
遊戯王5D's-青眼の白龍の継承者-

kurei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王5D's - 青眼の白龍の継承者 -

【Nコード】

N8940L

【作者名】

kurei

【あらすじ】

デュエルモンスターズ。

それはペガサス・J・クロフォードが古代エジプトの遺跡にあった石版を元に作り出したカードゲーム。

デュエルモンスターズ黎明から数十年。そのカード総数はゲームの花たるモンスターカードだけでも千を優に超える。

そんな幾千とあるデュエルモンスターズのカードの中で強靱、無敵、最強……それらの二文字を欲しいままにしたカードがあった。

そのカードの名は《青眼の白龍》。

かつて遙か古代エジプトでは神に唯一対抗できる存在として語られ、現在に至ってもその力の強大さ故に四枚のみしか作られなかった絶対強者の代名詞。

そして海馬瀬人が前世からの因縁を持つ魂のカード。

この物語は、その伝説を引き継ぐ一人の決闘者、海馬蒼乃丞と、《赤き竜》の痣を持つ決闘者たちとの魂の交響曲である。

Attention!! (前書き)

この作品はSS投稿掲示板『Arcadia』にも投稿しております。

話の内容は同じですので、どちらでも楽しめるようになっていきます。読みやすい、利用しやすいほうをお使いいただければ幸いです。

A t t e n t i o n ! !

青眼の白龍をシンクロモンスター化したオリジナルカードが不評だったことと、未刊行である『ソードアートオンライン4』をクロソバーさせることで起こりうる著作権的な問題を鑑み、この度本文を削除。青眼の白龍シンクロ化及びSOAクロスを廃し、新たに書き直すことと相成りました。

話の内容は変わらずオリジナル主人公である海馬蒼乃丞あおのしじょうの物語ではありませんが、彼女の使うデッキは基本OCGのカード群から青眼の白龍を主軸としたデッキに変更しております。

話の進展上、オリジナルカードを使う予定もありますが、その枚数は出来うる限り少なくし、効果も突出しないようにする予定です。

しかしながらオリジナル主人公を起用する上で、原作である遊戯王5D'sのシナリオ、設定からの逸脱、改変、独自解釈が起こりうることに変わりはありません。

作者が大きな困難やピンチのないまま、一方的に敵を壊滅させていくストーリーや主人公が大好きなのも変わらずです。

以上の点をご留意の上、作品をご鑑賞くださいますようお願い申し上げます。

後、一つ大きな変更が在ります。

今まで前半をストーリー、後半を決闘シーンと二部構成でやってきましたが、決闘シーンが長くなりすぎて前後の尺が倍以上違う話が出てきました。

ですので、これからはシーンによって前後に分けるスタンスを改

め、おおよそ一話あたりの文章の量を42字×38行のページ設定
で15±3ページの文章量を基本に掲載していきたく思います。

Character Material

海馬蒼乃丞 (Kaiba Anonjyou)

イメージCV: 水樹奈々 イメージSong: IDentit

y (玉置成実)

Profile

身長: 153cm 体重: 38kg

B/W/H: 62 (AAA未満) ・ 52 ・ 74

誕生日: 7月7日 (蟹座) 血液型: A型

心の花: ブルー・ロータス (花言葉: 清純な心、優しさ、純情、

信仰、神聖)

血縁: 海馬瀬人 (祖父) ・ ???・ ???

Status

決闘センス: A+ 決闘タクティクス: A+

デッキ構築: A カード資産 : EX

幸運 : A 騎乗テクニク : A

Skill

?????

?????

・ 王 (真) : EX

決せられた運命を切り開く力。如何なる苦境も己が意思一つで覆す事ができる。

効果は同じだが仲間と育んだ思いを力に変えるスキル《絆》とは似て非なるもの。

・ 精霊の力: B+

精霊世界に住むデュエルモンスターの精霊と心通わせる能

力。

青眼の白龍に限り現実世界に実体化させることができる。カードや決闘盤なしでも可。

Deck & Key Card

デッキ：青眼の白龍軸ドラゴン族・光属性天使族混合デッキ

切り札：《青眼の白龍》《青眼の白騎士姫》《オネスト》

《氷結界の龍 ブリューナク》《A・O・J カタス

トル》

D・Wheel

機体名称：青眼の白龍騎（Blue-Eyes White

Dragon）

スペック：決闘盤複合型二輪車 第二世代モーメントエンジン

搭載 最高速度300km/h

Duel Record

・vsプロフェッサー・フランク《Turn-02》

勝利 決め手：青眼の白龍（融合解除）

・vs十六夜アキ《Turn-04》Turn-05》

勝利 決め手：青眼の白龍（ストライク・ショット）

・vs不動遊星（騎乗決闘）《Turn-07》Turn-0

9》

引分 決め手：決戦融合・ファイナル・フュージョン

・vsダークシグナー磯野《Turn-11》Turn-14》

勝利 決め手：青眼の白騎士姫（異次元からの帰還）

Character Details

本作の主人公。初登場時十八歳。初代デュエルキングたる武藤遊戯の好敵手だった伝説の決闘者、海馬瀬人を祖父にもつ少女にして海馬コーポレーション五代目総帥。

使用するデッキは祖父より受け継いだ三枚の《青眼の白龍》とそれをサポートするカードを軸に攻撃力の高いドラゴン族と、奇襲や支援などの柔軟性に富む光属性天使族で構成されている。基本的に彼女が狙う戦術は《青眼の白龍》の圧倒的攻撃力による場の制圧。

そのために《青眼の白龍》の召喚・特殊召喚をサポートするカードがデッキに数多く投入されている。他にも《氷結界の龍 ブリューナク》や《A・O・J カタストル》、《青眼の白騎士姫》など強力なシンクロモンスターも揃えており、パワーだけではない柔軟性と汎用性の高いデッキに仕上がっている。エースカードはもちろん《青眼の白龍》。同じカードながら個体を識別しているようで、それぞれにイブリース、アズラエル、ジブリールと言う名前をつけている。ちなみに決闘盤も《青眼の白龍》を模ったものとなっている。自身が設計した《青眼の白龍》型のD・ホイール、《青眼の白龍騎》を駆るD・ホイラーでもある。ユニークなのはD・ホイール搭乗時、かつて海馬瀬人が羽織っていたのと同様のデザインの白コートがD・ホイールと連動して機械的な翼のように広がり、走行時に理想的な空力を作り出すと言うもの。その様はまさに白の龍が翼を広げて飛んでいるかのように見える。

次に蒼乃丞の容姿だが、これが年不相応な幼児体型。透けるような白い肢体は年をとる事を忘れたかのように幼く、女性的な凹凸はほとんど見受けることができない。しかし、彼女の蒼穹のような蒼の瞳や亜麻色の長髪、そして凜とした美貌と相まって不思議な魅力を醸し出している。その威力たるや、齡八〇を超えた従者の磯野を赤面させるほど。

そんな容貌に対して性格は苛烈にして熾烈。妥協を許さず完璧を貫く姿勢は海馬瀬人を想起させる。しかしながら年頃の少女らしさも併せ持っており、あれだけ瀬人が嫌っていたトウーンも愛せる無類の可愛いモノ好きと言う隠れた趣味を持つ。彼女のベッドは溢れんばかりのトウーン化されたモンスターのぬいぐるみたちでトウーン・ワールドになっているほど。寝る前に彼らをモフモフするのが彼女の日課でもある。お気に入りには当然、三体のブルーアイズ・トウーン・ドラゴン。

生まれはトップスだが両親はおらず伯父の養子として育った経緯を持つ。幼き頃は祖父の瀬人を信奉し、瀬人も自分の持ちうるもの

全てを蒼乃丞へと受け継がせるため彼女に英才教育を施した。そんな関係からか蒼乃丞にとつて瀨人とは偉大な人物であり、祖父への感情は信仰と言つていいものにまで昇華された。その信仰は瀨人が没してからも続いており蒼乃丞は常に祖父のようにあらんとする毎日である。その甲斐もあつてか蒼乃丞は僅か十五歳で海馬コーポレーションの総帥となつた。

その経営手腕に比例する高い決闘の腕前とシグナーである可能性を見込まれ、半ば無理やりに招待されたデュエル・オブ・フォーチュンカップへと参加。その決勝戦で合間見えた不動遊星と不思議な感覚を共有する。しかし、結局その謎は解けないままで決勝戦は開始。激戦の末、遊星との騎乗決闘は引き分けに終わる。生涯初の白星を逃したことに蒼乃丞は遊星を好敵手として認定。いつの日か決着をつけるかと再戦を強く望みながら会場を後にした。

かつては瀨人と同様、オカルトを非現実的だと嫌っていたがデュエル・オブ・フォーチュンカップで決闘したサイコデュエリストの十六夜アキや《赤き竜》の出現と共に実体化した《青眼の白龍》の精霊との触れ合いを通じてオカルトを信じるにいたつた。そしてダークシグナーと化した従者の磯野との闇のゲームで遂に蒼乃丞は精霊の力を覚醒させ、《青眼の白龍》をカードや決闘盤なしに実体化させる事に成功。自身と精霊の力を合わせて磯野の超強力なダークシンクロモンスター、《絶望のクトゥルフ》を打倒した。

Character Material (後書き)

Status参考値

遊星

決闘センス：A+ 決闘タクティクス：A
デッキ構築：A カード資産：E
幸運：A++ 騎乗テクニック：B

ジャック

決闘センス：A 決闘タクティクス：C
デッキ構築：B カード資産：A
幸運：C 騎乗テクニック：A

クロウ

決闘センス：B 決闘タクティクス：B
デッキ構築：A+ カード資産：D
幸運：B 騎乗テクニック：A+

アキ

決闘センス：C 決闘タクティクス：B
デッキ構築：C カード資産：B
幸運：D 騎乗テクニック：D

龍可

決闘センス：E 決闘タクティクス：C
デッキ構築：C カード資産：A+
幸運：C 騎乗テクニック：-

龍亞

決闘センス	: C	決闘タクティクス	: E
デッキ構築	: D	カード資産	: A +
幸運	: B	騎乗テクニク	: -

デュエルモンスターズ。

それはインダストリアル・イリュージョン社が名誉会長、ペガサス・J・クロフォードが古代エジプトの遺跡にあった石版を元に作り出したカードゲーム。

発売と同時に爆発的な人気を誇り、一過性のブームに終わることなく現在でも多くの人々に長く愛されている遊戯。

時にはエンターテイメントとして数々の名勝負を世に生み出し、また時には善と悪が雌雄を決する手段として幾度となく世界の命運をも左右した。

デュエルモンスターズ黎明から数十年。そのカード総数はゲームの花たるモンスターカードだけでも千を優に超える。

そんな幾千とあるデュエルモンスターズのカードの中で強靱、無敵、最強……それらの二文字を欲しいままにしたカードがあった。

白銀の巨躯は流麗にして華麗。青く輝く眼は全ての闇をかき消すが如く強き光を宿し、放つ白き閃光は破壊の流れとなって立ち塞がるもの全てを薙ぎ払う。

そのカードの名は《青眼の白龍》。

かつて遙か古代エジプトでは神に唯一対抗できる存在として語られ、現在に至ってもその力の強大さ故に四枚のみしか作られなかった絶対強者の代名詞。

そしてペガサスが生み出したデュエルモンスターズに新たな命を吹き込んだソリッド・ビジョン技術をただの一人で確立した海馬コ

ーポレーションの社長、海馬瀬人が前世からの因縁を持つ魂のカード。

時代が移り童実野町がネオ童実野シティとなった今を持って、デュエルモンスタースをプレイする者たち 決闘者の間で伝説として語られる《青眼の白龍》。

この物語は、その伝説を引き継ぐ一人の決闘者と《赤き竜》の痣を持つ決闘者たちとの魂の交響曲である。

ネオ童実野シティの最上層、トップス。

そこは一部の特権階級の人間にのみ許された、最も空に近い陸。見下すものは多々あれど、見上げるものは空と雲と星と太陽と月のみ。まさにそれが片手で足りる程しかないそこは、王の玉座とも不可侵の神殿とも言える特別な場所であった。

そんな雲上の世界、トップスにあって更に見上げなければならぬ唯一の人工物がある。

天を切り裂かんばかりに突き立ったビルの最上階に画かれるはKのロゴマーク。

ココこそがデュエルモンスタースにソリッド・ビジョンと言う革命をもたらした企業、海馬コーポレーションの本社である。

その海馬コーポレーションの一室にあるオフィスで一人の少女がデスクに山と積まれた書類に目を通していた。

長く癖のない亜麻色のストレートヘアを両側に垂らした顔は小さく、大きな瞳の色は突き抜ける蒼天のようにとこまでも見通している。そうなほど澄んでいる。小ぶりだが鼻筋はスツと通っており、引き締まった口元と相まって凜とした印象を第一に与える。幼い顔立ちと小柄な体躯から十一、二に見えるが今年で十八歳になる彼女が身に纏うは、かつて海馬瀬人が羽織っていた白のコートと同じデザインの物。

彼女の名前は海馬蒼乃丞。

その名が示すとおり彼女こそが海馬瀬人の孫にして海馬コーポレーション現総帥　このネオ童実野シティで最も高い玉座に座る王であるのだ。

しかも名ばかりの王ではない。

海馬コーポレーション総帥の座を養父である伯父から受け継いで早三年。

当初は彼女への後継者指名に多くの重役達は反対した。

当然だ。海馬コーポレーション中興の祖である海馬瀬人の血に連なると言っても齢十五の小娘に一体何ができるといのか　その意見が大勢を占めるのは無理からぬこと。

だがしかし、彼女はソレを鼻で笑うが如く辣腕を振るい僅か総帥就任数週間で海馬コーポレーションの業績を眼に見える形で押し上げてみせたのである。

これには蒼乃丞の総帥就任を、お飾りとしてならばと渋々承認した重役達は驚くしかなかった。

自分たちが小娘と鼻で笑っていた人物が簡単に成す事のできない偉業を成したのである。こうなると利に目敏い重役達は掌を返すように一転、蒼乃丞支持に回った。

彼女は己の腕一つで反対派が多勢を締める社内を纏め上げたのである。

その歳不相応な辣腕振りからか、蒼乃丞を先々代総帥に重ねるものも少なくはない。今となってはその先々代総帥、海馬瀬人の再来とまで言われているほどだ。

彼女は名実共に海馬コーポレーションの王であるのだ。

そんな天空の玉座に座したる姫君は、処理していた書類の中に一つの異物を発見した。

何であるう、封筒である。

決算の書類の中に何故封筒が紛れているのか不思議に思った蒼乃丞はソレを手にとって見る。表にはただ《海馬蒼乃丞》と彼女の名があるだけ。しかし封筒を裏返して見たところで、彼女の綺麗な眉が僅かに歪んだ。

何故ならば？で捺された封印の紋に見覚えがあったからである。

蒼乃丞は若干嫌な予感を感じつつ、デスクの引き出しからペーパーナイフを手にとると封筒を開封。中のモノを取り出した。

すると嫌な予感は現実となって彼女の前へと現れた。

封筒の中から現れたのは一通の招待状。しかし、それはただの招待状ではない。

それはネオ童実野シティより選ばれた八人の決闘者にのみ送られる特別なモノ　デュエル・オブ・フォーチュンカップの招待状だったからである。

招待状を見た蒼乃丞は今一度封筒を手に取り、裏に捺された紋と表に書かれた己の名前を確認すると眉どころか綺麗な顔まで歪めた。

忌々しげな視線を封筒と招待状に落としながら、彼女は虚空に向かって腕を振るう。すると、何も無い空間にスクリーンが投射されるではないか。

彼女はその中の一番上に記されたアドレスを押そうか押すまいかで悩むが、一瞬の逡巡の後、忌々しげに舌打ちするとアドレスを叩いた。

すると、そのスクリーンに灰色の長髪を後ろで束ねる壮齡の男が映し出される。

この人物こそが件の封筒を送ってきた犯人であった。

『おや、これは海馬総帥。私に直通回線とは珍しいですね』

慇懃に話す男の声が蒼乃丞の耳に響く。

彼こそがデュエル・オブ・フォーチュンカップの招待状の送り主、レクス・ゴドウィン。

蒼乃丞の手にもつ封筒の封印に捺された紋章が示すとおり、彼はネオ童実野シティの最高行政機関たる治安維持局の人間。しかも、最高位たる長官に腰をすえる大物である。

世界に名だたる大企業であり、ネオ童実野シティの電力事情を一手に担うモーメントを有する海馬コーポレーションとネオ童実野シティの行政を司る治安維持局が深い繋がりを持っているのは周知の事実だ。

故に両者の間にはホットラインが敷かれているのだが、レクスが言ったように蒼乃丞がレクスに直通回線を繋ぐのは非常に珍しいことだ。それこそ彼女が総帥に就任してから三年経つというのに、その回数は片手で足りるほどしかない。

理由は至って単純明快。彼女はこのレクスと言う男がどうにも気に食わないのだ。

「御託はいい。どういふことが説明してもらおうか」
『何のことですか？』

丁寧な口調と仕草で慇懃に言葉を返すレクスに、蒼乃丞は声を荒らげた。

「惚けるな！ ボクに宛てられた封筒、貴様の仕業だろう！！」

彼女がレクスを気に入らない理由の一つが彼の言動だ。蒼乃丞にとってはレクスの慇懃な喋り方や仕草が、どうにも癪に障って仕方がないのである。

唾を飛ばさんばかりに大声を上げる蒼乃丞に対してレクスは飄々とした風に言葉を返した。

『ああ、デュエル・オブ・フォーチュンカップの招待状ですね。無事にお手元に届いたようで何よりです』

蒼乃丞の神経を逆なでするレクスの喋り口に彼女は苦虫を噛み潰したような顔になりながらも、怒りに震える心をどうにか落ち着かせる。

一息をついた蒼乃丞は手に持った招待状と封筒を睨みつけながらレクスに問いただした。

「決算の書類に紛れ込ませるとは……レクス、貴様イエーガーを使つたな」

海馬コーポレーションのセキュリティは万全だ。

特に彼女の社長室とそこに運ばれる書類は企業秘密上、セキュリティランクは最高のものであることは言わずもがな。

そんな蟻も通さぬ警戒網を潜り抜け重要書類の中に封筒を紛らす

ことのできる人物など、蒼乃丞の知る限り一人しかいない。

それが、蒼乃丞の口にしたイエーガーと言う男だった。

治安維持局特別調査局室長にしてレクススの右腕と言うべき人物。まるで中世の道化師の様な風貌と不気味な笑い方から想像はつきないが、潜入工作のスペシャリストである。

レクスはこの蒼乃丞からの問いかけに笑みを持って答えた。

『そうでもしなければ貴女は受け取ってくれないでしょう？』

言外にYesと答えたレクスに、蒼乃丞は声を荒らげる。

「当たり前だ！ こんなモノ送りつけて来たところでボクに出るつもりは毛頭ない。世界中にある海馬ランドとデュエルアカデミアの運営、ソリッド・ビジョンシステムとMIDSのモーメント維持管理、その他にも展開している事業のアレコレ……。星の民だとか、《赤き竜》の痣だとか、シグナーだとかという貴様の非科学的なオカルト話に付き合う暇はボクにはない！！」

彼女がレクスを気に入らない二つ目の理由。それが彼の語る現実離れた話の数々であった。

五千年周期で起きる《赤き竜》と邪神との戦いだとか、かつてその《赤き竜》の力を借りて戦った星の民だとか、今がその五千年周期に当たりそれにより現れる《赤き竜》の痣を持つシグナーだとか、どの話を聞いても胡散臭いものばかり。

今回のデュエル・オブ・フォーチュンカップにしても、その真の目的は世界を滅ぼす邪神から世界を護るために《赤き竜》の痣を持つ者たちを見つけ出すために開かれるのだ。

蒼乃丞にとっては、そのような大会の主催者になるのは業腹だったが治安維持局との関係と海馬コーポレーションとして得られる利

益も鑑み、主催者として資金は出した。

蒼乃丞はレクスに対し、一応の義理は果たしているのだ。

それ以上に蒼乃丞が先ほど述べていたとおり、海馬コーポレーション総帥は多忙を極める。

先々代総帥が世界中に展開した海馬ランドとデュエルアカデミアの運営は軌道に乗っているからといって油断していいものではない。何より、今や世界に散らばり膨大な数となった施設を纏め上げるのは楽な仕事ではないのだ。

さらに先代が立ち上げたMIDS モーメント研究開発部は、その黎明期に起こした未曾有の重大事故……かつては陸続きであったシティとサテライトを分かつことになった《ゼロ・リバーズ》から嚴重な管理が必要不可欠だ。その管理責任のトップである蒼乃丞が目を離すわけには行かない。

言うては何だが蒼乃丞には決闘にかまけている暇は一時とてないのである。

これ以上義理立てする必要はない。そう断じてやろうと蒼乃丞が口を開きかけた時、レクスが口の端を吊り上げながら魔法の言葉を紡いだ。

『しかし貴女はデュエル・オブ・フォーチュンカップに出ざるを得ない。これはイリアステルの意思でもあるのです』

イリアステル。

それは有史以前から神の意志を聞き、歴史を裏から操作してきた世界の調整者。

蒼乃丞自身その存在を知ってはいるが、神の声を聞くという彼女が嫌いなオカルト話を含むだけに唾棄すべき存在である。しかし海馬コーポレーションを持ってしても、その影響力から逃れることは

叶わぬのは事実だった。

そして彼女が話すレクスこそ、イリアステル第三六〇代星護主イリアステルの関係者なのである。これが彼女のレクスを気に入らない最たる理由であった。

「くっ……!!」

レクスが放った言外の脅迫に、蒼乃丞は歯を食い締めた。

流石の蒼乃丞もイリアステルの名前を出されては無碍に断ることが出来ない。彼女自身の矜持が彼らに従うことを良しとしないが、イリアステルの力が強大なのは事実。

しかし彼女はそのまま黙っているわけではなかった。

今はまだ雌伏の時。

さらに海馬コーポレーションを発展させ、イリアステルの呪縛から解き放つ……それが蒼乃丞の目指す未来へのロードなのだ。

それを考えると今回のレクスの誘いは渡りに船かもしれない。

先々代総帥、海馬瀬人は己が決闘の強さを外へとアピールすることと海馬コーポレーションの信用を高めていたという。

ならばこの大会、上手く利用すればイリアステルからの解放も近づくかもしれない。その考えに行き着いた蒼乃丞は一つ鼻を鳴らすと笑みを浮かべた。

「貴様の掌の上で踊らされるのは糞だが……いいだろう。今回は貴様の話しに乗ってやる」

『貴女ならば、そう答えてくれると思っていましたよ。では、デュエル・オブ・フォーチュンカップでお待ちしております』

参加を渋っていた彼女からの色のいい返事に、満足気な笑みを浮かべたレクスはそれだけ言い残して回線を切ったのだった。

「ふんっ、狸が……。磯野！」

何も映らなくなったスクリーンに向かって憎憎しげにそう呟いた蒼乃丞が大声で付き人の名前を呼ぶ。

「はっ！」

すると打てば響くといった風に社長室の扉が開き、そこから黒服に身を包みサングラスをかけた老齢の男　磯野が現れた。

彼こそ海馬コーポレーションに三代に渡って仕える忠臣。

既に高齢に達しているというのに、未だ現役で海馬コーポレーション総帥の補佐をする歴代総帥の右腕である。

歳を感じさせない直立不動で立つ磯野に向かって蒼乃丞はデスクの上にある書類を叩きつつ命を下した。

「今ある仕事を全てもってこい。今日中に終わらせる」

デュエル・オブ・フォーチュンカップに出るからといって、海馬コーポレーションの仕事をおろそかにする気は蒼乃丞にはない。

大会中に仕事が出来ない分、今纏めてそれを消化する。それが蒼乃丞の取った決断だった。

しかし、それを命じられた磯野は蒼乃丞の言葉にしどろもどろになる。

「ぜ、全部ですか！？　しかしそれでは蒼乃丞様が　」

当然といえば当然か。

今の蒼乃丞の仕事量を取ってみても凡人にとっては十回は過労死できるほどのオーバーワークだ。彼女自身が優秀と言うこともあり、

その作業スピードが並外れているとはいえ、それでも長年総帥に仕えてきた磯野の目から見ても働きすぎだ。そこに仕事の追加など正気の沙汰ではない。

蒼乃丞の身を案じ、何とか踏みとどまって貰おうと口を開いた磯野であったが彼女から帰ってきたのは氷のように詰めた眼差しと、心も凍るような言葉であった。

「磯野、ボクに二度も同じ事を言わせる気か？」

「い、いえ！ 今すぐ持つてまいります！！」

心臓を刺すかのような蒼乃丞の言葉に、磯野は得も知れぬ懐かしき理不尽さをかみ締めながら社長室より退出して行く。

磯野が去った社長室で蒼乃丞はデスクの引き出しを開けた。

そこにあつたのは一つのデッキ。蒼乃丞は、そのデッキを手に取ると上から三枚のカードをめくる。

その中に画かれているのは青い眼を持つ美しき白龍の姿。

それは彼女が海馬コーポレーションと共に受け継いだ、海馬瀬人の残せし遺産。

「首を洗って待っているイリアステル。ボクはこの子たちと共に未来へのロードを切り開く」

三体の龍のカードを手に、見上げるものない世界で蒼乃丞は静かに宣言したのであった。

雲一つない快晴の空の下、ネオ童実野シティの海岸沿いに建てられたデュエル・スタジアムに多くの人々が集まっていた。

スタジアムに詰め掛けた彼らは、これから始まる選ばれし決闘者たちと現デュエルキング、ジャック・アトラスが見せるであろう熱き決闘に胸を躍らせながら、大会の開幕を今か今かと待ちわびているのだ。

そう。今日こそが海馬コーポレーション主催のデュエル大会、デュエル・オブ・フォーチュンカップの大会当日なのである。

観客達の熱気は止まることを知らず、その熱気は会場全体の気温が周りよりも数度高く感じられるほど。そしてそれは現在進行形でも上昇しており、開幕が一分一秒と迫るたびに膨れ上がっていく。

それは開幕前のこの時点で、これまで幾度となく行われてきたキング防衛戦の熱気を軽く凌いでいると言えれば彼らの期待の程が窺えよう。

もうこれ以上ないほどに会場の熱気が高まったとき、偶然か必然か彼らが待ちわびていた、その時がやってきた。

『Everybody Listen! デュエル・オブ・フォーチュンカップ、遂に開幕!!!』

とてつもなく長いリーゼント言う独特の髪形をしたMCが大会の始まりを宣言したのだ。

会場に詰め掛けた観客達はMCによって鳴らされた戦鐘に胸の内に溜めた熱気を大きな歓声へと変えた。

それはあたかも爆発のように一気に膨らみ、スタジアムを包み込

む。

そんなスタジアムの中に一迅の風が吹き荒れた。その風を内から切り裂き現れ出でるは一体の竜。

黒と赤の逞しい体躯、禍々しい三本の角、数多のモンスターを屠ってきた鋭い爪、雄大な翼を広げて空を飛ぶ姿はまさに王者の如し。

急に吹き荒れた風にどよめきの声を上げた観客達は、その竜の姿を目にすると再び爆発的な歓声を上げた。

何故なら彼らはその目で見えてきたからだ。その竜と竜を従える王が数多の挑戦者達を粉碎してきた姿を。

王の僕たる竜の登場に沸く会場でMCがその竜の名を口にする。

『現れたのはキングの魂、レッド・デーモンズ・ドラゴンだぁッ！』

レッド・デーモンズ・ドラゴン。

それがこの雄々しき竜の名前。そして、この竜を従えるは王の名は。

そこで会場の一角から猛々しい音が聞こえてきた。それは未踏の大地に徹を刻むが如く、荒々しい車輪音。

『そして、このホイール音はぁッ!?!』

このMCの言葉と共に騎乗決闘用のゲートから一台の白いモノサイクルが飛び出してきた。

白のモノサイクルはレッド・デーモンズ・ドラゴンと並び一瞬のランデヴーを披露すると、レッド・デーモンズ・ドラゴンを先に会場の真ん中で跪かせる。

まるで王を歓待させるかのように。

そして、白のモノサイクルは更に速度を上げると半チューブ上の壁を駆け上がると空へと舞った。

空に舞った白のモノサイクルは空中で横に一回転するアクロバットを見せると寸分変わらず、跪いたレッド・デーモンズ・ドラゴンの前へと着地する。

着地に成功した白のモノサイクルの騎乗者はヘルメットを取り、その顔をさらした。

彼こそがレッド・デーモンズ・ドラゴンの主にして白のモノサイクル 《ホイール・オブ・フォーチュン》を駆るデュエルキング。ジャック・アトラスである。

待ちに待ったキングの登場に会場は大きな歓声に包まれる。

そんな観客の声に応えるようにジャックは右手を高らかに挙げ、人差し指を天へと向けた。

「キングは一人！ この俺だぁッ！！ 俺と決闘するのは誰だ！？」

高らかに宣言したジャックの言葉に、さらに観客は大きな声援をジャックへと送る。

キングと言う主演の登場により舞台は整った。

後は主演に花を添える役者を呼ぶのみ。

『キングとのドリームマッチを賭けて幸運にもチケットを手に入れた決闘者たちよ！ いざ、ここに！！』

MCの言葉と共に会場の地面が裂けた。

そこから現れるのはキングと共に舞台を盛り上げるであろう七人の選ばれし決闘者たち。

数多の猛者の中から選りすぐられた決闘者たちの登場に会場は一瞬沸きあがるが、その中の一人の存在に会場はざわめきだつた。

「おい！ マーカー付きがいるぞ！！」

なぜならばモニターに映し出された出場者の中に、目から頬にかけて黄色い線 マーカーが入った人物がいたからだ。

マーカーとは犯罪を犯した在任に刻み付けられる不適合者の証。それぞれが個別のIDを持ち、常に治安維持局の下部組織セキユリテイにその位置を知らせる枷でもある。

犯罪歴のある人物が誉あるキングと同じ舞台に立つということが信じられないのだらう。その決闘者に向け、観客からブーイングの嵐が吹き荒れた。

マーカーの付いた人物 不動遊星に突き刺さる嫌悪の視線とブーイングに、遊星の隣に立つ龍可に扮した龍亞が戸惑いの声を上げる。

「遊星……」

「心配するな」

しかし当の本人はブーイングの嵐を前にしても、ただそう述べるのみ。

遊星へのブーイングは止まることを知らず、その規模の大きさに司会進行を司るMCもどうしたものかとアタフタしていると、出場者である一人の男が前に出てMCよりマイクを奪った。

MCよりマイクを奪った男は一つ息を吸うと、ブーイング覚めやらぬ観客達に向けて言葉を放った。

「お集まりの諸君ッ！！」

マイクを通したとはいえ、それを抜きにしてもよく通る男の声にブライングに包まれていた会場は一瞬にして静けさを取り戻した。会場が静まったのを確認した男はとつとつと静かに、しかし力強く言葉を紡ぐ。

「私の名はボマー。ここに立つ決闘者として、諸君が一体何を見ているか問いたい」

そこまで言ったところでボマーと名乗った男は、一旦言葉を区切ると非難の嵐の中心点である遊星を指差しながら観客達に向けて言葉を続ける。

「この男は我々と同じ条件で選ばれた、紛れもない決闘者だ！ カードを持てばマーカーがあるうがなかるうが、皆同じだ。この場に立っているものに何ら恥じる者はない。むしろ下らぬ色眼鏡で彼を見る諸君の言葉は暴力に他ならない！！」

それだけを述べたボマーは踵を返し出場者の列へと戻っていく。ボマーの言葉に時が過ぎるのを忘れたが如き静寂が会場を包む中、一つの拍手がその静寂を破った。

誰であろう、会場の一段高い場所に座っていたレクスである。

レクスの打つ拍手が一人、二人と伝染して行き、遂には会場を包み込む万雷の拍手へと変わるのに、そう時間はかからなかった。

それほどまでにボマーの語った言葉は皆の心に染みたといい事だ。特に龍亞は余程感動したのだろう。庇われたのは自分ではなく遊星だと言うのに感涙に咽びながら喜んでいた。

万雷の拍手もボマーがレクスに向かつて一礼し、手に持ったマイクをMCへと返したところで鳴り止む。

「心強い言葉をありがとうボマー君。さてMC君、この場も収まっ

たところで彼女の紹介に移ってはどうかね？」

そのタイミングに合わせるかのように徐に立ち上がったレクスは、観客へ言葉を発したボマーに謝辞を述べると、MCに視線を向け次に控えていたプログラムの進行を促した。

レクスからの指摘に己が職務を忘れていたMCは慌てつつも、その高い職業意識ですぐさま会場の雰囲気盛り上げに移る。

『こ、これは失礼しました！！ では、気を取り直して次に行ってみようかあッ！！』

些か強引な運び方であったがやはり観客達の大会に込める期待はこの程度のアクシデントで冷めるものではなかった様で、会場は再び大きな歓声に沸き立った。

何とか持ち直した会場の雰囲気MCは安堵の息を漏らしながらも、次に用意されたプログラムを進行させる。

『さて、皆さんはお気づきでしょうか？ デュエル・オブ・フォーチュンカップに参加する決闘者の数が一人足りないことに！？』

問いかけるようなMCの言葉に観客達はステージに立つ決闘者たちの数を数える。

デュエル・オブ・フォーチュンカップはトーナメント形式だ。よって組み合わせに空きが出ないように八人の決闘者が選ばれているはず。ちなみにジャックは優勝者とのエキシビジョンマッチでの対戦のみなので数には含まれない。

とすると……ステージに立つ決闘者はジャックを除き七人。確かに一人足りなかった。

この事態に、程よく観客がどよめいたところでMCは声を張り上げる。

「最後に紹介する決闘者は、まさかのサプライズゲストだああ！
ゴドウィン長官の尽力により出場してくれるようになった超VIP
を紹介しよう！！」

その言葉と共にレクスの横の地面が裂け、そこから一人の少女が
姿を現す。

「今回のデュエル・オブ・フォーチュンカップの主催者、海馬コー
ポレーションの若き総帥にして伝説の決闘者、海馬瀬人の血を引く
超一流決闘者！ 海馬あぁッ、蒼乃丞おおッ！！」

MCの紹介と共に、完全に姿を現した蒼乃丞とレクスとのツーシ
ョットが会場のスクリーンに大写しにされた。

まさかの海馬コーポレーション総帥の登場は誰も予想だになか
っただろう。観客はおろか出場者である七人の決闘者やジャックま
でもが驚きの声を上げる。

「あ、あの娘が……」

「海馬コーポレーション総帥……」

「伝説の決闘者、海馬瀬人の血を継ぐ者……」

誰もが啞然とした表情で蒼乃丞を見上げる中、レクスと並んだ蒼
乃丞は一つ鼻を鳴らすと、ジャックを含めた決闘者たちを上から見
おろしながら口を開いた。

「決闘者諸君、デュエル・オブ・フォーチュンカップへようこそ」

大会主催者から発せられた凜とした言葉に驚きでどよめいていた
会場は一瞬にして静まり返る。その様は彼女のよく通る声が遍く全

員の鼓膜を打ち、その脳に不可避の命を下したかのような。

姫君から勅を聞く臣民のように静まり返った会場で蒼乃丞は言葉を続けた。

「諸君等はその腕を認められ、この決闘の祭典に集められた精強たる決闘者だ。そんな諸君等にボクは言つて置きたい事がある。決闘者には身分も貧富の差も関係ないと言つことだが……しかし勘違いするな！ そこにあるのは平等などと言つ生ぬるいものではない！」

彼女の言葉は演説へと変わり、その凜とした愛らしい顔に似合わない熾烈な言葉が観客を含めた全ての決闘者たちへと向けられる。

「あるのは只、勝利か敗北という結果のみ！ 勝者は栄光をその手に掴み、敗者は地に伏せ惨めな骸を曝す……。それはこのボクをしても例外ではない！！ 決闘者たちよ、その手に栄光を掴みたいのなら戦うがいい！ そして勝利するがいい！！」

彼女の熾烈だが恐れることなく真実を的確についた演説に会場は一層の歓声に沸く。

今までにない観客からの大きな歓声に蒼乃丞は満足気に鼻を鳴らすと、腕を高らかに振るい宣言した。

「さあ、デュエル・オブ・フォーチュンカップの始まりだッ！！」

蒼乃丞の放った言葉により興奮冷めやらぬ会場を後にしたレクスは、スタジアムの一室にて己が右腕たるイエーガーの報告を受けていた。

「全て準備は完了しております。シグナーが揃うのも時間の問題でしょう。ヒッヒヒヒヒ」

既にMIDSの研究者、阿久津によりスタジアムの各所にはシグナーの力をモーメントを通して計測するD・センサーの設置が終わっている事を耳打ちして告げたイエーガーだったが気になることがあるのか、そのままレクスに一つの疑問を問いかけた。

「しかし、長官がイリアステルの名前を出してまで出場させた海馬蒼乃丞。……彼女はシグナーのですか？ それともシグナーを覚醒させるための獵犬？」

わざわざ自分が骨を追ってまで招待状を届け、イリアステルの強権を使ってまで強引に大会へと参加させた人物 海馬蒼乃丞。
シグナーなのか、そうでないのか。

彼女がこの大会で演じるべき役どころが今一つ掴めないでいるが故の質問であった。

「それは未だにわかりません……。しかし」

イエーガーからの質問にレクスは頭を振りながら答えた。彼に向けられた質問は同時に彼の疑問でもあったからだ。

イエーガーに向けた言葉を途中で区切ったレクスは手元を操作し、

空中に一枚のスクリーンを投射させる。

そこには幾つかのデュエルモンスターの大会で取られたのである。写真が映し出されていた。しかもその写真、どれもが蒼乃丞が写ったものばかり。

しかも、写真に写っているのは彼女だけではない。

彼女の周りには、三匹の白き龍の姿が必ずと言っていいほど見て取れた。その様は、まるで忠義の騎士が姫君を護るかのよう。

写真が映ったスクリーンをイエーガーに投げ渡しながら、レクスはこれまでの彼女の決闘履歴を新たに投射させる。そこに映し出された戦歴の多くは、決まって三匹の白き龍たちによってもたらされたものばかりであった。

これは少々、常軌を逸したものだ。

デュエルモンスターズはカードゲームの性質上、運による引きの良し悪しが存在する。

そんな中、今までの生涯にわたる全ての決闘において勝負の決め手が必ずと言っていいほど決まったカードであると言うことは、とても信じられない現象であるのだ。

ならば白き龍たちが彼女のフェイバリットカードであり、そうしたプレイングを彼女が心がけていると言う考え方はどうであろうか。確かに、彼女に危機が迫ると必ずと言っていいほど召喚され彼女に勝利をもたらしてきた三匹の白き龍たちは、その強力さ故に四枚のみしか作られなかった曰くつきのモンスターだ。

デュエルモンスターズ黎明期においては一枚場にでるだけで勝負が決まると言われたほどである。

と、なれば只の勝利への一手段かと普通の人間ならば思うだろうが、レクスの中では一つの確信が沸きあがっていた。

「彼女が三匹の白き龍の加護を受けていることは確かなのです。それがシグナーとしての力なのか、そうでないのかこの大会で見極められる事でしょう」

故にレクスは彼女をこの大会に無理矢理にでも参加させたのだ。

デュエルモンスターズのカードから加護を与えられし彼女の力がシグナーのものなのかを見定めるために。

それにだ。別にシグナーでなくとも構わないともレクスは思っている。

決闘履歴に表示された彼女の勝率は百パーセント。不敗伝説を持って鳴る彼女の決闘の腕前はシグナーを覚醒させる絶好の刺客に成りうるのだから。

レクスから受け取った蒼乃丞の戦績に、イエーガーもレクスの思惑を知ったようで口の端を吊り上げる。

「仮にシグナーでなくとも、シグナーを追い詰め覚醒させる刺客となる……。どっちに転んでも我らには有益な人物ですな。ヒィヒヒヒ。いや、全く。このイエーガー、長官の神算鬼謀には御見それ入りました。ヒィヒヒヒヒ」

照明の落とされた暗き一室でイエーガーの不気味な笑い声が木霊する。

あたかもそれは、この大会の波乱を予感させるものであった。

スタジアム中央に聳え立つ、前面にガラスが張られた円柱状の塔の最上階。

スタジアム全体を遍く見渡すことの出来るVIPルームに設えられたソファに腰掛けたジャックは苦々しげな表情で握りこぶしを机に落とした。

ガンツ！　　と言う鈍い音と共にジャックの叫びが広い室内に響き渡る。

「なんなのだ、あの小娘は!!」

今、思い出してみても腹が立つ。

ここまでの憤りはジャックにしてみても久しく感じたことのないものだった。

拳を打ち据えたままの姿で怒りに震えるジャックの姿に、別室にて企みごとを終えたレクスが珍しいものを見たと言う表情で語りかける。

「おや？　何やら荒れていますね」

「当然だ！　海馬コーポレーションの総帥だか何だか知らんが、キングたる俺を見おろすとは……これ以上の屈辱、ありはしない!!」

彼がこうまで荒れている理由。それはひとえに蒼乃丞の存在にあった。

先ほど行われた開会式、レクスと同じ壇上に上がった蒼乃丞が開会の言葉を放っていた時、ジャックは確かに見たのだ。

彼女が一瞬だけこちらを　　キングたる自分を見おろし、鼻で笑ったのを。

無理もなかるう。

なにせ、これまで生きてきた十九年間の人生で、こうもあからさまに見下されたのは初めての経験だったからだ。特にキングになってからの二年間は憧れと羨望の眼差しを一身に受けてきたのである。そんなジャックにとって、彼女のとつた行動は甚く彼の自尊心を傷つけた。

まるで噂されていた人物の実像が取るに足らない存在だと、どこにでも転がっている路傍の石であると認識されたことが彼には我慢できなかったのだ。

あの顔を　自分を見おろす蒼乃丞の不遜な笑みを思い出すだけで、ジャックの腸が煮えくり返る。

この屈辱をどう晴らしてやるうかとジャックが算段する中、扉が開く音と共に凜と響く声がジャックの鼓膜を打った。

「ふうん。偽りの王がよく吠える」

「なにッ!？」

聞き覚えのある声が発した不敬な発現に、ジャックは眉を吊り上げるながら後ろを振り向く。

彼が振り向いた先に立っていたのはジャックの機嫌を甚く損ねた張本人、海馬蒼乃丞。

白のコートと美しい亜麻色の長髪を揺らしながら悠然とVIPルームへと足を踏み入れる蒼乃丞の姿に、ジャックは忌々しげな視線で蒼乃丞を射抜いた。

そんな刺さるかのようなジャックからの視線を物ともせず歩を進める蒼乃丞の姿を見て、ジャックは一つの確信に至る。

海馬蒼乃丞。

彼女は、このジャック・アトラスにとって不倶戴天の天敵で

あると。

でなければ、こつも心を乱されるはずがない。

ジャックの心をこつも乱したのは、かつて友であった遊星以来なかつたことなのだ。

理性ではなく本能で蒼乃丞を天敵と認識したジャックは突き刺す視線をそのまま彼女へと向けていたが、蒼乃丞自身それを全く歯牙にもかけない。

遂には視線さえも返さずにジャックの横を素通りすると、レクスの前へと立つたのだった。

そんな蒼乃丞に、レクスは変わらぬ慥懃な態度で頭を下げる。

「これはこれは、海馬社長。今回は我が招きに応えてくれたこと、まことに感謝します」

「いらん。貴様からの感謝の言葉など虫唾が走るだけだ」

レクス of 礼に対し蒼乃丞が吐き捨てるかのように言葉を返したところで、ジャックの我慢は限界となった。

別にレクスに対する非礼に憤つたわけではない。

開会式では自分を見下して笑い、ここに姿を現せば自分に対し不遜な言葉を吐き、遂には路傍の石であるかのように自分の前を何事もないかのように素通りする。

そんな彼女の、キングである自分に対する不敬の数々に憤つていたのだ。

強引にレクスと蒼乃丞の間に和って入ったジャックは、彼女のもとに詰め寄る。

「お前ッ！ まだ俺を虚仮にするか！！」

襟首を掴みあげんばかりに憤つたジャックの叫びに、そこで初め

て蒼乃丞はジャックと視線を合わせた。

怒りに全身を震わすジャックに対し蒼乃丞は涼しげな顔で肩をすくめて見せる。

「虚仮？　ボクはただ真実をついただけだ」

この蒼乃丞の発言に口を開こうとしたジャックだったが、それにさえ蒼乃丞は先んじて見せた。

「ジャック・アトラス。治安維持局のデータベースではトップスの出身となっているが、実際はサテライト出身。かつてはサテライトで小さな箱庭の王を気取っていたが、そこにいるレクスの手引きによつてシテイに来訪。現在の地位に至る……」

「なッ!？」

秘中の秘である己の経歴を語つた蒼乃丞に、ジャックは表情を驚愕に染めるとレクスに視線を向ける。

何故ならこの情報は、治安維持局か旧知の友しか知り得ないことだからだ。と、なると考えうるのは治安維持局側からのリーク……そうジャックは思ったのである。

そのジャックの視線の意味を察したのだろう。レクスは静かに首を横に振り、一切の関与を否定した。

彼自身、レクスの語る全てを信じていることができないのか今一度レクスを問い詰めようとしたとき、その情報源を蒼乃丞自身が口にした。

「海馬コーポレーションの力を舐めてもらっては困る。この程度の情報、レクスから聞き出すまでもない」

現在の戦いは情報戦だ。情報を制したものが戦いを制す。

その常識は当然、企業にも当てはまる。特に海馬コーポレーションほど大きな企業になると、敵対企業や情報屋から有形無形の攻撃を受けるのだ。

社の秘密プロジェクトの情報の奪取や、その中核を担う人材のヘッドハンティングなど……。そんな敵から会社を護るため、海馬コーポレーションにも当然の如く防諜機関が存在する。

蛇の道は蛇。防諜機関と言っても、護るばかりが専門ではない。時にはカウンターを仕掛け返り討ちにしたり、敵の足並みを崩すために積極的に諜報戦を仕掛けたりもする。

そんな民間とはいえ、一流の情報機関を持つ海馬コーポレーションにとってはジャックの経歴を洗うことなど造作もないことだったのだ。

偽りの王　彼女が部屋に入ってきて開口一番に発した言葉は、そんなジャックの秘密を知るが故の言葉であった。

「まあ、決闘の腕はそこそこのようだが所詮は偽りの玉座に満足する紛い物だ」

ジャックの来歴を語り最後には彼をそう評した蒼乃丞の言葉に、ジャックの怒りは天を突かんばかりだ。

「小娘……ッ！　言わせておけば、好き勝手なことをペラペラと！」

「ふうん。弱い犬ほどよく吠えるとはこの事か。どうやらキングの正体とは、ただ吠えるしか能のない駄犬のようだ」

数え切れぬばかりを屈辱を彼に与えたばかりか、トドメには駄犬扱いである。

これにはとうとう、ジャックの堪忍袋の緒が切れた。

「ぐツ!? もう我慢ならん! 今、ここで叩き潰してくれる!」

ソファの横に立てかけてあった決闘盤を手にしたジャックが蒼乃丞に指を突きつける。

決闘の申し入れた。

「来るか? ならば紛い物の貴様に本物の力を見せてやる」

そんなジャックの姿に蒼乃丞は不敵な笑みを見せると、どこからともなく《青眼の白龍》を象った白銀に光る決闘盤を取り出した。まさに一触即発。

何か一つ物音でも立てれば、それが決闘の始まりになるだろう。それだけ緊迫した空気が二人の間を支配していた。

そんな二人と唯一場を同じくするレクスは彼らを止めるでもなく、まるで立会人のように静かに二人を見守る。

そして蒼乃丞とジャック。

両者が同時にデッキから五枚の手札を引き抜こうとした時。

『勝者決定イイツ! 二回戦進出はボマー!!』

会場からMCの声が響き渡った。

どうやら、一回戦第一試合である龍亞とボマーとの試合はボマーの勝利に終わったようだ。

その放送に、蒼乃丞は一つ鼻を鳴らした。

「存外早くに終わったな。キャンキャン五月蠅い駄犬を調教してやるのかと思っただが……まあ、いい。命拾いしたな駄犬」

それだけ言い残した蒼乃丞は踵を返し、VIPルームの出口へと歩を進めていく。

その彼女の行動に、ジャックは声を荒らげた。

「なッ!? 小娘、逃げるか!？」

ジャックの言葉に蒼乃丞は歩みを止める。彼女にとって、彼はなった言葉はとも容認できるものではなかったからだ。

扉の前で足を止めた蒼乃丞は視線だけをジャックに向けると、ハッと笑った。

「逃げる? ボクが? 勘違いするな駄犬。次の第二試合がボクの出番なだけだ。貴様との決着は優勝者に贈られる貴様とのエキシビジョンマッチでつけてやる。それまでボクが勝ち上がっていく姿を見ている。真の王が何たるか……それをボクのロードによって教えてやる」

振り返りもせずにジャックの言葉を一笑に付した蒼乃丞は、肩で風を切りVIPルームの扉を潜る。VIPルームから退出した彼女は一度も後ろを振り返ることなく、去っていったのであった。

後に残ったのは表情の読めないレクスと、忌々しげな顔で蒼乃丞の出て行った扉を睨みつけるジャックのみ。

静かに閉まった扉を親の敵のように睨んでいたジャックは今一度、硬く握った拳を高らかに振り上げた。

「ぐッ……クソオオッ!!」

VIPルームにキングの悔しげな叫びと、けたたましい打撃音が響いたのであった。

第一試合の興奮も冷めやらぬまま、早くも次のカード 蒼乃丞の出番がやって来た。

『さあッ!! 激闘を見せた第一試合だったが、まだまだ好カードが続くぞお! 次の試合、我々は伝説を目撃する! 伝説の決闘者の血統にして、不敗神話を持つ決闘者。海馬蒼乃丞!!』

MCの紹介と共に大量のスモークが焚かれ、そこから蒼乃丞が姿を現す。

腕を組んだ堂々たる姿勢で登場した蒼乃丞の姿に、観客から大きな声援が湧き上がる。しかし、彼女は向けられる声援を歯牙にもかけずに対戦相手が出てくるであろう場所を見据えていた。

『そして、その伝説の継承者にして神話の体現者たる蒼乃丞総帥に対するは決闘カウンセラーの異名を持つ、プロフェッサー・フランクだあッ!!』

続けてのMCの紹介と共に蒼乃丞の真反対の方でも大量のスモークが爆音と共に巻き上がる。

そこから現れたのは治安維持局が雇ったシグナーたちへの刺客の一人 プロフェッサー・フランクだった。

フランクは温和そうな笑みを浮かべると、蒼乃丞に向けて深々と一礼する。

「これは海馬社長、ご機嫌麗しゅう。海馬コーポレーションの若き総帥とこうして決闘できる栄誉に授かるうとは

齒の浮くような美辞麗句を並べるフランクに蒼乃丞は不機嫌そうに鼻を鳴らした。

一目見てわかる。

このフランクと言う人物。人のよさそうな顔をしているが、その心の奥底に渦巻く下種の臭いはどれだけ繕っても隠しきれるものではない。

蒼乃丞は、その鋭い嗅覚を持って彼の本性を見抜いていたのだ。

「御託はいいから、さっさと準備をしろ。ボクが目指すべきロードは遙か先にある。貴様の様な下種などにかまけている時間は一秒たりともありはしないのだからな」

その様な畜生にも劣る男に蒼乃丞が裂く時間などありはしないのだが、腐っても決闘者だ。直々に彼女が手を下す価値のない虫けらが相手でも決闘となると話は別。

蒼乃丞は、その腕にはめた《青眼の白龍》を象った決闘盤を掲げて見せた。

「全く……本当に噂どおりのお人だ。では姫君のご機嫌を損ねる前に始めるとしましょう」

本性を見抜かれたと言うのに、それでも温和な好青年という仮面を外さないフランクは柔和な笑みを浮かべると、蒼乃丞に倣い決闘盤を掲げた。

『それでは、デュエル・オブ・フォーチュンカップ第一回戦第二試合……決闘、開始イイツー!!』

「決闘ッ……!!」

MCの高らかな決闘開始の合図と共に、蒼乃丞とフランクはデッキより五枚のカードを引き抜いた。

フランクLP4000

蒼乃丞LP4000

「私のターン、ドロー」

まず先攻を取ったのはフランク。彼は手札の内容を確認すると、自身の勝利を確信した。

そこには既に、彼の必勝の方程式がなりたっていたからである。彼はその方程式に従い二枚のカードを手に取ると、それを決闘盤へと差し込んだ。

「私は手札より魔法カード、コストダウンを発動。手札のカードを一枚捨てることにより、このターン私の手札にある全てのモンスターの を2下げます。さらにもう一枚魔法カード、二重召喚。このカードの効果で私はこのターンに二回の通常召喚が行えるようになりました」

二枚の魔法カードの効果により上級モンスター召喚のためのリリースと、モンスターの通常召喚は一ターンに一度と言う決闘の不文律が、このターンのみ消えた。

その恩恵を背に、フランクは手札から二体のモンスターを召喚する。

「私は手札から が4に下がった超魔神エゴと超魔神イドを攻撃表示で召喚！」

超魔神エゴ	6	ATK1900	DEF1100
超魔神イド	6	ATK2200	DEF800

フランクの場に現れた稲妻迸る青と赤の竜の姿に、会場は驚きに包まれた。

しかし観客の反応とは裏腹に、対戦相手として決闘場に立つ蒼乃丞は涼しげな顔で二匹の竜に対峙する。

「初手から上級モンスターの連続召喚か」

上級モンスターとはいえ所詮は攻撃力1900と2200。どのような効果を持っていようと敵ではない。そんな蒼乃丞の思考を精神分析の専門家であるフランクは彼女の表情や仕草からの確に読み取っていた。

ならば見せてやろう。自身が持つ最強の切札を。

そして、その余裕の表情を苦悶に歪めてやろう。

ああ、彼女は一体、どのような声で鳴いてくれるのか………

心の奥底でどす黒い感情を迸らせるフランクは、そのような様子など欠片も表には出すことなく、手札から一枚のカードを抜き取った。

「それだけではありませんよ。私の場にあるイドとエゴ、二体の超魔神をリリースすることで手札から超魔神スーパー・エゴを特殊召喚！ー！」

二体の超魔神をリリースして新たに特殊召喚された竜は、紫の稲妻を迸らせ高らかに咆哮した。

超魔神スーパー・エゴ 8 ATK 2800 DEF 2300

『こ、これはすごいッ！！ プロフェッサー・フランク、怒涛の高級モンスター連続召喚さえ、スーパー・エゴ召喚の布石に過ぎなかったとは！ しかも、そのモンスターを決闘開始早々に召喚してしまうとは、これは蒼乃丞総帥にピンチ到来だぁッ！！』

MCの実況が会場中に響く中、フランクは自信満々な笑みで蒼乃丞に自身の切札を披露する。

「どうです？ これが私の心理分析デッキが誇る切札、超魔神スーパー・エゴ！！」

その攻撃力は3000に迫る2800ポイント。

これだけの攻撃力を誇るモンスターを初手から召喚するのは並大抵の事ではない。フランクにしてみても、今回は非常に運がよかったと言える。

フランクの言葉に呼応するかのようスーパー・エゴが咆哮を放つ中、それでも蒼乃丞は涼しげな表情を崩さない。

「ふうん。豪勢なことだな。全ての手札を消費して最上級モンスターを召喚とは」

確かに一体のモンスターを召喚するためにフランクは全ての手札

を費やしていた。

初代デュエルキング、武藤遊戯の言葉を借りるなら手札は可能性だ。手札の数だけ取れる戦術の幅も広がるという含蓄ある言葉である。

その格言に照らし合わせればフランクは強力なモンスターを従えてはいるが、それ以外は何も出来ないと言うことになる。

それでも攻撃力2800を前にしても一向に動じない蒼乃丞の姿勢というのは稀であろう。ソリド・ビジョンが見せる最上級モンスターの威圧感は、圧倒的な存在感となって決闘者の前に立ちほだかるのだから。

フランクは蒼乃丞に対して期待していた効果が得られなかったことに、心の奥底で忌々しげに舌打ちした。

余程、彼女の綺麗な顔が苦悶に歪むところを見たいのだろう。

しかし、焦る必要はない。スーパー・エゴのモンスター効果を教えれば、さしもの彼女とて表情を崩すはず。そう思ったフランクは表の温和な顔で親切さを装う。

「これくらいしなければ、貴女に瞬殺されてしまいますからね。ちなみに超魔神スーパー・エゴの効果は破壊されたターンのエンドフェイズ時に自分の場に特殊召喚できる蘇生能力と、この効果で特殊召喚された時に発生する、このカードを除く全てのモンスターを破壊する全体破壊能力です。さしもの貴女でも、このモンスターは攻略できないでしょう。ターンエンドです」

ターンエンド宣言と共に彼女の顔を窺ってみるが、それでも彼女の自信ありげな表情に変化は見られなかった。

ここまでされて表情一つ変えないのは余程の大物か馬鹿だが、彼女の場合は前者であろう。

こうなっては次のターン、直々にスーパー・エゴの恐ろしさを教えてやるしかない。そうフランクが考えていた時だった。

不意に蒼乃丞がフランクへ、その長くしなやかな人差し指を突きつけたのである。

「貴様、言ったな。ボクでも、そのモンスターは攻略できないと……。だが、それは大いなる間違いだ！ その様なモンスター、ボクの歩む栄光のロードの前には壁にもなりはしない！！ 故に

」

凜とした表情で言葉を放った蒼乃丞はそこで一旦言葉を区切ると、フランクへと突きつけられた人差し指を突きつけた形そのままに指差す先を天へと向けた。

そのポーズは奇しくもジャックのキングは一人、己自身を指し示すポーズと瓜二つ。

しかし、何故だろうか。ジャックお得意のポーズだと言うのに、何故か彼女の方が似合っている気がした。

そのポーズが意味する事とは。

「ターンあれば十分だ。このターンで決着をつけてくれる！！」

このターン 蒼乃丞一回目のターンによるワンターンキルであった。

『おおつとおおツ！！ 何と蒼乃丞総帥、攻撃力2800のスーパー・エゴを前にしてワンターンキル宣言だああ！ 本当にそんな事が可能なのかああツ！？』

蒼乃丞の発したワンターンキル宣言に、さしものMCも興奮気味に実況する。

観客達の反応も、攻撃力2800のモンスターを前にしたワンターンキル宣言に熱狂するが、本当に彼女が宣言どおりワンターンキ

ルを行えるのかと問われればどこか懐疑的だ。当然、それは対戦相手であるフランクでもある。

そんな誰もが彼女の言葉を本気と取らない中で、只一人彼女の言葉を信じている者がいた。

誰であるう、宣言した蒼乃丞本人である。

彼女にとつて、何もソレは不思議な事でない。蒼乃丞は自分自身こそを一番信賴しているのだ。

これまでのロードを歩んできた自分を、これからも果てしない戦いのロードを歩んで征く自分を迷うことなく信じているのである。

己が信じた自分の言葉は必ず未来へのロードとなるのだから。

しかし、高らかに宣言してみたものの現時点の手札では宣言どおりワンターンキルを行うことはできなかった。

そもそも攻撃力2800のスーパー・エゴを倒し、4000のライフポイントを一度に削りきるのは並大抵の事ではない。だが、彼女のデッキにはそれが可能なギミックがある。それを成すためのキーカードの何枚かも既に彼女の手中にある。

なれば、ここで引くべきカードは最後の鍵たるあのカードのみ。

引かねばならない。

自分の言葉を嘘にさせないために。

己が信じる自分を裏切らないために。

デッキに眠る、祖父の遺産に恥じぬように。

そして、栄光ある未来へのロードを歩むために。

その万感の思いを胸に、蒼乃丞はデッキへと手を伸ばした。

「見せてやるボクの栄光のロードを！ ボクのターン！！」

デッキからドロしたカードを目にした蒼乃丞は口元に笑みを浮かべた。

来たのだ。ワンターンキルを成すための最後の鍵が。

しかし何と言う偶然だろうか。初手の手札五枚を引いた後のデッキの残り枚数は三十五枚。その中から望むべきカード一枚を引き当てるとは、彼女には余程の強運がついていたということか。

いや、否である。

この引きは他ならぬ彼女が呼び寄せたものだ。彼女の己を信じる心と、カードとの絆が奇跡を呼び寄せたのである。

奇跡を呼ぶドロー！

それはデュエルモンスターズ黎明期からこう呼ばれる
引きと。

運命の
ドロー

しかし蒼乃丞の手札には全ての鍵が揃った。

あとは只、征くのみ。

蒼乃丞はデッキからドローしたカードを手札に加えることなく、そのまま決闘盤へと挿し込んだ。

「未来融合・フューチャー・フュージョンを発動！！ 自分のデッキから融合モンスターによって決められたモンスターを墓地へ送り、融合モンスター一体を選択！ 二回目の自分のスタンバイフェイズに融合モンスターを特殊召喚する！ ボクはデッキから竜の尖兵とブリザード・ドラゴン、そして三枚の伝説の白石を墓地に送りF・G・Dを選択！！」

蒼乃丞がエクストラデッキから選択したF・G・Dは攻撃力5000を誇る超強力なモンスター。しかし未来融合・フューチャー・フュージョンは発動してから効果を得るまでタイムラグがあるカードだ。これのみではワンターンキルはなせない。

そう。これのみでは……だ。

未来融合・フューチャー・フュージョンを発動した蒼乃丞の真の狙いは別にある。

デッキからF・G・Dの素材となる五枚のドラゴン族のカードを墓地へと送った時、蒼乃丞は高らかに宣言した。

「この時、伝説の白石が墓地に送られたことにより効果が発動！
一体につき一枚、デッキから青眼の白龍を手札に加える！！」

これこそが蒼乃丞の狙いだった。

手札に己が最も信頼するカードを集めるための布石。それが未来融合・フューチャー・フュージョンだったのである。

フランクも、蒼乃丞が取ったこの戦術は予想外だったのか表情を驚愕に染めていた。

「ッ！ 墓地に送られた伝説の白石は三枚……と、言う事は！？」

「三枚の青眼の白龍がボクの手札へと加わる！ さあ、我が元に集え！ イブリース、アズラエル、ジブリール！！」

蒼乃丞が呼んだ高らかな声に導かれ、三体の青眼の白龍が彼女の手中に納まった。

己が手札へと加わった三枚の青眼の白龍に蒼乃丞が笑みを送る中、シヨックから立ち直ったフランクが余裕の笑みを向けてきた。

「三体の青眼の白龍を一度に集めるとはお見事。しかし、どうするのです？ 確かに青眼の白龍は攻撃力3000を誇る強力なモンスターです。それが三枚もあるとなれば身の毛もよだつ様な脅威でしょう。しかし所詮はリリースが二体も必要な最上級モンスター。リリースするものが何も存在しない今の貴女が手札に加えたとして、一体何が出来ると？」

伝説の白石の効果によって三枚の青眼の白龍を手札に加えた蒼乃丞だったが、フランクの言うとおりだ。

青眼の白龍のは8。最上級に位置され、召喚するには二体のリリースを必要する超重量級のモンスターなのである。

如何に強力なモンスターとて、場に出なければ何の脅威にもなりはしない。

現在フランクに取つての脅威は蒼乃丞の二回目のスタンバイフェイズに特殊召喚されるF・G・Dであったが、これにはまだまだ猶予があつた。さらに、何かしらの手も打てずに召喚されたとしても彼の場にはスーパァ・エゴがある。

最悪ライフポイントを削りきられさえしなければ、その効果でいくらでも挽回は利く。そう思つての言葉であつたのだが、青眼の白龍の後継者たる蒼乃丞がそれを考えていないはずがなかつた。

余りにも浅はかなフランクの言葉に蒼乃丞は笑みを浮かべる。

「ならば貴様に見せてやる。伝説に謳われし、青眼の白龍の力を！」

そう高らかに言葉を放つた蒼乃丞は手札から一枚のカードを切る。ワンターンキルを成すための二の手を。そのカードとは。

「手札から魔法カード、融合を発動！ このカードの効果により、手札にある三体の青眼の白龍を融合！！」

「なッ！？ 手札融合！！」

蒼乃丞が切つてきた融合のカードにフランクは驚きを隠せない。

彼女が発動した魔法カード、融合。それは場、手札にある決められたモンスターを墓地に送り、エクストラデッキから融合モンスターを特殊召喚するための魔法カード。

これならばリリース云々は関係ない。既に融合召喚のために必要な素材は彼女の手札に揃つているのだから。

三枚の青眼の白龍と融合のカードを掲げた蒼乃丞は、高らかに言い放つた。

「かつて謳われし伝説よ、今こそ威光をここに現し究極進化せよ！」

蒼乃丞が紡ぐ高らかな言葉と共に、彼女の場に三体の青眼の白龍が現れ出でる。

その姿は流麗にして華麗、強靱にして無敵。そんな龍が三体、彼女の側に待るよう出現したのである。

美しく気高き白い龍たちは大きく咆哮を放つと融合のカードに導かれ、その身を溶け合うように混ざり合わせていく。

より雄々しく、より華麗に。

三重螺旋を描く三体の青眼の白龍が見せるその様は、変神といってもよかった。

そして。

「融合召喚！ 降臨せよ、青眼の究極竜ッ！！」

青眼の究極竜 1 2 ATK 4500 DEF 3800

より洗練された白き竜が、三つ首を持つ青眼の竜が そしてかつての伝説が、蒼乃丞の場に降臨したのだった。

『で、出たあああッ！ 伝説に語られる青眼の白龍、その融合体が今ここに降臨ッ！！』

かつて海馬瀬人が所有していた伝説のカードの究極形態たる竜の登場に会場は大歓声に包まれた。

「こ、攻撃力4500……………ッ!!」

伝説の龍の出現に、あれだけ余裕でいたフランクも数歩後ろへ後ずさる。

圧倒的な存在感を表現するソリッド・ビジョンだが、目の前に現れた竜は何かが違う。それこそ、あの竜がまるで実在するかのような感覚をフランクは感じていたのだ。

しかし、フランクは自分の場にあるスーパー・エゴを視界に納めると、未だに自分が有利であることを思い出した。

人間と言うものは現金なものだ。先ほどまでは本物であるかのよう感じた青眼の究極竜の威圧感が、己が有利を理解した今では小さく感じる。

それ故にフランクの胸中には一つの思いが渦巻く。伝説なぞ何するものぞ…………と。

「超魔神スーパー・エゴは不死のモンスター。例え攻撃してきたところで、そのターンのエンドフェイズには復活し、全てのモンスターを破壊できる。例え攻撃力4500の青眼の究極竜とはいえ恐れるには足りない…………私の勝利は揺るがない!!」

スーパー・エゴが持つ二つの強力な効果を持つてすれば迎撃は容易い。そう高らかに述べるフランクに対し、蒼乃丞は不敵な笑みを浮かべると、鼻を一つ鳴らした。

「ふうん。それはどうかな」

「なにッ!？」

蒼乃丞のその言葉と態度にフランクは驚きの声を上げる。

それはそうだろう。先ほど確認したとおり、このターンはスーパー・エゴを倒せても、そのターンのエンドフェイズには復活し彼女

の青眼の究極竜を破壊するのである。

エースモンスターである青眼の白龍全てを墓地に送ってまで召喚した、青眼の究極竜が破壊されては彼女に成す術はないはず。

敗北がほぼ決定付けられているのは、むしろ彼女の方ではないか。それなのにこの自信……強がりか、それとも本当に何か手立てがあるのか。心理分析のスペシャリストであるフランクを持ってしても、彼女の心意は図れなかった。

しかし、状況から見れば自分の優位に変わりはないのは事実。

この攻撃さえ凌げば勝てる　　そう確信したフランクは心の奥底で陰惨な笑みを浮かべた。

そんなフランクに対して蒼乃丞は青眼の究極竜に攻撃を命ずるため、腕を高らかに振り上げる。

「征くぞッ！　青眼の究極竜の攻撃！！」

彼女が振り上げた腕に導かれるように、青眼の究極竜は三つの口内に白き破壊の奔流を溜め込んでいく。

その輝きは全ての闇を祓うかのように白く、まるで一つの太陽のようにも見えた。

そして、そのエネルギーが臨界を迎えた時、蒼乃丞が号令と共に腕を振り下ろした。

「アルティメット・バアーストッ！！」

青眼の究極竜から放たれた三条の光の奔流は一つに交わりフランクの場にいたスーパー・エゴを飲み込むと、その無限熱量のエネルギーで灰も残さずに昇華する。

その白き破壊の奔流はスーパー・エゴだけではなく、フランクも牙をむく。

爆炎をあげる爆心地の余波がダメージとなりフランクへと襲い掛

かったのだ。

「くうあああッ!!」

フランクLP4000 2300

ライフポイントを大幅に減らされたフランクだったが、その表情には必勝の笑みが浮かんでいた。

「凌いだ……これで勝利は私のもの!!」

彼女の攻撃はこれで終了。このターンのエンドフェイズ時にスパー・エゴは復活し、その効果で彼女のモンスターは破壊される。あとは煮るなり焼くなり、自分の好きにすればいい。そのどす黒い思考がフランクの脳内を駆け巡る。

彼女の苦悶の表情や悲鳴を想像しただけで絶頂しそうになる気持ちを何とか落ち着かせながらフランクは煙が晴れるのを待つ。

しかし、フランクはそこで妙な事に気がついた。

それは薄くなった煙の先のシルエット。本来ならば青眼の究極竜一体のはずなのに、自分の目に映るシルエットの数は三つ。

嫌な予感と共に、背中に冷たい汗が流れる。

そんな馬鹿な、そんなはずがない。どれだけフランクが心の中で否定をしてみても、嫌な予感は全く払拭されないばかりか募るばかり。

しかしてフランクの場を覆っていた煙路が晴れる。

先に顕になったのは腕を組み堂々と立つ蒼乃丞の姿。しかし、彼女の側にいたのは先ほどスパー・エゴを攻撃した青眼の究極竜で

はなかった。

彼女の場にいたモンスター……それは流麗にして華麗、強靱にして無敵、そしてデュエルモンスター最強であるモンスター。彼女が最も信頼する、祖父からの遺産。

その名は。

青眼の白龍	8	ATK3000	DEF2500
青眼の白龍	8	ATK3000	DEF2500
青眼の白龍	8	ATK3000	DEF2500

「ぶ、青眼の白龍……だと……ッ!？」

神々しき威光を放つ三体の青眼の白龍の姿に、フランクは暫し茫然自失となる。

だが、そんな彼とは裏腹に蒼乃丞の場に現れた伝説の龍の姿に会場は大きな歓声に包まれた。

「な、なんとおおッ!? 蒼乃丞総帥の場にいた青眼の究極竜が消え、代わりに三体の青眼の白龍が出現したああ!! 伝説の最上級モンスターである青眼の白龍が三体も並ぶとは、何と壮大なる光景かああッ!！」

まるで姫君を守護するかのようには彼女の周りに侍る三体の青眼の白龍は、フランクを主の敵と見なしたのか威嚇するように咆哮をあげる。

それは彼にとっては嫌な予感が現実となって現れた瞬間だった。

「こ、これは一体どういうことだ!?! どうして三体もの青眼の白

龍が「

「どうもこうも、このカードを使ったただけだ」

いきなり蒼乃丞の場に三体の青眼の白龍が出現すると言う信じられない光景に戦慄くフランクに対し、蒼乃丞は一つ鼻を鳴らすと一枚のカードを掲げてみせた。

彼女が掲げたそのカードを視界に納めたフランクは呆然と、そのカードの名を口にする。

「融合……解除……！？」

融合解除。

それは融合モンスターをエクストラデッキに戻し、素材としたモンスターを墓地から特殊召喚する魔法カード。蒼乃丞は青眼の究極竜の攻撃の後にこのカードを使い、青眼の究極竜の融合を解いたのであった。

そして、これこそが彼女のワンターンキル最後の手。召喚しにくい青眼の白龍の弱点を補う蒼乃丞の手立てが一つ。

三体の青眼の白龍を従えた蒼乃丞は高らかに言い放った。

「戦闘フェイズ中、融合解除によってボクの場合に特殊召喚された青眼の白龍たちの攻撃は有効だ！ よって、戦闘続行！！」

「ッ！ 攻撃力3000の攻撃が三回も！？」

彼女の言葉に表情を真っ青に変えたフランクに対し、蒼乃丞は一つ鼻を鳴らすと言ってやった。

「ふうん。何も驚くことはない。貴様の敗北はボクに相対した時に既に決していたのだ。伝説の攻撃をその身に受ける栄誉と共に消え去るがいい！ イブリース、アズラエル、ジブリールの直接攻撃！

！」

蒼乃丞が腕を振り上げると共に青眼の白龍が口を開き、そこに破壊の輝きを溜め込んでいく。

白い輝きは臨界を突破し、会場を白く染め上げた。

「滅びの三連爆裂疾風弾ツ！！」
トリプルバーストストリーム

そして、蒼乃丞の号令と共に放たれた三条のエネルギーの奔流がフランクを包み込む。

「ぬおおおおおお！ うわああああああッ！！」

三点より照射される無限熱量にまで高まった破壊の光により、フランクのライフポイントは余さず全て昇華されていく。

その様を見た蒼乃丞は極上の笑みを見せると、高らかに叫んだ。

「強靱・無敵・最強オオツ！！ 粉碎・玉砕・大喝采ツ！！ ふっはははははははは！ あーっはははははははははは！！」

フランクLP2300 LP0

最後に残ったのは膝を突いてうな垂れるフランクと、宣言どおりワンターンキルを成した蒼乃丞。そして、高らかに勝鬨の咆哮を上げる三体の青眼の白龍の姿であった。

『き、決まったああッ！！ しかも宣言どおり、ワンターンキル達成いいッ！ これはすごい！ 本当にすごい！ 我々は今、新た

な伝説のページが開かれるのを目撃した！！　一回戦第二試合の勝者は、海馬蒼乃丞おおおッ！！」

蒼乃丞の成した偉業に観客ばかりかMCまで興奮する中、VIPルームで彼女の決闘を見ていたレクスは満足気に微笑んだ。

「やはり彼女を呼んで正解でしたね。これほどまで大会を盛り上げてくれるとは」

上出来も上出来。これならばシグナーを追い詰める最強の刺客になっってくれることだろう。

加えて彼女はシグナー候補者。レクスの彼女に対する期待は高まるばかりだ。

「どうでしたか彼女の決闘は？」

その期待を隠そうともせず、ジャックに彼女の決闘の感想を求めたレクスであったが、彼はその問いかけに答えなかった。……いや、答えることが出来なかったの方が正しいか。

何故ならジャックは苦々しげな眼差しで只一点を　彼女の事を見ていたのだから。

「これがヤツの決闘……………」

蒼乃丞のさせたパーフェクトな決闘にジャックは静かに拳をきつく握る。

彼女の見せたワンターンキル　それも堂々と正面から切り込む正攻法での勝利に、ジャックは彼女に自分以上の王者の風格を垣間見たのだった。

憎々しげに歯軋りジャックとは裏腹に、蒼乃丞の勝利に喜ぶ者がいた。先の第一試合、龍可に扮してボマーと戦った龍亞である。やんちゃな男の子故であろうか、蒼乃丞の見せた派手なワンターンキルは彼の琴線に触れたらしい。

「すっげえ！ 超カッコイイ！ 見た、龍可！？ ワンターンキルだよワンターンキル！！」

未だに勝利の雄叫びを上げ続ける三体の青眼の白龍を指差しながら大声で話す龍亞に、龍可は顔をしかめる。

「もう、耳元で怒鳴らないですよ。聞こえているから。……でも、本当に綺麗」

迷惑そうに龍亞に言ってやった龍可であったが、彼女も青眼の白龍の美しさの前に、そうポツリと呟いた。

龍亞と龍可の兄妹が青眼の白龍の姿に感嘆する中、彼らと席を同じくする一人の老人 矢薙典膳も大はしゃぎだ。

「あれが伝説の青眼の白龍か！ ワシも長いこと生きとったが、青眼の白龍を生でみるのは初めてじゃなあ。いやあ、綺麗なモンスタ

「じゃと知つとつたが、それにしても美しい！ 伝説に名を連ねるだけはあるのお」

この歳に至るまで世界の不思議を見て回ってきた典膳は、同時に世界中の決闘者たちの決闘も見てきたのだ。当然、その中には海馬瀬人の決闘も含まれる。

しかし、その決闘はどれもが中継放送や録画映像といったものばかり。生で海馬瀬人の決闘を見たことは一度もなかったのだ。

実際にこの目で青眼の白龍を見たのがこれが初めてだったのだから、彼が少年のようにはしゃぐのも無理からぬことだった。

「世界に四枚しか存在しない超レアカード、青眼の白龍……。かつて海馬瀬人の切札として活躍し、初代デュエルキング、武藤遊戯のブラック・マジシャンと双璧をなしたモンスター……。伝説に違わぬ力だな」

典膳の隣に座っていた氷室仁も圧倒的な青眼の白龍たちのパワーの前に身震いする。

あれと相對するには、かなりの覚悟がいる 元プロ決闘者である氷室をしてそう言わしめるほどの圧倒的な存在感を青眼の白龍は放っていたのだ。

そして、それは青眼の白龍だけに感じられるものではない。

他にもう一つ、青眼の白龍よりも大きな存在感が感じられた。

それは他でもない、伝説に謳われし三体の青眼の白龍の現主たる海馬蒼乃丞だった。

観客席で氷室が蒼乃丞から圧倒的な衝撃を受けるさなか、奇しくも同じ衝撃を感じている人物がいた。

「青眼の白龍の力は伝説に謳われている通りだが、真に恐ろしいのは彼女のカードプレイングセンスだな」

デュエル・オブ・フォーチュンカップ出場者の控え室。

そのモニターに映る青眼の白龍に視線をやりながらボマーは言葉を続ける。

「いかに青眼の白龍が攻撃力3000を誇るモンスターだからといって最上級モンスターにとっては避けられぬ道　二体のリリースと言う軛からは逃れられない。と、なると別の召喚手段が必要になってくる」

「それが特殊召喚か……………」

三体の青眼の白龍と蒼乃丞を見つめながら語ったボマーに遊星が言葉を返した。

通常召喚が難しいのならば、特殊召喚に道を見出すしかない
その遊星の言葉にボマーは頷く。

「ああ。今回彼女が見せた未来融合・フューチャー・フュージョンからの伝説の白石を墓地に送っての青眼の白龍のピンポイントサーチ、青眼の白龍三体融合から戦闘フェイズによる融合解除までの一連の動きは見事の一言だ」

まるで流れるように行われた無駄のない蒼乃丞のワンターンキルに、ボマーはそう総括すると言葉を続けた。

「青眼の白龍の召喚方法は融合からの融合解除だけでなく、他の特殊召喚の手段もいろいろと仕込んでいることだろう。それに青眼の白龍は海馬瀬人のカード。この決闘、未だ彼女のデッキは明らかにされていない」

「未だ見ぬ脅威……ということか」

ボマーの語るとおり、この決闘で彼女が見せたカードの数は余りにも少ない。

彼女のデッキの軸は青眼の白龍で間違いはなかるうが、その脇を固める二枚目、三枚目のキーカードがあるやもしれない。さらに青眼の白龍を展開する手段も、まだまだ持っていそうだ。

その事実、遊星は顔にこそ出さないが掌は汗でベツタリとなっていた。

間違いなく彼女は強敵だ　そう認識を新たにした遊星の考えを読んだのか、ボマーは静かに遊星に語りかける。

「キングであるジャックには悪いが、俺は彼女こそが今大会最強の決闘者だと思っている」

「……………」

それは遊星も考えなかったわけではない。しかし、遊星はボマーの言葉に肯定も否定も出来なかった。

遊星は蒼乃丞の事を全く知らない。彼女が何を考え、どんな人生を歩んできたのかを。

遊星はジャックの心意がわからない。何故彼が、自分の作ったD・ホイールとスターダスト・ドラゴンを奪ってまでキングになったの

かを。

彼らを知らないからこそ、ここで答えを出すことは遊星には出来なかつた。

そんな遊星の姿に好感を覚えたのか、ボマーは微笑を浮かべる。

「まあ何はともあれ、俺達は決勝まで上がらないと彼女とは戦えないんだ。それに次はお前の番だろう？　そろそろ用意したらどうだ」「……ああ。そうすることにしよう」

そつだ。まず、勝ち進まないことには彼らと決闘することはできない。

順調に勝ち上がり、そして対峙すれば自ずと全ての真実が曝されるだろう　そう信じる遊星はD・ホイールのガレージに歩を進めるのであつた。

「何なのだ……！ アレは一体何だというのだッ!?」

ジャックとは別に用意されたVIPルームの一室で、蒼乃丞は声を震わせていた。

いや、声だけではない。彼女は全身をも戦慄かせながら、射抜くような視線をある場所へと向けていた。

それはデュエル・オブ・フォーチュンカップ一回戦第四試合。謎の美少女決闘者と紹介された十六夜アキと、鉄血の騎士の異名を持つジル・ド・ランスポウとの決闘である。

ただの決闘ならば蒼乃丞もここまでの憤りは感じはしない。問題は、その決闘の経緯と迎えた結末だ。

決闘に敗れ倒れ伏したジル・ド・ランスポウの体は無残にも傷つき、決闘場のあちこちには何かによって穿たれた跡が見える。

何とこれらの惨状は決闘によって起こされたものなのだ。

信じがたい現象だ。どんなに圧倒的な存在感を演出できるソリッド・ビジョンシステムとはいえ所詮はバーチャル・リアリティつまりは幻影である。

幻影が実体に影響を及ぼせるはずなどない……はずだった。

しかし現実には決闘によるダメージが決闘者を傷つけ、カードの効果が大地を割る……。そんな現実離れた現象が 蒼乃丞が嫌う超常的なオカルト現象が先の決闘で起こったのである。

その現象を起こしたのは決闘の勝者として決闘場に立つ少女十六夜アキ。

己が力によって人を傷つけたと言うのに何の感慨もなさげに立つ彼女こそ、最近巷で騒がれているダイモンエリアに出没する仮面の

女。

ふらりと現れては、その異能を持って破壊を撒き散らす《黒薔薇の魔女》だったのである。

《黒薔薇の魔女》の噂は蒼乃丞とて耳にしていたが、オカルト話しが嫌いな彼女はこの話を単なる噂と歯牙にもかけていなかった。

それに決闘の衝撃を現実のものに変える技術は数十年前も前から存在している。

この技術　　衝撃増幅装置を用いた決闘によって命のやり取りを行う地下決闘は、かつてプロリーグに名を馳せ、後にカイザーリーグと言う独自リーグを立ち上げた丸藤亮がヘルカイザー亮へと覚醒した件もあり、とても有名である。

現在では取締りの対象となっている技術であるが、命のやり取りに魅了される観客も少なくはなく、衝撃増幅装置による闇決闘は撲滅できていないのが現状だ。

蒼乃丞はオカルトを信じないが故にアキの異能を超常的なものではなく、この技術によるものであると断じていたのである。

故に彼女は言葉ばかりか全身を震わせ怒っていたのだ。

「おのれ……ッ！　我が海馬コーポレーションが主催する大会を、よりにもよってオカルト紛いの方法で穢すとは……許さん！　絶対に許さんぞッ！！」

己が主催する大会を、大嫌いなオカルトを装った胡乱な手段で持つて傷をつけられたことに。

しかし、この大会のそもそもの狙いは《赤き竜》の痣を持つ者を見つけると言う胡乱の極みであるのだが、彼女にしてみれば己が参加した段階でそんな理由は大きく棚上げされたようだ。

蒼乃丞は怒りに震える手を振り払い、空中にスクリーンを投射させると呼び出しのパネルを叩く。

パネルが叩かれてから数秒。直ぐ側で控えていたのだろう、磯野

がVIPルームの扉を潜り蒼乃丞の前へと進み出た。

「お呼びでしょうか、蒼乃丞様」

恭しく頭を下げた磯野に対し、蒼乃丞は会場を指差しながら怒鳴るようにして言葉を放つ。

「スタジアムを徹底的に調べろ！ 会場、客席、待合室……くまなく全てだ！ あと、十六夜アキの経歴と近辺情報を洗え。彼女の家族構成、友人関係、これまでの人生で何をしてきたのか漏らさずだ！」

会場のどこかに衝撃増幅装置か、それに類するものが設置されていると睨んだが故の言葉である。

同時に、厳しい規制の対象になっている装置を手に入れるのには一介の少女でしかないアキでは確実に不可能と蒼乃丞は見た。ならば彼女の裏には何らかの組織の存在があると見て間違いない。

「は、ハッ！ 直ちに！！」

怒りに震える蒼乃丞の姿に顔を青くした磯野は踵を揃えて敬礼すると、駆ける様にしてVIPルームを後にする。

あの様子では既に本社に連絡を入れ、動かせるだけの人員をかき集めていることだろう。それだけ蒼乃丞の見せた迫力は鬼気たるモノがあった。

あとは優秀な海馬コーポレーションの情報部のことだ。

今日中には全ての情報を集めてくるに違いない。そう思った蒼乃丞は、今一度忌々しげな視線を会場にいるアキへと向けた。

待っている。すぐに化けの皮を剥がしてやる！

そう心に誓う蒼乃丞だったが、彼女の推理は半分はずれ半分当たることとなる。

時は進み、その日の夜。

蒼乃丞は己が城 海馬コーポレーションの社長室で磯野から手渡されたスタジアムと十六夜アキに対する調査報告書に目を通していた。

結論から言うとスタジアムには何も仕掛けられてはいなかった。当然と言えば当然か。セキュリティの警備厳しい会場に仕掛けを施すなど現実的に考えて不可能だ。

しかし、そうでないのならば決闘のダメージが現実になる彼の現象はどう説明したものか……。その答えは蒼乃丞が持っている書類の片方、十六夜アキに関する報告書に記されてあった。

曰く、十六夜アキの力は本物である と。

「くっ……何なのだこれは！ 巫山戯るなあッ！！」

報告書の一番上に書かれた文言に、蒼乃丞は強く憤慨する。

彼女が憤慨するのも無理はない。化けの皮を剥がしてやるうかと近づいてみれば、それが本当に化物だったのである。もはやこれは

冗談を跳び越え喜劇の域だ。

しかし彼女は怒りを沈ませざるを得なくなる。

何故なら、その裏づけとして一つの資料が報告書に添付されていたからである。

その資料とは蒼乃丞が総帥の座につく以前……三年前にデュエルアカデミア・ネオドミノ校で起こった模擬決闘時の事故の顛末が記された事故報告書。

彼女の膝元であるデュエルアカデミアからもたらされた事故報告書には三年前のある日、アキは授業で行われた模擬決闘で対戦者と見学者数名に軽傷を負わせ、天井を粉碎したと書かれてあった。特に天井は構造上の欠陥も見受けられず、純粋な衝撃により壊されたと記されている。

そしてこの件を境にアキは決闘をしなくなり 正確には誰もが彼女と決闘をしなくなり、それから数日後アキはデュエルアカデミアを休学したとも書かれてあった。

現在の在学名簿を見ても、そこに十六夜アキの名前はあるが未だに休学となっている。

磯野からの報告書によれば、それ以来彼女は実家へ帰っていないらしい。

彼女の両親はトップスとまでは行かないが、それでもシティの上流階級出身で父親はシティの議員と言う地位についているようだ。

彼女はそんな両親との接触も、あの事件以来断っているとか。

デュエルアカデミア休学までのくだりを読んだ蒼乃丞は肩を怒らせながらも次のページを捲る。そこから先に書かれていたのは、デュエルアカデミアを休学した後の彼女のその後。

そこに記された、とある存在に蒼乃丞は大きな衝撃を受けた。

アルカディアムーブメント。

それはデュエルアカデミア休学以降、仮面を被り《黒薔薇の魔女

《となつてダイヤモンドエリアで破壊活動を行っていたアキに声をかけた謎の組織。

デイヴァインと言う男が組織したその団体は、何でも彼を含めた構成員の全員が何かしらの力を持つサイコ決闘者であるという。

サイコ決闘者　カードを使って超常の能力を発揮する決闘者の事をそう呼ぶらしく、その数は決して少なくはないらしい。その異能から迫害を受け続け、決して日の目を見ることのなかった彼らは地下に潜り、秘密の組織として活動してきたようだ。

その存在を知っていたのは治安維持局とイリアステルのみだろう。この組織の存在は蒼乃丞自身初めて聞くものだった。

しかしそれは致し方のないことだ。いかに海馬コーポレーションの情報部が優秀とはいえ、存在しているかどうかわからないものを調べるほど暇ではない。

今回のことは蒼乃丞がアキへの調査を命じたことと、アルカディアムーブメントが表の世界に出てきた事が重なった偶然により、その存在がわかっただけの事なのだ。

そんな彼らの掲げる理想はサイコ決闘者が差別されない理想郷を作ることらしい。しかし掲げる大層な理想とは裏腹に余り言い噂は聞かれず、逆に人攫いや人体実験をしていると言ふ噂もある。

この噂の裏付けを取ろうとしたところでアルカディアムーブメントに感ずかれたらしく、ここで十六夜アキに関する報告書は終わっていた。

「ちッ！」

全ての報告書を読み終わった蒼乃丞が忌々しげな表情で一つ舌打ちする。

肝心なところで報告書が終わっていたことに対してではない。逆に彼女は海馬コーポレーション情報部の仕事に感心すらしていた。

たったの一日 厳密に言えば半日で、これだけの情報を仕入れてくれたのである。彼らには特別ボーナスを払ってやってもいいかと思えるほどのいい仕事ぶりだ。

ならば何に対してと問われるのは、もう今さらな事だろう。

当然、サイコ決闘者の存在に關してだった。

これまで頑なに彼女が否定してきたオカルトの存在。それが現実となつて目の前に現れたのである。

認めるしかあるまい。認めたくないことだが……………。

己が信頼する部下達が上げてきた報告書にそう書かれているのなら、蒼乃丞とて信ずるしかあるまい。蒼乃丞が生きてきた十八年の人生で、初めて彼女がオカルトの存在を認めた瞬間だった。

忌々しげな顔で報告書を睨みつけていた彼女の耳に扉をノックする音が聞こえてくる。

このような時間に何用なのか。

虫の居所が悪い蒼乃丞は一瞬追いつ返そうかとも思ったが、それは余りにも大人気ないと思いなおし入室を許可することにした。

「入れ」

短くそう言った彼女の言葉にノックをしていた人物 磯野は扉を静かに開き、社長室へと足を踏み入れる。

「蒼乃丞様」

「磯野か。今日のご苦労だったな。しかし、こんな時間に何用だ？」

磯野に対し労いの言葉を向けた蒼乃丞だったが、同時にこんな夜更けに自分を訪ねたてきた理由を問いかけた。

時間も時間だ。社の事で話があるならば明日に持ち越してもいい

はず。なのに今、このタイミングで話をするということは何か火急の事態が起こったということか。

少し身を硬くして磯野の言葉を待った蒼乃丞だったが、彼の口から紡がれた言葉は何とも拍子抜けするものだった。

「はッ。実は蒼乃丞様にお願いがあつて参りました」

何と、磯野の話とは蒼乃丞に願いを聞き入れてほしいと言つものだったのである。

これには流石の蒼乃丞も頬を緩めた。

何せこの磯野と言う人物、上司である自分に対して滅多に願いなど口にしては来なかつたのである。

それが今日に限つて願いを口にするとは……まあ、今日は有益な情報を集めてきたことだし特別に許してやろう。そう思つた蒼乃丞は、その愛らしい頤に頬杖をつくと言つてやった。

「願ひとは、貴様にしては珍しい……。聞くだけは聞いてやる。言つてみる」

しかし、その磯野の願ひとは蒼乃丞が到底聞き入れられるものはなかつた。

「ありがとうございます。実は、明日の二回戦、蒼乃丞様には出場を辞退して……いただき……たいので……す」

言葉が進むにつれ表情が消えていく蒼乃丞の姿に、言葉尻を震えさせながらも最後まで言うことのできた磯野は大した人物である。

絶対零度の様な彼女の視線に曝されれば、凡百の人間は動くことすら叶わないだろう。

それだけの迫力を彼女は放つていたので。

「……今、何と言った？」

凍てつくような視線で磯野を見据えた蒼乃丞は、よく聞こえなかったと言っ風にな一度、磯野に問いかける。

まるで雪山を裸で歩くかのような寒さに背筋を凍らせた磯野であったが、こればかりは首が飛んでも言わねばならない……そして、どうか彼女に聞き届けて貰わねばならない大事な事だった。

「で、ですから……蒼乃丞様には明日の試合は辞退を

」

何とか必死に言葉を搾り出す磯野に、蒼乃丞は徐に立ち上がる。

その蒼乃丞の行動に酷く体を震わせる磯野であったが、体を突き刺す絶対零度の気迫が薄れていくことを感じると安堵の息を漏らした。

しかし、それもつかの間。

今度は部屋中を得も知れない熱気が支配していく。

それはまるで、活動している火山の火口に足を踏み入れたかのような暑苦しさだ。息を吸うだけで肺が焼け付きそうな息苦しさも感じる。その正体は燃え滾る炎のような烈しい怒り。灰さえ残さず燃やし尽くす無限熱量の様な蒼乃丞の怒りであった。

実際は空調が効いた涼しい部屋のはずなのに、蒼乃丞の放つ気迫により磯野の汗腺は開きっぱなしだ。

絶対零度から無限熱量へ。静から動へと怒りのベクトルを百八十度転換した蒼乃丞は大きく息を吸うと磯野へ向かって吼えた。

「巫山戯るなああッ！！ 磯野、このボクに対して敵に背を向けると言うのか!?!」

空間どころか時間さえも揺らしてしまいそうな程の大声が社長室

に響き渡る。

彼女の怒りは当然ともいえる帰結だ。

蒼乃丞の辞書に後退の二文字はない。常に眼前の敵を打ち砕き、蹴散らし、踏み潰し、蹂躪してきた彼女にとって戦いを前に背を向けると言うのは最も恥ずべき行為であるのだ。

それを態々言葉にし、あまつさえ自分に乞うてくるとは……蒼乃丞の怒りは既に磯野の第一声から臨界に達していたのである。

だが、彼女の逆鱗たるそれを磯野が知らぬはずがない。彼女の美学がそれを口にすることすら許さないことを彼が知らぬはずがないのだ。

しかし磯野にとって、ここはあえて言うておかなければならない所だった。

「し、しかし次の相手はあの十六夜アキなのですよ！ あの力によって大事な蒼乃丞様の御身に何かあれば、私は先代や先々に顔向けが出来ません！！」

その最たる理由が、明日の準決勝で蒼乃丞が戦う決闘者 アキの存在だ。

磯野は彼女がアキとの決闘で傷つくのを危惧していたのである。今日の決闘で襷褌雑巾のようにされたジル・ド・ランスボウのように

に。 。
それに傷つくだけでは終わらないかもしれない。

ひよつとすれば運悪く死んでしまう可能性もあるかもしれないのだ。その危険性がある限り、磯野は蒼乃丞を明日の試合に出すわけにはいかなかった。

そんな磯野の思いの丈を込めた言葉に対し、蒼乃丞も気丈に言い返す。

「決闘を前にして敵に背を向けたとなれば、それこそ先々代たるお

爺様に顔向けできぬわ！！ そんな事も忘れるほど耄碌したか、磯野ッ！！」

「敵は十六夜アキだけではないのです！！ 彼女の後ろにはアルカディアムーブメントがいるのですよ！ 組織の規模も、構成員の数も、未だに全貌が把握できていない謎の団体を相手取るには些か早計に過ぎます！！」

「我が海馬コーポレーションが新興の宗教集団ごときに後れを取る と貴様は本気で思っているのか！？」

「それはないと私も固く信じております！ しかし、ここであえて火中の栗を拾う必要があるのですかと問うておるのです！！」

蒼乃丞が吼えれば磯野が叫ぶ。

話は平行線を辿り、一向に決着のつく様子は見られない。

そんな中、不意に蒼乃丞は怒りの表情を静めると磯野に向かって問いかけた。

「……磯野、ボクの目指すロードを言ってみる」

冷静になった蒼乃丞の姿に毒気を抜かれたのだろう。磯野も熱くなっていた頭を冷やすと、いつもの声色で蒼乃丞が標榜する言葉を紡ぎだした。

「それは……海馬コーポレーションの更なる躍進によるイリアステルからの脱却……ですが」

それでも何か言い募ろうとする磯野に対し蒼乃丞は片手を上げて彼の言葉を制すと、静かに……しかし力強く言葉を紡ぎだしていく。

「己がこれと定めた戦いのロード。自分自身が決めたロード故に、そこにどんな敵が立ちほだかるうともボクはそこから降りる訳にも

止まる訳にもいかないのだ。かつてのお爺様がそうであったように「蒼乃丞様……………」

とつとつと語る蒼乃丞の姿に、磯野は海馬瀬人の姿を思い出していた。

確かに海馬瀬人も、いかなる危険が待っているようにも己が道を塞ぐ者たちを蹴散らしてきたのだ。

それも自分の制止の言葉を全く聞かずに。彼女の言葉にかつての懐かしさがこみ上げてくるのを磯野が感じる中、蒼乃丞は言葉を続ける。

「それに遅かれ早かれアルカディアムーブメントとはぶつからざるを得ないだろう。ヤツラは何かきな臭い。海馬コーポレーションの敵にはなっても味方になることはない。ボクは見ている。そうであるならば、今回の事はヤツラとの衝突が多少早まっただけ……………それだけの事だ」

そうまで言われては磯野とて引き下がるしかないかった。

本当は磯野とて納得できてはいない。今すぐにも彼女に明日の試合出場は思いとどまっしてほしいと願っている。

しかし、こうなっては蒼乃丞は梃子でも動かないことを磯野は知っている。こう言うところまで彼女はかつて仕えた海馬瀬人にそっくりだ。その蒼乃丞のあまりにも海馬瀬人に似た生き様は、やはり磯野にとっては眩しく、主と敬愛するに相応しいものであった。

「わかりました。蒼乃丞様がそこまで言うのなら私には、もはや言うべきことはありません。しかし、これだけは言わせていただきます」

そして、そんな彼女にこそ磯野は伝えておきたい言葉があった。

「どうか、ご無事なお姿で帰ってきてください。貴女がご健勝であること……それだけが私の願いです」

身分や肩書き、そして己が身に課した使命を小さな体一つで抱えて立つ蒼乃丞。そんな彼女の無事こそが磯野の願って止まないことだったのである。

改めて語られた磯野からの願いに、蒼乃丞は珍しく　本当に珍しく柔らかな微笑を浮かべた。

「ふうん。磯野よ、そういうことならば安心するがいい」

いつも見せる挑戦的な笑みや、獰猛な笑みとはまるで違う。

歳相応の乙女が見せる花の咲いたような微笑に磯野は呆然となる。

そんな磯野の姿が可笑しいのか、もう一つ笑みを漏らした蒼乃丞は最後にこういつて見せた。

「明日の決闘、勝つのはボクだからな」

銀月の月光の下、その言葉を紡いだ彼女の周りに三匹の白い龍が見えた気がした。

明けて翌日。

「何故止めた！？ 何故えええッ！！」

スタジアム中にボマーの悲嘆の音が響き渡る。デュエル・オブ・フォーチュンカップの準決勝は早くも波乱に見まわっていた。

それは準決勝の第一試合、遊星vsボマーの騎乗決闘が遊星の勝利に終わった後のことだ。

スタジアムの映像及び音響設備をジャックしたボマーは、レクスが己が故郷にした悪行を 《赤き竜》の実験により村を壊滅せしめ、彼の弟と妹を含めた村人全員を消し去ったことを暴露したのである。

彼の独白に会場が騒然とする中、全てを暴露し終えたボマーはD・ホイールに跨るとレクスのいるVIPルームへと特攻を仕掛けた。村を焼き、弟や妹を奪ったレクスに復讐するために。

一矢報いよう空へと舞ったボマーのこの特攻は、しかして遊星によつて阻まれた。

ボマーと同じくD・ホイールを空に踊らさせた遊星は前輪をボマーのD・ホイールに当てることで勢いを殺させたのである。

だがボマーの執念が乗り移ったのか、その衝撃で弾けとんだD・ホイールの部品がレクスめがけて襲い掛かる。ガラスを突き破り己を引き裂かんとするそれをレクスは避けるのではなく、何と左手で受け止めたのだ。

その光景を目撃したのは同じ部屋にいたジャックとイエーガーのみ。レクスの鋼鉄で出来た腕を始めて見るのか、ジャックの表情には驚愕の色が見て取れた。

しかし、ボマーにとってそんな事はどうでもいい事だった。彼にとつて重要なのは復讐が失敗に終わったことと、それを止めに入っ

たのが遊星だと言うことだ。

昨晚、星なき夜空の元で彼らは語り合ったのだ。己が立脚点を故郷を思つゝ気持ちを。

同じ気持ちを抱く二人は不思議と共感を覚え、言葉にせずとも友と言える絆を育んだ。故にボマーは遊星ならば自分の復讐を理解してくれるはずだと思つていたのである。

だが、結果は違った。

彼の復讐を止めたのは他の誰でもない、昨夜共感を共にし絆を交わしたはずの遊星であつたのだ。

故に遊星の胸倉を掴み挙げて、悲嘆の籠つた問いを投げかけたのである。

そのボマーの問いかけに、遊星は真つ直ぐにボマーの目を見つめ返し語つた。

「ボマー、俺もヤツを許すことは出来ない。だが、力づくで決着をつけるならお前もヤツと同じだ」

「遊星……ッ、あああああああああッ！！」

魂の奥底から響くボマーの悲痛な叫びがスタジアムに木霊する。

ボマーの余りにも痛々しい叫びに多くの観客たちが呆然とする中、頭になつた機械の腕を後ろに隠したレクスは会場中にモニターを投射させた。

『会場の皆さん、どうかご安心ください。私は治安維持局長官として、皆さんを護る責任があります。どんな事が起ころうとも皆さんを護ります。……この命に代えても』

急に会場中に浮かび上がったレクスの姿に一瞬会場が騒然となつたが、彼の口から紡がれた心強い言葉に会場は一転して歓声に包まれた。

それこそボマーの語った言葉を忘却させるほどに。
無理もなかるう。

凶行に走った一決闘者と、治安維持局長官では言葉の重みが違う。
どちらの言葉を観客が支持するかなどわかりきった事だった。

舌先三寸で場を治めたレクスのパフォーマンスを別室のVIPルームで見っていた蒼乃丞は一つ鼻を鳴らしていた。

「ふうん。流石は治安維持局長官といったところか、口先だけは達者だな。しかし」

会場中が大きな歓声をレクスに贈る中、不機嫌そうな顔でレクスをそう評した彼女は視線をボマーへと向ける。

治安維持局長官への殺人未遂によりセキュリティに連行されていく彼が先ほど語っていた言葉がどうにも蒼乃丞は気にかかっていたのだ。

昨日オカルトの存在を認めはしたが、それはサイコ決闘者に対してのみ。

未だに蒼乃丞はレクスの語る《赤き竜》の存在を認めてはいない。しかしボマーの語った故郷の惨状は《赤き竜》によって引き起こされたものだという。

昨日までの蒼乃丞ならば馬鹿馬鹿しいと一刀両断した事だろう。既存の兵器を持って焼き払われたと考えるのが一番妥当だと。

だが一度オカルトの存在を認めた蒼乃丞は、その《赤き竜》の存在を頭から否定することが出来ない。

彼女は非常に優秀だ。

万に一つの可能性もあれば、それを見越した思考をする……いや、してしまう。

その優秀さ故に彼女はオカルトに対して完全否定することが出来なくなってしまうのである。

「ちっ……本当に忌々しい限りだな」

その舌打ちは、オカルトを頭から否定することを拒否する己が思考に対してか。それとも、その呼び水となった十六夜アキとアルカディアムーブメントに対してか。もしくは、その両方か。

それは蒼乃丞本人さえもわからないことだった。

忌々しげに蒼乃丞が舌打ちする中、彼女の対戦者たるアキは、その身を水の中へと浸していた。

ここはアルカディアムーブメントが用意したトラックの一室であ

るメデイカルルーム。

試合前の高ぶった心を落ち着かせるために、アキは適温に保たれた水が張られたポットの中に身を横たえていたのである。

虚空に視線を彷徨わせながら心を落ち着かせるアキの目元に、一人の若い男がやってくる。彼こそがアルカディアムーブメントの創立者であり総帥、デイヴァインだった。

デイヴァインはポットの近くに備え付けられた椅子に腰掛けると、優しい表情と声音でアキへと語りかけた。

「アキよ、わかっているね。この大会で我らの存在を明らかにしたことにより、リスクは格段に増えていく。アキの心を惑わす輩が目の前に現れるかもしれない」

これまで決して表に出ることなく、日陰で暗躍してきたアルカディアムーブメントが満を持してその姿を曝したのだ。

不意に現れた巨大な組織に、警戒感を抱くなどというのは無理からぬこと。

これからは日陰にいる時は受けることのなかった有形無形の妨害を受けるようになるかもしれない。それは翻ってみればアルカディアムーブメントの象徴であることを今大会で印象付けたアキが最も標的になりやすいと言うことだ。

そう語ったデイヴァインの言葉に、アキは臆することなく真っ直ぐにデイヴァインを見つめ返しながら答えた。

「無駄な事です。私の使命はアルカディアムーブメントの理想を世界に知らしめる事。この信念は揺らぐことはない。私の心はデイヴァイン、貴方によって正しく導かれている」

とつとつと語るアキの瞳には何の迷いも見られない。

しかしそれは、自分の定めたロードを己が力とカードを持って突

き進む蒼乃丞の絶対の自信を滾らせる瞳や、友や仲間、カードとの絆を信じる遊星の揺らがぬ信頼を宿す瞳とは似ても似つかないものだった。

彼らの迷いなき自信や信頼は己で定め、そして心に刻んだものに誓いを立て、深く信じるからこそ彼らの瞳は眩しいほどに光り輝く……それは全生物の中で人のみを持ちうる事ができる唯一無二の輝きだ

だが、同じ迷いのない瞳だと言うのにアキの瞳には彼らの様な眩しいほどの光はない。

何故ならそれは、全てをデイヴァインに委ね、自分自身は考えることを放棄した人形の瞳であるからだ。

自分の意志が存在しない伽藍堂のような瞳に宿るのはデイヴァインのみ。

彼女にとっては絶望の淵にいた時、手を差し伸べてくれた同属とも言えるこの男こそが心の拠り所であったのだ。

そんな盲目的に自分を信頼するアキの瞳と言葉に、デイヴァインは満足気に頷く。

「アキは賢いな。そう、彼らイリアステルの野望は悪しき者の象徴《赤き竜》の復活にある。人々は知らない。《赤き竜》によって世界を跪かせようとするのを。それに気付いているのは神より授けられた能力を持つ我々だけだ」

「わかっています」

「次の準決勝、相手である海馬蒼乃丞は海馬コーポレーション総帥と言う地位からイリアステルの関係者であることは確実だ。だがアキなら心配は要らない。もし自分の力に負けそうな時はこの髪飾りがアキの力を安定させてくれる。次の試合で海馬蒼乃丞を倒し、決勝戦で不動遊星を倒し、最後にイリアステルの傀儡であるジャックを倒したとき、人々の罵声は賞賛に変わるだろう。勝つのはお前だ、そして理想成就の時は近い」

「はい」

従順なアキの返事に愛おしげな それこそお気に入りの人形に向けるような笑みを向けたデイヴァインはもう一つ満足気に頷くと立ち上がってメディカルルームを後にしたのだった。

デイヴァインが退出し再び静寂に包まれたメディカルルームの中で、アキは右腕を掲げる。そこに浮かび上がっていたのは竜の足の形をした痣。

これこそがレクスが求めてやまない《赤き竜》により選ばれたシグナーの証。しかしアキにとって、この痣はもつと別の意味を持つものだった。

それは 忌むべき印。

アキの脳裏にかつての記憶が甦る。

この痣が現れ出でた日の事を、初めてサイコ決闘者としての力を使い初めて人を 実の父親を傷つけた日の事を。

そして父に怯えた目で見られえ、化物と呼ばれた日の事を。

アキの人生が 忙しいが優しい父と、慈愛に満ちた母と幸せに仲良く暮らしていくはずだった彼女の人生が狂った瞬間だった。

だからこそアキは、この痣を憎む。

手に入ったはずのものを全て奪い去った元凶として。今も自分を苦しめる悪魔の象徴として。

ライトが落とされ、夜の帳が降りたような演出を見せるスタジオ
ムにMCの声が響き渡る。

準決勝第二試合の始まりだ。

『さあ！！ 待ちに待った準決勝第二試合！ その選手の入場だあ
あッ！ 一回戦の衝撃未だ生々しい《黒薔薇の魔女》、十六夜アキ
！！』

スモークが焚かれ、そこからアキが登場すると同時に会場は一斉
に大ブーイングに見まわれた。

魔女を倒せ、化物は巢に帰れ、魔女を生け贄に。

その様な言葉が恥じも外聞もなく会場全体から浴びせられる光景
は、まさに過去の異端審問による魔女裁判を彷彿とさせた。

『対するは、こちらも一回戦を衝撃のワンターンキルで勝ち上がった
海馬コーポレーションの姫君！ 海馬蒼乃丞！！』

そんな大ブーイング渦巻く会場も、蒼乃丞の登場により歓声に変
わる。しかし、それは多分にアキが惨めたらしく敗北するのを期待
してのものだ。

それを肌で感じ取ったのか、蒼乃丞はそんな観客達に対して不機
嫌さを顕にする。

別に赤の他人であるアキがどう評されようと蒼乃丞の知ったこと
ではない。

しかし、しかしである。

己が栄光のロード、その一ページたる決闘が斯くも醜い罵声に包

まれているという一点において彼女は腹を立てていたのだ。

だが、彼女のそんな心情を観客達が理解できるはずもない。観客達の蒼乃丞に向ける歓声は、どんどん非情で陰鬱な感情を含んだモノへと変わっていく。

そんな観客達の恥を知らぬ言葉の数々に蒼乃丞の怒りが臨界に達しようとした、その時。

『魔女と姫君、麗しの女性決闘者同士の決闘が今、始まる！ デュエル・オブ・フォーチュンカップ準決勝第二試合……スタートオオツ！！』

MCによって戦鐘が鳴らされたのだった。

決闘開始の合図に蒼乃丞の反対に立つアキは紅の決闘盤を掲げる。それを眼にした蒼乃丞は思考をすぐさま臨戦態勢へと切り替えた。

五月蠅い外野はとにかく無視だ。今は目の前の決闘に集中する。

一瞬にしてマグマのように熱く滾っていた思考を、草原を駆け抜ける風のように落ち着いた思考へと切り替えた蒼乃丞は《青眼の白龍》を象った決闘盤を掲げた。

待機形態から決闘形態へと展開された決闘盤にモーメントの虹色の輝きが灯る。

「決闘ツ！！」

アキLP4000

蒼乃丞LP4000

五枚の手札をデッキから引き抜いた蒼乃丞とアキ。
先手を取ったのはアキだった。

「私のターン、ドロ。アイヴィ・ウォールを守備表示で召喚」

アイヴィ・ウォール 2 ATK300 DEF1200

「カードを二枚伏せてターン終了」

一体のモンスターを守備表示で召喚し、カードを二枚伏せてターンエンドを宣言したアキに蒼乃丞は身構える。

さして守備力も高くないモンスターを出したと言う事は、こちらの攻撃を誘っていると見てまず間違いはない。ならば、あの伏せカードはモンスターの攻撃に連動して発動する迎撃用の罠とみるのが妥当か……そこまで考えた蒼乃丞は首を横に振った。

どんな罠が張ってあるうとも、自分がすることは只の一つ。
真正面から食い破るのみ。

「ボクのターン、ドロー！」

デッキからカードを引き抜いた蒼乃丞は五枚の手札の中に引いたカードを加えると、一枚のカードを手にとった。

「シャインエンジェルを攻撃表示で召喚！」

シャインエンジェル 4 ATK1400 DEF800

蒼乃丞の場に現れたのは攻撃力1400のシャインエンジェル。攻撃力は大して高くはないが、守備力1200のアイヴィ・ウォールを破壊するには十分な数値だ。

光り輝く天使を従えた蒼乃丞は、アキの場にいるアイヴィ・ウォールを指差すと、高らかに攻撃を宣言した。

「シャインエンジェルよ、アイヴィ・ウォールを粉碎せよ!!」

しかし、ここでアキがアイヴィ・ウォールのモンスター効果を起動する。

「アイヴィ・ウォールが攻撃対象になった時、相手の場にアイヴィ・ウォールを守備表示で特殊召喚する」

アイヴィ・ウォール 1 ATK0 DEF0

蒼乃丞の場に攻守共にゼロのトークンモンスターが召喚された。

このトークンの厄介なところは、破壊されれば蒼乃丞に300ポイントのダメージを与えると言うことだ。

だが、この程度で臆する蒼乃丞ではない。

「輝け、シャイン・スパークツ!!」

彼女の命令の元、シャインエンジェルが眩しいほどの輝きをあげた。

その輝きは断罪の焰となりアイヴィ・ウォールへと迫る。

ここで伏せカードの発動を予期した蒼乃丞だったが、その予想に反してアキは動かない。シャインエンジェルの攻撃は何者にも阻まれることなくアイヴィ・ウォールを破壊したのだった。

蘇生系統の罠か、ただのブラフか、それとも低　モンスターであるシャインエンジェルに使う必要がなかっただけなのか……今のアキのとった行動に蒼乃丞はあらゆる可能性を羅列していく。

やはり一番可能性として高いのは蘇生系統の罠カード。

であるならば次のターン、彼女がとる戦術は墓地から特殊召喚してのアドバンス召喚と見るのが妥当だろう。しかし、蒼乃丞の場には戦闘で破壊され墓地にいった時、デッキから攻撃力1500以下のモンスターを特殊召喚できるシャインエンジェルがいる。

例えば相手に上級モンスターのアドバンス召喚を許し、シャインエンジェルが戦闘で破壊されたとしてもシャインエンジェルの効果によって場が途切れることはない。

「ふうん。リバーズカードを一枚セットして、ターンエンドだ」

そう考えた蒼乃丞は不敵に一つ鼻を鳴らすとカード一枚を決闘盤へと挿し込み、そのままターンエンドを宣言したのだった。

蒼乃丞のターンエンド宣言と共にアキのターンがやってくる。

「私のターン、ドロ！　リバーズカード、オープン。永続罠、カード・アイヴィを発動。その効果により墓地からアイヴィと名のつくモンスター一体を私の場に表側守備表示で特殊召喚できる。私はアイヴィ・ウォールを呼び戻す」

デッキからカードをドロしたアキが二枚あるうちの一枚の伏せカードを発動した。

発動した伏せカードは蒼乃丞の読みどおり墓地にあるモンスターを蘇生させる罠カード、カード・アイヴィ。

その効果によりアキの場には再びアイヴィ・ウォールが守備表示で現れ出でた。

アイヴィ・ウォール 2 ATK 300 DEF 1200

ここでアドバンス召喚を予期した蒼乃丞だったが、またしてもアキは予想外の行動を取る。

「カード・アイヴィはアイヴィ・ウォールに装備され場からなくなった時、装備モンスターも破壊される。ターンエンド」

なんと、アイヴィ・ウォールを蘇生させただけでターンを終了してしまったのだ。

今のアキの場には前のターンにセットし先ほどの蒼乃丞の攻撃では発動しなかった伏せカードが一枚と、守備力が1200のアイヴィ・ウォールのみ。

先のターン、蒼乃丞の攻撃で伏せカードを使わなかったと言う事は、あの伏せカードがモンスター迎撃用の罠である可能性は限りなく低い。少なくとも蒼乃丞はそう読んだ。

一体彼女の狙いはどこにあるのか。

それが見えない蒼乃丞であったが、ここは好機に他ならない。

「性懲りもなくまたしても守備力1200のモンスターを出してきたか。……ならば教えてやろう！ そのような死に損ないを壁にしたところで、何の役にも立たないと言う事を！！ ボクのターン！！」

そう高らかに宣言した蒼乃丞はデッキから引いたカードを手札に

加えると、場に新たなモンスターを召喚する。

「ブリザード・ドラゴンを召喚！」

ブリザード・ドラゴン 4 ATK1800 DEF1000

蒼乃丞の場に、氷雪を纏う青い竜が攻撃表示で召喚された。

これで蒼乃丞の場のモンスターは二体。片方の攻撃はアイヴィ・ウォールで防げて、もう片方の直接攻撃は不可避だ。

加えて伏せカード発動の可能性もほとんどない。

そう考えた蒼乃丞は腕を振りかぶり、場にいる二体のモンスターに号令をかける。

「シャインエンジェルでアイヴィ・ウォールを攻撃！！」

蒼乃丞の号令の元、再びシャインエンジェルの体が光り輝き、アイヴィ・ウォールを焼き尽くさんと光を放った。

しかし、アイヴィ・ウォールも攻撃対象になったことにより再びその効果を発動する。

「アイヴィ・ウォールが攻撃対象にされた事により、相手の場にアイヴィトークン一体を守備表示で特殊召喚」

アイヴィトークン 1 ATK0 DEF0

「猪口才な……。だがアイヴィ・ウォールの破壊は確実だ！」

自分の場に現れた二体目のアイヴィトークンに蒼乃丞は煩わしげな視線を送るが、それでもこの戦闘の結果に変わりはなかった。

蒼乃丞の読みどおり、アキは伏せカードを発動してこない。

何物にも阻まれない輝く光が、再びアイヴィ・ウォールを包み込み蒸発させたのだった。

シャインエンジェルの攻撃によりアイヴィ・ウォールとそれに装備されていたカースド・アイヴィが破壊されたが、しかしアキも黙ってはいない。

アイヴィ・ウォールと共に破壊されたカースド・アイヴィを掲げると、その効果を発動する。

「アイヴィ・ウォールが破壊されたことによりカースド・アイヴィも破壊されるが、このカードが墓地に送れたとき、相手の場にアイヴィトークンを二体まで特殊召喚することができる」

アイヴィトークン 1 ATK0 DEF0

墓地に置かれたカースド・アイヴィの効果により唯一空いていた最後のモンスターゾーンまでもがアイヴィトークンによって埋め尽くされた。

しかし、こうまでして蒼乃丞の場をトークンで埋め尽くすアキの目的はどこにあるのだろうか。

モンスターゾーンを埋め、召喚を制限する戦術かと思われたが、アイヴィトークンはリリース可能なトークンモンスターだ。

これでは相手の手札に上級モンスターや発動コストにリリースを要するカードがあれば、アドバンス召喚やカード発動のためのリリース源を支援しているだけのことになり、逆に自分の首を絞めてい

る。

ならば別の狙いがあるのだろうが、今のところ蒼乃丞にはその狙いが全くわからないでいた。

しかし相手の狙いがどこにあるうとも、彼女はただ征くのみ。

それが蒼乃丞のロードなのだから。

「だが、まだボクの戦闘フェイズは続いている！　そして今、貴様の場はがら空きだ！　ブリザード・ドラゴンで直接攻撃！！」

場に己が身を護るべきモンスターのいないアキを指差した蒼乃丞は、腕を振り上げブリザード・ドラゴンへと攻撃の命を下す。

彼女の命令に従いブリザード・ドラゴンは大きく息を吸むと、その体内で空気を急速に冷却していく。

「コキユートス・ブレスツ！！」

そして蒼乃丞の号令の元、絶対零度まで冷やされた氷の吐息がアキに向かって放たれた。

ブリザード・ドラゴンの攻撃は阻まれることなくアキへと襲い掛かり、そのライフポイントを大きく削っていく。

「……ッ」

アキLP4000　2200

「直接攻撃、炸裂ううッ！　先制のダメージを与えたのは蒼乃丞総

帥！　モンスターの連続攻撃で十六夜アキのライフを削ったあああ

ッ……」

蒼乃丞がアキに対して直接攻撃を決めたことにより、会場はワツと沸きあがる。忌々しい魔女が傷つく姿に恍惚とした表情を見せる観客も少なくはない。

そんな観客の声が聞こえているのかいないのか、アキは己のターンを始めるためにデッキへと、その手を伸ばした。

「私のターン、ドロー！！ 手札から魔法カード、偽りの種発動！手札から 2 以下の植物族モンスター一体を特殊召喚できる。現れよ、ダーク・ヴァージャ―！！」

ダーク・ヴァージャ― 2 ATK0 DEF1000

低 モンスターを特殊召喚したアキはさらに手札のカード一枚に手を伸ばす。

それはこの状況を一変させる切札ともいえるカードだった。

「そして、ダーク・ヴァージャ―をリリース！！ ローズ・テンタクルスをアドバンス召喚ッ！！」

ローズ・テンタクルス 6 ATK2200 DEF1200

アキの場に召喚されたのは薔薇の怪物。

モンスター一体のリリースを要する上級モンスターの登場に蒼乃丞は身構えた。

相手のモンスターの攻撃力は上級モンスターと言う事もあり、自

分が従えるの二体のモンスターの攻撃力を上回っている。このターンのダメージは必定だ。

そしてダメージを受けると言う事は、サイコ決闘者の力が自分に牙を向くと言う事。

しかし、サイコ決闘者の与える物理ダメージは決闘のダメージに比例すると言う事が既にわかっている。ならば、戦闘による超過ダメージ数百ポイント程度では大きなダメージには成りえない。そう蒼乃丞が考えていた時だった。

「リバーズカード、オープンッ！」

何と、ここで一ターン目に伏せていたカードを発動したのだ。

ただひたすらに沈黙を護っていた伏せカード……その正体が今明らかとなった。

そのカードとは。

「永続罫、アイヴィ・シャックル！！ この効果により、相手の全モンスターを私のターンの間、植物族にすることができる」

それはモンスターの種族を変更させる罫カード。

地面から生えた蔦がシャインエンジェルとブリザード・ドラゴンに絡みつき、その種族を強制的に植物族へと変える。

一見何事もないかのように見える種族の変更……しかし、それは悪魔のコンボが成立した瞬間だった。

「ローズ・テンタクルスでブリザード・ドラゴンを攻撃！ ソーン・ウィップッ！！」

植物族へと変わった蒼乃丞のモンスターに向けて、アキは攻撃の命を下す。

彼女の狙いは一ターンに一度、選択したモンスターの攻撃と表示形式の変更を次の相手ターンのエンドフェイズまで禁じる厄介な効果を持つブリザード・ドラゴン。

主の命を受けたローズ・テンタクルスは棘の鞭を振りかぶると、それをブリザード・ドラゴンへと振り下ろした。

攻撃力は2200と1800。

ローズ・テンタクルスの棘の鞭により、ブリザード・ドラゴンは無残にも切り裂かれる……その結果は火を見るよりも明らかだった。しかしローズ・テンタクルスの攻撃によりブリザード・ドラゴンが破壊され、その余波が蒼乃丞に襲い掛かる。

蒼乃丞LP4000 3600

「ぬううううっ！　これがサイコ決闘者の力か！！」

体を引き裂かんばかりの痛みが蒼乃丞に襲い掛かり、彼女はその綺麗な顔を苦悶にしかめる。

数百ばかりのダメージが大したことないとは、とんでもない体に走る痛烈な痛みが蒼乃丞の認識を改めさせた。

確かにこれならば命の危険もありうるだろう。

磯野が必死になって自分に出場辞退を進言してきたことも頷けると言うものだ。

しかし、だからと言って蒼乃丞に引く気はない。この程度のダメージならば決闘に支障は全くないと判断したからである。

だが、アキの攻撃はまだ終わってはいなかった。

「ローズ・テンタクルスのモンスター効果！　ローズ・テンタクル

スは植物族モンスターを戦闘で破壊した時、相手プレイヤーに300ポイントのダメージを与える。ブリザード・ドラゴンはアイヴィ・シャクルの効果により植物族モンスターに変更されていた……よって、300ポイントの効果ダメージが発生する!!!」

アキの宣言と共に、ブリザード・ドラゴンを貫いたローズ・テナクルスの棘の鞭が翻り、蒼乃丞に襲い掛かる。

「くっッ！」

蒼乃丞LP3600 3300

歯を食いしばり何とか痛みを耐えた蒼乃丞だったが、アキの攻撃はこれで終わりでなかった。

ローズ・テナクルスにはもう一つ、恐るべき効果を秘めていたのである。

「まだまだ!!! ローズ・テナクルスは戦闘フェイズ開始時に相手の場に存在する植物族モンスターの数だけ攻撃回数を増やすことが出来る!!!」

このアキの宣言に蒼乃丞は表情を驚愕へと染める。

何故なら、ローズ・テナクルスの効果起動のトリガーとなる植物族モンスター アイヴィ・トークンが三体、そしてアイヴィ・シャクルによって種族を植物族へと変更されたシャインエンジェルが自分の場にいたので。

しかも、その効果は戦闘フェイズが始まる時に起動する効果。

戦闘フェイズの開始時には先ほど戦闘で破壊されたブリザード・

ドラゴンもいたのである。

当然、アイヴィ・シャツクルの効果によって植物族へと変えられていた事は言うまでもない。

となれば、ローズ・テンタクルスの追加攻撃の回数は。

「五回の追加攻撃だとツ!? ボクの場合にアイヴィトークンを召喚していた狙いはコレだったのか!!」

「それだけではない。アイヴィ・トークンが破壊された時に300ポイント、ローズ・テンタクルスが植物族モンスターを破壊した時300ポイントが発生する」

「と、いうことは……………ッ!!」

蒼乃丞はやつとアキの狙いがわかった。

ローズ・テンタクルスによる連続攻撃の布石としてアイヴィ・トークンを展開していたのである。

アイヴィ・トークンとローズ・テンタクルスの効果により一体につき600ポイントのダメージをたたき出しつつ攻撃を追加するコンボに蒼乃丞は戦慄する。

しかもアイヴィ・シャツクルとのコンボがさらにダメージを増大させていた。

蒼乃丞が召喚したモンスターをも植物族モンスターに変更することで、さらなる攻撃追加と効果ダメージが発生するのである。

しかし、アキの狙いに気がついたところでもう遅い。

今の蒼乃丞にはアキの攻撃を止める手立てはなかったのだ。

「ローズ・テンタクルスで三体のアイヴィ・トークンとシャインエンジェルを攻撃! ソーン・ウィップ・ワルツ!!」

ローズ・テンタクルスから放たれた四本の棘の鞭がまるで円舞を舞うかのように宙に翻ると、狙い違わず全てのアイヴィトークンと

シャインエンジェルを貰いた。

アイヴィトークンが破壊されたことにより発生するダメージと、ローズ・テンタクルスが植物族モンスターを破壊したことにより発生するダメージが蒼乃丞の体を苛む。

「うっうううッ！　くうッッ！」

蒼乃丞LP3300　400

戦闘ダメージと効果ダメージ、合わせて2900のダメージを受けた蒼乃丞のライフポイントは風前の灯……いや、それ以前にこれだけのダメージを一度に受けた蒼乃丞は無事なのだろうか。

先の一回戦、ジル・ド・ランスボウは2400のダメージを受けて再起不能の傷を負ったのだ。

それ以上のダメージを受けた蒼乃丞は如何に

。観客達が固唾を呑む中、戦闘の衝撃により巻き上がった粉塵が晴れていく。そこには倒れることなく立つ蒼乃丞の姿があった。

驚くべきことだ。

これほどのダメージを受ければ、立つことさえもおぼつかないはず。なのに、蒼乃丞はよろめきながらも確りと自分の足で立っていたのである。

ローズ・テンタクルスによる四回の猛攻を耐えた蒼乃丞だったが、まだアキの攻撃は終わったわけではなかった。

効果によるローズ・テンタクルスの攻撃追加数は五回。後一回の攻撃が残っていたのである。

アキは、よろめきながらも倒れない蒼乃丞に向かって無慈悲に腕を振り下ろした。

「これで止めッ！！ ラスト・ゾーン・ウィップッ！！」

高らかなアキの濃い撃宣言と共に、棘の鞭が蒼乃丞に迫る。
あわや直撃かと思われた、その時。

「……シャインエンジェルの……モンスター効果で、デッキから……伝説の白石を特殊召喚するッ……！！」

伝説の白石 1 ATK 300 DEF 250

戦闘により破壊され墓地にいったことでシャインエンジェルの効果が発動。蒼乃丞はデッキから伝説の白石を特殊召喚したのであった。

しかし、それでもシャインエンジェルによって特殊召喚されるモンスターの表示形式は攻撃表示。攻撃力がたったの300しかない伝説の白石では壁にもならない事は誰が見ても明らかだった。

「それでも、この戦闘が通れば貴女の負けよ！」

アキの叫びと共にローズ・テンタクルスの攻撃が伝説の白石へと振り下ろされる。

もはやここまでか そう思われたとき、絶え絶えだった息を整えた蒼乃丞は場に伏せてあったカードを指差し吼えた。

「ッ、させは……しない！ リバースカード、オープンッ！ カウンター罠、救済の輝き！！ 攻撃力500以下の光属性モンスターが攻撃対象になった時、相手モンスターの攻撃を無効にし戦闘フェイズを終了させる！！」

発動した畏カードの輝きにより、ローズ・テンタクルスの攻撃は寸でのところで押し止められた。

この畏カードの発動のために蒼乃丞は攻撃力300の伝説の白石を選んだのである。

それにシャインエンジェルが特殊召喚できるモンスターの上限攻撃力1500のモンスターを特殊召喚したところで蒼乃丞の残りライフポイントは400。攻撃力2200のローズテンタクルスの攻撃で700ポイントの超過ダメージを受け負けていたのだ。

蒼乃丞はアキ必殺の連続攻撃コンボを凌ぎきって見せたのである。

「さらに救済の輝きが発動した時、デッキからカード一枚をドロウ出来る！」

救済の輝きのもう一つの効果によりカードをドロウした蒼乃丞の瞳には闘志が燃える。

ライフポイントの残りは400とかなり厳しいが、蒼乃丞の場にはシャインエンジェルの効果により伝説の白石を残すことが出来た。場にまだモンスターが残っているのならばいくらかでも挽回の余地がある。その意志を胸に蒼乃丞は真っ直ぐにアキを見据えたのだ。た。

傷ついてもなお、心を折らずに前を見据えた蒼乃丞だったが、そこで眉を顰める。

何故ならば彼女の対戦者たるアキが視線を下へ落として、肩を振るわせていたのだ。

不意にアキの起こした仕草をいぶかしんだ蒼乃丞だったが、その正体を感じくのに時間はかからなかった。

蒼乃丞は見たのだ。彼女の口が三日月のように歪んでいるのを。

歪む口元、震える肩……それが意味するモノそれは　笑み。

そう、彼女は笑っていたのだ。

不気味に肩を揺らすアキに、蒼乃丞は射抜くような視線を彼女にやりながら問いかける。

「……何が、可笑的い？」

その問いかけにアキは顔を上げて答えて見せた。

「可笑的い？ いいえ、楽しいのよ。私を恐れ蔑み、孤独に追いやる全ての者共に、私の力によって痛みを与えるのが……本当に楽しい！！ だって私は化物　魔女なんだから！！」

彼女の顔に浮かんでいた笑みは、それはもう歪で醜悪なものだった。

自分の力を恐れて遠ざかり、迫害してきた者たちをその力で持つて傷つけ壊す。

世界が自分を拒絶するならば、そんな世界は自分が壊す。間違っていたのは自分ではない、世界の方だ　そんな思いがアキの笑みから溢れ出すのを蒼乃丞は感じていた。

反吐が出そうな自己弁護に自己正当化。

しかし、それはまだいい。

所詮は人の生き方だ。反吐が出そうなほど醜悪で歪でも、それをよしとするならば蒼乃丞が気にかける必要は欠片とてない。

だが。

「貴様が何に愉悦を覚えようともボクの知ったことではない。だが、自分の本当に欲しいものを嘘で塗り固めて、その虚構に浸る……。実に……実に不愉快だ！！」

彼女を見ていると苛ついて仕方がない。

本当に欲しいものがあるのに、望むものがあるのに、それから眼

を背けているアキの姿に蒼乃丞は苛立ちを覚えていたのだ。

「なにを言っている！ 私は破壊を」

「ならば貴様の、その泣きそうな笑みは何だ！？ 本当に傷つけ破壊する事に愉悦を覚えるのならば、その瞳に揺れるモノは何だ！？」
「……ッ！？」

蒼乃丞の指摘にアキはハツとなると、その手を顔へと這わせる。彼女の歪んだ醜悪な笑みは、何もその残虐な心意から来るものではなかった。

アキの心の奥底には真なる願いがある。それを別の願いで無理矢理抑え付けているからこそアキの笑みは醜悪に歪んでいることを、蒼乃丞はその慧眼を持って見抜いていたのだ。

そしてアキの真なる心意を見抜いたからこそ、蒼乃丞はこの決闘に対して一つの確信を抱いていた。

「己を誤魔化し、己が進むべき道を選ぶことの出来ない貴様ごときが、栄光のロードを歩むボクに勝てる道理などない！ ボクのターンー！！」

醜悪な笑みと言う名の仮面を貼り付けたまま狼狽えるアキに向かってそう吼えた蒼乃丞はデッキからカードを一枚引き抜く。

蒼乃丞はデッキからドローした新たなカードをそのまま場へと召喚した。

「カイザー・シーホースを攻撃表示で召喚！！」

カイザー・シーホース 4 ATK1700 DEF1650

彼女の場に現れたのは海竜族の戦士。

しかし、その攻撃力ではアキのローズ・テナクルスには及ばない。

かといって守備表示で召喚するにしてもアキの場には自分のターンに相手モンスター全てを植物族にできるアイヴィ・シャックルと植物族モンスターの数だけ攻撃を追加でき、植物族モンスターを破壊すれば300ポイントの効果ダメージを与えるローズ・テナクルスのコンボがある。

この布陣を前にして、一体どんな手を使って蒼乃丞は逆転するのか。

その鍵は既に蒼乃丞の場にあつた。

先のフランクとの決闘で見せた青眼の白龍へと繋げる蒼乃丞の一手であり、先ほどの攻撃を救済の輝きとの効果で蒼乃丞を護ったモンスター 伝説の白石。

このカードの能力は、ただ青眼の白龍をサーチするだけではない。伝説の白石はシンクロモンスターを召喚するためのチューナーモンスターでもあるのだ。

チューナーモンスター。

それは新たに作られたモンスターのカテゴリー、シンクロモンスターをシンクロ召喚するために必要不可欠な素材となるモンスター。

そして先ほど蒼乃丞が場に召喚したカイザー・シーホースはシンクロ召喚に必要なもう一つの素材であるチューナー以外のモンスター。

チューナーとチューナー以外のモンスターが揃ったのならば打つ手は一つ。

蒼乃丞は天高らかに腕を振り上げた。

「4、カイザー・シーホースに 1、伝説の白石をチューニング

「!!」

蒼乃丞の号令と共に、伝説の白石が星となりカイザー・シーホースの周りを飛び交う。

すると、その星々に導かれるようにしてカイザー・シーホースも、その身を四つの星へと姿を変えた。

空中で飛び、絡み合う星々を蒼乃丞はオーケストラの指揮者のように一つの存在へと纏め上げるべく言葉を紡ぐ。

「虚無より生まれし正義の闇が、万の魔を断つ刃となる！ 光さす道となれ！ シンクロ召喚!!」

星々が集い一際大きな輝きが決闘場を包み込むと、蒼乃丞は新たに新生するモンスターの名を高らかに呼んだ。

「起動せよ、A・O・J カタストル!!」

A・O・J カタストル 5 ATK 2200 DEF 1200

眩いばかりの光から蒼乃丞の声に従って、場に新たなモンスターが舞い降りる。

それは災害の名を冠した正義の同盟者。立ち塞がる者を尽くなぎ払う白亜の機獣。

これこそ蒼乃丞自身のデッキが主力たるシンクロモンスターにして逆転への一手、A・O・J カタストルだった。

しかも、それだけではない。

「さらに伝説の白石の効果！ このカードが墓地にいった時、デッ

キから青眼の白龍一体を手札に加える！！」

そう。先日決闘で見せた伝説の白石の効果。墓地に送られることで起動するデッキから青眼の白龍をサーチする特殊効果だ。

この効果によりデッキから一枚の青眼の白龍を手札に加えた蒼乃丞は腕を振り上げローズ・テンタクルスを指差すとA・O・Jカタストルに命を下す。

「戦闘だッ！ A・O・Jカタストルでローズ・テンタクルスを攻撃！！ デッド・エンド・カタストロフィー！！」
「ッ！？ 相打ち狙い！！」

この蒼乃丞の攻撃にアキは驚きの声を上げた。

A・O・Jカタストルの攻撃力は2200。対するローズ・テンタクルスの攻撃力も2200。

同じ攻撃力同士のモンスターの戦闘は相打ちに終わる。

シンク口召喚した上級モンスターを捨て駒にする蒼乃丞の強引な戦術にアキは驚愕したのだが、さらなる衝撃がその先に待っていた。

「いいや、違う！」

そう高らかに述べた蒼乃丞の言葉と共にA・O・Jカタストルが迎え撃とうとしたローズ・テンタクルスの棘の鞭をすり抜け、死に体となったローズ・テンタクルスを細切れに切り裂いたのであった。

「くッ……何故！？ 同じ攻撃力のはずなのに！？」

予想外の結果に驚くアキに対して蒼乃丞はA・O・Jカタスト

ルが持つモンスター効果を説明する。

「A・O・J カタストルのモンスター効果だ。このモンスターと閻属性以外のモンスターが戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わず戦闘したモンスターを破壊するのだ」

蒼乃丞のA・O・J カタストルは閻属性以外に関しては無敵を誇るモンスター。

対するローズ・テンタクルスは地属性。閻属性でないローズ・テンタクルスではA・O・J カタストルの有する効果の前に余りにも無力と言う事だった。

まさか、このような方法で破壊されるなどとアキ自身思っていなかったのだろう。その表情が苦々しく歪む。

それにA・O・J カタストルの効果は一回きりではない。

その効果は戦闘のたびに発動する誘発効果だ。これでは閻属性以外のモンスターを出したところで問答無用で振り返りにあつてしま

う。
さらに間の悪いことに蒼乃丞の手札には先ほど伝説の白石の効果で手札に加えた青眼の白龍がある。このままの流れでは蒼乃丞に青眼の白龍を召喚されてしまう危険もあった。

流石に攻撃力3000のモンスターを場に出されては、厳しい戦いにならざるを得ない。

ならば、アキがすることはただ一つ。

ここで決闘の主導権を握り返すのみ。

「私のターン、ドロー！」

デッキから新たなカードを引き抜いたアキは永続罠であるアイヴイ・シャツクルを指差した。

「永続罨、アイヴィ・シャツクルの効果により、A・O・J カタストルを機械族から植物族へ変更!!」

地面から生えた蔦がA・O・J カタストルに絡みつき、その種族を強制的に植物族へと変える。

しかし、A・O・J カタストルを植物族にした所で一体何をするのであるうか。

この疑問は、次にアキが召喚するモンスターによって明らかとなった。

「さらにチューナーモンスター、コピー・プラントを召喚!」

コピー・プラント 1 ATK0 DEF0

アキの場に召喚されたのは攻撃力0の 1モンスター。

一見、最弱に見えるモンスターだったが、このモンスターもロズ・テンタクルスと同じくアイヴィ・シャツクルと合わせることで相乗効果を上げる効果モンスターだった。

その効果とは 。

「コピー・プラントはターンに一度、フィールド上に存在する植物族モンスターを選択し を同じにすることが出来る」

他の植物族モンスターののと同じになることの出来る効果だったのである。

アキは、アイヴィ・シャツクルの効果で植物族となったA・O・

J カタストルを指差して宣言した。

「A・O・J カタストルの をコピー!!」

コピー・プラント 1 5 ATK0 DEF0

アキの命によりコピー・プラントは ばかりか、その姿さえもA・O・J カタストルのものへと変えていく。

斯くして 1のチューナーであるコピー・プラントは 5のチューナーへと大きく変態したのだった。

しかし、これではまだ足りない。

チューナーモンスターがいたとしても、それ単体ではシンクロ召喚は不可能だからだ。

シンクロ召喚を行うにはチューナーでないモンスターの存在が不可欠……しかし、アキは既に一ターンに一回の通常召喚をコピー・プラントで使ってしまった。

場を見ても既に伏せカードはなく、モンスターを特殊召喚できそうにはとも見えなかった。場だけを見るのであれば。

そう。何も場だけが決闘の領域ではない。墓地にいて効果を発揮するモンスターもいるのだ。

アキは墓地へと手を伸ばすと、そこから一枚のカードを徐に引き抜いた。

「墓地に眠るダーク・ヴァーシヤーの効果発動! 植物族のチューナーを召喚した時、特殊召喚することができる」

ダーク・ヴァーシヤー 2 ATK0 DEF1000

場に召喚されたコピー・プラントに引き寄せられるかのように墓地からダーク・ヴァージャーが特殊召喚される。

それはまるで地面から種が芽吹くような光景　しかし、そこから咲く花は全てを壊す破滅の花だ。

「手札から魔法カード、マジック・プランターを発動。永続魔法であるアイヴィ・シャックルを墓地に送り、デッキから二枚カードをドロー!!」

永続罫を墓地に送りカードをドローするマジック・プランターで手札補充を終えたアキは、その破滅の花を咲かせるべく手を高々と振り上げた。

「2、ダーク・ヴァージャーに　5、コピー・プラントをチューニング!」

コピー・プラントがその身を五つの星に変えると空へ舞い上がり五つの連環を描く。

その五つの連環がダーク・ヴァージャーを包み込み、その身を同じく二つの星へと変じさせた。

五つの星と二つの星。合計七つの星が空中で絡み合う中、アキは星々を導くように言葉を紡いでいく。

それは破滅を降ろす魔女の呪文。

「冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の花よ、開け!　シンク口召喚!!」

そして今ここに、破滅の花が開花する。

《黒薔薇の魔女》の切札、破滅を呼ぶ黒薔薇の竜。その名は。

「現れよ、ブラック・ローズ・ドラゴン!」

ブラック・ローズ・ドラゴン 7 ATK 2400 DEF 1

800

アキの場に禍々しい黒薔薇の竜が深紅の花弁を撒き散らしながら
舞い降りたのだった。

Turn・05 威風堂々！ 破滅を討つ王の輝き

デュエル・オブ・フォーチュンカップ、準決勝は異様な気配に包まれていた。

そんな場を支配する気配を放つは、アキの場に開花した一輪の禍々しい花だ。

深紅の花弁からなるそれは《黒薔薇の魔女》の切札にして破滅を呼ぶ黒薔薇の竜。

その名は。

ブラック・ローズ・ドラゴン	7	ATK2400	DEF1
800			

ブラック・ローズ・ドラゴンの出現と共に、アキの右腕にある痣がブラック・ローズ・ドラゴンと共鳴を起し輝きだす。

光り輝く、シグナーの証たる竜の痣を視界に納めた蒼乃丞は忌々しげに舌打ちする。どうやらサイコ決闘者に続き、レクスの言っていた《赤き竜》の伝説とやらもただのオカルト話ではなかったらしい。

しかし何と言う威圧感か。

アキの異能を持って実体化を果たしたブラック・ローズ・ドラゴンの咆哮がスタジアム中に響き渡る。

それは、まるで世界の呪うかのような怨鎖の叫びに聞こえた。

その咆哮を聞いた観客達は大きな悲鳴を上げ、我先にと逃げ回る。先の一戦、このモンスターの起こした衝撃の記憶が未だ生々しく残っていたからだ。

全てを破滅へと導く黒薔薇の竜の力……しかしてそれは再びやって来る。

アキはシンクロ召喚されたブラック・ローズ・ドラゴンを指差すと高らかに叫んだ。

「ブラック・ローズ・ドラゴンのモンスター効果。このカードのシンクロ召喚に成功した時、場の全てのカードを破壊できる！」

「やはりその手で来たか！！」

ブラック・ローズ・ドラゴンの効果起動宣言に蒼乃丞は憎々しげな声を上げた。

攻撃力で上回るブラック・ローズ・ドラゴンが攻撃してこようとも、その属性は火。闇属性以外のモンスターには無敵を誇るA・O・J カタストルには傷一つつけられない。

だが、そんなA・O・J カタストルでも効果による破壊には脆弱だ。

だからこそアキはこの手を選んだ。

破壊を持って全てを無に帰さしめるブラック・ローズ・ドラゴンのモンスター効果を。

「舞え、黒薔薇！ ブラック・ローズ・ガイルツ！！」

アキが下した命と共にブラック・ローズ・ドラゴンが大きく咆哮を放つと、その身を幾百の花弁へと変じる。

そして破滅の竜が変じた黒薔薇の花弁は、竜巻のように渦を巻くと場全体へと襲い掛かった。

蒼乃丞の場にいたA・O・J カタストルは黒薔薇の花弁に切り刻まれ爆散。その衝撃が彼女を襲う。

「ぐうあああッ……ッウ！！」

余りの衝撃に体が飛ばされそうになった蒼乃丞だったが、何とか地に足をしっかりとつける事で体勢を立て直した。

人さえも吹き飛ばしてしまいそうな衝撃……それだけ大きな衝撃が決闘場には渦巻いていたのである。

そして、その余波は会場へも及ぶ。

黒薔薇の嵐は決闘場に穴を穿つばかりか、何と騎乗決闘に使われる半筒状のコースまでも罅をいれたのだ。最高時速250kmを叩き出すD・ホイールのクラッシュにも耐える特殊素材のコースに傷をつけたのである。

会場の観客が恐慌に陥る光景と蒼乃丞の浮かべる苦悶の表情に、アキは再び醜悪な笑みを浮かべると手札から二枚のカードを決闘盤へと挿し込んだ。

「カード二枚を場に伏せて、ターンエンド」

「ボクのターン！」

アキのターンエンド宣言と共に蒼乃丞のターンがやってくる。アキはブラック・ローズ・ドラゴンにより危機を脱したかに見えたが、その実はそうとも言えなかった。

先のターン、A・O・J カタストルを破壊するため、自身のエースモンスターであるブラック・ローズ・ドラゴンを犠牲にしたことによりアキの場には一体のモンスターもいなかったためである。

彼女の場にあるのは二枚の伏せカードのみ。攻撃には絶好の好機だ。

この期を逃すわけにはいかない。その思いと共に、デッキからカードを引き抜いた蒼乃丞は満足気に鼻を鳴らした。

「ふうん。切札たるブラック・ローズ・ドラゴンを破壊してまで場をリセットしたまでは良かったが、どうやら貴様の命運もここまで

のようだな」

「なんですって?」

自身ありげに語る蒼乃丞に、アキが眉を顰める。

これだけの自信ありげに語ると言う事はよほどいいカードを引いたに違いない。それこそ決闘に決着をつけることの出来るほどのカードを。

蒼乃丞はデッキから引き抜いたカードをそのまま高らかに掲げて言い放った。

「それはな……貴様に伝説を拝ませてやると言うことだ! ボクはこのターンに引いたカード、正義の味方 カイバーマンを召喚する!」

正義の味方 カイバーマン 3 ATK200 DEF700

自信満々に蒼乃丞が召喚したモンスターの攻撃力はたったの200……お世辞にも決闘に決着をつけられそうな強力なモンスターには見えない。

しかし、このモンスターの真骨頂は別にあつた。

蒼乃丞は手札から一枚のカードを 己がデッキ最強のモンスターを手にする、正義の味方 カイバーマンの効果を起動した。

「そして、このカードをリリースすることで手札の青眼の白龍一体を特殊召喚!!」

「ッ!!」

その効果にアキは息を呑む。

二体のリリースが必要な青眼の白龍を一ターンで一気に召喚する。それが正義の味方 カイバーマンの効果であったのだ。

蒼乃丞は高らかに己が手中にある青眼の白龍のカードを高らかに掲げると、青眼の白龍の名を呼びながら決闘盤へと振り下ろした。

「我が前に降臨せよ、ジブリール！」

青眼の白龍 8 ATK3000 DEF2500

蒼乃丞の呼びかけに答え、彼女の場に青眼の白龍が舞い降りる。

白銀の体躯に光を反射させ高らかに咆哮を放つその姿は、何度見ても気高く、そして美しかった。

その存在感は蒼乃丞がサイコ決闘者でもないのにかかわらず、先に実体として召喚されたブラック・ローズ・ドラゴンと比べてみても何ら劣るところはない。

いや、それどころか何と神々しいまでの神聖さではないか。

この伝説の龍の登場に、アキの異能に怯えきっていた観客たちは大きな歓声を上げた。

あの龍ならやってくれる そんな期待の高ぶりが観客達から確かに感じられるが、それは純然な蒼乃丞への声援ではなく、やはり魔女の敗北を見たいがための醜い歓声。

魔女を倒せ！ 魔女を生け贄に！ 魔女に敗北を！

それはアキが持つ歪な愉悦よりもさらに醜悪な感情の吐露だった。青眼の白龍に向けられるどす黒い願望にここまで我慢を続けてきた蒼乃丞も、もはや我慢の限界だった。己がロードを飾る決闘を罵声で穢すだけでは飽き足らず、あまつさえ青眼の白龍に対し醜い感

情を押しつけてきたのである。

彼女の輝かしい未来であるロードと、魂である青眼の白龍。両方を貶められた蒼乃丞は観客達に対して怒髪天を衝いた。

「黙れええええッ！！」

蒼乃丞の放った叫びは、肌を突き刺すような衝撃を伴い全ての観客達を射抜く。

不意に自分たちに向けられた蒼乃丞からの怒声に、会場は対戦者であるアキを含め、全員が一瞬にして静まり返った。

しかし観客達は何故、蒼乃丞が自分たちに対して怒っているのか全くわからない。

だって、そうだ。

罵声を浴びせていたのは彼女ではなく《黒薔薇の魔女》であるアキの方。それどころか、《黒薔薇の魔女》を倒して欲しくて必死に応援していたのである。

それなのに何故 皆が皆、そう思い首を捻る中、憤怒に表情を歪めた蒼乃丞が言葉を放つ。

「悪口雑言、結構！ 罵詈譏、結構！ だがそれは敵に真つ向から対峙して初めて口にする事が出来る言の葉だ！この決闘の場に立たない貴様らが口にしていい言葉ではない！ 誰かの背に隠れて囁るしか能のない臆病者の下種共が！！ これ以上貴様らに、ボクの決闘を……ボクの青眼の白龍を穢させはしない！ これ以上口汚い言葉を吐くのならば主催者権限により、貴様ら全員を会場の外に放りだしてくれるわ！！ 臆病者は臆病者らしく、静かにボクの勝利を見ているがいい！！」

主催者権限までも持ち出して怒る蒼乃丞に観客達は理不尽さを覚えながらも、それでも不思議と一声も声を発することができな

った。

それはまるで誓約を強制させられたかのような現象。ただの言葉をして、力ある言の葉とならしめる……それは蒼乃丞の王としての力であった。

スタジアムを静寂に包んだ蒼乃丞は、その会場の様子に一つ鼻を鳴らす。

「ふうん。やっと静かになったか。では決闘の続きと征こう」

悠然と語る蒼乃丞が腕を振り上げると、その動きに従うように青眼の白龍は口を大きく開いていく。

静か過ぎる静寂が場を支配していたからなのか、先ほどの蒼乃丞の言葉が強烈な印象を植え付けたのか、腕を掲げる蒼乃丞とその口内に白き光を迸らせる青眼の白龍の存在は現実離れした御伽噺の中に出てくる姫君と守護の龍のように感じられた。

それは対戦者であるアキも例外ではない。

先ほどの蒼乃丞の言葉に結果として庇われたこともあり、会場の中で一番混乱していたのはアキ自身であるのだから。

そんなアキに対して蒼乃丞は、高らかに掲げた腕を振り下ろした。

「これで終わりだ！ ジブリールでプレイヤーに直接攻撃！！ 滅びの爆裂疾風弾ッ！！」

腕を振り下ろすと共に放たれた蒼乃丞の号令に青眼の白龍は、その口内に溜めた迸るエネルギーをアキに向けて放つ。

今一度言うが、アキの場にはモンスターが一体もない。これが決まれば蒼乃丞の勝利だ。

混乱の只中にいたアキであったが、ここでやらせる訳にはいかない。

彼女は頭を振ると、場に伏せていたカード一枚を発動させた。

「……ッ、させない！ リバースカード、オープン。罨カード、幻影破壊！ この効果により、青眼の白龍を裏側守備表示に変更！ これにより青眼の白龍の攻撃は不発に終わる」

寸での所で罨カードの発動が間に合い、青眼の白龍の攻撃はアキから逸れる。明後日の方向に着弾した青眼の白龍の攻撃は、大きな火柱を立てて爆音を上げたのだった。

あと数瞬、カードの発動が遅れていればアキは青眼の白龍の攻撃に吞まれていた事だろう。

間一髪のタイミングだった。

裏側守備表示にすることで青眼の白龍の攻撃をかわしたアキに、蒼乃丞が舌打ちを打つ。

「ちいッ、運のいいヤツだ。しかし、次こそは青眼の白龍の閃光で貴様を葬り去ってやる！！ リバースカードを三枚セットして、ターンエンドだ！！」

しかし、蒼乃丞の場には変わらず攻撃力3000の青眼の白龍が存在している。

青眼の白龍ある限り、己に敗北はない。そう高らかに語った蒼乃丞に対してアキは呟くように言葉を漏らした。

「……何故なの？」

その一言は同じ決闘場に立つ蒼乃丞にも聞こえない、かすれたような呟き。

しかし、睨むようにして顔を上げたアキが二言目に放った言葉は叫びとなって蒼乃丞に叩きつけられた。

「何故ツ!? 貴女は私の力を恐れないの!? 何故、それも私を真っ直ぐに見つめて向かってくるの!? 私は魔女、《黒薔薇の魔女》なのよ!!! 貴女、この力が……この私が怖くないの!?!」

これまでアキの力を見た者は、その力の怖ろしさにに恐れ慄き自分の元から去っていった。

当然だ。

サイコ決闘者の力は人を傷つける力。否応なく自分を傷つける者に好きこのんで近づく人間はいない。それは自分の産みの親たる両親だって例外ではなかったのだから。

なのに、目の前に立つ彼女は何だ。

己を傷つけた忌まわしい力を持つ自分を前にして、どうしてそう気丈に立っていられるのだろうか。そのアキの疑問を蒼乃丞は一つ鼻を鳴らして答えた。

「怖くないかだと? ふうん、愚問だな。ボクの目の前に立ちはだかるのならば、それが男であろうと女であろうと、老人であろうと子供であろうと、人であろうと化物であろうと、そんな事は些かも関係ない!!! 何故ならばボクの前に立ちはだかるモノ、それは全て等しくボクの敵だからだ!!!」

蒼乃丞にとって、目の前に立つものが何者であるかは全く持つてどうでもいい事だった。

目の前に立ち塞がるならば、それはいかなるモノであろうとも彼女にとっては皆等しき存在だったのである。

その名は敵。己が全精力を持って叩き潰させばならない壁。

目の前にいるアキと言う存在は蒼乃丞にとって、己がロードを阻む一枚の壁でしかなかったのだ。

「栄光へと続く未来へのロード……それは並み居る全ての敵を踏破

した、その屍の先にある！！ 故にボクは引き下がらない！ 貴様
と言う敵が眼前に立ち塞がるのならは全力を持って粉碎し、栄光あ
るボクのロードに華を添えてくれるわ！！」

そして目の前に壁が立ち塞がるならば一つの例外もなく全てを砕
き蹂躪する その先に蒼乃丞の目指すロードがあるのだから。

この蒼乃丞の宣言にアキは両の手で頭を抱えた。

「わからない……私は貴女がわからない！！」

目の前に立つ蒼乃丞と言う存在がアキにとってわからなくなった
のだ。

今まで自分を孤独に追いやってきた誰とも違う。しかし、デイヴ
アインのように理解してくれるかと言えばそれも違う。愉悦に震え
る自分を諭し、罵声を浴びせてくる観客を一喝したのかと思えば、
次の瞬間には自分を倒すべき敵と高らかに宣言する。

こんな人間は初めてだ……その思いがアキの心を際限なく苛む。
アキの心はかつてないほどに波立っていた。

止め処なく心を侵食していく蒼乃丞の存在を振り払えないまま、
アキは伏せていたカードを発動させた。

「リバースカード、オープンッ！！ 永続罨、ウィキッド・リポー
ン！ ライフポイントを800ポイント払い、墓地にいるシンクロ
モンスター一体を特殊召喚する！！」

新たな罨カード、シンクロモンスター専用の蘇生カードを発動さ
せたアキは墓地から一枚のカードを掲げる。

それは先にターン、破壊を振りまいた彼女の切札。《黒薔薇の魔
女》の黒薔薇の竜。

アキは墓地から手に取り掲げたブラック・ローズ・ドラゴンの力

ードを決闘盤へと振り下ろした。

「今一度花開け、ブラック・ローズ・ドラゴンッ!!」

アキLP2200 1400

ブラック・ローズ・ドラゴン 7 ATK2400 DEF1

800

墓地に眠るブラック・ローズ・ドラゴンが花咲くように場に現れると、高らかな咆哮を上げる。目の前に立つ青眼の白龍を威嚇するかのように。

青眼の白龍も己が主人である蒼乃丞を護るかのようにブラック・ローズ・ドラゴンの前に立ちはだかると、高らかに咆哮を放った。禍々しい破滅の黒薔薇の竜と、神々しい神聖な白き龍。ここに二体のドラゴンが相対したのである。

青眼の白龍に負けじと高らかに咆哮を上げるブラック・ローズ・ドラゴンに呼応してより一層右腕の痣を光り輝かせたアキは、カードをドロウするべくデッキへと手を伸ばした。

「私のターン！ 私はフェニキシアン・シードを召喚！」

新たにドロウしたカードを手札に加えるまでもなくアキは場へと召喚する。

フェニキシアン・シード 2 ATK800 DEF0

アキの場に現れたのは目玉を持つ種。

見た目も攻撃力も貧弱なモンスターだったが、このモンスターもご他聞に漏れず特殊な効果を持つモンスターだった。

それはこのカードを墓地に送ることで特殊召喚できるモンスターがいるのだ。

そのモンスターとは。

「このモンスターを墓地へ送り、手札からフェニキシアン・クラスター・アマリリスを特殊召喚！」

フェニキシアン・クラスター・アマリリス	8	ATK220
0 DEF0		

リリースと墓地に送る違いはあるものの、蒼乃丞の正義の味方カイバーマンと青眼の白龍との関係に酷似した召喚方法により特殊召喚されたモンスターは、美しく燃える彼岸花であった。

蒼乃丞のお株を奪うように、最上級モンスターを一気に召喚したアキは俯きながら静かに言葉を呟き始める。

「わからない事も嫌な事も、全て洗い流せばいい。……私はただ感じるだけ。考えることは全てデイヴァインがやってくれる。これままでだって、ずっと私はそうしてきた……そして、これからモック・ブラック・ローズ・ドラゴンのモンスター効果発動！」

静かに語り始めた言葉は最後には苛烈な叫びとなると、アキはブラック・ローズ・ドラゴンの効果を起動するために墓地にあるアイヴィ・ウォールを手を取った。

全てを洗い流し、終わらせるために。

その意志に共鳴してか、アキのサイコ決闘者としての力が臨界点を突破した。

デイヴァインによって贈られた髪飾りが弾けとび、その長い前髪が解き放たれる。

しかし、もうアキにはそんな事は関係なかった。

心にあるのは、ブラック・ローズ・ドラゴンの効果と攻撃により早々に決着をつけることのみ。

「墓地に存在する植物族モンスター一体を除外することで相手の場にいる守備表示モンスター一体を攻撃表示にし、その攻撃力をターン終了時までゼロにする！　ローズ・リストラクション！！」

そして墓地のアイヴィ・ウォールを養分に、ブラック・ローズ・ドラゴンの効果が起動した。

ブラック・ローズ・ドラゴンから放たれた棘の鞭が裏側守備表示の青眼の白龍へと襲い掛かる。

青眼の白龍に絡みつき、磔にしていく棘の束縛に青眼の白龍は苦悶の悲鳴を上げた。

青眼の白龍 8 ATK 3000 0 DEF 2500

「ジブリール!？」

幾重にも絡まる棘の戒めにより青眼の白龍の攻撃力が、発していた神々しき威光と共に消え失せる。

その青眼の白龍の姿に蒼乃丞が声を上げるが、青眼の白龍は弱々しげにかすれた鳴き声を上げることしかできなかった。

青眼の白龍をその効果により地に伏せ締めたブラック・ローズ・

ドラゴンは、青眼の白龍の無様な姿に満足気に咆哮をあげると大きくその口を開く。

「これで決まりよおッ！！ ブラック・ローズ・ドラゴンで青眼の白龍を攻撃！ ブラック・ローズ・フレアアッ！！」

絶叫の様なアキの攻撃宣言と共にブラック・ローズ・ドラゴンは黒薔薇の花弁のように見える炎の奔流を吐き出した。

その攻撃は真っ直ぐに突き進み、身動きの取れない青眼の白龍へと迫る。

このままでは成す術なく青眼の白龍が破壊され、2400もの戦闘ダメージが蒼乃丞を襲うと思われた、その時。

「まだだあッ！！ 手札からモンスターの効果を発動！！」

高らかにそう宣言した蒼乃丞は手札から一枚のカードを抜き取ると、それを天へと突き出すように掲げた。

すると、どうしたことだろう。

青眼の白龍は大きく咆哮を上げるとブラック・ローズ・ドラゴンの束縛を破り、高らかに空へと羽撃いたではないか。

驚くのはそれだけではない。

青眼の白龍を天高くへと駆け上がらせた白銀の翼は、何と龍の翼膜から天使の翅へと変じていたのだ。

破滅の竜の束縛を破り、輝ける天使の翼を青眼の白龍に与えたカード。

蒼乃丞が天に高らかに掲げる、そのカードの名は オネスト。

オネストのカードを高らかに掲げた蒼乃丞は、その効果を高らかに宣言した。

「オネストは戦闘を行うダメージステップ中に手札から墓地に捨て

ることで光属性モンスター一体の攻撃力を、エンドフェイズ時まで戦闘を行う相手モンスターの数値分アップする!!」

青眼の白龍 8 ATK0 2400 DEF2500

「ッ!?!」

オネストの効果によりブラック・ローズ・ドラゴンの攻撃力2400を加算させた青眼の白龍が、その口内に眩しいほどの煌きを迸らせる姿にアキは息を呑んだ。

しかし既に戦闘は確定してしまっており、もはや後に引くことはできない。

ならばと、アキは己が竜の名を叫ぶように呼んだ。

「ブラック・ローズ・ドラゴンッ!!!」

蒼乃丞も己の僕たる龍の名を高らかに呼ぶ。

「ジブリールッ!!!」

それぞれ主人に名を呼ばれた二体のドラゴンは、その言葉に応えるために持ちうる限りの力を振り絞り、眼前に立つ敵へと攻撃を放った。

紅蓮の炎と破壊の光。

放たれた二条の閃光は決闘場の中心で衝突すると一進一退の拮抗を見せた。

攻撃力は互いに2400。ぶつかり合った炎と光は一瞬の後に強烈な爆発を上げ、二体のドラゴンを飲み込む 相打ちだ。

決闘場に黒薔薇の花弁と白き煌きが二体のドラゴンの残滓となつて舞い降りてくる。

そんな幻想的な光景の中、アキは蒼乃丞に向けて突き刺すように指を突きつけた。

「だけど、貴女の場合はこれであら空き！ フェニキシアン・クラスター・アマリリスの直接攻撃で貴女の負けよ！！」

アキの言葉通りブラック・ローズ・ドラゴンは破壊されたが蒼乃丞の場にはもうモンスターはいない。対してアキの場には攻撃力2200のフェニキシアン・クラスター・アマリリスがいる。

ここに勝敗は決した。そう思ったアキであったが、まだ青眼の白龍の魂は潰えてはいなかった。

「青眼の白龍の魂は、たとえ破壊されたとしても消え行くものではない！ 貴様に見せてやる。死してなお、燦然と輝くジブリールの気高き魂を！ リバースカード、オープンッ！！」

青眼の白龍の残滓である白き煌きが降り注ぐ中で、蒼乃丞は一枚のリバースカードを発動する。

「畏カード、決死の希望！！ 自分のモンスターが破壊された時、そのモンスターの元々の攻撃力分ライフを回復する！ ジブリールの……いや、青眼の白龍たちの魂はボクと共にある！！」

蒼乃丞の言葉に導かれるように、場に降り注ぐ青眼の白龍の残滓が彼女の元へと集まっていく。ただの光の粒子であったそれらは、その煌きを結合させると再び龍の姿をとったのだ。

その体躯を輝かせる青眼の白龍は一つ咆哮を上げると、その体を今一度光の粒子に変え蒼乃丞へと降り注いでいく。

その様はまさに、蒼乃丞へと力を与えていくようではないか。

蒼乃丞LP400 3400

風前の灯だった蒼乃丞のライフに青眼の白龍の力が灯る。

それは高潔な青眼の白龍が残せし、勝利へのロード。

ライフポイントを大幅に回復させた蒼乃丞を憎々しげな表情で睨みつけたアキは、腕を振り上げるとフェニキシアン・クラスター・アマリリスに攻撃の命令を降した。

「それでも戦闘は続行！ フレイム・ペタルツ！！」

アキの攻撃宣言と共に、フェニキシアン・クラスター・アマリリスの焼け付くような触手が蒼乃丞の体へと迫る。

その攻撃を前に蒼乃丞は先のターンに決死の希望と共に伏せたカード この状況を逆転するための切札に手を伸ばす。

だが、しかし。

「ぐっ！？」

蒼乃丞がそのリバーズカードを発動する事ができなかった。この決闘で蓄積されたダメージが蒼乃丞の動きを僅かに鈍らせたのである。

その僅かな間が致命的だった。

カードの発動が間に合わなかった蒼乃丞の元へ、フェニキシアン・クラスター・アマリリスの攻撃が次々と殺到する。

「ああああうっ！！」

蒼乃丞LP3400 1200

灼熱の劫火が鋭い痛みを持って蒼乃丞の身体を貫いていく。

しかも、その攻撃はこれだけでは終わらなかった。

フェニキシアン・クラスター・アマリリスには、他のモンスターにない独特な効果を持っていたのである。

「フェニキシアン・クラスター・アマリリスは攻撃の後、自らを破壊し相手に800ポイントのダメージを与える。スキャッター・フレイム！」

破壊され墓地へ送られると発動する効果ダメージを、攻撃後に自壊する能力により能動的に起動する。それがフェニキシアン・クラスター・アマリリスのモンスター効果だった。

そして、その効果ダメージ800が爆炎を伴って未だ痛みに喘ぐ蒼乃丞へと襲い掛かる。

「ぐうううッ！」

蒼乃丞LP1200 400

フェニキシアン・クラスター・アマリリスの直接攻撃とモンスター効果によって、決死の希望により回復した3000ものライフポイントが一気に削り取られた。

しかし、アキのターンはまだ終わりではない。

フェニキシアン・クラスタ・アマリリスにはもう一つの効果があるのだ。

アキは墓地にあるフェニキシアン・シードと、先ほど攻撃により自壊したフェニキシアン・クラスタ・アマリリスを手に取ると、その効果を発動させた。

「そして私のターンエンド時、墓地にあるフェニキシアン・シードを除外することでフェニキシアン・クラスタ・アマリリスを守備表示で特殊召喚する」

フェニキシアン・クラスタ・アマリリス 8 ATK220
0 DEF0

それは墓地にある植物族モンスターを除外する事で復活することの出来る自己再生能力。

その効果は先のダメージ効果と相まって非常に強力な効果となる。墓地に植物族モンスターがある限り何度でも場に花を咲かせ、攻撃後に自ら花を散らして相手にダメージを与えるのだ。

フェニキシアン・クラスタ・アマリリス 非常に強力なモンスターと言えた。

そんな強力な効果に牙をむかれた蒼乃丞はどうなったのだろうか。爆煙晴れ止まぬ決闘場でアキは一つの確信を抱いていた。もはや蒼乃丞が立つこと叶わないことを。

何故ならばこれまでのアキの経験上、一度に攻撃力3000以上のダメージを受けて立っていた人間はいなかったからだ。

しかも蒼乃丞は、3000ポイント以上の攻撃を二度に渡り受けていたのである。

「通算6600のダメージ……これだけの攻撃を与えれば
ッ!？」

例えばライフポイントが尽きていなくても勝負はあった。そう思ったアキはフェニキシアン・クラスター・アマリリスが発生させた効果ダメージによる爆煙が晴れていく中に信じられないものを見た。

「ば……馬鹿な……ッ!？」

アキの視線の先。そこには満身創痍でありながらも、アキを真っ直ぐに見据えて立つ蒼乃丞の姿があったのだ。

立っていられないはずのダメージを与えたはずなのに、それでも倒れない蒼乃丞にアキは言葉が出なかった。

そんな彼女に対し、蒼乃丞はよろめく体を確り立てさせると静かに言葉を紡ぎだす。

「……言っただはずだ。己を誤魔化し、己が進むべき道を選ぶこと出来ない貴様ごときが、栄光のロードを歩むボクに勝てない」と

静かに語るその言葉はこの決闘の間アキに対して放った言葉。それもただの言葉ではない。それは蒼乃丞が自身に課した言の葉の誓約だ。

己が歩む栄光のロードに誓いを立てたからこそ、彼女は倒れることを許されない。いや許さない。

その命がある限り、青眼の白龍と共にある限り。

「貴様に見せてやる！　ボクの歩む、栄光のロードを！！　ボクのターンッ!！」

高らかに宣言した蒼乃丞はデッキから新たなカードを引き抜くと、

先のターン発動できなかったリバーズカードへと手を伸ばした。
今一度言おう。そのカードこそが、蒼乃丞の逆転への一手にして
劣勢を勝利へと覆す切札。

それが今、開かれる。

「リバーズカード、オープンッ！！ 永続罠、正統なる血統！！」

正統なる血統。

それは自分の墓地に眠る通常モンスターを場に特殊召喚すること
ができる蘇生系罠だ。

そして言うまでもなく蒼乃丞の墓地に眠る通常モンスターと言え
ば。

蒼乃丞は墓地に眠る、己が魂のカードを高らかに引き抜いた。

「我が青眼の白龍は永劫不滅ッ！ 甦れ、ジブリール！！」

青眼の白龍 8 ATK3000 DEF2500

高らかに青眼の白龍の名を読んだ蒼乃丞の言葉に応える様に、墓
地に眠っていた青眼の白龍は雄々しい咆哮を上げ蒼乃丞の側へと舞
い戻った。

美しき青い眼と白銀の体軀を眩しく輝かす青眼の白龍を今一度従
えた蒼乃丞は腕を振り上げ高らかに宣言する。

「征くぞ！！ ジブリールで、フェニキシアン・クラスター・アマ
リリスに攻撃！！」

この蒼乃丞の攻撃宣言にアキは驚愕の表情を浮かべた。

「ッ！ 貴女、正気なの！？ フェニキシアン・クラスター・アマリリスを破壊すれば貴方は負けるのよ！！」

アキの言うとおり、彼女の場にいるフェニキシアン・クラスター・アマリリスは墓地に送られたとき800ポイントのダメージを与える効果があるのだ。

対して蒼乃丞の残りライフポイントは僅か400。

守備表示のフェニキシアン・クラスター・アマリリスを攻撃してもアキにダメージを与えることが出来ず、その効果で敗北するのは誰の目に見ても明らかだ。

しかし蒼乃丞とて、そんなことは百も承知。それを回避するための手段は既に場にあった。

蒼乃丞はその鍵たる最後の伏せカードへと手を伸ばす。

「ならば、この戦闘で全ての決着をつけるまでだ！ リバーサイド、オープンッ！！ ストライク・ショット！！」

「ッ！？ そのカードは ……！！」

今、開かれた蒼乃丞最後の伏せカードの正体にアキは戦慄する。そのカードは、まさに決闘に決着をつけるカードだったからだ。

「知っているならば話は早い。そう。これは攻撃するモンスター一体の攻撃力をターンエンド時まで700ポイント上昇させ、その攻撃力が戦闘した相手モンスターの守備力を越えていれば、その差分だけダメージを与える貫通効果を付随させる罠カード！！」

戦闘ダメージの発生はモンスターの破壊よりも先 すなわちフェニキシアン・クラスター・アマリリスの効果が起動する前に勝負をつけてしまえば良いと言うことだ。

そのための貫通効果を付与させるストライク・ショット。

そして、青眼の白龍が攻撃するフェニキシアン・クラスター・アマリスの守備力は

「フェニキシアン・クラスター・アマリスの守備力は……0……」

まさかの敗北を前にして愕然となるアキに対して、蒼乃丞は一つ鼻を鳴らすと高らかに言い放った。

「ふうん。目の前に壁が立ち塞がれば眼と耳を塞ぎ、それに背を向け続け、あまつさえ他人に依存してきた貴様にはこれが限界と言う事だ。そして、これこそがボクの未来へのロードを切り開く究極の光!!!」

己の心を自分にさえもひた隠しにし、見ず聞かず、ダイブアインと言う他人に縋って来たアキ。

己を信じ全てを見据え、ただただ前へと己が定めた栄光のロードを突き進んだ蒼乃丞。

両者の勝敗は既に戦う前から決していたのだ。

蒼乃丞の高らかな宣言と共に、ストライク・ショットが青眼の白龍へ力を与えていく。

ただでさえ神々しい輝きを放っていた青眼の白龍の姿を、新たな力はさらに眩しく輝かせた。

青眼の白龍 8 ATK3000 3700 DEF2500

その青眼の白龍の堂々とした神聖なる姿は、まるで傷つきながら

も膝を突くことなく戦った蒼乃丞の映し身のよう。

そんな青眼の白龍に向かって蒼乃丞は高らかに腕を掲げ 勢いよく振り下ろした。

「これで決着だ！！ ジブリールの攻撃！ 滅びの爆裂疾風弾ツ！！」

蒼乃丞の号令と共に青眼の白龍から放たれた真白き光の奔流はフエニキシアン・クラスター・アマリリスへと襲い掛かる。

攻撃力3700対守備力0。

歴然たるその差を前に、フェニキシアン・クラスター・アマリリスはまるで濁流に流される木の葉のように青眼の白龍の攻撃の前に露と消えた。

そしてストライク・ショットの効果により付随された貫通効果がアキの残りライフポイント全てを奪いつくす。

鎧袖一触とは、まさにこのためにあるかのような言葉だった。

アキLP1400 0

『波乱の準決勝、ここに決着ううツ！！ 準決勝第二試合、激戦を制し不動遊星の待つ決勝へ駒を進めたのは海馬コーポレーションの若き総帥、海馬蒼乃丞だああッ！！』

「……………」

MCの実況が会場に轟く中、膝をつき茫然自失とするアキに対して蒼乃丞は興味なさげに一つ鼻を鳴らすと踵を返す。

だが、何か思うところがあったのだろう。蒼乃丞は立ち去ろうとする歩みを不意に止めると、振り向くことなく言葉だけをアキへと

向けた。

彼女にと言ってみれば、それはただの気まぐれに過ぎなかった。オカルトの存在を認めざるを得なくした切欠であり、その在り方に心を苛立たせた存在に何かを言っておかなければ気がすまなかったのである。

「次に会うときは精々、己の願いと道を自分で決めておくことだな。それができなければ貴様は永遠に人形だ」

この蒼乃丞の言葉に一瞬だけ視線を上げたアキは、その手を蒼乃丞へと伸ばす。まるで助けを求めるとかのように。

しかし、蒼乃丞はそれに構うことなく決闘場を後にする。

後に残ったのは所在無げに手を宙に浮かすアキだけだった。

準決勝第二試合の蒼乃丞VSアキの決闘。その経過と決着を遊星はD・ホイールのドックで修理の片手間に見届けていた。

幸運にもD・ホイールの方はボマーの大型D・ホイールの特攻を防いだにも関わらず、これといった大きな損傷もなく今しがた修理と調整が終了したところだ。

そんな遊星に蒼乃丞とアキの決闘を共に見ていた氷室が問いかけた。

「海馬蒼乃丞 彼女の決闘、お前はどう見た？」

蒼乃丞の決闘 この氷室の言葉に遊星は先ほどの彼女の決闘を反芻する。

まずは彼女の決闘の腕前。

決め手である青眼の白龍の存在感から力押し一辺倒のパワープレイングに見えるがその実、彼女の決闘は精緻にくみ上げられたものだ。青眼の白龍の圧倒的パワーを生かすために様々なギミックが彼女のデッキに施されているのは先の準決勝と昨日の一回戦を見ての通り。

しかし驚くべきは、そのデッキ構築ばかりではない。

真に驚くべきは、彼女の卓越したカードプレイングセンスとカードプレイングテクスだ。

最上級モンスターである青眼の白龍を主力に据える彼女のデッキは非常にとり回しがしづらいのと言わずもがな。

そんな非常に重い 8の青眼の白龍をどう召喚するかと言っただけではなく、そこに至るまでの過程をどう繋げるか、召喚した後の青眼の白龍をどう生かすか等々……………。

そこまでを緻密に計算して二手三手先を読み布石を打ちながらも、直感的に最善の手も打つ事のできる決闘者。

流石は伝説の決闘者の血を引いていると言うことだろうか。カードプレイングセンスとカードプレイングタクティクス、どちら片方を持つものは少なからずいるが両者を併せ持つ決闘者は本当に稀だ。少なくとも遊星の知りうる決闘者の中では彼女が唯一と言っている。

次に決闘者としてのあり方だ。

彼女のこれまでの言動から決闘と青眼の白龍に並々ならぬ思いを寄せている事は予想されたが、先の決闘で見せた彼女の思いは予想以上だった。

傷つきながらも膝を屈する事もなく勝利を掴んだ不屈の姿勢と、決闘に向けられる観客達からの負の感情を一喝を持って祓った気高き心。例えそれがフェアな精神からではなく己の矜持から来たものだとしても、それでも遊星にとって彼女の行動は好感が持てるものだった。

遊星にしてみたところで絆で結ばれたカードたちに醜い感情を押し付けられるのは気持ちのいいものではない。

それを臆することなく 少々苛烈なところもあつたが言葉にし、痛烈に批判した事は賞賛に値する。

そんな蒼乃丞の決闘者の腕前とあり方を二日間に渡って見てきた遊星は彼女をこう評価した。

「揺ぎ無き信念と、気高き誇り……そして絶対の自信」

遊星は思う 海馬蒼乃丞、彼女は並みの決闘者ではないと。

しかし蒼乃丞の事を考えながらも、遊星は同時にアキの事も気になつていた。

遊星は視線を右腕へと落とす。

今は消えているが、そこにはシグナーの証である竜の痣がアキのブラック・ローズ・ドラゴンに共鳴するように輝いていたのだ。

この痣は間違いなくシグナーである遊星たちを繋いでいる。

遊星は確かに感じた。疼きと共に心に響いたアキの深い悲しみと苦しみの叫びを。

そして最後に彼女が見せた助けを求めるような仕草……あれこそが彼女の本当の願いだとしたら。

だが、今それは心の隅において置くことにしよう。現時点で遊星が優先すべきは蒼乃丞との決勝戦なのだから。

思考を元に戻した遊星はデッキケースからデッキを取り出し眺めた。

遊星が持ちうる戦術の全てをつぎ込んで組み上げたデッキ……しかし、これだけでは彼女と彼女の青眼の白龍に対峙するにはまだ足りない。

己が存在の全てを賭けなければ同じ舞台に立つことさえも叶わないだろう。そう考えた遊星は懐から一枚のカードを取り出した。

それは遊星の最強の切札、スターダスト・ドラゴン。

ジャックとの勝負までは使うつもりはなかったが、彼女を相手にするならば出し惜しみはできない。

全力でいくしかない。その思いと共に遊星はスターダスト・ドラゴンのカードをデッキの中に加えたのだった。

遊星が蒼乃丞との決闘に決意を新たにする中、蒼乃丞とアキとの決闘を満足気に見ていた者たちがいた。

誰であろう、この大会を仕掛けた治安維持局の人間　レクスとイエーガーである。

「ヒイツヒヒヒ、これで十六夜アキもシグナーである事が確定しましたね。いや、しかし予想以上ですな海馬蒼乃丞の實力は」

イエーガーは不気味な笑みを漏らしながらディヴァインに優しく連れ出されていくアキを見ると、手元にスクリーンを投射させた。

空中に投射されたスクリーンに、D・センサーの計測表とアキの右腕のアップ画像が表示される。そこには確りと浮かび上がった竜の痣と、それが本物である事を示す数値が映し出されていたのだ。

それにしても先の一回戦で蒼乃丞の實力の程はわかってはいたが、準決勝の試合は予想以上だった。

何せアルカディアムーブメントに囲まれて確認のしようがなかったアキのシグナーとしての資質をこれ以上ないほどに引き出してくれたのだから。

これで確認されたシグナーはジャックと龍可とアキの三人。五人目の痣が既にレクスの掌中にある中、残るシグナーは一人となった。

「残るはシグナーは後一人。可能性としては不動遊星でしょうが、海馬社長には彼のシグナーとしての資質を十六夜アキ同様に引き出してもらうことにしましょう」

これまでの治安維持局の調査のより遊星の右腕が度々光を発つしていた事はわかっていいる。この事から蒼乃丞がシグナーである可能性はほぼ潰えたと言ってもいい。

しかし、未だに遊星はシグナーとして覚醒してはいなかった。

炎城ムクロやボマーとの死闘でも目覚めなかった彼の覚醒を促すのならば並みの決闘者では務まらない。なればこそ蒼乃丞と彼女の青眼の白龍には期待がかかる。

そう思考していたレクスは、しかしと思う。

不動遊星と海馬蒼乃丞。

彼らの関係を知る者としては、感慨深いものがあつた。

片やサテライトの決闘者、片や海馬コーポレーションの総帥という身分に天地ほどの差がある彼らであるが、彼らの因縁を知るレクスにとつてはそんな立場など彼らには些かも関係はすまい。

何故なら彼らには切る事のできない繋がりがあるのだから。知ると知らないにも関わらず切っても切れない絆、という繋がり
が。

その繋がり導きの元、十七年の歳月を経て知らぬ内に再び向かい合う蒼乃丞と遊星にレクスは運命を感じた。

だが、今は感傷に浸る時ではない。

レクスは一つ頭を振ると、思考をレクスという一個人から冷徹な治安維持局長間のものへと切り替えた。

この決闘の果てに彼女は間違いなく遊星をシグナーとして覚醒させてくれるだろう……その勝敗に関係なく。

しかし贅沢を言うならば、やはりここはシグナー同士の いや、シグナーの竜同士の激突を垣間見てみたいと言う欲求もレクスにはあつた。

だからだろう。レクスはジャックの方を振り返りつつ、その思いを口にした。

「私は見たいのです、キング。貴方のレッド・デーモンズ・ドラゴンと遊星のスターダスト・ドラゴンの激突を。その迸るエナジーを私は感じたい」

「当然だ。遊星があのような小娘に負けようはずがない」

レクスの言葉に対して、さも当然のように返すジャックだったが彼にも一抹の不安がある。

他ならぬ蒼乃丞のことだ。

彼にとつて蒼乃丞は今まであつてきた者の中で一番気に入らない人物であるのだが、その決闘の腕前は認めざるを得ないほど遥かに高い次元にある。

ジャック自身、負けるとまでは言わないが実際のところ勝敗の行方はやってみなければわからない。決闘に絶対の自信を持つジャックをしても、その予想は五分と五分　これがジャックの本音だった。

だが、ここで一つだけ確かな事がある。

それはジャックに比肩する腕を蒼乃丞が持つと言う事は即ち、ジャックの好敵手たる遊星にとつても苦戦を強いられる相手だということだ。

自分たちに匹敵する力を持つ蒼乃丞の存在に、ジャックは遊星の敗北の可能性を髪間見たのである。

遊星、よもや貴様が負けるとは思えぬが……。

海馬蒼乃丞、忌々しい小娘だがコイツの強さは本物だ。

その思いは奇しくも遊星が抱いた思いと同じものであった。

遊星とジャックから強敵と認定された蒼乃丞は若干ふらつく足腰に喝を入れていた。

アキや観客の前では強がって何ともないように振舞ってはいたが蒼乃丞だつて人間だ。

如何に彼女があらゆる意味で規格外とはいえ痛みを感じるし疲れもする。

傷らしい傷はほとんど見られないが、衝撃によるダメージが予想以上に蒼乃丞を苛んでいたのだ。

しかし蒼乃丞にとって、この程度のダメージはどうということはない。

先の決闘では不覚を取ったが、決勝戦が始まる前には問題のないところまで回復している事だろう。そう思いつつ用意された控え室の扉を潜った蒼乃丞の鼓膜にけたたましい声が聞こえてきた。

「蒼乃丞様！ よくぞ、ご無事で！」

耳を塞ぎたくなるほどの大声で持つて蒼乃丞を迎えたのは他でもない。

蒼乃丞の側近中の側近、磯野だ。

余程心配していたのであるろう、蒼乃丞の元に駆け寄ってくる忠臣の姿に蒼乃丞は当然と言つたように笑みを返す。

「いったであろう、勝つのはボクだと。それとも磯野、お前はボクの言つた言葉が信用できなかったのか？」

笑みと共に意地の悪い問いかけをしてくる蒼乃丞に、磯野は辟易としながらも安堵の息をついた。

先の決闘、あまりに痛々しい蒼乃丞の姿に彼女の無事を心配して

いた磯野だ。

こうして無事な姿を見せ、いつもどおりに意地の悪い言葉を投げかけてくれた。これ以上に喜ばしい事はない。

「蒼乃丞様のお言葉を疑っている訳ではありませんが、それでも心配な事には変わりありません」

「ふ、ふんッ」

いつもならばしどろもどろになって答えに窮する磯野が笑みを浮かべて答えを返した事が気恥ずかしいのか、蒼乃丞は頬を少し赤く染めてソッポを向きながらボロボロになったコートを磯野へと投げつけた。

照れ隠しに投げ渡されたコートを手に取った磯野は、孫に見せるような笑みを浮かべつつ新しいコートを手に取ると、それを蒼乃丞の背に向けて広げ彼女が袖を通すのを待つ。

「……ふうん」

今しばし頬を赤く染めていた蒼乃丞だったが、満更でもなさそうに一つ鼻を鳴らすと磯野が広げたコートの袖に腕を通した。

新しいコートに着終えた蒼乃丞に一礼して後ろに引いた磯野は、未だに背中を見せる彼女に向けて問いかける。

「決勝戦は一時間後、騎乗決闘で行われます。それまでどうお過ごしになりますか？」

僅かにとられた決勝戦までのインターバル。

休憩に使うもよし、デッキの調整に当てるもよし、その使い方は多種多様。そんな様々な過ごし方がある中で蒼乃丞は、そのどれでもないものを選んだ。

「例のモノは既にこちらにあるのだな」

次に行われる決勝戦が騎乗決闘なれば必然と必要になってくるものがある。

蒼乃丞はその調子確かめることにしたのだ。

「はい。現在はあの方々がこちらで最終調整に入っております。ご覧になれますか？」

どうやら自分が手を出すまでもなく彼らが調整を行っていてくれるようだ……それは当然か。

アレと彼らは一つでセットだ。

何といても彼らはアレの為に集められたといっても過言ではないのだから。

彼らに任せておけば万事問題はない　そう思った蒼乃丞だったがしかし、やはり最後の調整は自身で行ったほうがいいと判断した。別に彼女自身、彼らの腕を見損なっている訳ではない。

彼らは蒼乃丞を大きく凌ぐ科学者で技術者だ。そんな彼らに蒼乃丞は全幅の信頼を置いている。

しかしだ。

次の決勝戦、共に彼女のロードに徹を刻む唯一無二の相棒で、何より自身が手がけた子の様なモノである。

そう言うこともあってか、蒼乃丞は人頼みと言うままではいられなかったのだ。

「そうするとしよう。磯野、案内しろ」

「では、こちらになります」

一つ頷いて返した蒼乃丞に、磯野は手を別の扉の先へと示した。

その手の先にある扉。VIP専用の控え室の出入り口とはまた異なる扉を蒼乃丞は潜る。すると僅かな振動と共に体が弱い力で上から押さえつけられる。

エレベーターだ。

それにしてもと思う。蒼乃丞は降りのエレベーターがどうにも好きにはなれない。いや、降る時に感じる重力に言い換えたほうが正しいか。

何か見えざる力に押さえつけられている感じが彼女にとって気に食わないのである。

しかし、そう思うのもつかの間。

降る距離が短かったのか、降るときと同じような振動と共にエレベーターは階下に到着した。

静かに開いていく扉の先からキーを叩く軽快な音と共に油の臭いが立ち込めてくる。

控え室からエレベーターを降りた先にあつた物。それは堆く山のように詰まれた機材と無秩序に方々伸びる配線。

一見するとそこは魔窟のようにも見えるがしかし、その中心に座すモノがここが魔窟であると言つ事を否定していた。

流麗な線を描く白銀の体躯。大地を踏みしめ、雄々しき軌跡を刻むであろう一対の輪。それを駆る主が座す場所は、まるで玉座のよう。

その様な美しく、清らかで、気高いモノがいる場所など魔窟であるはずがない。言うなればそこは聖域だった。

そしてここが聖域ならば、その聖域の主たるモノの面倒を見る彼らはさしずめ賢者であろうか。

「ノビさん、新OSのアップデート完了だ」

「ご苦労、英一。この分だと何とか間に合いそうですね、ドクターJAM」

「ああ、すぐにシミュレーションに移ることにしよう……うん？」

おお、蒼乃丞ちゃんか。何か用かい？」

D・ホイールの整備ドックと言う聖域に立つ三人の賢者　科学者の内の一人、ドクターJAMと呼ばれた老人がドックに立ち入った蒼乃丞に優しい笑みを浮かべた。

しかし、世界に名だたる大企業にしてネオ童実野シティを半ば支配する海馬コーポレーションの総帥を“ちゃん”呼ばわりとは何とも剛毅な老科学者である。

そんなドクターJAMに対して蒼乃丞は気を悪くすることなく、いつもの不敵な笑みを彼へと向けた。

「用も何も、これはボクの子供と言ってもいいモノだからな。ドクターたちにとってもらっては親であるボクの立つ瀬がないというもののだ」

そう言って蒼乃丞は白銀に輝くそれを叩いた。

ドクターJAMたちが整備し、蒼乃丞が子供とまで言ったそれ

それこそ青眼の白龍を象ったD・ホイール。その名も《青眼の白龍騎》トドラゲイン
フルアインズ・ホイール。

蒼乃丞が基礎設計し、三人の賢者が持てる技術の粋を集めて開発した蒼乃丞専用のD・ホイールだ。
しかしなるほど。

基礎設計を手がけた蒼乃丞にとって《青眼の白龍騎》が子供と言うのは言いえて妙だった。

この蒼乃丞の言葉に、ドクターJAMを始めとした三人の科学者が口元を綻ばす。

そんな彼らこそ、蒼乃丞が召抱える彼女専用のD・ホイール《青眼の白龍騎》の開発、整備チームの面々なのだ。

人数は三人と少ないが、それぞれが各分野のスペシャリストで、その腕の高さを見込まれて蒼乃丞直々にスカウトされた超一流の科

学者にして技術者たちである。

彼らは微笑まじげな笑顔をそのままに、蒼乃丞に向かって手招きした。

「丁度良かった。ならお嬢、これからシミュレーションなんだがちよつと乗ってくれないか？ 今さっき新しいプログラムをアップデートしたところだな。計算上ではエンジンのパワーをそのままに加速力を三パーセント向上できたはずだ」

蒼乃丞をお嬢と呼んだ四角縁眼鏡と赤色のサンバイザーがトレードマークの青年の名は木手英一。

機械工学や物理学に精通する科学者でもあるが、それ以上にOSを始めとしたソフトウェア・プログラム開発の第一人者として有名だ。

彼が開発した人工知能、KOROSUKEは自我の形成と言うAIでは決して越えることのできなかつた壁を突き崩したとして一世を風靡したほどである。

「モーメントエンジンの調整もバツチリ。完璧に仕上げておいたから蒼乃丞さんもきつとビックリするよ」

次いで蒼乃丞にエンジン部分の説明をしながら、デュアルアイをバイザーに変えたカイバーマンマスク型のヘルメットを渡す丸縁眼鏡の青年が野比ノビ太。

彼もまたあらゆる工学知識に精通する一流の科学者であるが、中でも得意とする分野は動力機関だ。

彼を一躍有名にしたのはモーメントに変わる新型永久機関《四次元連結システム》である。しかしこれは現在、理論上だけのもので未だに実用化までにはこぎつけていない。

だが、若くして新たな永久機関の理論を独力で完成させたその頭

脳と手腕は高く評価されている。

そんな二人から《青眼の白龍騎》の現在の仕様を聞いた蒼乃丞はヘルメットを被ると、パイロットシートに跨った。

「ふうん、ならば見せてもらおうか。本当にボクが満足できる仕上がりになっているのかを」

「それは私が保証しよう。きっと蒼乃丞ちゃんも気に入るよ」

挑戦的な蒼乃丞の言葉を笑顔で返したのは最後の一人であるドクターJAM。

長いコック帽を被ったふくよかな頬の老科学者だ。それに加えて英一とノビ太の師匠的存在でもあり、彼らの信任も厚い人格者でもある。

歳と共に重ねてきた工学知識は世に名を轟かせるノビ太や英一でさえも追隨を許さないほど深く、そして鋭い。

若き最高頭脳たる二人をして師と仰ぐほどの科学者であるドクターJAMだが、何と驚く事に彼にとって科学者は片手間の仕事なのである。

何と驚く事なけれ、彼の本職はパン職人なのだ。

素材から厳選し、丹精込めて生地を作り、匠の技を持って焼く彼のパンはそれはもう頬が落ちるほど美味だと人気が高い。常に年間グルメランキング上位に名を連ねるパン屋《パン工場》の店主なのだ。つまり科学者は副業なのである。

閑話休題

そんな大御所であるドクターJAMからのお墨付きを聞きながら蒼乃丞はペダルやハンドルの具合を確かめていく。

それだけで蒼乃丞には彼らがいい仕事をしてくれた事がわかった。手や足に伝わる固さや手ごたえは蒼乃丞にとって理想のもの。こ

んな細部に至るまで自分仕様に仕立ててくれたのなれば、彼らの調整は完璧なのだろう。

これならば大いに期待がもてる。その思いに笑みを漏らした蒼乃丞は腕からエンジンキーでもある決闘盤を取り外すと《青眼の白龍騎》の計器類の手前に空いた窪みに決闘盤をはめ込んだのであった。

蒼乃丞がD・ホイールのドックで最終点検を行っている最中、観客席では遊星の様子を見に行っていた氷室が客席へと戻ってきていた。

そんな氷室を目敏くみつけた龍亞は席から立ち上がりながら懸念していた事を問いかける。

「あッ！ 氷室のおっちゃん、遊星のD・ホイールはどうだった？」

なんとと言っても遊星のD・ホイール、《遊星号》を押しつぶすほどに巨大なボマーのD・ホイールの突進を防いだのだ。

決勝はどうなるかわからないが、その先にあるジャックとのファイナルは騎乗決闘である。ここで大掛かりな修理が必要になる故障ともなれば、それが危ぶまれる事になる。しかしそんな懸念は

杞憂に終わる事になる。

心配げな視線を送る龍亞たちに氷室は安心させるように頷いた。

「ああ、大丈夫らしい。次の決勝戦に騎乗決闘が来ても問題なくいけるそうだ」

この氷室の報告に、皆はホッと息をつく。

決闘して負けるのならばまだいいけれど、D・ホイールの不調で不戦敗など泣くに泣ききれないことだ。

そんな最悪の事態が回避された事は本当に僥倖であった。

それ故だろうか。先ほどまで口数少なめだった天兵や龍亞が、息を吹き返したように言葉を挙げていく。

「次の決勝戦、ついに海馬社長との決闘だね」

「遊星と蒼乃丞姉ちゃんの決闘、きつとすごいことになるぜ！」

昨日の一回戦と今日の準決勝、共に見事な決闘を見せた遊星と蒼乃丞の姿を反芻しながらはしゃぐ二人を尻目に、典膳は腕を組みながら一つ首を捻った。

「それにしても、あんちゃんにアキちゃん、龍可ちゃんまでがシグナーだったんだらう？　じゃあ、あの社長さんもシグナーなのかねえ？」

典膳の疑問はもつともだ。

このデュエル・オブ・フォーチュンカップ、その参加者に伝説に歌われるシグナーが集まっているのである。

無作為に集められた人間から尽く五人しか存在しないシグナーが登場する……とても偶然じゃありえないことだ。ならば作為的にシグナーとその候補者が集められてといったほうが説明がつく。

シグナーの五人の内、既に四人は典膳たちの知るところだ。

残りのシグナーはあと一人。ならば最後に残った候補者である蒼乃丞がシグナーだと考えるのも無理な推測ではない。

そんな思いが込められた典膳の言葉に、龍可は右腕を抱えると視線を下へと落とした。

「……………」

「龍可……………」

そんな龍可に気遣わしげな視線を送る龍亞の横で、氷室は腕を組むとスタジアムに投射された蒼乃丞と青眼の白龍を眺めながら言葉を発する。

「それはわからん。しかし仮に彼女がシグナーだとするのなら、彼女のシグナーの竜は間違いなく青眼の白龍のはずだ」

シグナーは、それぞれに竜を従えろと言う。

その言葉通りならば、蒼乃丞がシグナーの場合は彼女の代名詞である青眼の白龍がそれにあたるはず。

そんな氷室の推理に皆が頷きかけた時、一人　龍可だけが首を横へと振った。

「……………それはないと思う」

いきなりの龍可の否定の言葉に皆が、えっとなるが右腕を抱える龍可の姿に納得がいく。

彼女は真正銘、シグナーの一人であるのだ。

そんなシグナーである龍可には先の蒼乃丞とアキとの決闘ではつきりと感じたことがあった。

「さつき、アキさんがブラック・ローズ・ドラゴンを召喚した時感じたの。シグナー同士の共鳴って言うのかな……アキさんの心が……悲しいまでの心の悲鳴が、痣を通して胸に流れ込んできたの」

ぼつりぼつりと語る龍可の胸に、あの時のアキの声なき悲鳴が甦る。胸が締め付けられそうなほどに苦しい、彼女の助けを求める声が。

あれほど他人を自分の事のように感じた事は今までにないことだ。これがシグナー同士の繋がりであるならば、シグナーの竜の召喚がその触媒となるならば、先の決闘で蒼乃丞の心も感じられたはずである。

彼女も青眼の白龍を召喚していたのだから。

「でも蒼乃丞さんが青眼の白龍を召喚しても、それは起きなかった。だから多分」

だが、蒼乃丞からは何も感じられなかった。

アキからは感じられたはずの心が蒼乃丞からは感じられなかったのだ。

ならば結論はただの一つ。

「彼女はシグナーではない……そういうことか」

氷室の言うとおり、つまりはそう言うことだ。

他のシグナーを感じる事ができるシグナーである龍可が否定したのだから、それは間違いのないことだろう。

その結論に皆は少し肩透かしを食らったような顔になった。

しかし、そうなると五人目のシグナーはどこにいるのだろうかと言っ疑問が残る。

この大会辞退がシグナーを集める為のものだと言っのは疑いよう

のない事実。ならばこの会場のどこかに五人目のシグナーがいるはず。そうは思ってみても一観客に過ぎない自分たちではそれを知る事などできようはずもない。

龍可にしてみても、痣を通して感じるのは遊星、ジャック、アキの三人のみ。

五人目のシグナーの気配など露ほども感じる事はできなかった。

「でも、どっちみち遊星の強敵である事には変わらないよ。俺にだってわかる。蒼乃丞姉ちゃんがとてつもなく　遊星やジャックと同じくらい強いってことが」

わからないものを延々と考えていても仕方がないと思ったのだから。

龍亞が話題をシグナーから決勝戦の事に転換した。

シグナーの事も重要だが、やはり龍亞にとっては遊星の決闘もそれに負けないほど重用だったようだ。

この龍亞の振りに他の面々も暫く後に行われるだろう決勝戦へと思いを馳せた。

「そうだな。彼女がシグナーであろうがなかるうが、遊星はどうしてもジャックとの因縁に蹴りをつけなきゃならない。そのためには彼女を倒す以外に道はないからな」

そんな彼らの心を総括した氷室の言葉に、皆は大きく頷く。

今は遊星を応援する事に全力を尽くそう　皆の思いはただそれだけに集まったのであった。

Turn - 07 決勝戦、騎乗決闘・加速開始！

『Yeah!! とうとう決勝戦だあッ! この騎乗決闘を疾く駆け抜け、偉大なるキングへの挑戦権を得るのはどっちだあッ!?!』

MCの声がスタジアム中に響き渡る。

昨日、今日と二日間に行われたデュエル・オブ・フォーチュンカップ。その決勝戦の火蓋が今切つて落とされようとしていた。

これから行われる騎乗決闘でキングであるジャックに挑戦する決闘者が決定するとあつてか、観客達の歓声は今まで以上の熱気が籠る。

『では、数多の猛者たちを退けてきたファイナリストを紹介しよう! まず一人目の挑戦者! サテライトの流れ星、不動遊星ッ!!』

高らかなMCの紹介と共に中央のモニターに遊星の顔が表示されると、スモークの焚かれたコースの一画から赤いD・ホイールが姿を現した。

サテライトでの牛尾との騎乗決闘から今大会まで、遊星と共に数々の危地と激戦を潜り抜けて来た《遊星号》である。

己が相棒である《遊星号》に騎乗した遊星はD・ホイールの調子を確認するようにコースを返していく。

しかし、D・ホイールに跨り周回のコースを回る遊星に対して観客達が向ける声は未だに冷やかだ。一回戦と準決勝を勝ち上がったきた実力から幾分かはマシにはなったが、それでも所詮はマシになつた程度。

やはりサテライト出身のマーカー付きがD・ホイールを所持し、

キングと競演できるデュエル・オブ・フォーチュンカップに招かれた事が不満なのだろう。

遊星に向けられるブーイングは未だに大きかった。

だが、そんなブーイングの嵐もMCの次の言葉で露と消えることになる。

「その不動遊星に対するは、伝説の継承者にして不敗神話の体現者！ 海馬蒼乃丞おおッ！！」

MCの紹介と共にモニターに映る映像が遊星から蒼乃丞に変わると、一転して会場が大歓声に包まれたのだ。

しかし何と不思議な光景だろうか。

先のアキとの準決勝、蒼乃丞は観客達を高らかに叱りつけたのだから颯爽を買ってもおかしくないはずである。だと言うのに、彼女に向けられる歓声は今まで以上に熱く大きなものであった。

それだけ蒼乃丞が見せた決闘はセンセーショナルであり、多くの観客達の心を掴んだと言う事だ。

天性のカリスマ……それもまた蒼乃丞が持つ才能の一つである。

天を裂き地を砕かんばかりの歓声がスタジアムに響き渡る中、そんな歓声に心えるように高らかなエンジン音が鳴り響いた。

皆の視線が音の源へと集まる。

そこはコースに隣接するD・ホイールの搬入口のはずだ。しかし、エンジン音の鳴り響くそこは何故か龍の棲むねぐらに見えた。

誰もが固唾を呑んでその先を見つめる中、鳴り響くエンジン音は次第に大きくなってくる。

まるで奥に棲む龍が次第にこちらに向かってくるかのように。

そんな幻想を皆が共有する中、ついにソレは現れた。

高らかななるエンジン音は心臓の鼓動。光りを返して輝く白銀の

フルカウルは堅き龍鱗。地に轍を刻む両の輪は全てを踏み砕く雄々しき脚だ。そして新素材の形状記憶繊維で編まれたコートの裾が金属質なフィンと化し、まるで空を駆け抜ける大いなる翼のように風を切り裂く。

D・ホイールの搬入口が龍のねぐらだと幻想したのは勘違いなどではなかった。

そこから姿を現したのは、まさしく龍　青眼の白龍の姿をしたD・ホイール、《青眼の白龍騎》だった。

だが、何と言う幻想的な光景だろうか。

《青眼の白龍騎》に騎乗する蒼乃丞の姿は、まるで白銀の龍に跨り空を翔る姫君のように見えた。

「……………あッ」

スタジアム中がいやに静かなのに気がついたのは誰が最初であろうか。不意に誰かが発した声と共にいつの間にか止まっていた時間が動き出す。

まるで夢から醒めるように観客達は二台のD・ホイールが走るコースを見た。

しかし、コースを走るのは赤と白銀のD・ホイールのみだ。先ほどまで見えていた龍に跨る姫君の姿などどこにもない。

夢か幻か……現実と幻想の境界が曖昧に感じられる中、不意に観客達は気がついた。白銀の龍こそが《青眼の白龍騎》であり、それに跨っていた姫君が蒼乃丞であると言う事に。

誰もがその事実気がついた時、忘れかけていた大歓声スタジアムの静寂を切り裂いた。

『ななな、何と美しいD・ホイールだろうかああ！　言葉も出ないとはまさにこの事！！　不覚にも一瞬、これが現実だと言う事を忘れてしまったああッ！！』

MCでさえも職務を忘れ魅入ってしまう程、蒼乃丞と《青眼の白龍騎》の組み合わせは言葉に出来ない魔力を持っていたのである。

会場中に魔法をかけた張本人である蒼乃丞はMCの言葉と観客達の歓声を、さも当然の事のように受け止めると《青眼の白龍騎》の返しに入った。

大歓声渦巻くスタジアムのコースを周回していく赤い《遊星号》と白銀の《青眼の白龍騎》。

不動遊星と海馬蒼乃丞　ここに決勝戦の舞台に上がる役者は揃った。

コースを数週回り返しを終えた二台のD・ホイールは同じタイミングでスタート地点へと停止する。

両雄が並び立つた騎乗決闘のコースで、不意に遊星は横に並ぶ蒼乃丞の方を見た。

それは昨日と今日に渡り圧倒的な決闘をまざまざと見せつけてきた強敵の姿のはずだ。しかし、初めて蒼乃丞を間近で目にした遊星が彼女に抱いた印象は不可思議なものだった。

海馬蒼乃丞とは何時かどこかで会ったことがある　そんな既視感を遊星は彼女に感じたのである。

だが、彼女に感じるこの感覚は既視感とは違う気がする。

彼女を間近で見ると不意に懐かしさがこみ上げて来るのだ。その不思議な感覚は既視感と言うよりも懐古の念に近いものだった。

しかし、数年前の決闘チーム所属時代から幼少期の孤児院時代まで遡ってみても遊星の記憶に蒼乃丞の姿はない。

そもそも蒼乃丞は海馬コーポレーションの総帥だ。

トップスで生まれ育った彼女がサテライトにいた遊星と繋がりがあること事態がありえない事なのである。

だと言っのに遊星は何故か蒼乃丞を識っている。

知らないはずなのに識つていると言う矛盾

その矛盾を前に遊星はどうやってこの感覚を言葉にしていまいか迷っていたのだが、救いの手は思わぬところから差し伸べられた。

「ふうん、言いたい事があるなら言え。今なら聞いてやらん事もない」

何かを聞いたそんな遊星の視線に気付いた蒼乃丞が視線だけを遊星にやるとそう言ってきたのである。

蒼乃丞のこの言葉に遊星は一瞬聞くか聞くまいか躊躇した。

だってそうだろう。初対面であるはずの人間にどこかであったかを聞くなど、何時の時代のナンパ文句だと言うのだ。

だがしかし、それでも遊星は蒼乃丞に聞かずにはいれなかった。

この不思議な懐かしさの正体を

「海馬……お前と俺、どこかであった事があるか？」

「愚問だな。ボクが貴様の様なサテライト出身者を知るはずもないだろう……と言いたいところだが、ボクも不思議と貴様を知っている感じがする。貴様こそボクとどこかであったか？」

「ッ！？」

返ってきた答えは予想通り ではなかった。何と彼女も遊星を識つていると言ったのだ。

この彼女の言葉に遊星が絶句したのも無理はない。

自分一人であるならば勘違いの類かと思っただけだが、何と彼女も同じ感覚を共有していたのである。

しかし、こんな偶然ありえるのだろうか。

可能性としてはシグナー同士の繋がりが成す感覚の共有だが、彼女から感じる感覚はシグナーのそれとはまた違う。

そもそも蒼乃丞がシグナーであり、この感覚がシグナーの繋がりが

から来るものであったならばアキの時と同じように痣が疼くはずである。

ならば、この奇妙な……それでいて不快ではない感覚は一体何なのだろうか。

答えの出ない問題に悶々とする遊星に対して蒼乃丞は一つ鼻を鳴らした。

「ふうん、まあいい。別にボクが貴様を知っていようがいまいが関係ない。疾く貴様を蹴散らし、駄犬を偽の玉座から引き摺り下ろしてくれるわ」

確かに蒼乃丞の言うとおりだ。

互いを識っていようと知っていまいとに関わらず、この決闘譲るわけにはいかない。人質に取られたサテライトの仲間達のために。因縁あるジャックとの決着のために。

だとするならば、今この事は忘れておこう。今、自分の前には越えるべき壁が立ち塞がっているのだから。

『フィールド魔法、スピード・ワールド！ セエット、オンツ！』

遊星が決意を固めると同時にMCの音がスタジアムに響き渡る。

その声にあわせてD・ホイールのAIがフィールド魔法を発動させた。

【Duel mode, on-Auto Pilot, standby.】

スピード・ワールドの発動と共に世界の色が変わる。

ここから先はスピードに支配された世界。通常の決闘とはまた別

の理で運営される別世界だ。

『これでフィールドはスピード・ワールドに支配されたあッ！
このスピードに支配された領域で、もしスピードスペル以外の魔法
カードを発動すればペナルティとして2000ポイントのダメージ
が発生する！ つまり、実質上使える魔法カードはスピードスペル
のみッ！』

MCの説明どおりスピード・ワールド発動下では既存の魔法カー
ドの発動には大きなペナルティが課せられている。別に使用が禁止
されているわけではないが4000ポイントのライフでは2000
のダメージはあまりにも致命的だ。

そんなスピード・ワールド発動下で発動できる魔法カードこそが
スピードスペル。

二ターン目のスタンバイフェイズから一つずつ追加されるスピー
ドカウンターを一定数溜めたり消費する事で発動できる魔法カード
だ。

毎ターン、加速するたびに使える魔法カードが ひいては戦術
の幅が広がるのである。

これこそ騎乗決闘において、D・ホイールの速さが魔法になると
言われる由縁。

誰もがこれから行われるだろう激戦に期待を膨らませる中、スタ
ジアムにMCの言葉が木霊した。

『すべての刻が、今ここに交わる！！ デュエル・オブ・フォーチ
ュンカップ、決勝戦』

その一言一句に観客達の期待と、D・ホイールのエンジン音が徐
々に高鳴っていく。

既に指し示す針の目は臨界点。

あと必要なのは軛を解き放つ言葉のみだ。

どれだけの時間がたったであろうか。一瞬が永遠に引き伸ばされたかのような感覚がスタジアムを支配する。

まだか……まだなのか　誰もがそう思い固唾を呑む中、とうとうその言葉は放たれた。

『ライディングデュエル　アクセラレヲオオン
騎乗決闘　・ 加速開始ッ！！』

MCが打ち鳴らした戦鐘に、遊星と蒼乃丞はスロットルをいっばいに回しエンジンであるモーメントを解放させる。虹色に輝くモーメントから絶大なエネルギーを受けた両輪はけたたましい音と共に火花が迸り、地面に轍を刻みつけた。

蒼乃丞の《青眼の白龍騎》と遊星の《遊星号》はタイヤ痕だけをその場に残し、コースへと躍り出る。

今ここに決勝戦の火蓋が斬って落とされたのだった。

蒼乃丞LP4000　SPCO

遊星LP4000　SPCO

「先攻はボクが貰う！　ドローカードッ！！」

まず先手を取ったのは蒼乃丞。

デッキから一枚カードを引き抜いた蒼乃丞は引いたカードと手札の内容を確認すると、手札から二枚のカードを引き抜いた。

「カードを一枚セットし、シャインエンジェルを攻撃表示で召喚！」

シャインエンジェル 4 ATK1400 DEF800

蒼乃丞が召喚したのは破壊されて墓地にいった時、デッキから攻撃力1500以下の光属性モンスターを特殊召喚できるシャインエンジェル。

この効果で特殊召喚できるモンスターはチューナーであり青眼の白龍をサーチ出来る伝説の白石を始め、手札にある青眼の白龍を特殊召喚できる正義の味方 カイバーマン、手札から捨てる事でコンバットトリックな戦術を取れるオネストなど効果が強力なモンスターたちばかり。

伏せカードが一枚あるが、それを差し引いても攻撃力の高くないモンスターを攻撃表示にする彼女の意図はあからさまだ。

こちらの攻撃を誘っている。

その心意が伏せカードによる迎撃なのかシャインエンジェルの効果を起動させるためのかは定かではないが、そう考えてまず間違いはない。

油断しているとすぐに置いて行かれる そう感じた遊星は今一度気を引き締めると、デッキへ手を伸ばした。

「俺のターン！」

蒼乃丞 LP4000 SPC0 1

遊星 LP4000 SPC0 1

二ターン目のスタンバイフェイズとなり、スピードカウンターがそれぞれに一つずつ追加される。

遊星はデッキから引いたカードを加えた手札から一枚のカードを

選びだした。

「スピード・ウォリアーを召喚！」

スピード・ウォリアー 2 ATK 900 DEF 400

召喚されたのは攻撃力900のスピード・ウォリアー。しかし、その攻撃力ではシャインエンジェルの1400には届かない。

だが、スピード・ウォリアーには召喚されたターンに発動できるモンスター効果がある。

遊星はスピード・ウォリアーを指差し、そのモンスター効果を発動させた。

「スピード・ウォリアーは召喚したターン、攻撃力が二倍となる！」

スピード・ウォリアー 2 ATK 900 1800 DEF
400

上昇後のスピード・ウォリアーの攻撃力は1800。

これでシャインエンジェルの攻撃力を上回った。

攻撃力を上げたスピード・ウォリアーを従えた遊星は、腕を振り上げるとスピード・ウォリアーに攻撃の命を下す。

「行けッ!!! スピード・ウォリアー! ソニック・エッジ!!!」

遊星から号令を受けたスピード・ウォリアーは大地を駆け抜けシヤインエンジェルに肉薄すると、鋭い蹴りをシヤインエンジェルへ叩き込んだ。

スピード・ウォリアーから放たれた蹴りにシヤインエンジェルはひとたまりもなく粉々に砕け散る。

「ッ！」

蒼乃丞 LP 4000 3600 SPC 1

超過ダメージ400が蒼乃丞のライフポイントを削るが、蒼乃丞にとっては予定調和だ。

攻撃の余波が蒼乃丞の《青眼の白龍騎》を揺らす中、蒼乃丞は眉一つ動かすことなくシヤインエンジェルの効果を発動させた。

特殊召喚するカードは。

「この時、シヤインエンジェルの効果発動！ デッキから伝説の白石を特殊召喚するッ！！」

伝説の白石 1 ATK 300 DEF 250

蒼乃丞が選んだのはチューナーモンスターにして、青眼の白龍をサーチできる伝説の白石。

この流れを見るに、彼女の狙いは次のターンにシンクロ召喚を行うと見てまず間違いはないはないだろう。そう考えた遊星は手札

から一枚のカードを抜き出し、決闘盤へと挿しこんだ。

「カード一枚を伏せてターンエンド」

スピード・ウォリアー	2	ATK1800	900	DEF
400				

遊星のターンエンド宣言と共にスピード・ウォリアーの効果が切れ、攻撃力が元に戻る。

その光景に蒼乃丞は静かにほくそ笑んだ。

今の遊星の場にいるモンスターは攻撃力がたったの900しかないスピード・ウォリアーのみ。しかも表示形式は攻撃表示ときいてる。

大ダメージを与える絶好の機会……この好機、逃さぬ手はあるまい。

蒼乃丞は己がデッキへと手を伸ばした。

「ボクのターン！」

蒼乃丞	LP3600	SPC1	2
遊星	LP4000	SPC1	2

新たなカードを引き抜いた蒼乃丞は手札より新たなモンスターを召喚する。

「手札から竜の尖兵を召喚！」

竜の尖兵 4 ATK1700 DEF1300

蒼乃丞の場に槍と楯を持つ竜人のモンスター、竜の尖兵が攻撃表示で現れた。

その は4。蒼乃丞の場にいる伝説の白石との 合計は5だ。

彼女のデッキの 5シンクロモンスターと言えば、先のアキとの準決勝で見せたA・O・J カタストルだろう。闇属性以外のモンスターを問答無用で破壊する効果を持つモンスターである。

やはり彼女の狙いは超強力な効果を持つ 5シンクロモンスター、A・O・J カタストルのシンクロ召喚か そう遊星が身構えた時、蒼乃丞は予想外の行動を取った。

「竜の尖兵のモンスター効果！ 手札のドラゴン族一枚を墓地に送ることで、このカード攻撃力を300ポイント上昇させる！！」

竜の尖兵 4 ATK1700 2000 DEF1300

何と手札を捨てて竜の尖兵の攻撃力を上げたのである。

手札のドラゴン族モンスター、ブリザード・ドラゴンを墓地に送った事により竜の尖兵の攻撃力は2000にまで上昇した。

だが、どういうことだろうか。

これからシンクロ素材として墓地に送るモンスターの攻撃力を上げる必要性はないと聞いていい。それなのに、態々手札を減らしてまで竜の尖兵の攻撃力を上げるとは……………。

彼女の狙いは一体どこにあるのか 蒼乃丞の不可解な行動に遊

星が求める答えはいたって単純なものだった。

「戦闘だツ！ 竜の尖兵でスピード・ウォリアーを攻撃！！」

そう、攻撃である。

チューナーである伝説の白石とチューナーでない竜の尖兵がいるにも関わらず蒼乃丞はシンクロ召喚を行わずに、そのまま攻撃を仕掛けてきたのだ。

高らかに腕を振り上げ攻撃を宣言した蒼乃丞に、遊星は驚愕する。

「シンクロ召喚しないでとツ！？」

予想外の事態に啞然とする遊星を、蒼乃丞は不敵な笑みを浮かべながら一つ鼻を鳴らしてみせた。

「ふうん、貴様如きにボクの神算は量れはしまい。ドラグーン・スピアツ！！」

そして凜と響く蒼乃丞の声と共に槍と楯を構えた竜の尖兵がスピード・ウォリアーの元へと迫る。

攻撃力は900と2000。

その歴然たる差に遊星のスピード・ウォリアーは、その鋭い穂先の鎧と消えるかに思われた。

だが、遊星も黙ってみているわけではない。

遊星は先の自分のターン、シンクロ召喚を警戒して伏せていたカードを発動させた。

「させない！ 畏発動、くず鉄のかかし！！ 相手モンスター一体の攻撃を無効にする！！」

竜の尖兵からスピード・ウォリアーを護るように鉄製のかがしが現れる。

スピード・ウォリアーの身代わりとなったくず鉄のかがしに対し、竜の尖兵はそのまま槍を突きつけた。

竜の尖兵の槍とくず鉄のかがしがぶつかり合い、高らかな金属音と火花を散らす……そんな一瞬の拮抗の後、竜の尖兵の攻撃はくず鉄のかがしにより弾かれた。

さらに遊星は攻撃を防いだくず鉄のかがしを指差すと、もう一つの効果を発動させる。

「くず鉄のかがしは効果発動後、再び場にセットされる！」

自身の効果により、くず鉄のかがしは墓地に送られる事なく、そのまま裏側表示でセットし直された。

これは普通のカードではありえないことだ。

普通の場合、効果を終えたカードは場に残る事はなく墓地へと送られる。しかし、くず鉄のかがしは効果発動後も再びセットされることで場に残り続け、プレイヤーを護るのである。

使い減りしない畏カード……それこそが、くず鉄の案山子の真骨頂だった。

だが、この程度の防御で攻撃の手を緩める蒼乃丞ではない。

「それでボクの攻撃を防いだつもりだろうが……まだ甘い！ リバーカード、オーブンツ！！」

威勢よく吼えた蒼乃丞は先のターン、場に伏せたカードを発動させた。

そのカードとは。

「畏カード、緊急同調を発動ッ！ このカードの効果によりシンク

「ロモンスター 一体を特殊召喚する!!」
「何ッ!?!」

姿を見せた蒼乃丞の伏せカードの正体に遊星は驚きの声を上げた。蒼乃丞の発動したカードは戦闘フェイズに発動する事で通常は行えない戦闘フェイズでのシンクロ召喚を可能とする罫カード、緊急同調。

まさかこのタイミングでシンクロ召喚を仕掛けてくるとは完全に遊星の予想の範囲外であった。

しかし同時に、遊星は先ほど見せた蒼乃丞の行動に納得する。

蒼乃丞の本当の狙いは戦闘フェイズでシンクロ素材であるモンスターで攻撃を行った後、この緊急同調でシンクロ召喚を行いさらなるダメージを与える事だったのだ。

「ヤツの場合には 1の伝説の白石と 4の竜の尖兵……ッ、まさか!?!」

蒼乃丞の場のモンスター の合計は5。

遊星の脳裏には先のアキとの準決勝で姿を見せた白き機獣の姿が甦った。

その災害の如き理不尽な効果で、あらゆるモンスターをことごとく屠る蒼乃丞のエースモンスターの名は 。

「 4、竜の尖兵に 1、伝説の白石をチューニング!!」

蒼乃丞の声と共に伝説の白石が一つの星となり竜の尖兵の周りに環を描く……すると、竜の尖兵も身体を四つの星へと変じさせた。そんな五つの星々を束ねるのは凜と響く美しい蒼乃丞の祝詞だ。

「虚無より生まれし正義の闇が、万の魔を断つ刃となる! 光さす

道となれ！ シンクロ召喚！！」

蒼乃丞の言葉に導かれ、五つの星々は一直線に並ぶ。

その星々の集まりは光の道となり一筋の道へと列をなす。その一瞬の後、光の道が弾けそこより災害の名を冠する正義の同盟者が現れた。

「起動せよ、A・O・J カタストル！！」

A・O・J カタストル 5 ATK 2200 DEF 1200

「……来たか、A・O・J カタストル……………ッ！」

バイザーに表示されたカタストルのステータスデータに遊星はその身を硬くする。

そんな遊星に蒼乃丞はA・O・J カタストルの威容をまざまざと見せ付けながら伝説の白石の効果を発動させた。

「伝説の白石の効果でデッキから青眼の白龍を一枚手札に加える！」

デッキから青眼の白龍を手札に加えた蒼乃丞は、遊星の場に伏せられたくず鉄のかかしを見つめながら一つ鼻を鳴らす。

「ふうん。効果発動後に場にセットし直され、何度でも効果を使用できる貴様のくず鉄のかかしは確かに厄介なカードだ。だが、そんなカードにも付け入る弱点はある」

確かに場に残り続けるくず鉄のかかしは攻撃する側から見れば至

極厄介で面倒なカードだ。

故に一見すると完璧な防御カードに見えるくず鉄のかかしであるが、蒼乃丞はくず鉄のかかしが抱える弱点を的確に見抜いていた。蒼乃丞は遊星に指を突きつけながら、その弱点を指摘する。

「それは一ターンに防げる攻撃は一回のみと言う事　つまり、二回目以降の連続攻撃には耐えれないと言う事だッ！」

決闘では罨カードはセットされたターンには発動できないと言う大原則が存在する。

いかにくず鉄のかかしが一回目の攻撃を防ごうとも、セットしなおされれば次に効果を発動できるの次の自分のターン以降と言う事になるのだ。

よって、くず鉄のかかしは初撃を防いだターンはもう発動する事ができず、二回目以降の攻撃を防ぐ事ができない。

たったの一度、カードの発動を見ただけでそのカードの本質を理解し弱点を見抜いた蒼乃丞のカードプレイングセンスに遊星は冷汗を流す。

やはり彼女は只者ではない　そう考える遊星に向けて蒼乃丞は腕を高らかに振り上げた。

「今度こそ、その雑魚モンスターを蹴散らしてくれるッ！　A・O・J　カタストルでスピード・ウォリアーを攻撃！　デッド・エンド・カタストロファイッ！」

蒼乃丞の号令の元、カタストルがスピード・ウォリアーへと照準を定める。

くず鉄のかかしの弱点を見抜かれた遊星の場には、カタストルの攻撃を防ぐ手立てはない。

何者にも阻まれる事なくスピード・ウォリアーを捉えたカタスト

ルは頭部からレーザーを照射し、スピード・ウォリアーを紙切れのように切り裂いたのだった。

本来ならばここで攻撃力分差の戦闘ダメージ1300が発生するのだが、ここでA・O・J カタストルの強力な効果が遊星の味方をする。

「A・O・J カタストルは闇属性以外のモンスターとの戦闘では戦闘ダメージは発生しない。ふうん。命拾いしたな」

そう。A・O・J カタストルのモンスター効果は闇属性以外のモンスターとの戦闘の際、ダメージ計算を行わずにモンスターを破壊すると言うもの。

即ち、いかに攻撃力の低いモンスターに攻撃し破壊しようとも、それが闇属性モンスターでない限り戦闘ダメージは発生しないのだ。故に蒼乃丞はスピード・ウォリアーの破壊を竜の尖兵に行わせたのである。

その後、場ががら空きになった遊星に伝説の白石の攻撃を叩き込んだ後、緊急同調でA・O・J カタストルをシンクロ召喚し直接攻撃を仕掛けようとおたのだ。

この場合、モンスターとの戦闘は起こらないからA・O・J カタストルの効果は発動しせず、遊星にダメージを与える事ができる。彼女はここまで計算して竜の尖兵のモンスター効果を使い攻撃力を上げ、攻撃を仕掛けて来ていたのだ。

これが決まっていれば遊星は合計3600ポイントの大ダメージを受けていた事になる。

蒼乃丞の言葉通り命拾いした遊星であった。

「場に三枚カードをセットし、ターンエンドだ」

カード三枚を決闘盤へと挿しこんだ蒼乃丞のターンエンド宣言と

共に遊星のターンが回ってくる。

そんな遊星は視線を蒼乃丞の場のカタストルへ、次いで自分の手札へと移した。

彼女の場にあるカタストルは闇属性以外のモンスターには無敵を誇る超強力なモンスターだ。このモンスターを何とかしなければ遊星に勝利は見えてこない。

だが、そうは言っても遊星の手札にはカタストルを破壊できるカードは一枚もなかった。

ならば遊星の取るべき手段は、ただの一つ。

手札に現状を打破するカードがない以上、このドローで引くしかあるまい。カタストルを打倒しうるカードを。

遊星はハンドルから離れた手をデッキへと伸ばしながら目を静かに閉じる。

カードたちとの絆を信じれば、きっとカードたちは答えてくれる。このドローはカードたちと自分の絆が試されるドローだ。その静かながらも熱き心意を胸に、遊星は目を見開いた。

蒼乃丞の《青眼の白龍騎》と並び、コーナーを加速しながら駆け抜けて行く《遊星号》の上で遊星はデッキから一枚のカードを引き抜いた。

「俺のターン！ ドローツ！！」

蒼乃丞 LP 3600 SPC 2 3
遊星 LP 4000 SPC 2 3

コーナーを抜けた《遊星号》の上で、遊星はドローしたカードへと視線を落とす。

すると、そのカードを目にした遊星は口元を僅かにほころばせた。

「ふッ……来たか」

彼は引き当てたのだ。

この状況を打開するキーカードを。

遊星がデッキから引き当てたキーカード、それは　　。

「チューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを召喚！」

ジャンク・シンクロン　　3　ATK1300　DEF500

遊星の場に召喚されたのは　3のチューナーモンスター、ジャンク・シンクロン。

しかし、チューナーモンスターを召喚したところでチューナーだけではシンクロ召喚を行うことは出来ない。シンクロ召喚を行うには、あとチューナー以外のモンスターが必要なのだ。

後一体のモンスターをどうするか……本来であればここで万事休すのだがジャンク・シンクロンに取って、その問題は問題に成りえない。

何故ならば、ジャンク・シンクロンには召喚に成功した時に発動できるモンスター効果があるのだ。

遊星は墓地に存在するスピード・ウォリアーのカードを手に取ると、ジャンク・シンクロンの効果を高らかに宣言した。

「このカードの召喚に成功した時、墓地にある　2以下のモンスター　1体を特殊召喚する事ができる！　来い、スピード・ウォリアー　ッー！」

スピード・ウォリアー 2 ATK 900 DEF 400

ジャンク・シンクロンのモンスター効果により、墓地からスピード・ウォリアーが復活する。

これこそがジャンク・シンクロンのモンスター効果。

どんな窮地に陥ろうとも仲間を呼び寄せ、絆の力で戦況を打開する……その存在のあり方故に、このカードは遊星のデッキでキーカード足りえるのだ。

そして、今ここにシンクロ召喚に必要な二つの素材、チューナーとモンスターが揃った。

「お前がシンクロ召喚で来るならば、こちらもシンクロ召喚で迎え撃つまで！ 2、スピード・ウォリアーに 3、ジャンク・シンクロンをチューニング！！」

遊星の言葉と共にジャンク・シンクロンは腹部に備え付けられたリコイルスターターを大きく引く。すると、ジャンク・シンクロンは自身を二つの星へと姿を変えた。

ジャンク・シンクロンが身を変えた三つの星が三輪の環を描き、その環の中をスピード・ウォリアーが潜り抜けて行く。

「集いし星が、新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！ シンクロ召喚！！」

遊星の言葉に導かれ、スピード・ウォリアーが身体を二つの星へと変じさせていく。

五つになった星々は空に光の道を描くと、その道からくず鉄の戦士が姿を現した。

「出でよ、ジャンク・ウォリアー!!」

ジャンク・ウォリアー 5 ATK 2300 DEF 1300

首に巻いた白いマフラーを風にはためかせたくず鉄の戦士 ジ
ヤンク・ウォリアーが遊星の場へと舞い降りる。

このジャンク・ウォリアーこそ遊星のエースモンスターにして、
唯一遊星のモンスターの中で蒼乃丞のカタストルを戦闘破壊でき得
るモンスターなのだ。

空を駆けながら《遊星号》に併走するジャンク・ウォリアーに遊
星は攻撃の命を下す。

「戦闘ッ！ ジャンク・ウォリアーでA・O・J カタストルを攻
撃ッ!!」

遊星の下した攻撃の命にジャンク・ウォリアーは二つの赤い瞳を
輝かすと巨大な右腕の拳を握り、背中に備え付けられたブースター
を点火させた。

白いマフラーをはためかせたジャンク・ウォリアーが、蒼乃丞の
場のカタストルに迫る。

しかし、蒼乃丞にはジャンク・ウォリアーの攻撃になす術はない。

「ちいッ！ ジャンク・ウォリアーは閻属性モンスター。A・O・
J カタストルの効果は発動しない……………」

苦虫を噛み潰したように呟いた蒼乃丞の言葉の通り、ジャンク・
ウォリアーはカタストルの天敵である閻属性モンスターなのだ。

高攻撃力の闇属性モンスターを前にしては、流石のカタストルも無敵ではられない。

なす術がないカタストルに肉薄したジャンク・ウォリアーは、その巨大な右腕を大きく振り絞った。

「叩き込め、ジャンク・ウォリアー！ スクラップ・フィストオオツ！！！」

遊星の言葉と共にカタストルに叩き込まれたジャンク・ウォリアーの拳はカタストルへと突き刺さる。

「ツウ！」

蒼乃丞 L P 3 6 0 0 3 5 0 0 S P C 3

ジャンク・ウォリアーの攻撃はカタストルを貫通し、蒼乃丞にまでダメージを及ぼしのだった。

Turn - 08 遊星の切り札 飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！

「叩き込め、ジャンク・ウォリアー！」

騎乗決闘のコースに遊星の高らかな攻撃宣言が木霊する。

その言葉に導かれるようにジャンク・ウォリアーはその巨大な右腕を蒼乃丞の場のカタストルに向けて大きく振りかぶった。

「スクラップ・フィストオオツ！！」

そして遊星の号令と共にジャンク・ウォリアーの攻撃がカタストルに突き刺さると、カタストルは爆炎をあげて粉々に砕け散る。

戦闘では無敵を誇るカタストルでも閻属性モンスターであるジャンク・ウォリアーとの戦闘では無敵ではいられなかったのだ。

「ツウ！」

蒼乃丞 LP 3600 3500 SPC 3

エースモンスターの一体であるカタストルが破壊された事で形勢が大きく遊星へと傾いたが、この程度の状況など蒼乃丞にとっては予想の範囲内ではない。

そして当然、この事態に陥った時のための手段も既に打っていた。

「だが、リバーズカード・オープンツ！ ロスト・スター・ディセント！！！」

ロスト・スター・ディセント。

それは自分の墓地に存在するシンクロモンスター一体を表側守備表示で特殊召喚する罫カード……これだけ聞けば強力な効果に思えるが、当然のようにデメリットも存在する。

そのデメリットとは、この効果で特殊召喚されたモンスターのモンスター効果が無効化されることが一つ。

次に特殊召喚されたモンスターの が一つ下がり、守備力も0に下がるのが一つ。

そして、最後に表示形式を変更できない事である。

つまるところ表示形式の変更が出来ず特殊効果が使えない守備力0のモンスターになると言う事なのだが、そんなデメリットを抜きにしても次の自分のターンにモンスターを残せるメリットは大きい。そう蒼乃丞は判断したのだ。

「このカードの効果により墓地にいるA・O・J カタストルの 守備力を下げ特殊召喚！」

A・O・J	カタストル	5	4	ATK 2200	DEF 1
2000					

ロスト・スター・ディセントの効果により墓地から守備表示で復活したカタストルであったが、カタストルを無敵足らしめていたモンスター効果が無効にされたからであろうか……その身からは最早、先ほどまで感じていた圧倒的な威圧感を感じられなかった。

「場にモンスターを残したか………」

だが、遊星は警戒を緩める事はない。

例え強力な効果が無効になるうとも、それでモンスターの使い道がなくなるわけではないのだ。アドバンス召喚のためのリリースや、チューナーを召喚してからのシンクロ召喚等々、いくらでも用途は存在するのである。

蒼乃丞が次に打ってくるであろう手を予想した遊星は手札から一枚のカードを手に取る。

遊星の場には攻撃を無効に出来るくず鉄のかかしがあるとは言え、蒼乃丞は既にその弱点を見抜かれている。

ここはさらに防御を固めておくべきだと遊星は判断した。

「俺は二枚カードを伏せてターンを終了する」

そんな遊星のターンエンドを宣言を耳にしながら、蒼乃丞は思案を廻らせる。

今遊星が伏せたカードが何であれ、今の蒼乃丞にとって一番厄介なのはくず鉄のかかしである事には変わりはない。このカードのお陰で少なくとも一回の攻撃は無駄に終わるからだ。

それに問題はまだある。

くず鉄のかかし以前に遊星の場には攻撃力2300のジャンク・ウォリアーが立ちはだかつたいるのだ。

ロスト・スター・ディセントで場にカタストルを残せたものの、通常のカタストルでもジャンク・ウォリアーには敵わないのは先の戦闘の結果を見ての通り。

幾多のデメリット効果で縛られたカタストルでは荷が勝ちすぎる相手である。

この現状を打破し遊星にダメージを与えるにはくず鉄のかかしを破壊するか、攻撃力が2300を超えるモンスターを二体以上用意する必要がある。

だが今の蒼乃丞の手札にはセットされたカードを破壊できるカードも、高攻撃力のモンスターを複数体展開できるカードもなかった。ならば蒼乃丞のすることはただの一つ。

次のドロワーで引くのだ。この状況を一手で逆転することの出来るカードを。

迷いも疑いもない澄んだ心をそのままに、蒼乃丞はデッキの一番上のカードへと手をかけた。

「ボクのターンだ！ ドローッ！！」

蒼乃丞 LP 3500 SPC 3 4
遊星 LP 4000 SPC 3 4

「ふうん」

引いたカードを目にした蒼乃丞は満足気に鼻を鳴らす。彼女の望むべきカードを彼女は引き当てたのだ。

蒼乃丞は引き当てたそのカードを、そのまま決闘盤へと振り下ろした。

「チューナーモンスター、朱光の宣告者を召喚！」

蒼乃丞の場に羽の生えた朱色の宝玉が姿を現す。

これこそが蒼乃丞の逆転への一手。蒼乃丞自身が持つ、もう一体のエースモンスター召喚のために必要なシンクロ素材であった。

全てはこの時のために……そのために醜態を晒させてまでカタストルを場に残したのだ。

二体のモンスターを場に従えた蒼乃丞は腕を高らかに振り上げた。

「 5から4に下がったA・O・J カタストルに 2、朱光の宣告者をチューニング! 」

蒼乃丞は口元に笑みを浮かべながら星々を束ねる祝詞を紡ぎ出す。それは力強い詩。

遙か先にある絶対勝利を掴み取らんとする求道者の詩。

「勝利導く神の槍、氷結を纏いて世界の全てを蒼へと閉ざす! 光さす道となれ! シンク口召喚! ! 」

蒼乃丞の詩に導かれた六つの星々が空を飛び交い、一列の光をなした。

その光よりいずるものは、投擲すれば必ず勝利をもたらすと云われた神の槍……。《貫くもの》の意を持つ神造兵器と同じ名を冠した氷雪の龍。

その名は 。

「貫け、氷結界の龍 ブリューナク! ! 」

氷結界の龍	ブリューナク	6	ATK2300	DEF1400
-------	--------	---	---------	---------

光の道が弾け、そこから六花の如き頭部を持つ青き氷雪の龍
ブリューナクが周囲に雪光を煌かせながら蒼乃丞の場へと舞い降りた。

青眼の白龍にも負けない幻想的な氷雪の龍の登場にスタジアム中は息を呑む。

このブリューナクこそカタストルに続く蒼乃丞自身がデッキの
ースモンスター。

蒼乃丞に勝利をもたらす切札だ。

しかし、ブリューナクの攻撃力はジャンク・ウォリアーと同じ2
300。これでは戦闘を行っても良くて相打ちだ。それに遊星の場
には攻撃を一回無効に出来るくず鉄のかかしがある。

誰の目にも、遊星の場を突破する事は困難に思えた。

こんなモンスターが現状を打開できる切札なりえるのか　そん
な疑問は高らかに発せられた蒼乃丞の言葉と共に霧散する。

「氷結界の龍　ブリューナクのモンスター効果発動ッ！　任意の枚
数手札を捨てることで捨てた枚数分、場にあるカードを持ち主の手
札に戻す！！」
「何ッ！？」

蒼乃丞の発したブリューナクのモンスター効果に遊星ばかりかス
タジアム中が驚愕した。

純粹な破壊でもモンスターの連続攻撃でもなく、まさか手札に戻
す方法で事態の打開を狙ってくるとは誰が予想できたであろうか。

ざわめく観客達など意に介さず、蒼乃丞は残った二枚の手札を手
に取るとブリューナクのモンスター効果を起動した。

「ボクは残りの手札を全て捨てジャンク・ウォリアーとセットされ
たくず鉄のかかしを貴様の手札に戻すッ！！　吹き荒べ、極低温の
嵐！　アブソリュートゼロ・ドライブッ！！」

蒼乃丞の宣言と共にブリューナクが風雪の嵐を巻き起こし、遊星
のジャンク・ウォリアーとくず鉄のかかしを吹き飛ばさんと猛威を
振るう。

風雪に晒されたくず鉄のかかしが呆気なく風にさらわれる中、ジ

ヤンク・ウォリアーは風に飛ばされまいと必死に身構える。

しかしブリューナクの発した風雪の嵐はそんな努力をあざ笑うかのように、いとも簡単にジャンク・ウォリアーを空高く吹き飛ばしたのだ。

「ジャンク・ウォリアー!?!」

遊星の叫びがコースに響く中くず鉄のかかしは手札へ、ジャンク・ウォリアーはエクストラデッキへと戻されてしまった。

これで遊星を護るモンスターは消えた。

攻撃を無効にする厄介なくず鉄のかかしも、今は遊星の手札の中だ。

この好機に蒼乃丞は一気に攻勢をかけるべく場に伏せていたカードを発動させた。

「さらにリバーカード、オープンッ! 正統なる血統! この効果で墓地に存在する通常モンスター一体を攻撃表示で特殊召喚する

!?!」

「なッ!? まさか、さっきのブリューナクの効果はこのためでもあったのか!?!」

発動された正統なる血統に、遊星は驚きの声を上げる。

何故ならば先のブリューナクの効果で蒼乃丞が捨てたカードの中に通常モンスターが存在していたからだ。

そのモンスターとは……もはや説明は不要だろう。

蒼乃丞のデッキが真のエースモンスターにして彼女の魂のカード。それがとうとう姿を現す。

「見るがいい! そして慄くがいいッ!! 降臨せよ、アズラエル!?!」

青眼の白龍

8

ATK3000

DEF2500

蒼乃丞の高らかな声と共に、神々しい輝きを放ちながら青眼の白龍が彼女の場へと降臨した。

『ここで蒼乃丞総帥の青眼の白龍が降臨ッ！！しかし、何と恐ろしいコンボだろうか！？プリューナクの効果で場のカードを制圧すると共に、それが青眼の白龍の召喚の布石になるうとは……全く無駄のない完璧なコンボだぁぁッ！！』

MCの語るとおり、非常に攻撃的でありながらも一分の隙もない完璧な戦術。

これこそが蒼乃丞の決闘。

小さな力を絆で束ねて敵を倒すのが遊星の決闘ならば、蒼乃丞の決闘は大きな力を完璧に制御して全てをなぎ払う……柔と剛、まさしく対極に位置する決闘スタイルだった。

その蒼乃丞が振るう大きな力が遊星に向かって牙をむく。

「征くぞッ！！ 氷結界の龍 プリューナクでプレイヤーに直接攻撃ッ！ 貫け、神槍！ 轟く五星ッ！！」

蒼乃丞の号令と共にプリューナクから放たれた長槍の如き一条の氷雪の吐息が護るもののない遊星に襲い掛かった。

「ぐッ！！」

ブリューナクの直接攻撃により、遊星のライフが大幅に削られる。その衝撃により《遊星号》は大きく減速すると、スピードカウンターが二つ減少した。

スピード・ワールド発動下ではダメージを受けた時、1000ポイントごとにスピードカウンターが一つ減少するのだ。

今まで並走を続けてきた《遊星号》と《青眼の白龍騎》であったが、ここで《青眼の白龍騎》が先頭に躍り出た。

その差は三車身。

スピードカウンターの差にして二つではあるが、その差は決して小さなものではない。

魔法カードの発動をスピードカウンターに依存する騎乗決闘では、強力なスピードスペルほど要求されるスピードカウンターの数が多くなるのだ。

これは遊星にとって相当なディスアドバンテージとなる。

しかし、今はそんな心配をしている暇ではない。何故ならば蒼乃丞には青眼の白龍の攻撃が残っているのだから。

ブリューナクの攻撃により後退した遊星を振り返りながら蒼乃丞は高らかに言い放った。

「これで決まりだッ！！ アズラエルの攻撃！ 滅びの爆裂疾風弾ッ！！」

蒼乃丞の宣言と共に青眼の白龍から放たれた白き破壊の奔流が遊星へと迫る。

この攻撃が決まればライフは0になり、遊星は敗北だ。

だが、遊星もそう易々と負ける訳には行かない。ここで遊星は先のターンに仕掛けておいた伏せカードを発動させた。

「ッ、罨カード発動！ スピリット・フォース！！」

青眼の白龍の攻撃は遊星の直前で光の壁に阻まれ四散する。

「プレイヤーが受ける戦闘ダメージを一度だけ0にする！ さらに墓地に存在する守備力1500以下の戦士族チューナーモンスター一体を手札に加えるッ！！」

しかもスピリット・フォースの効果はダメージを防ぐだけではなかった。

その効果により墓地から守備力1500以下の戦士族チューナーつまり、ジャンク・シンクロンのカードが遊星の手札に加わったのである。

スピリット・フォースは遊星の危機を救ったばかりか今一度、逆転の一手を彼に与えたのだ。

「ちいッ、凌いだか。……だが、まあいい。アズラエルとブリューナクを擁するボクの優位は揺るがないのだからな！ ボクはこのままターンエンドだ」

攻撃を防がれ、かつ墓地よりジャンク・シンクロンを手札に加えた遊星に対して忌々しげに舌打ちした蒼乃丞だったが、それでも圧倒的優位には変わりはない事実之余裕を持ってターンエンドを宣言したのであった。

そして、遊星のターンが回ってくる。

「俺のターン！」

蒼乃丞LP3500 SPC4 5
遊星LP1700 SPC2 3

蒼乃丞の後を追いかける遊星は引いたカードを目にすると、現在の自分のスピードカウンターの数を確認した。

現在のスピードカウンターの数は三つ。

先の直接攻撃でスピードカウンターを減らされたが、それでも引いたカードを使うには十分な数が残っていた。

遊星は引き当てたカードを 騎乗決闘用の魔法カード、スピードスペルを発動させる。

「Sp-エンジェル・バトンを発動ッ！ このカードはスピードカウンターが二つ以上ある時デッキからカード二枚をドロ―し、その後手札から一枚カードを墓地に送る！！」

手札増強のスピードスペルにより新たなカードを手札に加えた遊星は静かに瞼を閉じた。

すると遊星の脳裏には手札に揃ったカードと蒼乃丞の場のモンスター、そして場に伏せてある最後のカードが光で結ばれると一筋の道となる。

ここに逆転の道筋は整った その心意と共に、目を見開いた遊星は手札からジャンク・シンクロンのカードを引き抜いた。

「俺はスピリット・フォースの効果で手札に戻したジャンク・シンクロンを召喚し、さらにジャンク・シンクロンの効果で墓地に眠るスピード・ウォリアーを再び特殊召喚！」

ジャンク・シンクロン 3 ATK1300 DEF500

スピード・ウォリアー 2 ATK900 DEF400

再度召喚されたジャンク・シンクロンと三度召喚されたスピード・ウォリアーが《遊星号》に並び騎乗決闘のコースを駆け抜ける。

だが、遊星の手はコレで終わりではない。

手札から新たなカードを手に取った遊星は、そのカードを決闘盤へと振り下ろした。

「そしてスピード・ウォリアーをリリースし、ターゲット・ウォリアーを特殊召喚!!」

ターゲット・ウォリアー 5 ATK1200 DEF2000

光がスピード・ウォリアーを包み込み、そこから二つの砲塔を持った砦の戦士が現れる。

だが、その攻撃力は1200。

5の上級モンスターとしては余りにも頼りない数値だ。

脆弱に過ぎるかと思われたターゲット・ウォリアーだったがしかし、このモンスターも当然のように低攻撃力をカバーする特殊効果を持っているのである。

遊星はリリースしたスピード・ウォリアーを掲げると、ターゲット・ウォリアーの効果を発動させた。

「ターゲット・ウォリアーは自分の場に存在する戦士族モンスター一体をリリースする事で特殊召喚できるモンスター。さらにこの方法で召喚されたとき、リリースしたモンスターの元々の攻撃力がターゲット・ウォリアーに加算される!」

ターゲット・ウォリアー 5 ATK 1200 2100 D
EF2000

遊星の墓地に存在するスピード・ウォリアーが、その力をターゲット・ウォリアーへと与えていく。

スピード・ウォリアーの元々の攻撃力は900。

その数値がターゲット・ウォリアーの攻撃力に加わり、ターゲット・ウォリアーの攻撃力は2100へと上昇したのであった。

しかし。

「ふうん。それでも攻撃力は2100ではないか。それではアズラエルはおろかブリューナクにすら届きはしない！」

蒼乃丞の指摘どおり攻撃力を上げたとは言え、その数値は2100。

彼女の場にいる攻撃力3000の青眼の白龍や、攻撃力2300のブリューナクを超えるまでには至らない。

だが蒼乃丞は遊星の打った手に、ふと違和感を覚えた。

何故ならば遊星のエクストラデッキにはブリューナクの効果によって戻されたジャンク・ウォリアーがあつたからだ。

戦士族をリリースして、その攻撃力を得る事の出来るターゲット・ウォリアーが手札にいたのならばジャンク・ウォリアーをシンクロ召喚したあと、ジャンク・ウォリアーをリリースしてターゲット・ウォリアーを特殊召喚すれば、その攻撃力は3500までに跳ね上がっていたはずである。

ならば、遊星は反撃の機会をみすみす逃した事になる。

蒼乃丞には、それがどうにも腑に落ちなかつたのだ。

遊星はここまで勝ち上がり、他ならぬ蒼乃丞に相對した決闘者だ。プレイングミスの可能性はまずない。

だとするならば、別の狙いがあると見るのが妥当だ。

攻撃力3500のモンスターを捨ててでも取るべき狙いが……

…。

「勘違いするな。ターレット・ウォリアーの特殊召喚はただの布石……俺の狙いは、その先にある!!」

「何……ッ、まさか!？」

その言葉に蒼乃丞は遊星の狙いに気がつく。

ターレット・ウォリアーばかりに気を取られていて、蒼乃丞はすっかり失念していたのだ。

遊星の場にジャンク・シンクロンと言うチューナーモンスターがいることを。

「そう!! そのまさかだ! 5、ターレット・ウォリアーに

3、ジャンク・シンクロンをチューニング!!」

「やはりッ! 8のシンクロ召喚!!」

蒼乃丞が声を荒らげる中、リコイルスターターを引いたジャンク・シンクロンが四つの環をなし、ターレット・ウォリアーを五つの星へと変えると八つの星々が風を切って宙を舞った。

その星々を束ねるのは遊星の言葉 思いを繋げる絆の詩だ。

「集いし願いが、新たに輝く星となる。光さす道となれ! シンクロ召喚!!」

遊星の詩に導かれた八つの星々が、その願いである絆で結ばれあう様に光の道造った。

光の道の中で遊星の思いを受け取った星々は新たな姿と力を得て、今ここにその威容を現す。

遊星は光の道からいずる、そのモンスターの名を 己がデッキの真のエースの名を高らかに呼んだ。

「飛翔せよ、スターダスト・ドラゴンッ!!」

スターダスト・ドラゴン 8 ATK 2500 DEF 2000

遊星の声に導かれ、白き星屑の竜が煌く光を零しながら遊星の場に舞い降りた。

その余りにも美しい姿にスタジアムが言葉を忘れたかのように静かになる中、思い出したかのようなMCの声だけが木霊する。

『こ、この竜は始めて見るぞおおッ！ 何と言う気高い姿だろうか！ 伝説のモンスター、青眼の白龍を前にしても全く引けを取らない美しさああッ!!』

誰もが遊星のスターダスト・ドラゴンに釘付けになる中、蒼乃丞は懸念事項が青眼の白龍の脅威にならなかつた事に安堵すると同時にがっかりしていた。

「スターダスト 星屑の竜か……。しかし最上級モンスターをシンクロ召喚しようとも肝心の攻撃力が2500ではな」

そう。スターダスト・ドラゴンは 8の最上級モンスターにもかかわらず、攻撃力が2500しかなかったのである。

これならばジャンク・ウォリアーをリリースして攻撃力3500

のターゲット・ウォリアーを召喚していた方が遥かに有利になっていたはずだ。

では何故、遊星はスターダスト・ドラゴンを召喚したのか。

その答えは蒼乃丞の場のブリューナクと、遊星が伏せていたリバーカードにあった。

遊星は蒼乃丞の場のブリューナクを指差すと、場に伏せてあったカードを発動させる。

「それでもブリューナクの攻撃力2300は上回っている！ それに俺の狙いは青眼の白龍じゃない！ シンクロモンスターであるブリューナクだッ！！ 罨カード、発動！ シンクロ・デストラクターッ！！」

「そのカードは！？」

遊星が発動したシンクロ・デストラクターに蒼乃丞は驚愕の声を上げる。

何故、遊星が攻撃力3500のモンスターを捨ててまで攻撃力2500のスターダスト・ドラゴンを選んだのか……その真の狙いが今になってようやくわかった。

だが、気がついたところでもう遅い。

遊星はスターダスト・ドラゴンに攻撃の命を下すべく、既に腕を振り上げていたのだ。

「スターダスト・ドラゴンで氷結界の龍　ブリューナクを攻撃ッ！！」

主より下された命令にスターダスト・ドラゴンはブリューナクに狙いを定めると、その口内に白き光を輝かせる。

いや、それは光ではない。幾千幾万に集まった星屑の粒子の煌きだ。

本来ならばバラバラとなって零れ落ちるはずの星屑の粒子たちをスターダスト・ドラゴンは風の手で一つに纏め上げているのである。これ以上束ねられないほどに凝縮された星屑たちの光がスターダスト・ドラゴンの口内で輝く中、遊星は振り上げていた腕を振り下ろしスターダスト・ドラゴンにその力を解放させた。

「響け、シューティング・ソニック！」

遊星の言葉と共にスターダスト・ドラゴンの口内から星屑たちが風の力によって放たれる。

本来ならば塵芥に過ぎない小さな粒子たちが集う事によって、強大な敵を倒す力となる。それは、絆を繋いで力となす遊星のあり方そのモノであった。

「つううッ！」

幾万と集められた星屑たちの流れがブリューナクに突き刺さり、爆音を轟かせると蒼乃丞駆る《青眼の白龍騎》を揺らす。

蒼乃丞 LP 3500 3300 SPC 5

僅かな超過ダメージが蒼乃丞のライフを削るだけで終わったかに見えた戦闘だったが、まだ遊星の戦闘フェイズが終わってはいない事を蒼乃丞は理解していた。

何故ならば遊星が戦闘フェイズ開始時に発動していたシンクロ・デストラクターの効果がブリューナクの破壊を引き金にして発動する代物だったからである。

「この時、シンクロ・デストラクターの効果が発動！ 自分フィールドのシンクロモンスターが相手シンクロモンスターを戦闘で破壊した時、その攻撃力分のダメージを相手に与える！！」

遊星の宣言と共に表側で表示されたシンクロ・デストラクターのカードが光り輝くと、その光が一条の閃光になり蒼乃丞を貫いた。

「ぬううううッ！」

蒼乃丞 LP 3300 1000 SPC 5 3

2300のダメージを受けて大幅にライフポイントを減らした蒼乃丞の《青眼の白龍騎》が速度と共にスピードカウンターを落とす。蒼乃丞が大ダメージにふらつく《青眼の白龍騎》の態勢を元に戻す間に遊星の《遊星号》がピタリと真横に並んだ。

これこそが遊星の真の狙い。

シンクロ・デストラクターはシンクロモンスター同士の戦闘でなければ効果が発動しない特殊な罠カードだ。

例えば攻撃力を3500までに高めたとしても、ターレット・ウォリアーのモンスターカテゴリは効果モンスター……シンクロ・デストラクターの効果適用外なのである。

だからこそ遊星はスターダスト・ドラゴンを選択した。

遊星は青眼の白龍の破壊よりも蒼乃丞に最大限与えうるダメージを狙っていたのである。

だが、蒼乃丞も然る者。

ただで攻撃を受けてやるほど情弱ではない。

「だが、この時ボクの場の罠カード、矜持の宝札が発動ッ！ この

戦闘フェイズに受けたダメージ1000ポイントにつき一枚、デッキからカードをドロウできる！！　ボクが受けたダメージの合計は2500ポイント……よって二枚のカードをドローツー！！」

受けたダメージが手札となる罫カード、矜持の宝札により蒼乃丞は新たなカードを手札に加える。その矜持の宝札のカードは、己が身を削られても怯まず臆さず矜持を胸に前へと突き進む蒼乃の気高き姿を映す鏡であるかのようにだった。

そんな蒼乃丞の気高き心意に共鳴するように、青眼の白龍は高らかに咆哮を上げる。

高らかな咆哮をあげる青眼の白龍に、スターダスト・ドラゴンも負けじと咆哮をあげた。

白き龍と星屑の竜……二匹の上げる咆哮が不思議な二重奏となりスタジアムに響き渡ると、不意に遊星の右腕が疼いた。

それはこれまで幾度となく感じた、覚えのある感覚。

遊星は視線を己が右腕へと移すと、やはりそこには《赤き竜》の痣が眩しいまでの輝きを放っていた。

「ッ!?　痣が!」

まるで青眼の白龍とスターダスト・ドラゴンの対峙に共鳴するかのように輝く遊星の痣に、蒼乃丞はやはりと言った表情を見せる。

「やはり貴様も十六夜アキ同様、シグナーだったか」

「それを知るお前こそ、ゴドウィンの差し金なのか!」

蒼乃丞の言葉に対して遊星は問い詰めるようにして言葉を投げかけた。

遊星が蒼乃丞に疑惑を持つのも無理もなからう。彼女は治安維持局と繋がりがあればかりか、今大会の主催者でもあるのだ。

そう投げかけられた疑惑の声に蒼乃丞は《青眼の白龍騎》の上で愚かしげな者を見るように、一つ鼻を鳴らした。

「ふうん、馬鹿も休み休み言え。ボクがレクスの差し金だと？ 有り得ん事だ。確かにヤツの口車に乗せられはしたが、この大会はボクの意志で参加した！」

確かに蒼乃丞の大会参加がレクスの思惑通り進んだのは否定しない。

しかし、参加する事自体は蒼乃丞本人が自身の意志で決めた事だ。それにだ。

「《赤き竜》が存在しようがしなかるうが、そんな事このボクには些かも関係のないことだ！ ボクにはそれ以上に歩まねばならないロードがあるのだからなッ！！」

蒼乃丞にとっては《赤き竜》の存在が真実だろうが虚偽だろうが、もはやそんな事は関係ない。今彼女の目の前にあるのは不動遊星と言う一人の決闘者と、彼を倒した先にある勝利、そして果てしなく続くロードのみ。

彼女が語る《赤き竜》やレクスの思惑とは別に負けられない理由それは当然、遊星にもあった。

自分を強制的にこの大会に参加させるために人質に取られた友の安全のために。

かつて育んだ友情を切り捨ててまで玉座に上り詰めた友の真意を知るために。

「俺だつて負ける訳には行かない！ 今の友のために……かつての絆のために！！」

「ならば言葉は不要！ 決闘者ならば決闘を持って己が生き様を語

れッ!!」

確かに蒼乃丞の言うとおりだ。

互いに譲れないものがある以上、言葉は無力……ならばカードを持って語る他ない。

遊星は先のターンにブリューナクの効果で戻されたくず鉄のかかしを手に取ると、それを決闘盤へと挿し込んだ。

「俺はカード一枚を場に伏せてターン終了だ!」

「ボクのターンッ!!」

蒼乃丞LP1000 SPC3 4

遊星LP1700 SPC3 4

デッキから引き抜いた新たなカードを手札に加えた蒼乃丞は、その内容に笑みを浮かべると手札の中から一枚のカードを手を取った。

「スピードッグ・ファイト発動ッ!」

「ここでスピードスペルを使ってきたか!」

この騎乗決闘で初めて蒼乃丞が使ってきたスピードスペルに遊星は身構える。

蒼乃丞が発動したスピードッグ・ファイト、その効果とは。

「スピードカウンターの数が四つ以上ある時、発動! 自分の場にあるモンスター一体の攻撃力が対象とする相手モンスターの攻撃力を上回っている場合、そのモンスターを破壊するッ!!」

蒼乃丞の場には攻撃力3000の青眼の白龍。

この攻撃力を前にしては、ほとんどのモンスターが破壊可能圏内だ。

自分の場のモンスターが強力であれば強力であるほど効果が増す…… S p - ドッグ・ファイト、実に恐ろしい効果を秘めたスピードスペルである。

蒼乃丞は遊星の場のモンスターを指定するため悠然と腕を振り上げた。

当然、蒼乃丞の狙いは攻撃力2500のスターダスト・ドラゴン。しかし、スターダスト・ドラゴンは蒼乃丞も知らない特殊なモンスター効果を備えていた。

遊星は高らかに腕を振り上げると、その効果を発動させる。

「させない！ スターダスト・ドラゴンのモンスター効果発動ツ！
！ カードを破壊する効果が発動した時、スターダストをリリースする事でそのカードの発動を無効にし、破壊する！！」
「なんだとツ！？」

遊星の口から放たれた衝撃の内容に蒼乃丞は驚きの声を上げる。
スターダスト・ドラゴンの効果はそれほどに強力なものだった。
考えてみればいい。スターダスト・ドラゴンが場にいる限りこちらが発動するカードを破壊する効果を持つカードは、その効果を封じられるのだ。

攻撃力が低いため侮ってはいしたが、その身に持つ効果は 8 モンスターを誇るに相応しい……いや、数あるモンスターの中でも頭一つ突出した超強力な効果だった。

「ヴィクテム・サンクチュアリツ！！」

高らかに言い放たれた遊星の言葉と共にスターダスト・ドラゴンはその身を幾千幾万の星屑へと変える。

その星屑が蒼乃丞の場のSp・ドッグ・ファイトを取り囲むと、今まさに発動されようとしていた破壊の力を包み込んだ。この効果によりSp・ドッグ・ファイトは効果を発動することなく砕け散り、スターダスト・ドラゴンと共に星屑と消えたのであった。

しかし、発動したカードを無効にされたと言うのに蒼乃丞の瞳には好機を捕まえた輝きが煌く。その蒼乃丞の視線の先は手札の中にある一枚のカードに向けられていた。

蒼乃丞はそのカードを手に取ると遊星に向けて高らかに言い放つ。

「この程度でボクの攻撃を凌げたと思うなッ！！ さらに手札からスピードスペル発動！ Sp・ブリッツ・ストライクッ！！」

「何ッ！ スピードスペルの連続使用だト！？」

新たなスピードスペルの発動に遊星は驚愕すると同時に心の中で戦慄した。

そして遊星は理解する 蒼乃丞はくず鉄のかかし同様、たった一回の効果発動でスターダスト・ドラゴンの効果の弱点を見抜いたのだと。

しかし遊星にそれがわかったところで最早どうすることもできない。既にスターダスト・ドラゴンは遊星の場にはいないのだから。

「このカードはスピードカウンターが三つ以上ある時に発動できるスピードスペル！ その効果は自分の場の一番攻撃力の高いモンスターへの攻撃をこのターン禁止にする事で、相手の場にセットされたカード一枚を破壊するッ！！」

蒼乃丞はカードの効果を高らかに宣言すると、破壊するカードを指し示すべく腕を振り上げた。

スターダスト・ドラゴン以外に蒼乃丞が最優先で狙うのは当然。

「ボクが破壊するカードは先のターンにセットし直されたカード……
…くず鉄のかかし!!」
「ッ……やはりかッ!」

先のターンに伏せたカードの内容を完璧に読み切っていた蒼乃丞に遊星は顔をしかめる。

蒼乃丞が発動したS p -ブリッツ・ストライクはその名の通り電撃的な衝撃を伴い、遊星の場にセットされたくず鉄のかかしを完膚なきまでに破壊したのであった。

しかもS p -ブリッツ・ストライクの効果はセットされたカードを破壊するだけには止まらない。

「さらにS p -ブリッツ・ストライクはカード一枚をドローできる効果もある。ボクは一枚のカードをドローさせてもらうぞ」

S p -ブリッツ・ストライクのもう一つの効果でデッキからカード一枚をドローした蒼乃丞は、そこに揃った二枚のカードに満足気に鼻を鳴らした。

「ふうん」

くず鉄のかかしを破壊したためにS p -ブリッツ・ストライクの制約として青眼の白龍の攻撃はこのターンは封じられたが、手札に揃ったカードにより蒼乃丞に勝利が見えたのだ。

引いたカードをそのままに、笑みを浮かべた蒼乃丞は自身を勝利へ導くそのカードを場へと召喚する。

「手札からマンジユ・ゴツドを召喚ッ！」

マンジユ・ゴツド 4 ATK1400 DEF1000

蒼乃丞が召喚したのは万の手を持つ仁王の姿をしたモンスター。
このマンジユ・ゴツドは遊星のジャンク・シンクロン同様に召喚されたとき起動する効果を持つ効果モンスターだ。
腕を振りかぶった蒼乃丞は、その効果を高らかに宣言した。

「マンジユ・ゴツドの召喚に成功した時、デッキから儀式モンスターカードまたは儀式魔法カードを一枚選択して手札に加える事はできる」

マンジユ・ゴツドの効果により、蒼乃丞はデッキから一枚のカードを選択する。

すると、オートメーション化された決闘盤の機能によりデッキからそのカードが検出された。

デッキから押し出されるように出てきたカードを手にとった蒼乃丞はそのカードを手札に加えることなく、そのまま決闘盤へと挿し込んだ。

「そして儀式魔法、s p ・スピード・セレモニーを発動ッ！」

怒涛の三連続スピードスペル発動にスタジアムは騒然となる。

そんな観客たちを尻目に、蒼乃丞は手札に残った最後のカードを手にとると発動させたスピードスペルの効果を高らかに宣言した。

「スピードカウンターの数が手札に存在する儀式モンスターの以

上ある時、このカードは儀式モンスターの儀式召喚に必要な儀式魔法の代わりとなるッ！！ボクのスピードカウンターは四つ！よって場の4モンスター、マンジュ・ゴッドをリリースして手札の4儀式モンスター、白竜の聖騎士を儀式召喚するッ！！」

蒼乃丞の場のマンジュ・ゴッドが光と消え、その光の中から白き竜に跨った騎士が蒼乃丞の場へと召喚される。

白竜の聖騎士 4 ATK1900 DEF1200

スピードスペルにより儀式モンスターを儀式召喚した白竜の聖騎士の攻撃力は1900。

対して遊星の残りライフは1700。場には彼を守るべきスターダスト・ドラゴンは自身の効果の代償として場を離れ、攻撃を無効にするはずだったくず鉄のかかしも最早ない。

この攻撃を通せば蒼乃丞の勝利だ。

蒼乃丞は白竜の聖騎士に攻撃の命を下すべく腕を天へと振り上げた。

「白竜の聖騎士でプレイヤーを直接攻撃ッ！　ダークアウト・セイクリッド・スピアアッ！！」

攻撃の号令を受けた白竜の聖騎士が腰から剣を引き抜き、その切っ先を遊星へと向ける。

最早、遊星の命運もここまでか　スタジアムに座る観客達の誰もが蒼乃丞の攻撃にそう思った。

だが、遊星とて場の護りをくず鉄のかかしのみに頼るほど浅はかではない。

遊星は残った最後の伏せカードに手をかけると、それを発動させた。

「畏カード、ガード・ブロック！ このカードの効果で一度だけ俺が受ける戦闘ダメージを0にし、デッキからカード一枚をドロースする！！」

発動させたガード・ブロックが遊星を護る盾となり、白竜の聖騎士の攻撃を阻む。

白竜の聖騎士が放った竜巻の如き衝撃と遊星を護るガード・ブロックが僅かの間拮抗するが、白竜の聖騎士の放った攻撃がその護りを抜く事は叶わなかった。

衝撃がただの風と霧散する中、その風の中を切って駆ける遊星はガード・ブロックのもう一つの効果でデッキから新たなカードをドロースする。

必殺の攻撃を防がれたばかりか手札まで補充してみせた遊星に、蒼乃丞は忌々しげな表情を浮かべた。

「猪口才な……。だが、そんな小細工を弄したところで青眼の白龍の絶大な力の前では無力と知れツ！！」

しかし、それも僅かの間。

忌々しげな表情をいつもの不敵な笑みへと戻した蒼乃丞は、先の言葉が真実である事を証明せんと腕を高らかに振り上げた。

その腕がさす先にあるのは白竜の聖騎士。

このモンスターはただの儀式モンスターではない。その身を贅としてあるモンスターを召喚することができる効果を持っているのだ。蒼乃丞はその効果を高らかに宣言する。

「白竜の聖騎士のモンスター効果！ このカードをリリースする事で手札またはデッキから青眼の白龍一体を特殊召喚できる！！ 我が招きに応えよ、イブリースッ！！」

光の中に消えた白竜の聖騎士と蒼乃丞の声に導かれ、デッキから青眼の白龍が場へと現れた。

青眼の白龍 8 ATK 3000 DEF 2500

「青眼の白龍が……二体だとッ……………」

攻撃力3000のモンスターが二体も並ぶと、これほどの威圧感があるモノなのか コースを駆け抜けていく《遊星号》の上で遊星は二体の青眼の白龍の姿に戦慄する。

眼前に立ちはだかった大いなる危機に、遊星は強くハンドルを握り締めたのであった。

「白竜の聖騎士のモンスター効果！ このカードをリリースする事で手札またはデッキから青眼の白龍一体を特殊召喚できる！！ 我が招きに応えよ、イブリースッ！！」

光の中に消えた白竜の聖騎士と蒼乃丞の声に導かれ、デッキから青眼の白龍が場へと現れた。

青眼の白龍 8 ATK3000 DEF2500

蒼乃丞の場に降臨した青眼の白龍が雄々しき咆哮を上げ、遊星の前に立ちはだかる。

しかし、何と言う威圧感か。

最上級モンスターである青眼の白龍が二体も並ぶと、その圧倒的存在感の前に消し飛んでしまいそうになる。

「青眼の白龍が……二体だとッ……………」

「ふうん。この程度で臆したか？ あまりボクをがっかりさせるなよ」

表情が凍りつく遊星に対して悠々と鼻を鳴らした蒼乃丞は墓地から一枚のカードを徐に取り出した。

「先のターン、ブリューナクの効果で墓地に捨てた罫カード、青眼の逆襲は墓地に存在する青眼と名のつくモンスターか伝説の白石を

除外する事により手札に戻す事ができる！　ボクは墓地に存在する伝説の白石を除外し、青眼の逆襲を手札に加え場にセットするッ！
！　ターンエンドだッ！！」

墓地より回収したカードを場に伏せた蒼乃丞がターンエンドを宣言する。

蒼乃丞の場には二体の青眼の白龍と先ほど手札に加え場に伏せた畏カード……磐石の態勢だ。

対して遊星の場には身も護るべきモンスターも、迎え撃つ伏せカードもない。

進退ここに窮まったかに見えた遊星だったが、しかし遊星の望みは未だにたたれてはいなかった。何故ならば蒼乃丞のターンエンド宣言と共に、遊星の場には小さな綺羅星が幾万と集い始めたのである。

自分の場を集っていく星屑たちを背にした遊星は、その星屑たちを導くように高らかに言い放った。

「だがこの時、リリースされた場を離れていたスターダストが俺の場に舞い戻る！　飛翔せよ、スターダスト・ドラゴンッ！！」

スターダスト・ドラゴン 8 ATK 2500 DEF 2000

スターダスト・ドラゴンにはカードを破壊する効果を無効にするためリリースされたターンのエンドフェイズ時に場に舞い戻る特殊効果を持っていたのである。

翼を大きくはためかせて再び場に降り立ったスターダスト・ドラゴンであったが、それでも遊星の劣勢は覆らない。

だが、しかしだ。

「例え攻撃力3000の青眼の白龍が二体立ちはだかろうとも勝利への道は断ち切れてはいない！　まだ俺の場にはスターダストがいるのだからッ！！」

しかし、それでも何とかこのターンの危地は乗り越え次の自分のターンに望みを繋げる事ができたのだ。

遊星の放った言葉は言の葉と成り、蒼乃丞の鼓膜を打つ。すると、どうしたことだろうか。

二人はまるで全身の血液が沸騰したかのような熱い感覚を感じたのである。

未だかつて感じた事のない感覚だったがこの感覚も決闘開始前に感じた既視感同様、不思議と不快ではない。それどころか非常に心が踊るモノを両者は確かに感じていたのだ。

この遊星の言葉に蒼乃丞は口元に笑みを湛える。

その表情は良くぞ言ったと言わんばかりに歓喜の色を浮かべていた。

「そうでなければ面白くはない！　ボクの栄光のロードは、立ち塞がる敵が強ければ強いほど眩しく光り輝くッ！！　さあ、我が前に立ちはだかる決闘者よ！　このボクと青眼の白龍を打倒せんとするならばデッキからカードの剣を抜けッ！！」

「言われるまでもない！　俺のターンッ！！」

蒼乃丞の言葉に対し高らかに言い返した遊星がデッキに手を伸ばすと、そこから新たなカードを引き抜いた。

蒼乃丞 LP 1000 SPC 4 5

遊星 LP 1700 SPC 4 5

デッキから引いたカードを目にした遊星は一つ思案する。

今引き当てたカードを使えば一体ではあるが青眼の白龍を破壊し蒼乃丞にダメージを与える事ができるのだが、遊星は蒼乃丞の場に伏せられた青眼の逆襲なる罠カードの存在に攻撃するかすまいかで悩んでいたのだ。

効果もわからないカードに無策に飛び込むのは自殺行為……しかし、消極策に出てこの機を逸せば遊星の勝利は遙かに遠のく。

迂闊に動く事が出来ないのに、動かなければ勝機はない。仮に動いたとしても分の悪い賭けだ……雁字搦めに思考が絡む中、遊星はその思考を快刀乱麻を断つがごとく振り払うと決断を下した。

攻めるならば今だ。迎撃を恐れては勝つ事はできないと。それに何も無策と言うわけではない。

例えばの罠カードが攻撃を仕掛けてきたモンスターを破壊する罠だったとしても、スターダスト・ドラゴンのモンスター効果で効果の発動を無効に出来るのだから。

決意を固めた遊星は一つ頷くと、引いたカードを決闘盤へと挿し込んだ。

「手札よりSp-シルバー・コントレイル、発動ッ！ スピードカウンターが五つ以上ある時、風属性モンスターの攻撃力が1000ポイントアップする！！」

遊星のスピードカウンターの数はちょうど五つ。

Sp-シルバー・コントレイルから放たれた風の力を纏ったスターダスト・ドラゴンが、その力を急上昇させていく。
その攻撃力。。。

スターダスト・ドラゴン 8 ATK 2500 3500 D
EF2000

「攻撃力が青眼の白龍を上回っただとツ!?」

青眼の白龍をも超越する力を得たスターダスト・ドラゴンに驚愕する蒼乃丞に対して、遊星は高らかに腕を振りかぶった。

「スターダスト・ドラゴンで青眼の白龍を攻撃ッ!! シューティング・ソニック!!」

遊星の下した号令と共にスターダスト・ドラゴンが翼をはためかせる。

体の向きを青眼の白龍へと向けたスターダスト・ドラゴンは口内に幾万と煌く星屑たちを束ねると、それを眼前に立ちはだかる青眼の白龍へと放った。

「うつくうう……ッ!」

蒼乃丞 LP 1000 500 SPC 5

スターダスト・ドラゴンから放たれた星屑の奔流は青眼の白龍に突き刺さり大きな爆音と爆煙をあげる中、蒼乃丞は暴れる《青眼の白龍騎》を必至で押さえつける。

切札である青眼の白龍の一体が破壊され、その攻撃の余波がライフポイントを削られた蒼乃丞だったが、その瞳には些かも戦意は衰えていなかった。

ライフポイントは残り僅か。

ちよつとしたダメージでも命取りになるこの状況だが、この程度の修羅場は蒼乃丞とていくらでも潜り抜けてきたのだ。

この程度の事に対処できずに何が海馬蒼乃丞か　その強き意志と共に蒼乃丞は先のターンに墓地より回収し、伏せたりバーサクドを発動させる。

青眼の白龍が破壊されるという最悪の事態をも彼女は想定していたのだ。

「だが、この程度でボクの青眼の白龍は滅びはしない！！　リバーサクド、オープンッ！　罨カード、青眼の逆襲！！　青眼と名がつくモンスターが戦闘によって破壊された時、破壊された青眼のカードを手札に加え、相手プレイヤーにそのカードが持つ元々の攻撃力の半分のダメージを与えるッ！！」

「ッ！　破壊効果ではなく直接ダメージを与える効果だったか！！」

発動された青眼の逆襲の効果は墓地に送られた青眼の白龍を手札に戻す効果と、相手にダメージを与える効果……これではスターダスト・ドラゴンの効果で無効化することは出来ない。

その事実を前に遊星が齒噛みする中、青眼の逆襲が光り輝くとその効果を発動させた。

眩しく光る輝きの奥からスターダスト・ドラゴンによって破壊された青眼の白龍が大いなる翼をはためかせて蒼乃丞の手札に舞い戻る。

その羽ばたきが衝撃波となって遊星に襲い掛かった。

「ぐあああああッ！！」

まさかのカウンターに晒された遊星は、何とか《遊星号》の態勢を立て直す。

ここまで手痛い反撃を貰うのは想定外の事だったのか、苦い顔をした遊星は手札から一枚のモンスターカードを抜き取った。

「ッ……俺はゼロ・ガードナーを守備表示で召喚！」

ゼロ・ガードナー 4 ATK0 DEF0

遊星の場に召喚されたゼロ・ガードナーは守備の態勢を取ると、《遊星号》に併走する。

しかし遊星は攻撃力・守備力共に0のモンスターを召喚してどうしようというのか。

場の護りを固めたところで遊星の残りライフは200。攻撃表示のスターダスト・ドラゴンが青眼の白龍から攻撃を受ければ遊星の敗北だ。

攻撃を終えたスターダスト・ドラゴンが表示形式の変更をすることができない以上、この遊星の守備固めはまるで無意味な行動に見えた。

遊星の行動を蒼乃丞がいぶかしむ中、場の護りを固め終えた遊星は最後に残った手札に視線を落とす。

それは最大にして最後の保険。

本来ならば使いたくはないカードだが、相手が蒼乃丞と青眼の白龍であるならば使わなければいけない局面も在りうるだろう。それだけ目の前を走る決闘者は強敵なのだから。

それに遊星はこの決闘は己が全存在を賭けて行くと心に決めたの

だ。

ならば何も迷う事はない。
遊星はそのカードを手を取った。

「さらに、カード一枚を伏せてターン終了！」

スターダスト・ドラゴン	8	ATK3500	2500	D
EF2000				

最後に一枚のカードを伏せた遊星がターン終了を宣言するとSP
シルバー・コントレイルの効果が切れ、スターダスト・ドラゴン
の攻撃力が元へと戻る。

これまでの決闘はまさに一進一退。
何時どちらが勝ってもおかしくない程の激戦だ。

決闘の結果がどちらに転ぶのかは神のみぞ知ると言う事だろうか
……そんな決闘が、とうとう佳境へと突入する。

「互いにライフポイントは残り僅か……そろそろ最終章と征こうか
！ボクのターンッ！！」

蒼乃丞LP500	SPC5	6
遊星LP200	SPC4	5

高らかに言い放ちながらカードをドロ―した蒼乃丞は引き当てた
カードを目にすると、すぐさま決闘盤へ挿し込み発動させた。

「手札からスピードスペル発動ッ！！ Sp・エンジェル・バトン！ この効果でデッキからカードを二枚ドロし、その後手札から一枚カードを墓地へと送る！」

そのカードは遊星も使った手札増強系のスピードスペル。

Sp・エンジェル・バトンの効果で蒼乃丞がドロした二枚のカードの中に三枚目となる青眼の白龍が存在していた。

これで蒼乃丞の場と手札に全ての青眼の白龍が揃ったことになる。しかし、蒼乃丞の手札には青眼の白龍の召喚を支援するカードは見受けられない。

それにSp・エンジェル・バトンにはドロした後、手札からカードを一枚捨てると言うデメリット効果も付随する。

さてどうしたものかと手札を見下ろした蒼乃丞は、ふと青眼の白龍と共に引き当てたもう一枚のカードが視界に入った。

そのカードとは、宝札の天使。

宝札の天使を目にした蒼乃丞は口元に笑みを湛えたと、迷うことなくSp・エンジェル・バトンの効果でそのカードを墓地へと送った。

何故ならばSp・エンジェル・バトンの効果で墓地に送った宝札の天使は先の青眼の逆襲同様、墓地にて効果を発動することのできる特殊な効果を持つモンスターだからだ。

墓地に送られた宝札の天使と墓地に存在するシャインエンジェルのカードを手にとった蒼乃丞は、宝札の天使の効果を発動させる。

「そしてこの効果で墓地に送った宝札の天使のモンスター効果発動ッ！！ 墓地にある宝札の天使と光属性天使族モンスター一体をゲームから除外する事で、互いのプレイヤーはカード二枚をドロできるッ！！ さあ！ 貴様も二枚のカードをドロするがいいッ！！」

宝札の天使のモンスター効果は二枚ものカードのドロー補助。
しかし、その効果は発動したプレイヤーばかりか相手プレイヤー
にも及ぶ。

ともすれば己を危地に落としかねない危険な効果だが、蒼乃丞は
そんなリスクごときに怯む者ではない。

互いにデッキへと手を伸ばした蒼乃丞と遊星は、しかして同じタ
イミングでデッキからカードを引き抜いた。

「ドローッ！！」

蒼乃丞と遊星は引いたカードに視線を落とす。

それぞれに引いたカードはオネストとS p -スピード・フュージ
ョンに、S p -オーバー・ブレストとS p -ファイナル・アタック。
自身が引き当てたカードの内容に、蒼乃丞の脳裏で稲妻の如き閃
きが走る。

場と手札に揃った三体の青眼の白龍、S p -スピード・フュージ
ョンと青眼の究極竜、遊星の場のスターダスト・ドラゴン、そして
オネスト……全てが光の道でつながり、蒼乃丞が進むべきロードと
なった。

「ふうん。ここで揃うか……ならば、よし！」

脳裏に見えた勝利への道筋に満足気に鼻を鳴らした蒼乃丞は二枚
の青眼の白龍とS p -スピード・フュージョンに手に取り天高く掲
げると、高らかにカード効果を発動させた。

「S p -スピード・フュージョン発動ッ！ このカードはスピード
カウンターが四つ以上ある時、融合召喚を行うことが出来る！！
場にあるイブリースと手札のアズラエル、ジブリールを融合し……
降臨せよ！ 青眼の究極竜ッ！！」

青眼の究極竜 12 ATK4500 DEF3800

そして現れるは青眼の白龍三体融合モンスター、青眼の究極竜。
数あるデュエルモンスターのカードの中で究極竜騎士、F・G・
Dの持つ攻撃力5000に次ぐ攻撃力4500を誇る最高位のモン
スターだ。

「ッ!？」

攻撃力4500を誇る圧倒的な威圧感の前に遊星は凶らずも息を
飲む。

最強のさらに上を征く究極の名を冠した三つ首を持つ白銀の竜を
従えた蒼乃丞は、この勝負に決着をつけるため高らかに腕を振り上
げた。

「青眼の究極竜 でスターダスト・ドラゴンを攻撃ッ！」

蒼乃丞の宣言と共に青眼の究極竜は三つ首の口内に溢れんばかり
の光を湛え始める。

全てを薙ぎ払い光と昇華させる、破壊の輝きに遊星は目を見開い
た。

そして、蒼乃丞の声がスタジアムに木霊する。

「これで終わりだぁッ! アルティメット・バアーストッ!！」

高らかに下された蒼乃丞の号令に、青眼の究極竜は眩いばかりの
破壊の奔流を解き放った。

その光が進む先は遊星がデッキのエースモンスターにして遊星の絆の象徴でもあるスターダスト・ドラゴン。

目を覆わんばかりの圧倒的な光と攻撃力の前に、スターダスト・ドラゴンはその名の通り星屑の様に散るかと思われた。

しかし、攻撃力3000の青眼の白龍にさえ敵わない素の状態のスターダスト・ドラゴンを何の護りもなしに放置しておくほど遊星は愚かではない。

遊星の場には、この蒼乃丞のターンを凌ぐための楯が用意されていたのだ。

その効果を今、遊星は発動させる。

「断ち切らせはしないッ！！ゼロ・ガードナーのモンスター効果！このモンスターをリリースする事で戦闘による破壊を無効にし、戦闘ダメージを0にするッ！！」

それは遊星の場にいた攻撃力・守備力共に0のモンスター、ゼロ・ガードナー。

取るに足らない存在と思われていたこのモンスターこそ、遊星とスターダスト・ドラゴンを護る楯であったのだ。

青眼の究極竜とスターダスト・ドラゴンの間に割って入ったゼロ・ガードナーは小さな体で圧倒的な破壊の奔流を受け止める。

存在するモンスターを尽く薙ぎ払う事のできる攻撃力4500の攻撃を攻撃力・守備力が0のモンスターが阻む……その様は本来では在り得ない、異様な光景であった。

その身を楯にして青眼の究極竜の攻撃を防ぎきったゼロ・ガードナーに蒼乃丞は忌々しげに舌打ちする。

「ちいッ、二度ならず三度までも青眼の攻撃を止めるか……ッ！
ターンエンドだッ！！」

忌々しげに言い放たれた蒼乃丞のターンエンド宣言は僅かに怒りで震えていた。

それは無理もなかるう。

蒼乃丞が吐き捨てたとおりこの決闘、青眼の白龍や青眼の究極竜の攻撃は尽く遊星に止められて来たのだ。ここまで青眼の白龍の攻撃を防がれたのは蒼乃丞にしても初めての経験だったのである。

しかし、と蒼乃丞は熱くなる思考をどうにか宥め冷やすと手札のカードに視線を落とした。

その視線の先にあったのはS P・スピード・フュージョンと共に宝札の天使の効果でドロートしたオネストのカード。

恐らく遊星も宝札の天使の効果で切札を引き当てたのだろう。

ならば次のターン、遊星がスターダスト・ドラゴンの攻撃力を上げ攻撃を仕掛けてきた時こそが蒼乃丞の勝利が確定する時だ。

この屈辱、次のターンで晴らす。その心意を瞳に込めて僅か後ろを走る遊星を一瞥したのであった。

そして、遊星のターンが……この騎乗決闘のラストターンが廻って来る。

「俺の……ターンッ!!」

蒼乃丞 L P 5 0 0 S P C 6 7

遊星 L P 2 0 0 S P C 5 6

遊星は引いたカードに視線を落とす事はしない。

何故ならば遊星の手札には既に決闘の勝敗を決する切札があったからだ。

遊星はそのカードを。先の宝札の天使によってドロートした二枚のスピードスペルを手を取った。

「Sp-オーバー・ブースト、発動ッ！ この効果で俺のスピードカウンターを四つ増やす！！」

発動したスピードスペル、Sp-オーバー・ブーストの効果に連動し《遊星号》のモーターエンジンが唸り声を上げる。その膨大なエネルギーは両輪へと伝わり《遊星号》を……そして遊星をさらなる領域へと導く。

火花を散らし、コースに轍を刻みながら加速する遊星の《遊星号》が蒼乃丞の《青眼の白龍騎》を追い抜いた。

そのスピード。。。

遊星LP200 SPC6 10

二桁の大台にまで加速した《遊星号》の上で、最後となるカードを手に取った遊星は共にコースを駆け抜けるスターダスト・ドラゴンに視線を向けた。

「行くぞ、スターダストッ！」

主人から投げかけられた言葉にスターダスト・ドラゴンは高らかな咆哮を持って応える。

スターダスト・ドラゴンの咆哮を背に遊星は手札のカード、Sp-ファイナル・アタックを勢いよく決闘盤へと挿し込んだ。

「Sp-ファイナル・アタックッ！！」

先に遊星がSp-オーバー・ブーストを発動させスピードカウン

ターの数を増やしたのは、まさにこのスピードスペルのため。

S p -ファイナル・アタックは、その効果の強力さ故に要求されるスピードカウンターの数もまた多いのだ。

その要求数は実に八つ。

本来ならば要求数に二つ足りないところであつたが、遊星はS p -オーバー・ブーストの効果でスピードカウンターを補つたのである。

そして今ここに条件を満たして発動するS p -ファイナル・アタックの効果は遊星は高らかに宣言した。

「スピードカウンターが八つ以上ある時、モンスター一体の攻撃力を二倍にするッー!!」

発動したS p -ファイナル・アタックの効果は、何とモンスターの攻撃力を倍にするという破格の効果。

その効果がスターダスト・ドラゴンに大いなる力を与えていく。

スターダスト・ドラゴン	8	ATK 2500	5000	D
EF2000				

S p -ファイナル・アタックの効果によりスターダスト・ドラゴンの攻撃力は大台である3000を超え、青眼の究極竜の攻撃力4500を超え、デュエルモンスターズ界最高攻撃力である5000へと到達した。

さらにその攻撃力は青眼の究極竜を破壊せんばかりか、超過ダメージでそのまま蒼乃丞のライフポイントを0に出来る攻撃値である。この攻撃で全てが決まる。その心意を胸に遊星は腕を振り上げると、スターダスト・ドラゴンに向けて号令を下した。

「これで決めるッ！！ スターダスト・ドラゴンで青眼の究極竜を攻撃ッ！」

遊星の命を受けたスターダスト・ドラゴンは大きく体をしならせる。

その身に纏う風のが力が口内に集った幾千幾万の星屑たちを束ね、眩いばかりの輝きを放つ……その様は一つの星が生まれ出かのようにだ。

「響け、シューティング・ソニック！！」

そして、眩いばかりの星となった輝きは遊星の言葉と共に青眼の究極竜に向けて放たれた。

大いなる風に導かれた星屑たちが青眼の究極竜を飲み込まんと迫る。

しかし、この攻撃こそが蒼乃丞の望んでいた一手。

蒼乃丞を勝利に導く攻撃だ。

蒼乃丞は大きく目を見開くと、手札のオネストのカードを高らかに掲げた。

「この時を待っていたああッ！ 手札からオネストのモンスター効果を発動！！」

自分の場の光属性モンスターに相手モンスターの攻撃力を加算するその効果により、蒼乃丞の場の青眼の究極竜はスターダスト・ドラゴンの攻撃力を自身の力に加えて行く。

オネストの発動により輝く白銀の竜翼を、黄金に煌く天使の翅に変えた青眼の究極竜の攻撃力は

青眼の究極竜 1 2 ATK 4500 9500 DEF 3800

実にその攻撃力、9500ポイント。

前代未聞、空前絶後……五桁に迫るその攻撃力は、そんな言葉しか浮かばないような埒外の数値だ。

遙かな高みにまで高められた青眼の究極竜の攻撃力に、蒼乃丞は高らかな笑みを上げた。

「ふっははははははッ!! どうだ!? これこそデュエルモンスターズの頂点に君臨する青眼の究極にして至高の輝き! サテライト出身の決闘者がボクと青眼たちを相手にこれだけの力を出させた事は褒めてやる……が、どうやらそれもここまでのようだな!」

意気揚々と語る蒼乃丞の言葉と共に、青眼の究極竜がその三つ首のアギトを雄々しく開く。

そこに灯るは白き破壊の輝きだ。

溢れんばかりに輝く光は先のスターダスト・ドラゴンが放った星屑の輝きが霞まんばかりの眩い光。全てを白く塗りつぶす暴虐の如き輝きだった。

そして、その輝きが蒼乃丞の言の葉と共に解放される。

「迎え撃て、青眼の究極竜ッ! アルティメット・バアアーストッ
!」

青眼の究極竜から放たれた破壊の奔流は超新星の如き輝きを持って全てを薙ぎ払わんと、スターダスト・ドラゴンの放った攻撃に向けて打ち出された。

極限まで束ねられた星屑の光と、全てを薙ぎ払う破壊の光。

それらは一瞬の膠着を見せるがそれでも圧倒的な攻撃力差はいかんともしがたく、徐々にスターダスト・ドラゴンの攻撃が押され始めた。

圧倒的な破壊の光が星屑の光を引き裂いて行く光景に誰もが遊星の敗北を予感する中、遊星は場に最後に残っていたカードへと視線を落とす。

そのカードは先のターンに伏せた対蒼乃丞戦、最大にして最後の切札。

圧倒的な攻撃力を持つ蒼乃丞のデッキに負けないために投入したそれは、同時に勝利も放棄する事になる諸刃の剣だった。

しかし、このまま何もしなければ敗北は決定的。

ならば事ここに至って選ぶ事のできる選択肢などただの一つ

覚悟を決めた遊星は視線を上げると、そのカードを発動するべく手をかけた。

「畏カード、発動ッ！ 決戦融合 - ファイナル・フュージョン！」

遊星の発動させた伏せカードの正体に蒼乃丞はこれ異常ないほど表情を驚愕の色に染める。

「なにいいッ!？」

蒼乃丞が遊星の発動させた畏カードに驚愕するのも無理はない。

決戦融合 - ファイナル・フュージョン……その効果はその名の通り決戦的で最終的なゲームエンドをもたらす効果なのだ。

その効果を遊星は高らかに宣言した。

「このカードの効果により戦闘を無効にし、俺達は互いのモンスターの攻撃力の合計分のダメージを受けるッ!!！」

遊星の発動した決戦融合・ファイナル・フュージョンにより青眼の究極竜とスターダスト・ドラゴンの攻撃は螺旋を描くように混ざり合い、太陽の様な巨大な光となる。

誰もがその圧倒的エネルギーからなる輝きに目を奪われるが、それも一瞬の事だった。

二体のドラゴンの攻撃によって造られた巨大なエネルギーの塊は心臓の鼓動のように一回脈打つと、その圧倒的な破壊の力を一気に撒き散らしたのである。

その圧倒的な破壊の光はダメージとなって爆心地にいた蒼乃丞と遊星に襲い掛かった。

「うわあああああッ！！」

蒼乃丞と遊星は襲い掛かるダメージの前に、D・ホイールから振り落とされないようにするだけで精一杯だった。

何せ蒼乃丞の青眼の究極竜の攻撃力9500と、遊星スターダスト・ドラゴンの攻撃力5000の合計値　つまり14500ものダメージが二人に襲い掛かったのである。

そしてこの騎乗決闘の結末は最早、言葉にする必要はあるまい。これだけのダメージを受ければ結果は誰の目にも明らかである。

目を覆わんばかりの光が晴れ行く中でスタジアムのスクリーンに大写しにされた二人のライフポイントには、その当然の結果を映し出していた。

蒼乃丞 L P O S P C 7

遊星 L P O S P C 1 0

その表示に誰もが啞然とする中で、初めて時を刻み出したのは他でもない決闘を行っていた遊星である。

対する蒼乃丞はこの結果を認める事ができないのか未だに呆然としていたが……………。

コース上に緊急停止したD・ホイールの上で頭を振った遊星はモニターに映る【DRAW】の文字を一瞥すると、ふと右腕に違和感を感じた。

何がと言われれば言葉にし難いが、とにかく何時もと何かが違うのだ。

違和感の正体を確かめるためにグローブを外した遊星は、そこにあったモノに目を見開いた。

「……………痣が消えていない。これは……………」

それはシグナーの証である《赤き竜》の痣。

度々遊星の腕に浮かび上がっては消え、先の決闘でも顕現した痣が今では消えることなく遊星の腕に残っていたのである。

それは遊星が真にシグナーとして覚醒した証。

レクスが待ち望んだ全てのシグナーが揃った瞬間だった。

だが、今はシグナーやレクスの思惑は脇においておこう。それより重大な事案があるのだから。

遊星が痣に視線を落とす中、思い出したかのようなMCの音がスタジアムに響き渡る。

まるで予期していなかった結末に、MCも興奮しているのだろう。勢いよく唾を飛ばしながら決闘の結果をコールした。

『ななな、何と波乱の決勝戦は全く予想外の決着となったあああッ！！ 誰がこの結末を予想したであろうか！？ 不動遊星vs海馬蒼乃丞、その結果は何と引き分け！ ドローゲエームッ！！ しかし、キングの待つファイナルに進めるのは一人のみ！ これは審

議を待たねば……あ、あれッ？ またマイクの調子が

しかし、結果は前代未聞の引き分け。

これからのファイナルがどうなるかを語っていたMCだったが、
またしても不意にマイクが途切れた。

またしても起こった音響設備の不調にスタジアムの観客達はざわめく中、マイクの入る音と共に脳に直接響くような言葉がスタジアムにいる人間の鼓膜を打った。

『静まれえええええッ！！』

その声の主は誰であろう、遊星と共に決勝戦を戦った蒼乃丞だった。

緊急停止した《青眼の白龍騎》から降り立った彼女は、そのハツキング技術で音響設備をジャックしたのである。

蒼乃丞が態々音響設備をジャックした理由、それは

『このデュエル・オブ・フォーチュンカップの主催者として、この試合に裁定を下すッ！』

大会主催者として、思わぬ結果となった決勝戦に対する裁定を下すためであった。

蒼乃丞の主催者としての言葉に、スタジアムに座る観客達は息を呑んで彼女がどのような裁定をするのか聞き入る。

もう一度決勝戦をやり直すのか、それとも特例として三人でデュエルキングの称号をかけてファイナルを行うのか……あらゆる可能性がスタジアム中を駆け巡る中、彼女の下した裁定はそのどれでもなかった。

『この試合、結果は引き分けとしデュエル・オブ・フォーチュンカ

ツプの優勝者はボクこと海馬蒼乃丞と不動遊星の二人とする！ よって、駄け……キングであるジャック・アトラスへのファイナル挑戦権は両者に発生するものであるが、ボクは不動遊星にこの権利を完全に譲渡する事をここに宣言する！！」

なんと蒼乃丞は遊星とのダブル優勝を宣言したのだ。

しかもファイナル進出権の譲渡までも。

この裁定には観客達は大いにどよめいた。当然、それは死闘を演じた遊星とて同じだ。

「海馬……………」

何か言いたげな視線を向けてくる遊星に対して、蒼乃丞は不満げに鼻を鳴らすと背中を向けた。

「ふうん、勘違いするな。引き分けなどボクに取っては負けも同じ事だ」

彼女がファイナル進出を遊星に譲った理由……それはまさに彼女の言葉どおり、引き分けと言う結果に彼女自身が納得できないことであつた。

これまで蒼乃丞はいかなる勝負であろうとも絶対に勝利を掴んできたのだ。

それがここに来て初めて勝利を逃した 例え負けではない引き分けであろうとも、蒼乃丞にとっては初めての挫折だったのである。故に蒼乃丞はそんな不甲斐ない自分自身が許せない。

だからこそ彼女は優勝者を遊星とのダブル受賞にしながらも、戒めとしてファイナル進出権を遊星に譲ったのだ。

だが、勘違いしてはいけない。

蒼乃丞は今だにこの結果には納得していないのである。

《青眼の白龍騎》に跨った蒼乃丞は最後にもう一度だけ遊星に視線を向けると、これまでにない闘志と共に言葉を向けた。

「そんな事より不動遊星、この屈辱は忘れはせんぞ。この決着はいずれ何処かでつけてくれる。それまでせいぜいキングの玉座を暖めておく事だな」

「……ああ」

言外に後にキングの座を奪いに来ると言う蒼乃丞の宣言に遊星は静かに、だが力強く頷いて応えた。

この時こそ、遊星が蒼乃丞に好敵手認定された瞬間であった。

『これを持ってデュエル・オブ・フォーチュンカップ決勝戦は終了とする！！』

そして最後に一言、そう宣言して《青眼の白龍騎》を発進させた蒼乃丞はスタジアムから姿を消したのであった。

後に残ったのは蒼乃丞の去った後を見送る遊星のみ。

まるで嵐のようだった蒼乃丞の主催者権限の行使に呆気に取られていたMCはマイクの音が戻っていることに気がつく、高らかな声でファイナル進出者を宣言した。

『……おおつと！ 主催者直々の裁定によりファイナル進出者が決まったああッ！ ファイナル進出は不動遊星！！ サテライトの流れ星、不動遊星いいッ！！』

紆余曲折あったが遂に決したジャックの対戦相手に高らかな歓声がスタジアムに巻き起こる。

こうしてデュエル・オブ・フォーチュンカップ決勝戦は異例の事態を孕みながらも幕を閉じたのであった。

CM 《DUELIST PACK - 蒼乃丞篇 -》

CV：海馬蒼乃丞

「ふうん。ボクの青眼の白龍を始めとするレアカードたちを特別に貴様らにもくれてやる！ これを持って最強のデッキを構築するがいいッ！！ さあ、貴様らも青眼の白龍と共に全速前進だ！！」

遊戯王5D'sオフィシャルカードゲーム DUELIST P
ACK - 蒼乃丞篇 -

1パック5枚入り メーカー希望小売価格150

円（税込み）

11月31日 発売予定

「決闘者の頂点に君臨せよッ！！」

（ K N A M I ）

収録カード

（未）原作登場未OCG化カード

（オ）作者オリジナルカード

・ D P O X - J P 0 0 1 《青眼の白龍》 R a r e

・ D P O X - J P 0 0 2 《伝説の白石》

・ D P O X - J P 0 0 3 《青眼の究極竜》 R a r e

・ D P O X - J P 0 0 4 《白竜の聖騎士》

・ D P O X - J P O 0 5	《マンジユ・ゴツド》
・ D P O X - J P O 0 6	《朱光の宣告者》
・ D P O X - J P O 0 7	《シャインエンジェル》
・ D P O X - J P O 0 8	《宝札の天使》 Ultra (オ)
・ D P O X - J P O 0 9	《A・O・J カタストル》 Super
・ D P O X - J P O 1 0	《カイザー・シーホース》
・ D P O X - J P O 1 1	《ブリザード・ドラゴン》 Rare
・ D P O X - J P O 1 2	《竜の尖兵》
・ D P O X - J P O 1 3	《オネスト》 Rare
・ D P O X - J P O 1 4	《正義の味方 カイバーマン》
・ D P O X - J P O 1 5	《F・G・D》 Rare
・ D P O X - J P O 1 6	《氷結界の龍 ブリユーナク》 Sup
e r	
・ D P O X - J P O 1 7	《滅びの爆裂疾風弾》
・ D P O X - J P O 1 8	《白竜降臨》
・ D P O X - J P O 1 9	《未来融合 - フューチャー・フュージ
ヨ	
・ D P O X - J P O 2 0	《龍の鏡》 Rare
・ D P O X - J P O 2 1	《融合》
・ D P O X - J P O 2 2	《融合解除》
・ D P O X - J P O 2 3	《異次元からの帰還》
・ D P O X - J P O 2 4	《緊急同調》
・ D P O X - J P O 2 5	《青眼の逆襲》 Super (オ)
・ D P O X - J P O 2 6	《救済の輝き》 Rare (オ)
・ D P O X - J P O 2 7	《ストライク・ショット》
・ D P O X - J P O 2 8	《正統なる血統》
・ D P O X - J P O 2 9	《決死の希望》 Ultra (未)
・ D P O X - J P O 3 0	《矜持の宝札》 Super (オ)

全く持つて本当に今日はオカルトに縁がある日だ。

海馬コーポレーション内に設えられた蒼乃丞の寝室。

いつもの凜々しいコート姿ではなくフリルやレースが多くあしらわれた可愛らしいヴィクトリア朝デザインのネグリジエを身に纏った蒼乃丞は、目の前に広がる光景に今日の日と言うモノを深く反芻していた。

準決勝ではサイコ決闘者である十六夜アキの力を身を持って知った事に始まり、決勝では凶らずも遊星をシグナーとして覚醒させ、ファイナルでは《赤き竜》の出現と共にシグナーたちと異空間に転移。

そこで青眼の白龍たちの精霊と触れ合ったばかりか、あまつさえ過去と未来のビジョンを垣間見たのである。

それだけでも昨日の自分が聞いたら一笑に付してしまいそうな非現実的な内容の数々だと言うのに今、蒼乃丞の目の前にはそれ以上に信じられない光景が広がっていた。

「さあ、蒼乃丞様。闇のゲームを始めましょう」

青紫に渦巻く炎の中、無二の忠臣である磯野が右腕に青紫に光る痣を輝かせ蒼乃丞の前に立ちはだかっているのである。

磯野が蒼乃丞に敵対する事もさることながら、問題は蒼乃丞と磯野を取り巻くように燃える青紫の炎の壁と磯野の腕に輝く痣だ。

シグナーのそれと酷似した痣など磯野は身に宿していなかったはず……そもそもシグナー候補であるならばレクスが万難を廃してもデュエル・オブ・フォーチュンカップに出場させたはずである。

そもそも磯野の腕に浮かぶ蜘蛛の痣。それは蒼乃丞にとって見覚えがあるモノだった。

時を遡る事、数時間前。

デュエル・オブ・フォーチュンカップがファイナルでそれは起きた。

不動遊星とジャック・アトラスによって行われている騎乗決闘の最中、シグナーとして完全なる覚醒を果たした遊星のスターダスト・ドラゴンとジャックのレッド・デーモンズ・ドラゴンの激突により天が裂け、大地に赤い稲妻が落ちたのだ。

赤き稲妻はまるで生きているかのように騎乗決闘のコースを走り抜けると、その身に次々と生物的な特徴を宿して行く。

赤き翼、赤き尾、赤き手、赤き足、そして赤き頭。

それは見まごう事なき竜の姿……伝説に謳われし《赤き竜》がシグナーの竜同士の激突により顕現したのである。

ついに現れた《赤き竜》が咆哮を上げながら騎乗決闘のコースを悠々と回っていく様にスタジアムのあちこちでどよめきが巻き起こった。

その存在を知ると知らないに関わらず、《赤き竜》が発する桁違いの力と存在感がスタジアム中を圧倒していたのである。

当然、その中には蒼乃丞も含まれていた。

「これが……《赤き竜》！？」

VIPルームで好敵手と認められた遊星の決闘の結末を見届けんとしていた時に出現した《赤き竜》から発せられるただならぬ存在感に、彼女も息を吞まざるを得なかったのだ。

その余りの驚き故か、蒼乃丞は気付かない。

デッキケースの中にある三枚の青眼の白龍のカードが僅かに光を放っている事を。

誰もが例外なく《赤き竜》の存在に驚愕する中、ただ一人、レクスだけが口元に笑みを湛えていた。

何故ならば、この展開こそレクスが最も望んでいたもの。

ジャックをイエーガーに唆させシテイに招きキングに仕立て上げたのも、デュエル・オブ・フォーチュンカップを開催したのも、イリアステルの名を使ってまで蒼乃丞を大会に招いたのも、全てはまさにこの時のため。

もっとも遊星と蒼乃丞の決勝戦での顛末は流石のレクスとて肝を冷やしたが、それでも結果としては全てがレクスの思惑通りに落ち着いた。

そして今、遊星のスターダスト・ドラゴンとジャックのレッド・デーモンズ・ドラゴンの衝突の果て、ついに五千年の時を超え《赤き竜》が再びその姿を現世に現している。

覚醒を果たした四人のシグナーと姿を現した《赤き竜》　今こそ、その真の力を解放する時。

レクスは口元に湛えた笑みをそのままに、機械仕掛けの左腕を前へとかざした。

これで全ての条件が揃った。

真の力を発揮するシグナー同士が戦う時、決闘は新たな次元に突入する。

今こそ五つに分かれた力を束ねよ、ドラゴンヘッド！

すると、レクススの意に従うようにどこかに保管されていた五人目の《赤き竜》の痣　ドラゴンヘッドが人知れず眩いばかりの光を放った。その輝きに共鳴するかのように遊星やジャックを始めとする《赤き竜》の痣を持つ者たちの痣が脈動するかのように疼きだす。ついに揃った五つの痣に《赤き竜》が高らかな咆哮を上げると、スタジアムに目も開けていられないような嵐が吹き荒れた。だが、驚くのはまだ早い。

吹きすさぶ嵐の中、何と《赤き竜》はその巨大な口を開けスターダスト・ドラゴンとレッド・デーモンズ・ドラゴンを一息に飲み込んでしまったのだ。

「なんだとツ!?!」

「ツ!?!」

予想だにしなかった《赤き竜》の行動にジャックと遊星が驚愕する中、二匹の竜を飲み込んだ《赤き竜》は今一度口を大きく開けた。何事かと思うのもつかの間、《赤き竜》は遊星とジャックまでも飲み込んだのである。

遊星とジャック、スターダスト・ドラゴンにレッド・デーモンズ・ドラゴンをその身に収めた《赤き竜》は今までにない高らかな咆哮を上げ、遙か天へと駆け上がっていく。

その翼を広げた姿が十字架の様な形を象った時、残ったシグナーである龍可とアキの痣が眩いばかりに輝いた。

同時に、天へと上る《赤き竜》を呆然と見上げていた蒼乃丞のデツキケースから漏れていた光は眩いばかりの輝きとなり蒼乃丞を包み込む。

そして蒼乃丞、龍可、アキの三人が光の中に消え……………。

世界の全てが停止した。

次に蒼乃丞が気付いたのは、どれほどの時間が経った頃であろうか。

「……ッん……これは一体………」

ふと気がついた時、既にそこはデュエル・オブ・フォーチュンカ
ップが行われているはずのスタジアムではなかった。

星々がたゆたう夜空とも宇宙とも言える空間。後ろに高速で流れ
て行く星々。そして延々と続く一本の光の道。

その光の道の上を三体の青眼の白龍に囲われながら蒼乃丞は飛ん
でいたのである。

「イブリース、アズラエルにジブリアルも!？」

自分の周りをエスコートするかのように飛ぶ三体の青眼の白龍に蒼乃丞が驚きの声を上げたのも無理もなからう。

蒼乃丞の腕には決闘盤は装着されていない……即ちソリッド・ビジョンによる投影がないにも関わらず青眼の白龍が召喚されていたのだから。

この宇宙の様な光景と言い、決闘盤に置かれてもいないのに召喚された青眼の白龍たちと言い、ソリッド・ビジョンの中枢であるデュエル・リング・サーバーに何らかの不具合が起こったのかと蒼乃丞が思った時、信じられない事が蒼乃丞の身に起こった。

主に名前を呼ばれたのが嬉しいのか、三体の青眼の白龍は一声鳴くと蒼乃丞に頬を摺り寄せてきたのである。そして、その感触はしっかりと蒼乃丞の触覚を刺激していたのだ。

この事実には蒼乃丞は驚愕する。

「ッ!! そんな莫迦な! ソリッド・ビジョンじゃない……だと!？」

ソリッド・ビジョン・システムは攻撃の衝撃等がある程度再現するまでの体感システムを積んでいるとはいえ所詮はバーチャル・リアリティだ。

いかに技術が進歩したとしても幻影の域を出る事は叶わない。

だと言うのに、蒼乃丞の触覚に触れる青眼の白龍たちの感触は紛う事なき本物の感触だ。

そう。三体の青眼の白龍たちはあり得る筈のない実体化を果たしているのである。

戯れるように蒼乃丞に擦り寄る青眼の白龍たちの感触に蒼乃丞が声も出せないでいる中、彼女の視界に見知った人物達の姿が映った。それは、このデュエル・オブ・フォーチュンカップで見た決闘者

たち。

片方は蒼乃丞と決闘する事なかったが、もう片方は準決勝にて蒼乃丞と死闘を繰り広げた決闘者。

赤い膜に覆われながら蒼乃丞と同じように、この空間を飛ぶ龍可とアキであった。

向こうもこちらの存在に今気がついたのだろう。

青眼の白龍たちと共に飛ぶ蒼乃丞と併走するように並んだ二人がそれぞれ声を上げた。

「蒼乃丞さん!？」

「ッ! 海馬……蒼乃丞………」

蒼乃丞がここにいることに純粹に驚く龍可に対して、アキは準決勝での事が尾を引いてるのか複雑な表情を見せると顔を会わせ辛そうに視線を外す。

色々な感情がない交ぜになった表情を見せるアキに気遣わしげな視線を送る龍可だったが、龍可にとってはそれ以上に蒼乃丞を護るように飛ぶ三体の青眼の白龍が気になっていた。

デュエルモンスターの精霊の声を聞く事のできる龍可は蒼乃丞の青眼の白龍たちが精霊としての力を使い、実体化していることを一目で見抜いたのである。

故に龍可は蒼乃丞に問わずにはいられない。

今まで自分一人だけだと思っていた精霊と心を通わせる事のできる能力。

蒼乃丞もその能力を持つ人間かもしれないのだから。

「あの、蒼乃丞さん。貴女も精霊の力を使えるんですか？」

「ッ!？」

その龍可の問いかけに蒼乃丞が答えを返すよりも早くアキが息を

呑む。

アキもまた、デイヴァインが現れるまでは自身のサイコ決闘者としての異能に一人苦しんできた者だ。

龍可の問いかけが本当ならば、蒼乃丞も自分達と同じ異能を持つ仲間かもしれないと思っただのである。

自身の異能を恐れて家に籠り、人との関わりを断つて来た龍可。

自身の異能のせいで排斥され続け、ついには破壊の衝動に至ったアキ。

ベクトルは違えども異能によって望みもしない人生を強要されて来た二人の視線が蒼乃丞に集まる。

何かを期待するような彼女達の視線に晒された蒼乃丞は些か不機嫌そうな顔を見せるが、この事実を否定できるほど蒼乃丞は愚かではなかった。

「精霊の力だと？ 馬鹿馬鹿しい。そんな非現実的な事……と、言いたいところだが現実なのだろうなコレは」

確かに昨日までの自分ならば今言った言葉の前半分を持って一蹴した事だろう。

しかし今日、蒼乃丞が見て感じた非現実的な出来事の数々はどれもが全て真なる現実であった。

ならばこの不可解な現象も龍可の言葉も、易々と切って捨てていいものではない。

何より、甘えるように擦り寄ってくる青眼の白龍たちとの暖かな交流を非現実的なオカルトと断じる事など蒼乃丞に出来ようはずがなかった。

慈しむ様に青眼の白龍たちを優しく撫でる蒼乃丞の姿に龍可とアキは別の意味で驚く。

童女のような無垢な笑みを浮かべながら青眼の白龍と戯れる蒼乃丞の姿は、ここ二日で目にした強烈にして苛烈な蒼乃丞像とはかけ離

れていたからである。

あまりに激し過ぎるギャップに二人が言葉をなくす中、不意に蒼乃丞は眼下に見える光の道に何かを見出した。

それは星々が煌く空間を切り裂いて飛ぶ星屑の竜と赤き悪魔の竜。さらにその下には光の道に轍を刻む赤と白のD・ホイールも見えた。

「あれは遊星に駄犬か！」

蒼乃丞の言葉に釣られるように呆然としていた龍可とアキも視線を下へと落とす。

すると、スターダスト・ドラゴンとレッド・デーモンズ・ドラゴンと共に光の道をD・ホイールで駆け抜ける遊星とジャックの姿が確かに見えた。

遊星とジャックの姿を確認した事で龍可とアキは確信する。

それは、この不可思議な空間に自分達を招いたのは《赤き竜》であると云う事だ。

《赤き竜》が何を思い、シグナーである自分達をこの空間に導いたのかまではわからないが、未だに光り輝く痣が何かを訴えようとしている事だけはわかった。

しかし、ここで一つの疑問が浮かび上がる。

何故シグナーでもない蒼乃丞が《赤き竜》の導いたこの場にいるのかと云う事だ。

彼女を見てみても、ここには意図して来たのではない事は明白。

そして、精霊として実体化を果たした三体の青眼の白龍。

だとするならば、この場に蒼乃丞を導いたのは青眼の白龍ということか。

謎が謎を呼び、答えの出ない迷宮の中を彷徨うような感覚に陥る中、光の道を駆け抜ける四人のシグナーと蒼乃丞の目の前に何かが目につくのが見えた。

それは天上に赤い光を頂く巨塔。

坂道を上るように塔の上を駆け抜ける五人が見たものは、地に平伏す人々と塔の最上階で手を高らかに掲げる五人の神子たち。

そんな彼らの右腕に輝くのは。

「ッ！ 俺達と同じ痣!？」

「シグナー……俺達は遥かな時を越え、その因縁で結ばれているとでも言うのか」

彼らの右腕に輝くの痣は遊星やジャック、龍可にアキがその腕に輝かせる《赤き竜》の痣と全く同じモノ……塔の最上階で腕を掲げる彼らこそ前周期である五千年前に《赤き竜》に選ばれたシグナーたちであった。

かつてのシグナーたちの姿に遊星とジャックが言葉を漏らす中、蒼乃丞も眼下に映る光景に静かに呟く。

そして、自分をここに導いたのであるう青眼の白龍たちに言葉を投げかけた。

「これは過去のビジョン？ これを見せるためにお前達はボクをここに導いたのか？」

この蒼乃丞の問いかけに対して青眼の白龍たちは首を僅かに振り否定の意を示すと、さらに先の方へと視線を向ける。

まるで、そちらを見てくれと言わんばかりに。

「先だと？ これより先にまだ何かがあるのか？」

かつての星の民とシグナーたちの光景が後ろに過ぎ去る中、蒼乃丞は青眼の白龍たちが見つめる先に目を凝らす。

しかし、いくら目を凝らしてみても視線の先に映るのは煌く星々

のみ。先ほどの赤き光を頂く巨頭の様な何かのビジョンは見えなかった。

……いや、待て。

確かに青眼の白龍たちが向ける視線の先には、この空間に漂うのと同じような星々が映るばかりだが、あの星々は何かが違う。何が違うかと問われれば言葉にしにくいだが、とにかく何かが違うのだ。

得も知れぬ違和感を蒼乃丞が感じる中、ついにその星々の正体が明らかになる。

足元を照らす街灯、色取り取りに輝くネオン、道行く車のライト、暖かな家庭を包む照明　追った視線の先にあったのは、人の営みを物語る光の数々。

それは確かに眩しいばかりに輝く地上の星々であった。

だが、青眼の白龍たちが見つめていた先はそこではない。

青眼の白龍たちが真に見つめていた先とは、地上の星が煌く大地の直ぐ隣……光溢れる大地と隔絶され闇に沈んだ孤島。

それらの土地は、ここにいる全員に見覚えのあるモノだった。

身間違えようはずもない。

まるで対照的な光輝く大地と暗闇に包まれる孤島は、彼らが生を受け育ってきた場所であるのだから。

「あれはネオ童実野シティとサテライト!?!」

見慣れた二つの街のビジョンに遊星も驚きの声を上げる中、さらなる驚愕の事態がサテライトに発生した。

何と、青紫の炎がサテライトの大地に走ったのである。

いきなり現れた青紫の炎は建物を次々となぎ倒しながら、その炎でサテライトの大地に線を描いていく。

青紫の炎が描いた線は図と成り、サテライトを見下ろす蒼乃丞たちの目の前に姿を現す。

サテライトの大地に炎を持って刻まれた図はあまりにも有名な代

物だった。

「あれは、蜘蛛の地上絵……だとツ!?」

それは太古の昔、ペルーがナスカに描かれた幾何学図形や動植物の絵の中の一つ。

蜘蛛の地上絵に相違なかったのである。

サテライトに描かれた場違いな蜘蛛の地上絵に誰もが啞然とする中、眼下に映るサテライトにさらなる変容が見られた。

「サテライトが……滅んで行く………」

燃え盛る地上絵の炎に蝕まれるようにサテライトが崩壊を始めたのである。

あまりにも不吉過ぎるビジョンに蒼乃丞はようやく、これこそが青眼の白龍たちが自分に見せたかったものであることを確信した。

「そうか。これがお前達がボクに見せたかったものなんだな」

青紫に燃え上がる蜘蛛の地上絵を睨みつける青眼の白龍たちを撫でながらそう呟いた蒼乃丞だったが、このビジョンが一体何を意味するものなのかは、今の蒼乃丞にはわからない。

しかし、無意味なものであるとも思えない。

青眼の白龍が精霊となってまで蒼乃丞に伝えた事が無意味であるはずなどないのだから　そう蒼乃丞が思う内に、サテライトを飲み込んだ蜘蛛の地上絵が後ろに流れすぎて行くのだった。

どうやら《赤き竜》や青眼の白龍が見せたかったものは、先の地上絵で終わりらしい。

過去のビジョンである星の民と未来のビジョンであろう蜘蛛の地上絵以降、他に何かが見える気配はなかった。

だというのに、この星々が流れる異空間が消える兆しは全く持っていない。

他にまだ何かがあるのだろうか。

その疑問に対して蒼乃丞が考察を始めようとした時、眼下に見える遊星とジャックに動きがあった。

「遊星、決闘を続行する！」

「なにッ!？」

「俺はこの決闘の果てが例え地獄に続こうと、貴様とは決着をつける!！」

「ジャックッ!！」

「わかるのか!！ 俺達の決闘が俺達をここに運んだ。ならば、ここから出るには俺達の決闘を完結させるしかない! カードを二枚伏せ、ターンエンド!！」

「ッ……俺のターン!！」

何と、中断されていた騎乗決闘をここで再開したのである。

しかし、蒼乃丞はジャックの言葉になるほどと思う。

この空間への呼び水となつたのは間違いなく、遊星のスターダスト・ドラゴンとジャックのレッド・デーモンズ・ドラゴンの衝突だ。それが事の発端であるならば事態の幕を引くには、この騎乗決闘の決着をもつてしかありえない。

そして、再開されたこの騎乗決闘はまさしく死闘となつた。

シグナー同士による決闘のせいなのか戦闘によるダメージが現実の衝撃となる中、ハイパー・シンクロンを素材とした事で戦闘破壊耐性を獲得したスターダスト・ドラゴンとレッド・デーモンズ・ドラゴンが幾度となくその力をぶつけ合う。

気を抜けば決闘の決着以前に魂が砕け散ってしまうほどの衝撃を見せる決闘は結果として、遊星のメテオ・ストリームの発動を読んだジャックのクリムゾン・ヘル・フレアをさらに読んだ遊星の白銀

のバリア・シルバーフォースにより決め手を欠いたジャックの敗北に終わった。

遊星の決め手は蒼乃丞との決勝戦でも用いられた、S p -ファイナル・アタック。

この効果により攻撃力を5000にまで跳ね上げたスターダスト・ドラゴンの攻撃により決着がついたのであった。

それから先が大変だった。

無敗のキングであるジャックが負けたことも然ることながら、新しいキングはサテライト出身者である遊星である。

同時に彼らの決闘を見届けたのはシグナーであるアキと龍可、青眼の白龍の精霊に導かれた蒼乃丞のみ。つまり、スタジアムにいた誰もが《赤き竜》の出現から勝敗決着までの顛末を知らないのだ。

マーカー付きのサテライト出身者が見えないところでジャックに勝利したことに対して何か裏があると考える人も多く、故にマスコミの記者達の食いつきもしつこいものだった。

特に蒼乃丞は新たなキングである遊星と決勝戦で引き分けた決闘者であり、一応の理由付けとして不備とされたソリッド・ビジョン・システムを司る海馬コーポレーションの総帥とあつてか様々な質問に晒されたのである。

あれやこれやと聞いてくるマスコミたちを何とか捌き、己が城で

ある海馬コーポレーションの本社ビルに蒼乃丞が戻れたのはすっかり日が沈んだ後の事であった。

そんな忙しい一日の疲れを、蒼乃丞は海馬コーポレーション本部ビル内の自室に備え付けられたシャワールームで汗と共に洗い流していた。

しかし、一糸纏わぬ姿でシャワーを浴びる蒼乃丞はこう……何と云うかアレである。

鏡に映る彼女の裸体は年不相応に女性的な起伏に乏しい幼児体型ではあるが、何故か不思議と魅入ってしまう魅力があった。

穢れを知らない妖精の様な肢体と表現すればいいだろうか。

絹の様な滑らかな亜麻色の髪と相まって、生まれたままの姿で水に濡れる彼女の姿は侵し難い神聖なものに見えた。

程よく体を清め終えた蒼乃丞はシャワーの栓を止めバスタオルを手にとると、身体と髪に付着した水分を丁寧に拭っていく。

次いで蒼乃丞は綺麗に畳まれて用意されていた寝間着を手にとった。

普段着として彼女が着る黒のスラックスとシャツから寝間着も質実剛健な無地色のパジャマかと思われたがしかし、その予想は大きく裏切られる事になる。

彼女のがに取った寝間着は、何とフリルやレースがふんだんに織り込まれた可愛いヴィクトリア朝デザインのネグリジエだったのである。

誰がこの事実を予想できたであろうか。

あの辣腕をして持って鳴る蒼乃丞が、あの海馬瀬人の再来と言われる蒼乃丞が、あの強烈で苛烈なまでの決闘を見せた蒼乃丞が、可愛いネグリジエに袖を通す姿を。

しかし、驚くのはまだ速い。

蒼乃丞が開く扉の先にはさらなる驚愕の世界が展開されていたのだ。

シャワールームから蒼乃丞が足を踏み入れた先は彼女の寝室……一見すれば大人しい色合いの壁紙に、豪華ではあるが品のいい調度品が揃えられた如何にも彼女らしい部屋であったが、問題は彼女が眠りにつくであろうベッドにあった。

いや、ベッド自体には何も問題はない。

天蓋付きと言つ些か豪華に過ぎる代物ではあつたが、その程度は蒼乃丞自身のステータスを考えれば何も驚く程の事ではない。

では何が問題なのか……それはベッドの上に置かれた彼らの存在である。

この場にあるべきでない筈のモノが鎮座するベッドに腰掛けた蒼乃丞はベッドの上に置かれていた彼らに手を伸ばして手繰り寄せる。。。

「んゝ　もふもふゝ」

何と、思い切り胸に抱きしめたのである。

しかも、普段の彼女からでは想像もできない幸福に蕩けた様な表情で。

若き海馬コーポレーションの王に愛でられるという栄誉を賜り、かつ不遜にして苛烈なる孤高な王を籠絡させた彼らこそ、この海馬コーポレーションではあり得ざるべき存在。かつて彼女の祖父である海馬瀬人が惨めな姿と一蹴した存在　そんな彼らを蒼乃丞は幸せそうな顔で、ぎゅっと抱きしめていたのだ。

もう、おわかりだろう。

蒼乃丞が胸に抱きしめる彼らこそ、かつてペガサスが海馬瀬人の青眼の白龍を自身の趣味である漫画の世界に合わせて変容させたモンスター、ブルーアイズ・トゥーン・ドラゴン……そのぬいぐるみだったのである。それが三体も……。

しかも、彼女のベッドの上にあつたのは三体のブルーアイズ・トゥーン・ドラゴンのぬいぐるみばかりではなかった。

他にも可愛らしくトウーン化されたブリューナクやカタストル、カイバーマンにオネストなどなど、蒼乃丞のデッキのモンスターたちのぬいぐるみが広いベッドの上に所狭しと置かれていたのである。トウーン・ワールドと化したベッドの上でトウーンのぬいぐるみたちを愛でる。

それが蒼乃丞の一番心休まる時間であり、日々の秘めた日課であった。

もちろん、彼女の一番のお気に入りは今抱いている三体のブルーアイズ・トウーン・ドラゴンだ。

海馬瀬人がこの光景を目にすれば何と思うであろうか　想像に難くない気がする。

しかしながら思考や口調、経営手腕、決闘スタイルまで祖父である海馬瀬人と恐ろしいほどに瓜二つな蒼乃丞であったが、トウーン嫌いという一点に関してだけは似なかつたようだ。

だが、これは本当に驚くべき新事実だ。

可愛らしいネグリジエを見に纏い、幸せそうにぬいぐるみを愛でる今の蒼乃丞の姿からは、陣頭に立ち采配を振るう凛々しい社長や、相手を完璧な戦術で完膚なきまでに叩き潰す苛烈なまでの決闘者の姿は欠片も感じられない。

あるのは幼い容姿に似合った純真無垢な愛らしさのみ。

その普段との余りにかけ離れたギャップのせいか、ただでさえ愛らしい今の彼女の姿がより愛らしく見えたのだった。

閑話休題。

一通りブルーアイズ・トウーン・ドラゴンのぬいぐるみを愛で終えた蒼乃丞は何かを思い出すかのように顔を上げ、惚けていた顔を引き締めると抱いたぬいぐるみをそのままに片手だけをベッドサイドに置かれたデッキケースへ伸ばした。

手に取ったデッキケースの蓋を開け、そこから三枚の青眼の白龍

のカードを引き抜いた蒼乃丞はカードに映る青眼の白龍たちを眺めながら異空間での事を思い返す。

急に飛ばされた異空間、実体化した青眼の白龍、そして過去と未来のビジョン。

《赤き竜》が導いたであろう異空間にシグナーでない自分が介入する事ができたのは間違いなく青眼の白龍の力だろう。

龍可の言葉を借りるならばデュエルモンスターの精霊の力と言うべきか。

精霊の声を聞けると言う龍可が言うには蒼乃丞自身にも精霊と心を交わす力が備わっているらしいが、どうにも蒼乃丞にはその実感が湧かなかった。

当然と言えば当然か。

今まで非現実的な事は一切認めてこなかった蒼乃丞である。

非現実的な現象が存在する事自体は認めるに至ったが、自身が非現実的なオカルトの力を備えた事に対しては認めることが出来なかったのだ。

しかし、蒼乃丞の掌に残った青眼の白龍たちの暖かさや感触は紛れもない本物で、本来ならばシグナーでしか立ち入る事のできない空間に彼らが自分を招いたのも事実。そして青紫に燃える蜘蛛の地上絵に飲み込まれるサテライトを未来のビジョンとするのならば、自分にその光景を見せた青眼の白龍たちの思惑は。

様々な思考が絡み合い迷宮のように複雑に入り組んでいく中、蒼乃丞は身体の力を抜くと背中を後ろに預けるようにして倒す。

些か乱暴に身を倒した蒼乃丞であったが、最高級の素材と家具職人の匠の技によって作られたベッドは彼女の身体ををこれ以上ないほどに優しく抱きとめ、気持ちの良い寝心地を提供してくれた。

この世のものとは思えない極上の寝心地を与えてくれるベッドをキャンパスに、自身の豊かな亜麻色の髪で美しい波紋を描いた蒼乃丞は一つ寝返りを打つ。

ブルーアイズ・トゥーン・ドラゴンたちのぬいぐるみを抱え、三

枚の青眼の白龍を手にとったまま横になった蒼乃丞は今一度青眼の白龍たちを見つめると、静かな声で呟くように問いかけた。

「……青眼の白龍たちよ。ボクと共に栄光のロードを歩む我が半身たちよ。お前達はボクに一体何をさせたいというんだ………」

だが、彼女の目に映る青眼の白龍たちは何も応えてはくれない。彼らは静かにカードの絵の中で蒼乃丞を見つめるのみだった。

「……まったく。何をやっているんだろうな、ボクは」

どれだけの時間、見つめ合っていただろうか。

言葉を返してくるはずのないカードに言葉を投げかけると言う、今まで絶対にしなかった自身の行動に苦笑を漏らした蒼乃丞は青眼の白龍たちをデッキケースへと戻すために身を起こす。

わからない事を延々と悩んだところで非生産的だ。

それに、今日は色々な事があって疲れた。青眼の白龍たちをデッキケースに帰したら今日のところは寝て、また明日に考えるところ。そう結論つけてベッドから降り立った蒼乃丞の耳に寝室の扉が開く音が聞こえた。

最高位のセキュリティで護られた社長関連の部屋に足を踏み入れる事を許されているのはただの一人しかない。

蒼乃丞の右腕であり彼女に仕える忠臣、磯野だ。

しかし、ここで蒼乃丞はおかしな事に気がつく。

彼女は海馬コーポレーション総帥という公人であるが、同時にうら若き乙女である。

いつもの磯野ならば、どのような緊急事態であろうとも蒼乃丞の寝室に無断で立ち入る事はしないはずだ。

なのに今回はノックもなしで足を踏み入れたのである。

磯野らしくない行動に蒼乃丞が磯野のいるほうを振り向いてみる

と、何故か磯野は腕に決闘盤を装着していた。

それだけではない。

扉の前に立つ磯野からは普段の彼とは違う邪悪な雰囲気かじみ出ていたのだ。

「貴様……磯野ではないな」

磯野の余りの変容振りに、蒼乃丞は自分の前に立つ磯野が別人である事を見抜く……いや、コレには多少の語弊があるか。

彼は紛れもなく磯野本人だ。それは間違いない。

社長関連の中で最高位のセキュリティを誇る寢室の生体認証はイーガーを持つてしても誤魔化せるものではない。この部屋に入つてこれた事こそ、彼が磯野本人である証拠なのだ。

だが、それは磯野の身体に関してのみという注釈がつく。

つまりは、と言う原理かは知らないが誰かが磯野身体を乗っ取り操っているのである。

それを一目で見抜いた蒼乃丞から発せられた問いかけに対し、磯野は何も応えることなくただ右腕を振るつた。

すると、磯野の右腕に蜘蛛の痣が浮かび上がったではないか。

同時に蒼乃丞と磯野の周りを青紫の炎が走ると、二人を困う様に取り囲んだ。

まるで闘技場のように二人を閉じ込めた青紫の炎と、磯野の腕に輝く蜘蛛の痣……それは蒼乃丞にとって見覚えがあるモノだった。

「ッ！ それは、未来のビジョンで見えた蜘蛛の地上絵と同じ痣！？」

磯野の腕に輝いていた痣こそ、シグナーたちと共に見たサテライト崩壊のビジョンに出てきた蜘蛛の地上絵だったのである。

その蜘蛛の痣を磯野が持っているという事実か蒼乃丞が慄く中、

決闘盤を起動させた磯野は唇の端を吊り上げると蒼乃丞に向かって静かに言葉を紡ぐ。

「さあ、蒼乃丞様。闇のゲームを始めましょう」

磯野の紡いだ言葉により《赤き竜》に導かれし者たちとの邂逅の幕が降り、新たな物語の幕が上がる。

それは冥府より誘われし亡霊たちとの戦い。

五千年の時を越えた光と闇の戦いが始まった瞬間であった。

完全に日が沈み、星々がその運行を始めた深夜。

侵されざる天空の領域たるトップスが海馬コーポレーション本社ビルの中に在って、さらに不可侵たるべき乙女の寢床である蒼乃丞の私室は今、不気味な青紫の炎に包まれていた。

まるで闘技場の様な炎の輪の中で対峙するは、この海馬コーポレーションの王である蒼乃丞と、彼女の一番の従者である磯野だ。

それは、本来であれば在りえざる対峙。

今まで忠を尽くしてきた家臣が何の前触れもなく謀反する……その悪夢の様な現実を前に、可愛らしいネグリジエを見に纏った蒼乃丞は磯野の腕に灯る痣を忌々しげに睨み付けていた。

シグナーの痣に酷似したそれこそ、サテライト崩壊という未来のビジョンに出てきた蜘蛛の地上絵そのもの。サテライトを滅ぼす元凶となるであろう蜘蛛の地上絵と同じ痣を磯野が持っていたのである。

それだけではない。

蒼乃丞の前に立ちはだかる磯野からは、普段の彼からは感じられない邪悪な気配を感じる。それに油断すれば吞まれてしまいそうな威圧感もだ。

まるで別人の様に変容してしまった磯野であったが、その実、真なる意味では彼は磯野ではなかった。

どういふ手品を使ったかは知らないが、磯野は何者かに操られているのである。

当然、蒼乃丞はこの事を自身の慧眼を持って既に見抜いている。

問題はどうかやって磯野を正気に戻すかと言う事なのだが、どうやらその方法を考えている時間はないようだ。

「さあ、蒼乃丞様。闇のゲームを始めましょう」

燃え盛る炎の闘技場の中で磯野が決闘盤を起動させ、臨戦態勢を取ったのである。

不気味に輝く蜘蛛の痣や、操られた磯野などの非現実的な状況の数々に対する疑問は尽きないが決闘を申し込まれては是非もない。

決闘を前にして敵に背を見せるは海馬蒼乃丞に非ず。

自身の前に立ちただかるならば、その全てを完膚なきまでに粉碎するのみ。それは操られているとはいえ磯野に対しても例外ではなかった。

蒼乃丞は不敵な笑みを漏らしながらベッドサイドに置かれた決闘盤とデツキケースに手を伸ばす。

「闇のゲームとは大きく出たな。いいだろう！ 貴様がどこの誰かは知らんが、ボクに決闘を挑んだ事を後悔させてやる！！」

一見すると青眼の白龍を見事に彫り出した彫刻芸術の美術品にか見えない決闘盤を手にとった蒼乃丞は澱みのない動作で決闘盤を腕に装着すると、デツキケースから引き抜いたデツキを決闘盤へと挿入した。

デツキの挿入を感知した決闘盤が起動し、動力機関であるモーターに虹色の光が灯る。

決闘盤を起動させ凜と構える蒼乃丞であったが、その装いは決闘には場違いな可愛らしいネグリジエ姿。流石にこの場では似合わないと思われた彼女の格好だったがしかし、不思議とそれが不似合いであるなどは欠片も感じなかった。

むしろ、その場違いな衣装が普段より彼女を妖しく魅せているではないか。

美しく愛らしい容姿と幼さを強調する寝具の下に苛烈な闘志と気

高き心意を抱える様は、まるで妖精の女王ティタニアだ。

そして、蒼乃丞をティタニアとするならば磯野は闇からの使徒と
いったところか。あながち間違いではない表現である。

しかして、戦いの準備は整った。

蒼乃丞と磯野。現実ではありえなかった主従の戦い。

その幕が今、闇のゲームとして切つて落とされた。

「決闘ッ!!」

磯野LP4000

蒼乃丞LP4000

二人の発した決闘の言葉に共鳴するかのように青紫の炎は、より
一段と激しく燃え盛る。

より堅固となった炎の檻の中で、磯野は普段の彼では絶対に浮か
べない寒々しい笑みを蒼乃丞に向けた。

「さあ、もうこれで貴女は闇から逃れる事はできません。共に久遠
の虚無に沈みましょう、蒼乃丞様」

「逝くなら一人で勝手に逝け。特別にボクが引導を渡してやる。も
ちろん磯野は返して貰うがな」

何時もの従順な部下の調子で、しかし確かな敵意と殺気を隠しも
しない磯野であったが、流星は蒼乃丞と言うべきか。

ただの凡夫ならば磯野の放つ濃厚な死の気配に中てられて立つ事
すら叶わない中で、磯野から放たれる殺気を涼しげな表情で往なし
たのである。

しかし往なしたとは言え、それでも肌に纏わりつく殺気に不愉快

を感じたのか蒼乃丞は鼻を一つ鳴らすと、殺気を放つ磯野にとんでもない提案を口にした。

「ふうん、それにしても無粋な殺気だな。そんなに逸るならば先手は貴様にくれてやる」

何と、先攻を磯野に譲ったのである。

一見すると決闘の勝敗には直結しそうにない要素に見える先攻後攻。しかし、実のところ決闘ではこれが非常に重要な要素足りえるのだ。

では何故、先攻を取る事が有利足りえるのか。

その理由は決闘のルールに起因する。

当然の事だが、決闘開始直後の互いの場には一枚のカードもない……何を今さらと思うだろうが、今一度よく考えて欲しい。

自分の場に何もカードがない常態で、相手の発動する切札を止められるか否か。

答えは当然、否である。

そう、これこそが先攻に与えられた絶対にして唯一のアドバンテージ。先攻は最初のターンに限り、相手に阻まれる事なくカードを発動する事ができるのだ。

この絶対的なアドバンテージを蒼乃丞は自分から捨てたのである。余裕故か前述した以上の利を後攻にあると見たのか……蒼乃丞の口ぶりからすれば、恐らくは前者だ。

しかし、過ぎた余裕は慢心となり身を滅ぼす毒となる事を理解していない蒼乃丞ではあるまい。なのに何故、彼女はそれを理解しながら自身の中から捨て去らないのか。

その答えは至って単純。

捨て去らないのではない、捨て去れないのだ。

彼女の見せる余裕の源泉たる慢心こそが、彼女が蒼乃丞である事

の 王である事の証なのだから。

慢心故に王は広く人を愛し、慢心故に王は人に殺される……その大いなる矛盾を孕んだ心意を持つことこそ王たる証明にして宿命なのである。

ジャックも偽りとはいえ王故に慢心し、慢心故に遊星に負けたのだ。

もっとも蒼乃丞は慢心が生む毒ごときに負けるつもりはさらさらない。むしろ、その毒さえも飲み干し平伏させてこそ真の王だと彼女は考えていたのである。

慢心せずして何が王か 　これこそが蒼乃丞が磯野に先攻を譲った行動原理だった。

それにこれは同時に、磯野に対する意趣返しでもある。

無遠慮に殺気をぶつけて来た磯野に対して、蒼乃丞も同じだけの気迫で持つて殺気を押し返す事も可能であったのだが彼女はそれを良しとしなかった。

無粋を無粋で返すのは無粋の極み。それは蒼乃丞の美学に反する事だ。

故に蒼乃丞は相手にアドバンテージを与えろというリスクを負ってまで後攻を取る事で、磯野の無粋を小粋に返したのである。

「では、失礼して……私のターン」

己が放った殺気を小粋な技で持つて涼しげに返された磯野は蒼乃丞に対して芝居がかった形だけの慇懃な礼を返すと、カードをドロすべくデッキへと手を伸ばした。

磯野はドロしたカードを一瞥すると、引いたカードをそのまま場へと召喚する。

「魂を削る死霊を守備表示で召喚！」

魂を削る死霊

3

ATK300

DEF200

磯野が召喚したのは死神の鎌を持つ不気味なアンデットモンスター、魂を削る死霊。

攻撃力と守備力の数値だけ見れば余りにも頼りないモンスターであるが、この魂を削る死霊の持つモンスター効果はなかなか厄介な代物だった。

その効果とは戦闘では破壊されない破壊耐性能力と、相手に直接攻撃でダメージを与えた時、相手の手札一枚を墓地へと送る手札破壊能力。

カードの効果対象になった時、自壊すると言うデメリットも併せ持つモンスターであるが、それを抜きにしても汎用性の高いモンスターカードであり、戦闘においては無敵の壁である事に変わりはない。

究極の壁モンスターとも言える魂を削る死霊を召喚した磯野は、さらに手札から二枚のカードを手にとった。

この磯野の動きに、蒼乃丞は早速仕掛けてくるのかと身構える。先攻のアドバンテージを利用して何らかの切札を切ってくると思っただのだ。

「さらにカードを二枚伏せて、ターンエンドです」

しかし、磯野はリバースカードを二枚セットしたのみ。

余りにも消極的な磯野の戦術に対して、蒼乃丞は些か不満気な態度で鼻を鳴らす。

「ふうん。大口を叩いた割に、やる事はせせこましい限りだな。破壊耐性モンスターで守備固めとは拍子抜けもいいところだ。だが

「そこで言葉を区切った蒼乃丞は力強く瞳を見開くと、高らかに吼えた。

「その程度の守りでボクの攻撃を阻めると思うな！ ボクのターンッ！！」

蒼乃丞の凜とした声の元、彼女にターンが回ってくる。

まるで獲物を狙う猛禽類のように瞳を光らせた蒼乃丞は、その手をデッキへ伸ばすと勢いよくカードをドローした。

デッキからカードを引き抜いた蒼乃丞はドローしたカードを手札に加えると、改めてその内容を確認する。

もし手札にモンスター破壊かモンスターを対象に取れるカードがあったのなら、それで魂を削る死霊を破壊してやろうと目論んだ蒼乃丞だったが、そう事は上手く運ばないらしい。

残念な事に今の蒼乃丞の手札には魂を削る死霊を破壊できるカードはなかった。

しかし、この程度の事で簡単に引き下がる蒼乃丞ではない。

蒼乃丞は今ある手札から取り得る最高の戦術を即座に弾き出すと、手札から二枚のカードを抜き取った。

そして蒼乃丞は、まずその中の一枚を場へと召喚する。

「チューナーモンスター、伝説の白石を召喚！」

伝説の白石 1 ATK300 DEF250

蒼乃丞が召喚したのは彼女のデッキでは最早お馴染みとなったチ

チューナーモンスター、伝説の白石。

デュエル・オブ・フォーチュンカップではA・O・J カタストルをシンクロ召喚するための素材になったり、蒼乃丞の手に青眼の白龍のカードをもたらしたりと八面六臂の活躍をしたモンスターであるが、このタイミングで場に出す事については首を捻らざるを得ない。

何故ならば、伝説の白石は遊星のジャンク・シンクロンやアキの夜薔薇の騎士の様に自身の召喚に際して他のモンスターを特殊召喚する事のできる効果を持ち合わせていないからだ。

つまり、自分の場に他のモンスターがない状態で召喚しても、即シンクロ召喚へ繋げる事の出来ないカードなのである。

だが、蒼乃丞は自分の場にモンスターがないにも関わらず伝説の白石を召喚した。

一見すると不合理にしか見えない手だったが、この不合理を逆転させる手立てが蒼乃丞にはあったのだ。

それこそ、蒼乃丞が手に持ったもう一枚のカード。

蒼乃丞はそのカードを天高く掲げると、カードが持つ特殊効果を高らかに述べた。

「光属性チューナーモンスターの召喚に成功した時、手札にあるこのカードは場に特殊召喚する事ができるッ！」

その効果とは、チューナーの召喚に際して自身の効果で場に出る事のできると言う効果。

効果を発動する事のできるチューナーに縛りはあるものの、これならばジャンク・シンクロンや夜薔薇の騎士同様、速攻でシンクロ召喚を行うことが可能となる。

そして伝説の白石は光属性のチューナーモンスター。

特殊召喚の発動条件は、ここに満たされた。

蒼乃丞は掲げたカードを決闘盤へと振り下ろしながら、そのモン

スターの名前を高らかに呼ぶ。

それは聖なる力を宿す美しき女神。

いかなる逆境をも逆転させ、持ち主に勝利を与える閃光の女神。

悠久の時を越え、新たな命を吹き込まれたかつてのカード。

その名は。

「来い、エクスシアイ・アストレア - 逆転の女神 - ！！」

エクスシアイ・アストレア - 逆転の女神 - 6 ATK 180

0 DEF 2000

伝説の白石の召喚をトリガーに、蒼乃丞の場に一体の女神が舞い降りる。

それはかつて、海馬瀬人が持っていたカードのリメイク。

新たな力を得て生まれ変わった逆転の女神の姿がそこにあった。

レアカードながらに見合わぬステータスの所為で観賞用にしかならなかった逆転の女神だったが、チューナーの召喚に際して自身を特殊召喚できると言う強力な効果を身につけた事で、真にレアカードと呼ぶに相応しいカードとなったのである。

この逆転の女神の効果により、蒼乃丞の場にはチューナーとチューナーでないモンスターがシンクロ召喚に必要な素材が今、揃った。

場に揃ったシンクロ素材である二体のモンスターを前に、蒼乃丞は笑みを浮かべながら静かに語りかけるようにして言葉を紡いだ。

「貴様に新たな伝説を見せてやる」

果たして、その言葉は何を意味するのか。彼女の語る新たな伝説

とは……………。

その答えを考える間もなく、蒼乃丞は指揮者の様に腕を天へと振り上げた。

そこにこそ、先の言葉の答えがあると云わんばかりに。

「6のエクシア・アストレア - 逆転の女神 - に 1、伝説の白石をチューニング！」

蒼乃丞の指揮の下、伝説の白石はその身を一個の星へと変え宙に一輪の環を描いた。

宙を舞う星が光の尾を引く中で、蒼乃丞は星々を導く祝詞を高らかに謳う。

それは新たな伝説の始まりの詩。

かつて在りし伝説が、新たに生まれ変わる新生の詩。

「白き輝石の輝きが、新たな伝説を刻みだす！ 光さす道となれ！
シンク口召喚！！！」

蒼乃丞の詩と共に七つの星が宙を舞い、星々が一列の軌跡を光の道を描いた。

その光の道を切り裂いて現れるは、伝説を纏いし戦乙女。
青眼の白龍から加護を受けた、新たなる青眼の伝説だ。

「新生せよ、ブルーアイズホワイトケルキュリア青眼の白騎士姫ッ！！！」

最後に紡いだ蒼乃丞の言葉と共に光の道が弾け、光の粒子が雪のように舞い散る中それは現れた。

青眼の白騎士姫 7 ATK 2100 DEF 1600

澄んだ青き瞳。白磁の肌に、白金の長髪。

その身に纏う流麗な鎧も、白き龍があしらわれた長剣も、全てが青と白銀のツートンカラー。

かつての伝説と全く同じ色を備えた新たな伝説は、その背に爆ぜた光の粒子を集め、天使の翼を現出させながら蒼乃丞の場に降臨したのだった。

光の残滓によって作られた天使の翼は地に降り立つと同時に四散したが、それでも白銀の戦乙女から放たれる威光は一片たりとも霞む事はない。

これこそが青眼の白騎士姫。遙かな時を超えて新生した青眼の伝説だった。

そして今、その新たな伝説が時を刻みだす。

「伝説の白石が墓地にいった事で効果発動。デッキから青眼の白龍のカード一枚を手札に加える。そして」

伝説の白石の効果でデッキから青眼の白龍のカード一枚を手札に加えた蒼乃丞は、その青眼の白龍のカードを掲げると青眼の白騎士姫を指差した。

「青眼の白龍が手札に加わったこの瞬間、青眼の白姫騎士の効果が発動！ 自分の手札にある青眼の白龍のカード一枚に付き、青眼の白騎士姫の攻撃力は300ポイントアップするッ!!」

蒼乃丞の言葉と共に青眼の白騎士姫が発動するは、攻撃力アップの効果。

今、蒼乃丞が手札にある青眼の白龍は先の伝説の白石の効果で加えた一枚……よって青眼の白騎士姫の攻撃力は一段階、300ポイ

ントアップする。

青眼の白騎士姫	7	ATK2100	2400	DEF1600
---------	---	---------	------	---------

かつての伝説である青眼の白龍から力を受け、その身に聖なる白
いオーラを纏った青眼の白騎士姫　その姿はまるで、古の伝説か
ら力を借りて戦う勇者の様だった。

しかし、真に恐ろしきは蒼乃丞の戦術か。

青眼の白騎士姫のシンクロ召喚に青眼の白龍をサーチ出来る伝説
の白石を使う事で、青眼の白龍を手札に加えつつ青眼の白騎士姫の
効果をも発動させる……………。

互いが互いに有利に作用し合うこのコンボは、まさに見事の一言
だ。

シンクロ召喚“する”という結果のみに止まらず、一連のプロセ
スさえも余すことなく利用する……………これこそ蒼乃丞が決闘の真骨頂
だった。

そして、この戦術で召喚・強化された青眼の白騎士姫を持って、
蒼乃丞は磯野の場の魂を削る死霊に対し攻撃を宣言する。

「青眼の白騎士姫で魂を削る死霊を攻撃！」

蒼乃丞の号令を受けた青眼の白騎士姫は長剣を軽く振るうと地面
を踏みしめ、魂を削る死霊に猛烈な突進をかけた。

この蒼乃丞の攻撃に対し、磯野は慌てるでもなく高らかに言い放
つ。

「無駄な事です！　魂を削る死霊は戦闘では破壊されない！」

そう。磯野の言うとおり、彼の場にいる魂を削る死霊は戦闘では破壊されない効果を持つ不死のモンスター。

どれだけ攻撃力を高めようとも、この効果の前にはいかなる攻撃も通用しないのだ。

しかし、そんな事は蒼乃丞にとって百も承知。

蒼乃丞の召喚した青眼の白騎士姫には、魂を削る死霊を打破するための第二の効果があったのだ。

「しかし、戦闘ダメージは発生する！ 青眼の白騎士姫は攻撃した守備表示モンスターの守備力を攻撃力が超えていれば、その差分だけダメージを与える貫通効果を持つモンスター！！」

貫通能力。

それこそが青眼の白騎士姫が持つ第二の効果にして、鉄壁を誇る魂を削る死霊の護りを突き破る蒼乃丞の一手。

魂を削る死霊は、その強力な効果の代償にステータスは最低値のものしか持ち合わせていない。たとえ不死の能力を持っていたとしても、その僅かな守備力では貫通効果を持つ高攻撃力のモンスターの蹂躪を押し止める事は不可能なのだ。

蒼乃丞はその弱点を突いたのである。

「ッ！？」

青眼の白騎士姫が持っていた貫通効果に磯野が息を呑むのを尻目に、蒼乃丞は高らかな声を凜と響かせた。

「ボクの前に雑魚モンスターを並べた事を後悔するがいい！！ 青眼の白騎士姫よ、奪命の一撃を持ちて敵の魂魄を穿て！ ヴォーパル・ストライクッ！！」

蒼乃丞の放った言葉と共に白銀の流星が軌跡を画く。
全ては一瞬。

その一瞬の間に青眼の白騎士姫は魂を削る死霊へ迫ると、腕を引き絞り目にも留まらぬ速さで長剣を突き立てたのだ。

「ぬっううッ!!」

磯野LP4000 1800

貫通効果により魂の削る死霊を突き抜けた青眼の白騎士姫の攻撃は、磯野のライフポイントを大きく減らしたのだった。

初期ライフポイントの半分余りを一気に奪う大ダメージ。
それをたった一度の戦闘で奪い去って見せた蒼乃丞は、余裕の笑みを浮かべながら鼻を一つ鳴らした。

「ふうん。この程度の守りでボクを止められると思った貴様の浅はかさを呪うんだな」

この蒼乃丞の言葉に対し、磯野は自分の場に視線を向けながら蒼乃丞に言葉を返す。

「確かに貫通効果モンスターの警戒を怠ったのでは、浅はかと罵られても致し方ありませんね。しかし蒼乃丞様、伏せカードを警戒もせずに攻撃を加えてくるとは貴女も些か浅はかではありませんでしたか？」

磯野が向ける視線の先。

そこにあつたのは磯野が先のターンの終了間際に伏せた一枚の伏せカード。

「罠か魔法か……どちらにせよ攻撃する側からすれば無視する事のできないモノのはずである。しかし、蒼乃丞は警戒すべき伏せカードを前にして攻撃を敢行したのだ。」

これは磯野でなくとも彼女が攻撃に逸つたと見るのも無理はあるまい。

しかし、無防備に見えたこの攻撃でさえ蒼乃丞の戦術の内だった。

「このボクを浅はかと断じる、その威勢だけは褒めてやる。だが、このボクに決闘の講釈を垂れるには一世紀早い！ 決闘において罠による迎撃を恐れて攻め手を緩めるは愚の骨頂ッ！ 僅かなダメージが致命的となる終盤に罠を残してしまふくらいならば、リスクの少ない序盤にあえて相手に使用を強要させるは決闘の定石だ！！」

確かに場に伏せられた魔法・罠カードは見落としてはいけない重要なポイントだ。

これを見落とし攻撃に逸れば手痛い反撃をくらう事となる。

しかし伏せカードがあるからといって迎撃を恐れ、攻め手を緩めるのは下策でしかない。

何故ならば、場に伏せられたカードは使用されるか破壊されない限り場を離れる事はないからだ。つまり、この場を見送ったところで相手の場には伏せカードが残り続けるのである。

それでは何も問題の解決にはならない。

蒼乃丞の言うとおり、相手の伏せカードに対処する事のできるカードが手札にない場合は例え見え透いた罠であろうとも挽回できる序盤に使わせるほうが攻め手の利となるのである。

使わせれば良し。使わせなくとも良し。ブラフであるならば、さらに良し。

心理戦を含めた決闘の主導権争いにおいて、この戦術は大きな意

味を持つのである。

「なるほど。蒼乃丞様のご高説、感服いたしました。しかし」

高らかに言い放たれた蒼乃丞の決闘講義に仰々しい仕草で一礼して見せた磯野だったが、そこで言葉を区切ると口元に笑みを浮かべながら場に伏せてあつたカードに手をかけた。

「そんな貴女だからこそ、この罨は靨面に効果を発揮するのですよ。罨カード、発動！」

それは蒼乃丞の読みどおり罨カード。

しかし、罨発動前に磯野が言つた言葉が気にかかる。

蒼乃丞だからこそ効果が発揮されるとはどういう意味であるうか。その意味は発動された罨カードの効果にあつた。

「クトウグアの業火！ このターン相手から受けた戦闘ダメージ1000ポイントに付き一枚、相手の手札をランダムに墓地へと送ります」

「ッ！？ 手札破壊！！」

磯野の発動した罨は、受けたダメージに比例して相手の手札を墓地へと送る手札破壊の罨カード。

蒼乃丞が磯野に与えた戦闘ダメージは2200。

つまり二枚の手札が墓地に送られる事になる。

相手に与えるダメージが大きければ大きいほど効果を増す手札破壊の効果は、攻撃に比重を置き、罨が張ってあるうとも果敢に攻め込んで行く蒼乃丞には確かに効果靨面だった。

クトウグアの業火の効果により、手札にあつた宝札の天使とマン

ジユ・ゴッドを墓地へと送られた蒼乃丞の手札は残り二枚。

中身が別人とは言え、磯野にしてやられた事が気に入らないのか蒼乃丞は忌々しげな視線を磯野に向けた。

「……やってくれる」

普段の磯野ならば一睨みされただけで萎縮してしまいそうな蒼乃丞の貫くような視線を涼しげな顔で受け止めた磯野は、蒼乃丞に更なる追い討ちをかける。

クトウグアの業火にはある条件化で発動する追加効果があったのだ。

「それだけではありません。この効果で墓地に送った相手の手札の中にモンスターカードがあった場合、一枚につき500ポイントのダメージが相手プレイヤーに発生するのです」

その追加効果とは直接火力によるダメージ。

磯野の発動した罫カードは手札破壊ばかりか、ライフポイントに直接ダメージをも与える効果まで備えていたのだ。

クトウグアの業火により墓地に送られた蒼乃丞のカードは、二枚ともにモンスターカード……よって蒼乃丞には1000ポイントのダメージが発生するのである。

磯野の語ったクトウグアの業火の追加効果に蒼乃丞が驚く間もなく、墓地に送られた二枚のカードが灼熱の炎にまかれて爆ぜると、その衝撃が蒼乃丞の身体を貫いた。

「ああっうっうっッ!!」

蒼乃丞LP4000 3000

二つの小爆発によって発生した爆煙が部屋に漂う中で、蒼乃丞は自身を貫いた衝撃に戦慄を隠せなかった。

何故なら、蒼乃丞を襲った衝撃は身を引き裂く様な痛みを伴っていたのだから。

その紛う事なき本物の衝撃に、蒼乃丞は声を荒らげる。

「ッ、馬鹿な！ 本物の衝撃だと!？」

幻影であるソリッド・ビジョンが実体を持った現実となる決闘：

…それは、蒼乃丞にも覚えのあるものだった。

今日のデュエル・オブ・フォーチュンカップ準決勝、そこで戦った十六夜アキも幻影を現実へと化す力を サイコ決闘者の力を備えていたのだ。

しかしこの決闘、サイコ決闘者であるアキとの決闘とは似ているようで何かが違う。何が違うのかと問われれば答えに窮するが、それでも何かが決定的に違うのだけはわかる。

云い得ぬ何かが蒼乃丞の胸中で渦を巻く中、不意に視線を落とし先で蒼乃丞はそれを見つけた。

それはモンスターが地面を踏み砕いた足跡。

だが、それ自体は別に珍しいものではない。

実際アキもサイコ決闘者の力で決闘場や騎乗決闘のコースに傷をつけていたのだから。

だから足跡が一つあったところで、何ら不思議な事ではないのだ。それが青眼の白騎士姫によって作られたものでなければ……………。

そう。その足跡は他ならぬ蒼乃丞のモンスターである青眼の白騎士姫が刻んだものなのである。

ありえない事だ。

アキとの決闘でさえ、実体化したのはサイコ決闘者であるアキの

カードのみ。あの特殊な決闘の最中でも蒼乃丞のカードがアキに物理的なダメージを与える事は一度としてなかった。

なのに今は、磯野の攻撃ばかりか自分のモンスターまで実体化を果たしているのである。

このありえない現実にが意味するところ　それは至って単純で、しかし到底信じられないものだった。

「まさか、このフィールドでは互いの攻撃が実体となるのか!？」

青紫の炎が渦巻く決闘場で、蒼乃丞の声が響き渡る。

珍しく困惑の色が窺える蒼乃丞の言葉に対して磯野は何も答ええない。ただ蒼乃丞に向けて薄ら笑いを浮かべるのみだ。

しかし、かえってその沈黙が蒼乃丞の言葉を雄弁に肯定していた。その磯野の無言の肯定に、蒼乃丞は忌々しげな表情で舌打ちを一つ打つと、残った二枚の手札から一枚のカードを引き抜き決闘盤へとセットする。

「ちいッ！　カードを一枚セットしてターンエンドだ！」

苦々しげに放たれた蒼乃丞のターンエンド宣言に、磯野は満足気な笑みを浮かべながら言葉を返した。

「死への糸に少しずつカードと身体を絡めとられて行く心地はいかがですか、蒼乃丞様？」

まるで深淵から聞こえて来るような悪寒を覚える寒々しい磯野の声が蒼乃丞へと突き刺さる。

確かに罨にかかり手札を破壊され、実体を伴った衝撃で肉体を痛めつけられる蒼乃丞の姿は、蜘蛛の糸に絡められた儂い蝶のようだ。蜘蛛の糸に囚われた憐れな蝶は遠からず蜘蛛の餌食になるが運命

……なのだが、忘れてはいけない事が一つだけある。
それは蒼乃丞が儂い蝶ではなく、猛き百獣の王たる獅子であると
言うことだ。

「ふうん。手札二枚とライフポイントを四半削っただけでずいぶん
と余裕だな。未だにライフポイントは逆転せず、ボクの場合には攻撃
力2400の青眼の白騎士姫がいる。一見して貴様の畏カードはボ
クに痛打を与えたかに見えたが、まだまだだ。ボクを倒すには遙か
に足りん！ このボクを倒したければ、今の三倍は持って来いッ！
！」

クトウグアの業火が蒼乃丞に与えたダメージは彼女が語ったほど
決して小さなものではない。

未来への可能性とも言うべき手札を削られ、命がかかるこの場で
は命その物と言ってもいいライフポイントを四分の一も減らされた
のである。

しかし、蒼乃丞は吼えた。

心に灯る勝利への自信と決闘者としての誇りは、その程度で消え
去るものではなかったのである。

そして何より、蒼乃丞の手札には青眼の白龍が残っていたのだ。
幸運にもクトウグアの業火の手札破壊から逃れる事のできた青眼
の白龍の存在は、それ一枚をとって見ても未だ天が蒼乃丞の上にあ
ることを示す証。

青眼の白龍が共にある限り蒼乃丞に敗北の二文字はないのだ。

「どうやら、貴女は未だ闇の深さと恐ろしさを認識できていないよ
うですね……。では蒼乃丞様、貴女には最高の絶望を与えて差し上
げましょう」

未だ瞳と心に強き光を灯す蒼乃丞の姿に磯野は致し方ないと言う

仕草で首を振ると、もう一枚伏せてあつた伏せカードに手を伸ばした。

蒼乃丞に真の絶望を突きつけるために。

「リバースカードオープンッ！！ 速攻魔法、終焉の焰！ この効果により、私の場に黒焰トークン二体を守備表示で特殊召喚します」

黒焰トークン	1	ATK0	DEF0
黒焰トークン	1	ATK0	DEF0

磯野の発動した終焉の焰の効果により、蒼乃丞のターンのエンドフェイズに二体の黒焰トークンが磯野の場に現れる。

これで磯野の場に三体のモンスターが揃った。

それらは闇の祭壇に捧げられし生け贄……この三体の生け贄を持つて磯野は絶望の化身を降ろす。

「私のターン！」

そして迎えた磯野のターン。

口元を三日月のように浮かべながらカードをドロ―した磯野は、手札から一枚のカードを切った。

「二体の黒焰トークンをリリース！ 12のダークチューナー、DT ナイアルラトホテップをアドバンス召喚ッ！！」

DT ナイアルラトホテップ	12	ATK0	DEF0
---------------	----	------	------

二体の黒焰トークンを生け贄に召喚されたのは不気味に浮かぶ黒い霧の様な闇。

闇よりもなお暗い黒き翼と、爛々と燃える三眼を闇に浮かべたそのモンスターは異様な威圧感を放ちながら磯野の場に舞い降りた。それもそのはずである。

このカードの原型となったモノは宇宙の全てを冷笑し嘲笑し失笑する神性にして、狂気と混乱をもって世界を侵し冒し犯す旧支配者が一柱なのだから。

千の貌を持つ者、無貌の神、世界を弄ぶ者、混沌の守護者、黒き王……様々な呼び名があれどコレが一番彼の神を端的に言い表しているだろう。

這い寄る混沌。

その邪神の名を冠せられたモンスターこそ磯野が召喚した闇属性最高 を誇るモンスター、DT ナイアルラトホテップだったのである。

しかし今回、このモンスターの最も注目すべき点はその名に冠せられた宇宙的恐怖神話のビッグネームなどではない。デュエルモンスターズ界最高峰の 12 でありながら攻守が共に 0 であると言うステータスの低さでもない。

それ以上に注目すべき点 それはこのモンスターのカテゴリリーにあった。

磯野は召喚の際、そのモンスターをこう言ったのである。

「ダークチューナー……だと………ッ!？」

ダークチューナー。

それは、世界に名を連ねる大富豪としてデュエルモンスターズの

資産家としても名高い蒼乃丞をして始めて聞くモンスターカテゴリだった。

未知なるモンスターの出現に蒼乃丞が声を戦慄させる中、その未知なるモンスターであるDT ナイアルラトホテップを従えた磯野は不気味に嗤う。

既に勝利を掌中に収めたと云わんばかりに

「ふっふふ。これぞ闇の扉を開く鍵にして、全てを久遠の虚無へと帰す道標……。今こそ、深く暗い闇への扉が開く時！」

「貴様、何を言っ

まるで意味がわからない文言を呪文の様に述べた磯野は蒼乃丞の問いかけも置き去りに、古の神官が儀式を始めるかの様に腕を大きく広げた。

「場に残った魂を削る死霊に、DT ナイアルラトホテップをダークチューニングッ！」

この磯野の言葉と共に闇の塊とも云えるDT ナイアルラトホテップが姿を変える。

形なき闇であるDT ナイアルラトホテップがその身を夥しい数の触手へと変じさせた次の瞬間、信じがたい事が起きた。

何と、その無数の触腕を味方であるはずの魂を削る死霊へと殺到させたのである。

無数の触手に呑み込まれた魂を削る死霊は触手に抵抗するように触手の肉塊の中で苦しい呻き声を上げるが、逆に云えば出来た抵抗はたったのそれだけだった。

「DT ナイアルラトホテップは 1 2、魂を削る死霊のは3…。見えざる闇よ、姿を現せッ！」

しかも、悪夢はまだまだ続く。

磯野の言葉と共に、身動きの取れない魂を削る死霊の身体に触手を通してDT ナイアルラトホテップから十二個の星が注入されたのだ。

自身の を超える の侵入に、魂を削る死霊は声にならない悲鳴を上げる。

しかも星はただ侵入しただけではない。

侵入したDT ナイアルラトホテップの が魂を削る死霊の を蝕み始めたのである。

その様はまさに侵食。闇を持って光を喰らう忌まわしき外法の力だった。

DT ナイアルラトホテップからの身の毛もよだつ侵食の果て、全ての を喰われた魂を削る死霊は断末魔の悲鳴を上げて碎け散る。後に残ったのは黒く輝く暗い九つの凶星だった。

星が星を喰らい、輝けるはずの星を黒く染めた異様な光景に蒼乃丞は驚愕の声を漏らす。

「馬鹿な……星が闇に堕ちただと!？」

闇に光を喰われ、白き輝きを黒に墮とす。

声を戦慄かせながら紡ぎだされた蒼乃丞の表現は、なるほど云いて妙だった。

そして、その表現はこれから起こる現象を的確に言い例えていたのだ。

「やはり蒼乃丞様は聡明でいらっしゃる。そう、光り輝く星は闇へと墮ちたのです。そして、ダークシンクロ召喚はチューナー以外のモンスター一体の から、ダークチューナーの を引いた数と同じのシンクロモンスターを召喚できるのです」

闇の堕ちた星々が狂おしいまでに回り周り廻る中で磯野が語るは、闇のシンクロ召喚。

しかし、それは今までのデュエルモンスタースの歴史を大きく覆すものだった。

「そ、そんな馬鹿な事があるかッ！ 3から 12をマイナスしたら」

蒼乃丞が首を大きく振りながら磯野の言葉を否定する。

だって、そうだ。

デュエルモンスタースに存在するモンスターの 最低の 1から最高の 12まで。それ以上の も、それ以下の もありはしない。

それが今日まで続いてきたデュエルモンスタースの摂理であり常識だ。

しかし、その摂理と常識は今日を持って覆る。

「あるのですよ。私達、闇の世界には…… 9のモンスターがね」

断じてその存在を認めない蒼乃丞に突きつけるようにして磯野がエクストラデッキから取り出して見せたのは、黒い縁で覆われたカード。

既存のカードとは一線を画す色を持つそれが記す は 9。

右から順に明るい色で記されているはずの までもが、真逆の左から暗い色で記されていたのだ。

そのカードこそ、白のカードであるシンクロモンスターと対極をなす黒のカード。

ダークシンクロモンスターのカードであった。

「ッ!？」

ありえざるカードの存在に蒼乃丞が言葉をなくす中、磯野は今一度腕を大きく振り上げる。

「闇と闇重なりし時、冥府への扉は開かれる……光なき世界へ！
ダークシンクロ!!」

磯野が紡ぐ言葉は深き闇に捧げる邪教の祝詞。

この詩と黒き九つの凶星を持って、磯野は古代都市と共に眠りし邪神を覚醒させる。

それは水を象徴する旧支配者の一柱にして、広い海洋に覆われた地球においては最強を誇る水の属性が長たる神性。

その名は。

「出でよ、絶望のクトゥルフ!!」

黒い輝きを引き裂いて、絶望の闇が帳を下ろす。

その闇の中から這い出るように、それは姿を現した。

生きたままの生物から引きずり出した新鮮な腸を地面にぶちまける様な不快な音を鳴らして……………。

絶望のクトゥルフ 9 ATK3000 DEF3000

生理的嫌悪を覚える音と共に顕現したそれは、その姿さえも人には到底受け入れる事のできない醜悪で魁偉な異形のモノであった。とても名状し難く、口にするのも憚られるとはまさにこの事だ。だがあえて、それを言語化するならば 検閲削除 に似た

検閲削除 の様な 検閲削除 した 検閲削除 のあ
る 検閲削除 に覆われた 検閲削除 状の身体、 検
閲削除 の様な細い 検閲削除 を持つ異形の化物である。
もしこの場に凡百の者がいたならば、その余りのおぞましい姿に
発狂していた事だろう。

まさに絶望を冠するに相応しすぎるモンスターだった。

「ダークチューニングにダークシンクロ……まさか、そんな事が……
……ッ!」

ありえざる召喚方法で召喚された相容れない異形の怪物を前に、
流石の蒼乃丞も一歩後ずさるを得ない。

それだけの圧倒的な威圧感を絶望のクトゥルフは放っていたので
あった。

Turn - 12 絶望の邪神 暴かれた王の弱さ

青紫の焰の中で蒼乃丞は今、狂気と絶望に対峙していた。

ありえざる方法 から を引く事で行われるダークシンクロ。その独特の召喚方法で召喚された黒いカードに描かれた のダークシンクロモンスター！。

絶望のクトゥルフ 9 ATK3000 DEF3000

今までの常識を覆す闇のシンクロ召喚によって召喚された邪神が、その禍々しいまでの神性を持って蒼乃丞の前へと立ちはだかつていたのだ。

言葉にするのも憚られる醜悪な姿。

ただの凡人ならば一目見ただけで心を碎かれるその異形。

絶望の名を冠された邪神を前に、蒼乃丞は生まれて初めて敵を目の前にして後ずさった。

恐怖に声を戦慄かせ、膝を震わせながら

「……………あッ……………ああ……………ッ」

こんな蒼乃丞の姿を誰が想像できたであろう。

常に自信と威厳を見に纏わせ他者を平伏させる海馬蒼乃丞が、苛烈と熾烈を持って己が道を切り開く不敗の決闘者たる海馬蒼乃丞が、敵を前に後退したのである。

もはや彼女に道を開きたる王の姿はない。

そこにあるのは見た目相応、在りえざる狂気に恐怖し怯える少女

の姿だった。

しかし、それも無理はあるまい。

むしろ蒼乃丞のこの反応は人として正しいモノであると言い切れる。

例え王であろうとも人である限りこの狂気を振りまく異形を見て恐怖しないものなどいない。この邪神を目にして平静を保てるのは邪神と同じく闇に棲む者か、そうでなければ既に壊れた者のみ。

故に仕方がない。

誰かの声が蒼乃丞の心に響く。

この異形の怪物を前に心折れるのは人である限り仕方のない事だと。これを前にしたならば膝を屈するのは何も恥ではないのだと。

だから諦めよう。

ここで諦めても誰も貴女を責めたりはしない。

絶望をその名に冠された邪心を前に、姿の見えない誰かから甘美な誘いが蒼乃丞の心を揺らす。

誇りも矜持も何もかも捨てて、デッキの上にその掌をかぶせよう。

そうすればきつと楽になれる。

どこからともなく響くその言葉に蒼乃丞は決闘盤に挿し込まれた己がデッキを見た。

その通りだ。

声の言う通り、サレンダー投了すれば決闘は終わる。

決闘が終われば醜い怪物は消えてくれる。あの怪物と対峙するくらいならば あまつさえアレと戦わねばならないと言うのならば

戦いを放棄し負けを認めたまはうがずっとマシだ。

足元の定まらない沼地のような思考の元、姿の見えぬ誰かの誘いに導かれ、その結論に至った蒼乃丞は光を燈さぬ死人の様な目でゆつくりと右手をデッキの上に掲げた。そして、掲げたその手をデッキに向けて徐々に下ろしていく。

この光景に蒼乃丞の前に立つ磯野は口元を愉悦に歪めた。

いかに傲慢で苛烈な王といえど、絶望を体現した闇の前では無力な少女だ。真なる闇の力を持ってすれば人の心など如何様にも手折る事が出来る。

その証明が今、磯野の目の前で完成しようとしていた。

闇によって相手の心を折っての勝利。

それは磯野にとつては完璧な勝利であったがしかし、同時に磯野は物足りなさを覚えていた。

現に今もう一箇所で行われている我が身の分身と不動遊星の決闘は中々いい勝負になっている。恐怖と痛みと言う違いはあるが、遊星の方は身を切り刻む痛みと身を凍らせる冷気を前にしても未だに闘志は尽きていなかった。

対してこちらは余りにも歯ごたえがなさ過ぎる。

まあ、この後にはジャック・アトラスとの決闘も控えているのだ。今感じている物足りなさはそちらで解消するでしょう。磯野がそう考える間に、とうとう蒼乃丞の掌はデッキの三センチ上まで来ていた。

あと少し。

あと少しで蒼乃丞の敗北が決定しようとした、その時。

ドクン。

と、蒼乃丞の耳に何かが脈打つ音が聞こえた。

その脈動に蒼乃丞の瞳に光が甦ると同時に思考がクリアになる。

そこで蒼乃丞は初めて、今自分が何をしようとしていたのかをハッ

キリと自覚した。

水平に掲げられたデッキと、それにかぶせられようとしている自身の右手。

何と、信じられない事に自分は投了しようとしていたのである。

「ッ!？」

自ら敗北を認めるといふ王として有るまじき行為をしようとしていた事に蒼乃丞は顔を真っ赤に染めるとバツと右手をデッキから遠のかした。

真っ赤になつた蒼乃丞の表情に浮かぶのは己自身に対しての羞恥と憤怒だ。

あのどこからともなく聞こえてきた甘美な誘いは紛れもなく己が弱き心。

常に強者たらんと勤めてきた蒼乃丞の心の片隅にあつた心の闇。恐怖に屈し、己が矜持と誇りを捨て、流されるを良しとし、敗北を受け入れるもう一人の自分。それが己の内になんか蒼乃丞は腹を立てていたのである。

さらになんか。

己の中に弱さが存在していた事でさえ業腹なのに、その弱さに屈しかけた事も蒼乃丞の怒りに拍車をかけていた。

これ以上の不甲斐なさを今まで感じた事があるうか。いや、ない。例え相手ももう一人の自分であろうとも蒼乃丞は自身の敗北を許さない。遊星との引き分けでさえ彼女の矜持をいたく傷つけたのだ。その蒼乃丞をして自身の弱さに負けかけた事実が彼女の心を荒立てていたのである。

しかし、此度の失態に対し猛省するのは後回しだ。

弱い心に流されそうになつた自分を寸でのところまで止めてくれた熱き鼓動。蒼乃丞はその鼓動が聞こえた先に視線を向けた。

そこにあつたのは最後に残つた一枚の手札　青眼の白龍の力―

ド。

まさか鼓動の発信源がカードであると言う事実には驚愕した蒼乃丞だったが半ば確信があったからであろう。彼女は自然とその事実を受け入れる事ができた。

サテライトに訪れる危機を知らせ、今も自分を助けてくれた青眼の白龍。

非科学的だろうがオカルトだろうが、もうそんなモノの真偽は関係ない。数時間前には触れ合い、そして何より今は窮地を救われたのだ。蒼乃丞にはその事実だけで十分。

ならば自分を救ってくれた存在に語りかけるのに何の迷いがあるうか。

「お前が助けてくれたんだな」

青眼の白龍に向けて優しく問いかける蒼乃丞だったがベッドの上で問いかけた時と同様、青眼の白龍は何も応えない。

先ほどの鼓動がまるで嘘であるかのように静かに絵の中で蒼乃丞を見つめるのみだ。

しかし、蒼乃丞は確かに感じていた。

青眼の白龍の息遣いと鼓動、そして体温を。

「未だ応えてはくれぬか……いや応えずとも良い。だが、今は

」

カードを通して伝わってくる確かな命の脈動を感じつつ蒼乃丞は目を瞑る。

自身の不甲斐なさに対する怒りに邪神への恐怖は吹き飛んだが、それも一時的なものではない。

落とした視線を上げ彼の異形と再び目を合わせれば、また恐怖に絶望し弱い自分が鎌首をもたげるだろう。今だってヤツが蠢く音を

聞いているだけで背筋が凍りそうだ。

だが、だがである。

彼女は思い出した。思い知らされた。

自分が一人ではないことに。共に絶望と対峙し、戦う存在がいてくれる事に。

「この恐怖に……絶望に打ち勝つ力を……ボクに……ボクにくれッ
ッ！」

故に蒼乃丞は今一度、絶望と対峙する。

次も助かる保証があるわけではない。余りの恐怖に今度こそ自身の弱さに、心の闇に吞まれてしまいかもしれない。

しかし蒼乃丞は信じる。心の中に弱者が潜んでいる事に気がついた自分自身にはもはや絶対の信頼は置けないが、青眼の白龍だけは絶対に信じられる。

青眼の白龍がいるかぎり恐怖が道を阻もうとも絶望が立ちほだかろうとも必ず踏破できる事を。何者をも乗り越えられる事を。

その思いを胸に、蒼乃丞は凜と顔を上げると異形の邪神を真正面から見据えた。

蒼乃丞と邪神の視線が合う。

「ぐううッ！」

見据えた視界の先、絶望を振りまく邪神から発せられる心を砕くほどの狂気は物理的な衝撃となって蒼乃丞へと襲い掛かる。

致死量を遥かに超える狂気の波に表情を苦悶に歪める蒼乃丞だったが、それでも今度は何とか踏みとどまった。

落ちろ。

しかし、それと同時に再び己の中の心の闇が湧き出てくるのを感じる。

墮ちろ！

闇へと誘う甘美な声は段々と強くなつて蒼乃丞の心を揺さぶっていく。

墮ちろッ！！

先ほどまでの蒼乃丞ならば再び闇に落ちていただろう。だが、今の蒼乃丞には先の蒼乃丞にはないものがある。確かに感じる温もりを左手に、蒼乃丞は目の前に立つ絶望と己が内にある闇を振り払うために唇を振るわせる。

「……………程度で……………青眼の白龍を、ボクの心を……………折れると」

オチろおおおおおッ！！

その蒼乃丞の心意を読み取ったのか、彼女の心の闇は蒼乃丞を屈服させようとこれまでにない叫びを上げた。

内と外からの圧倒的な重圧の前に蒼乃丞の精神が軋み、悲鳴をあげる。

だが、蒼乃丞はそれも厭わず左手に持つ青眼の白龍のカードをきつく握り締めると高らかに言い放った。

「思つなああああッ！！」

気合一喝。

蒼乃丞の放った言葉は言の葉となり、室内に突風のような嵐が吹き荒れた。

嵐と言ってもその嵐が吹き飛ばすのは人でもなければ物でもない。嵐が暴虐の牙を剥くは室内に充満した邪神の狂気と蒼乃丞の心の内より出でた心の闇。

蒼乃丞を押しつぶさんとしていた狂気と闇は、彼女の一喝に拮抗する事さえもできず一瞬の内に駆逐され霧散させられたのであった。そんな無慈悲で理不尽な嵐が治まった室内は見た目ではこれと言った変化は見られない。

不気味な青紫の炎は爛々と燃えているし、異形の邪神は未だ健在だ。だが、先ほどまで圧倒的な狂気を振りまいていた邪神からは今や何も感じることはない。

姿形は未だ禍々しいが、それでも許容範囲内だ。決闘の続行に支障はない。

そして蒼乃丞の心で甲高く敗北を叫んでいた闇もまた綺麗に消え去っていた。

ただの一喝を持って場を支配していたクトウルフの狂気と己の心の闇を抜った蒼乃丞。そんな彼女に対し磯野は愉快そうな表情を見せた。

「ほう……持ち直すどころか、まさか抜ってしまつとは。いやはや、これは予想していませんでしたが流石は蒼乃丞様。そうでなければ面白くはありません」

本人の意思次第で恐怖に打ち勝つ事までは想定していた磯野だったが、クトウルフの放つ狂気を根こそぎ抜ってしまうとは全く想定外の範囲外のことだ。

しかし、これで少しは決闘を楽しめるといふもの。

クトウルフの狂気のみで蒼乃丞を絶望に突き落とすことは叶わなかったが、ならば敗北と言う結果を持って彼女を落とすのもまた一

興。

そう考え不気味な笑みを湛える磯野に対し、蒼乃丞は烈火の如き
気迫で磯野とクトウルフに向かって吼えた。

「御託はいい！！ 忌々しくもボクに……このボクに痴態を晒させ
た気色の悪い蛸モドキのゲテモノモンスターめッ！ 塵も残さず葬
つてくれるわ！！ さっさと決闘を進めろッ！！」

弱い心に負け、投了しかけるといふ失態を犯したのは他ならぬ蒼
乃丞自身ではあるが、それでもその切欠を作ったのは間違いなくク
トウルフだ。

ならばこそ、このやり切れない怒りはあの気色の悪い蛸モドキを
完膚なきまでに破壊し、蹂躪しつくさないと静まらない。

そして、この決闘の勝利を持って先ほどの失態を清算する。

それが人生初の大失態を犯した蒼乃丞なりのはじめであった。

普段の調子を取り戻し復活を遂げた蒼乃丞だったが、しかし磯野
の余裕は揺らぐ事はない。何故ならば、クトウルフの放つ狂気と絶
望はこれからが本番なのだから。

「おやおや。絶望に震える蒼乃丞様もなかなか可愛らしかったので
すがお気に召しませんでしたか。では、絶望の第二楽章と参りまし
ょう」

まるで本のページをめくるかのような気やすさで磯野が言い放つ
と同時に、驚くべき事が蒼乃丞の場で起こった。

青眼の白騎士姫 7 ATK 2400 1350 DEF 16

00

「なにッ!? 青眼の白騎士姫の攻撃力が!？」

何と青眼の白騎士姫の攻撃力が下がり、力なく片膝をついていたのである。

この現象を前に声を上げて驚く蒼乃丞に磯野はその種を明かす。

「何も驚く事はありません。貴女自身がそうであったようにクトウルフの振りまく狂気と絶望に貴女のモンスターが耐えられなかっただけです」

決闘者でさえも、その姿の禍々しさに心を病むほどのモンスターなのである。

人にとつての致死量の絶望は蒼乃丞が被ったとはいえ、それは人に対してのみこと。同種族であるモンスターにとつては薄まったとはいえ未だに心を砕くほどの絶望と狂気をクトウルフは放っていたのである。

クトウルフがいる限り、それから放たれる絶望と狂気により心碎かれたモンスターは十全な力を発揮できない。

それ即ち

「ッ!? 攻撃力ダウンの永続効果……ッ!!」

「正解です。絶望のクトウルフは自身の よりも低い相手モンスターの元々の攻撃力を半減させる効果があるのです。……もつとも よりも下と言う事は更にマイナスということになりますので語弊がありますね。ここはクトウルフの にその を足しても0以上に転じれない相手モンスターの元々の攻撃力を半分にする効果としておきましようか」

これこそが絶望のクトウルフのモンスター効果。

8以下のモンスターの攻撃力を強制的に半減させるという恐ろしい効果だった。

そして、今や死に体となった青眼の白騎士姫に磯野は容赦のない攻撃を下す。

「では、戦闘です。絶望のクトゥルフで青眼の白騎士姫を攻撃ッ！
コール・オブ・アウターゴッド！！」

磯野の号令と共にクトゥルフから幾本もの触手が伸ばされ、その全てが青眼の白騎士姫を貫いた。

余りの衝撃により青眼の白騎士姫の手にしていた長剣は青眼の白騎士姫の手を離れ、蒼乃丞の足元に突き刺さる。

そして青眼の白騎士姫の身体を粉々に砕け散らした邪神の触手は、その有り余る勢いを持って後ろに立っていた蒼乃丞へと殺到していく。

「くぬうッ！！」

蒼乃丞LP3000 1350

蒼乃丞へと届いた邪心の触手は鋭利な刃となり、蒼乃丞のネグリジェを切り裂きその下の白磁のような素肌を顕にさせた。

しかし、あれだけのダメージがあったと言うのにも関わらず蒼乃丞の玉のような肌には傷が一つもない。

どうやら磯野は蒼乃丞を絶望に突き落とすだけでなく辱めも与えるつもりらしい。

切り裂かれたネグリジェから僅かに除く瑞々しい鎖骨や脇腹、大腿の眩しさに磯野は愉悦の笑みを浮かべると腕を大きく広げ、先の

ターン蒼乃丞が言っていた彼我の多寡を指摘した。

「さて、これで場も手札もライフポイントも逆転です。貴女の場には一枚のカードもなく、手札も僅か一枚のみ。今度こそ、貴女は絶望へと沈むのです」

磯野の言うとおりライフポイントは1800と1350、手札は三枚と一枚、モンスターに至っては強力な効果を持つ攻撃力3000の最上級モンスターが向こうにいるにも関わらずこちらはゼロだ。全ての要素において我が方の優位は覆され、なおかつ相手モンスターの強さは強大にして絶望的。この状況から勝機を見出すなんてほぼ不可能だ。

しかし、見よ。彼女の瞳を。

この絶望が支配する決闘にあっても煌くような光を燈す蒼乃丞の蒼穹の瞳を。

蒼乃丞は識つたのだ。

いかな絶望や闇に支配されようと戦っているのは自分ひとりではないと。闇を踏破し絶望を打ち砕く翼が自分にはあることを。

その事実が蒼乃丞の胸にある限り、もはや蒼乃丞は何者にも屈する事はない。

故に蒼乃丞は磯野の言葉に余裕の笑みを持って返した。

「大した余裕だな磯野。そんな貴様に一つ、いい事を教えてやる」

破かれたネグリジエから惜しむことなく素肌を晒しながら蒼乃丞は地に突き刺さる青眼の白騎士姫の長剣の前に立つと、とある物語を語り始める。

「青眼の伝説を引き継いだ青眼の白騎士姫の武器たる長剣は、かつてはあるモンスターだった。今はただの物言わぬ武器だが、そこに

宿る記憶と心はかつて己が何であったかを忘れてなどいない。そしてある特定の条件下でのみ、その心の意を解放し本来の姿を顕すことができるのだ」

磯野には一瞬、蒼乃丞が何を言っているのか理解できなかった。カードデザイナーがそのインスピレーションで書き起こしたプレイヤーテキストに一体何の意味があると言うのか。そう思ったのも束の間、磯野は彼女の左手に残った最後の手札を見て、まさかと思った。

新たな伝説である青眼の白騎士姫が武器とした長剣。

その元がモンスターと言うのなら、そのモンスターが何であるかなど考えるまでもない。そして、そのカードは今も蒼乃丞の手の中にある。

ならば蒼乃丞の語った物語はただのカードに書かれたプレイヤーテキストではなく、そのモンスターの持つ固有の能力。

攻撃力アップ、貫通効果に続く青眼の白騎士姫のモンスター効果。

「…………ツ!!」

蒼乃丞の言葉と状況から青眼の白騎士姫最後のモンスター効果が何であるかを悟った磯野であったが気がついたところでもう遅い。

既に蒼乃丞の手は突き刺さった青眼の白騎士姫の長剣の柄を握っていたのだから。

「青眼の白騎士姫、第三のモンスター効果！ このカードが相手によって破壊された時、手札の青眼の白龍一体を自分の場に特殊召喚する事ができる!!」

青眼の白騎士姫最後にして最大のモンスター効果を高らかに宣言した蒼乃丞は開いた右手で力強く長剣の柄を握り腕に力を込めると、

突き刺さった長剣を引き抜く前に磯野に向かって笑みを向けた。

「貴様に真の伝説を見せてやる」

それは勝利を確信した笑み。

絶望的なこの状況でも勝機を見出し、なければ創造さえしてしま
いそうなほど自信に満ち溢れた笑みだった。

勝利への確信と青眼の白龍への信頼。その二つを胸に蒼乃丞は古
の伝説を覚醒させる呪文を高らかにしながら己が前に突き刺さ
った長剣を勢いよく引き抜いた。

リリース^{リリース}コレクション
「心意解放ッ!!!」

蒼乃丞が告げると共に引き抜かれた長剣が眩いばかりの輝きを放
つ。

そして、その輝きの中から現れるは伝説の龍。

力強くも流麗な白き四肢、闇を切り裂く逞しい尾、暗黒を飛翔し
踏破する白銀の翼、決して穢れることのない気高き青眼。

もはや言葉は不要。

ただ刮目せよ。デュエルモンスターズ最強の龍、その猛き姿を。

「今こそ我が下に來たれ、イブリースッ!!!」

青眼の白龍 8 ATK3000 DEF2500

神々しいまでの輝きを身に纏い蒼乃丞の場へと舞い降りた青眼の
白龍だったが、しかしその存在は磯野の心胆を寒からしめるもの
はなかった。

「出てきましたか。デュエルモンスターズ最強のドラゴン、青眼の白龍。しかし」

青眼の白龍	8	ATK3000	1500	DEF2500
-------	---	---------	------	---------

邪神の発する狂気が青眼の白龍の力を奪っていく。

身体の回りを覆っていた輝きが霧散し、羽ばたく事も叶わず地に脚をつけた青眼の白龍の姿に磯野は嗜虐的な笑みを浮かべた。

「それでも は。クトウルフの効果により、その攻撃力は半分となります」

伝説の龍を持つとしても邪神の放つ狂気と絶望には敵わない。

邪神の狂気によって神聖なる輝きを封じられ地に落ちた青眼の白龍を前に磯野は、それがこの世の理だと言わんばかりに腕を振った。

「こうなっては伝説の青眼の白龍と言っても、ただの下級モンスターと何ら変わりありませんね。蒼乃丞様にとっては大いなる逆転の一手でしたでしょうが、闇の絶望は全てを上回ります」

確かに磯野の言う通りかもしえない。

満を持して場に出した切り札、青眼の白龍をしてもクトウルフの前では余りに無力。逆転の切札も切札足りえない状況だ。

だがしかし、もはやそんなもの蒼乃丞には何の関係もなかった。

蒼乃丞だけでは邪神に敵わず、青眼の白龍だけでも邪神には届かないならば。

「ふうん、ならば見せてやろう。ボクと青眼の白龍が歩む栄光のカードを！ ボクのターンッ！！」

蒼乃丞の最強と青眼の白龍の伝説、その二つを合わせ邪神の絶望を断つ。

高らかにそう宣言した蒼乃丞はデッキから新たなカードを引き抜くと、さらなる手札の充実を図るため墓地にあるカードを発動させた。

「墓地に存在する宝札の天使の効果発動！ 墓地にあるこのカードと光属性天使族モンスター、マジュ・ゴッドをゲームから除外することで互いのプレイヤーは二枚のカードをドローする」

天からの恵みは万物に等しく降り注ぐ。

例えそれが醜悪な邪神を携える者であろうとも。

「おやおや、いいのですか。ここでさらに私にカードをドローさせても」

彼女が発動せし宝札の天使のモンスター効果。その効果は相手決闘者にも及ぶドロー補助だ。

いかに今の蒼乃丞に打つ手がないとはいえ、磯野にもカードをドローさせるのは余りに危険な賭けであることは間違いない。

ここは守りに徹して時間と手札を稼ぎ、起死回生の好機を狙うのが定石だろう。

だが、そんな定石などお構いなしに蒼乃丞は攻めに打って出た。

この選択が勝利か敗北かの分水嶺 蒼乃丞はそう判断したのである。

「御託はいい。さっさとカードを引け」

「では、失礼して」

蒼乃丞の瞳が揺るがないのを見て取った磯野は少し詰まらなさそうに肩をすくめると早々にデッキから二枚のカードをドローしたのだった。

後は蒼乃丞がカードをドローするのみ。

蒼乃丞は真つ直ぐに磯野を見据えた視線を己がデッキへと落とす。この状況下を逆転できるカードは蒼乃丞のデッキに複数枚あるが、その数は少ない。未だ三十枚以上残るデッキの中からそれらを引き当てるのは至難の業だと言ってもいいだろう。

目当てのカードを引ければ勝ち、引けなければ負ける。

もはやこのドロー自体が至極単純な遊戯ゲームとなっていたのだ。

しかしデッキに伸び行く蒼乃丞の手に震えはない。

何故ならば、このドローこそが 何者をも恐れぬ前進こそが深き闇を掻き消す光だと確信していたからである。

「ドローッ!!」

しかして蒼乃丞はデッキから二枚のカードを引き抜いた。

全ての者に等しく機会を与える天使が蒼乃丞にもたらした結果とは。。。

「ならばよし」

その結果を視線に収めた蒼乃丞の口元が笑みに和らいだ。

彼女がドローしたカードの一枚はオネストのカード。それは彼女が掴んだ勝利への一手。

蒼乃丞は確かに奇跡をその手に引き寄せたのである。

運命の引きにより勝利への切札を手中に収めた蒼乃丞は、そのカードを持って青眼の白龍に攻撃の命を下した。

「戦闘だツ！ イブリースで絶望のクトゥルフを攻撃！！」

この蒼乃丞の攻撃宣言に磯野は彼女がドロートしたカードが何であるかを察する。

「ここで攻撃とは、先ほどのドロートでオネストを引き当てましたか」

だが、それがわかったところで如何ほどの物か。

オネストへの対抗策の少なさは使い手である蒼乃丞自身が良く知っている。例えその存在を看破されたとして、その効果を押し留めるのが不可能に近い事もだ。

なればこそ蒼乃丞は磯野の言葉に堂々と応えた。

「磯野にしては鋭いではないか。ならば受けてみるがいい。聖なる光の力を受けた青眼の白龍の攻撃をッ！」

そして高らかにオネストのカードを掲げ、その輝きを青眼の白龍へと与える。

青眼の白龍	8	ATK1500	4500	DEF2500
-------	---	---------	------	---------

眩いばかりの輝きを放つ天使の翼を得た青眼の白龍は今一度力強く空中に羽ばたき、雄々しい咆哮を磯野と邪神へと放ったのだった。斬魔の咆哮を上げ、深遠の闇を踏破せんと羽ばたく青眼の白龍はオネストの翼から膨大なエネルギーを口内に凝縮して行く。

その眩いばかりの輝きに蒼乃丞は目を細めることもなく、闇の体現者たるクトゥルフを指差すと青眼の白龍に号令を下した。

「青眼の白龍よ、渦巻く狂気を薙ぎ払え！ 滅びの爆裂疾風弾ッ！」

蒼乃丞の号令の元、口内に収縮された破壊の奔流を青眼の白龍は解き放つ。

オネストの効果により超絶強化された青眼の白龍の攻撃は青紫の世界を一瞬にして白へと塗りつぶした。

しかし、世界が白く転じたのは一瞬。

その一瞬の後、世界の色が元に戻ると共に爆音が響き渡った。

海馬コーポレーションの本社ビルを揺らすほどの爆発により起こされた爆煙が頬をかすめる中、感じた確かな手ごたえ。

「絶望のクトウルフ、粉碎！！」

その確かな感触に、蒼乃丞は高らかにクトウルフの破壊を宣言したのであった。

磯野LP1800 300

部屋を覆っていた煙が次第に晴れ、ライフポイントを大きく減らされた磯野が視界に入ると蒼乃丞は勝利を確信した笑みを持って磯野に言葉を投げかける。

「これで形勢逆転だな磯野」

手札は未だに磯野の圧倒的優位だが、ライフと場のアドバンテージは蒼乃丞へと覆り再び戦況は回天した。

この蒼乃丞の言葉に磯野は下を向いたまま何も応えない。ただ静かなる沈黙を持って立ち尽くすのみである。

すわ、戦意喪失か。

そう思われるほどの静寂が暫し場を支配した後、その終焉は不意に訪れた。

「……ふ、ふふふふ。はっはははははははは」

黙っていた磯野が不気味な嗤い声をあげ始めたのである。

「ッ、何がおかしい？」

壊れたように嗤い続ける磯野に蒼乃丞が怪訝な表情を向ける中、ひとしきり嗤った磯野は未だに肩を震わせながらその理由を蒼乃丞に明かす。

「いえいえ、余りにも蒼乃丞様が滑稽で可愛らしくて。そんな貴女を微笑ましく思っていたところですよ」

「なにッ！」

この磯野の物言いに蒼乃丞は眉を吊り上げた。

当然と言えば当然だ。

エースモンスターを撃破し窮地に追いやったはずの相手に滑稽と罵られたのである。これ以上の屈辱があるうか。

磯野の発言に対し怒りに身を震わせる蒼乃丞であったが、同時に彼の言動に一抹の違和感も感じていた。

この磯野の台詞と態度、ブラフにしては余裕過ぎはしないか。まるで己の優位が未だに揺らいでいないかのような。

しかし、いくら考えようとも答えは出ない。

そんな未だ違和感の正体を掴めきれぬ蒼乃丞に対し、磯野はまる

で好々爺のような体で蒼乃丞の場を指差し言った。

「まだ気がつきませんか。よく自分の場を御覧なさい」

敵の言葉に従うのは癪であったが、自力で答えを出すのは困難であると悟った蒼乃丞はその視線を自身の場へと向ける。

しかし、自分の場に視線を向けてみても特に変わった点は見受けられない。青眼の白龍も健在だ。先ほどと何ら変わらない己の場が一体何を示すと言うのか いや、待て。

そこまで考えたところで蒼乃丞は思考に引つかかるモノを感じた。

何かがおかしい。

一見おかしく見えない自身の場だが、しかし確かに何かがおかしい。

先ほどと何ら変わりないはずの場だが、それが反って矛盾を感じさせるのだ。

だが、矛盾を感じると言っても蒼乃丞の場にあるのは青眼の白龍一体のみ。何の変化もない青眼の白龍に一体何があると言うのか。

そう考え今一度青眼の白龍へ視線を移した時、蒼乃丞はやっと自身が感じていた違和感の正体に気がついた。

青眼の白龍 8 ATK 4500 DEF 2500

「ッ!? イブリースの攻撃力が戻っていない!？」

そう。青眼の白龍の攻撃力を下げていたクトゥルフを破壊したのにも関わらず、青眼の白龍の攻撃力は元に戻っていなかったのだ。

る。

クトウルフが破壊され邪神の呪縛から解放されたのであれば、その攻撃力は元に戻った数値3000とオネストで上昇した3000を合わせた6000ポイントになっていなければいけないはずだ。しかし青眼の白龍の攻撃力は先ほどと変わらぬ4500ポイント。

そして、下がったままの青眼の白龍の攻撃力が元に戻らないと言
う事は。

その蒼乃丞の最悪の予想は最悪の結果となって彼女の前へと突き
つけられる。

絶望のクトウルフ 9 ATK3000 DEF3000

薄れ行く煙の中から現れしは生ある者全てを冒瀆する邪神の姿。
白の極光で掻き消されたはずのその異形は未だに狂気を振りまき
ながら蠢いていたのである。

悲しいかな、蒼乃丞が引き寄せた奇跡も闇を消し去る事はできな
かったのだ。

その健在な邪神の姿に蒼乃丞は声を荒らげた。

「な、何故だ！？ 確かにイブリースの攻撃は決まっただはず！？」

青眼の白龍の攻撃は間違いなくクトウルフを捉えたはずだ。それ
は疑いようもない。

ならば何故狂気振りまく邪神は破壊されていないのか。

至極当然とも言えるその問いの答えは他でもない磯野からもたら
された。

「ええ、確かに貴女の青眼の白龍の決まりましたとも。 お陰で私の

ライフポイントは風前の灯。しかしですね、私の墓地にも貴女の宝札の天使同様墓地にて効果を発動するモンスターがいたのですよ」

鷹揚に肩をすくめながら語る磯野は墓地へと手を伸ばすと、そこから一枚のカードを手に取り蒼乃丞へと掲げて見せた。

狂気振りまく絶望の化身に不死の力を与えしカード。

その名は。

「DT ナイアルラトホテップ。このカードが墓地にある限り、このカードをシンクロ素材として召喚されたモンスターは戦闘では破壊されないのです」

這い寄る混沌。

Turn - 12 絶望の邪神 暴かれた王の弱さ（後書き）

今回のキーカード

ブルーアイボウイカタルキユリア
《青眼の白騎士姫》

7 ATK2100 DEF1600 光属性 戦士族 シンク

口効果モンスター

ドラゴン族チューナー+チューナー以外の光属性モンスター1体以上

自分の手札にある青眼の白龍のカード一枚につき、このカードの攻撃力は300ポイントアップする。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

このカードが相手のカード効果によって破壊されるか相手ターンの戦闘フェイズに戦闘で破壊された時、手札にある青眼の白龍一体を特殊召喚する事ができる。

「白き輝石の輝きが、新たな伝説を刻みだす！ 光さす道となれ！
シンク口召喚！！ 新生せよ、青眼の白龍姫ッ！！」

Turn - 13 奇跡を呑み込む絶望 恐怖神話の外なる神々

絶望を乗り越え、奇跡を手にした蒼乃丞と青眼の白龍の攻撃。

しかし、その攻撃も遙か深遠の闇にはとどかなかつた。

未だ健在の邪神を傍らに、磯野は墓地から引き抜いた一枚のカード

邪神に不死の力を与えしカードを蒼乃丞へと掲げて見せた。

「DT ナイアルラトホテップ。このカードが墓地にある限り、このカードをシンクロ素材として召喚されたモンスターは戦闘では破壊されないのです」

それは宇宙的恐怖神話切つての狂言回し。^{トリックスター}

旧支配者に使役される存在でありながら、上位者たる旧支配者を含む全ての者達を冷笑する無貌の神。

「必殺を期してのオネストでしたでしょうが……残念でしたね」

そのカードを手にまったく残念そうにない下卑た笑みを浮かべる磯野に対し、蒼乃丞は忌々しげに舌打ちを打つ。

しかし、それは何も磯野やクトウルフの破壊を無効にしたナイアルラトホテップばかりに向けたものではなかった。

DT ナイアルラトホテップは存在自体がダークチューナーモンスターと言う異様なカテゴリにあるとは言え、その 12 は最高値の

そんなデュエルモンスターズ界最高峰と言つてもいい 12のモンスターが大した能力を持っていないはずがなく、例えば場になくとも墓地にて効果が発動するカードは巨万とあり当然ナイアルラトホテップがその効果を持っている可能性も十分に考えられた。

その二点を、普通の蒼乃丞ならば見落とすはずのない初歩的な点を彼女はすっかり失念していたのだ。蒼乃丞の忌々しげな舌打ちには敵に対しての事だけではなく、ナイアルラトホテップの事を失念していた彼女自身に対しての苛立ちも含まれていたのである。

だが、しかしだ。

蒼乃丞は今まで体験した事もない狂気と闇に心を蝕まれ、それを退けた後も絶望的な戦力差が重圧となり彼女を苛んでいたのである。これらの圧力を前にして視界を広く保ち、大局的な思考を走らせる事がいかに難しい事か。それは実際にそれら重圧を体感した蒼乃丞が一番わかっているはずだ。

であるならば、不可抗力とも言える事象に対し蒼乃丞がそこまで自身を責める理由とは何か。

その答えは至って単純なものだった。

如何な理由があれ、初歩的なミスをした自身が許せないのである。蒼乃丞にとって過程とは結果が出て初めて価値が出るものであり、悪い結果に対しての過程は価値にならないばかりか言い訳の材料にもなりはしない。

ここで彼女にとって一番重要なのはナイアルラトホテップの存在を見落としたと言う、ただ一点。その結果のみ。

その結果がある限りどんな理不尽が立ちはだかっていたにせよ、それらは蒼乃丞にとって免罪符には成りえないのである。

故の自身に対しての舌打ちでもあったのだが、一つの失敗には成功と勝利の二つを持って返すのが蒼乃丞のやり方だ。蒼乃丞はすぐさま思考を切り替えると、勝利のためにこの場をどう切り抜けるかを思案するため手札に視線を落とした。

しかし、残念ながら今の手札ではこの窮地を脱する事はできない。ならばここは何としてでも耐え、次の自分のターンに希望を繋ぐしか道はない。そう結論した蒼乃丞は次の磯野のターンを凌ぐために一枚のカードを決闘盤へと挿し込んだのだった。

「カード一枚を場に伏せ、ターンエンドだ」

青眼の白龍	8	ATK4500	1500	DEF2500
-------	---	---------	------	---------

蒼乃丞のターンエンド宣言と共にオネストの効果は切れ、青眼の白龍の攻撃力が元へと戻っていく。

青眼の白龍に力を与えていた天使の翼が消え去り再び力なく地に脚をつけた青眼の白龍の姿に磯野は笑みを浮かべると新たなカードをドローすべくデッキへと手を伸ばした。

「では、私のターン。そうそう、私は貴女に感謝しなければ成りません」

「ッ！」

デッキからカードをドローした磯野が思い出したかのように口にした蒼乃丞への謝辞の言葉。

何の前触れもなく放たれた敵からの謝辞に対し、蒼乃丞は苦虫を噛み潰したような表情で磯野を睨みつける。

何故ならば磯野から送られた謝辞に蒼乃丞は確かな心当たりがあったからだ。

「先の宝札の天使。それによって得られたカードで、さらに私の場は磐石となるのですから」

「やはりかッ！」

磯野が語った言葉に蒼乃丞は齒切りした。

全ての者に等しく機会を与える天使は蒼乃丞だけでなく敵である磯野にも切札を与えていたのである。

互いにカードをドローさせる宝札の天使の効果は自身に好機を与えると共に相手にも同等のものを与えるものだ。そのリスクは蒼乃丞も十分に承知していたはずだが、己が危地にあるにも関わらず敵に塩を送ってしまった事実は余りにも歯がゆすぎる。

そんな蒼乃丞の心情を知ってか知らずか、磯野はにやけた笑みを浮かべながら宝札の天使が施してくれたカードを手に取ると高らかに宣言した。

「今貴女にお見せしましょう。クトウルフと共に海底に沈んだ古代都市を！」

この磯野の言葉に彼の場にいるクトウルフは歓喜の叫びを上げる。まるで黒板を爪で引っかくような怖気の走る声に蒼乃丞が耳を塞ぐ中、磯野は心地よさげに腕を広げると邪神に仕える神官のように高らかに祝詞を歌い上げながら邪神に捧げる一枚のカードを天高く掲げた。

「絶望の邪神の揺り籠よ、クトウルフの復活と共に今こそ浮上せん！ フィールド魔法、発動ッ！！」

高く掲げたカードを決闘盤のフィールド魔法ゾーンに振り下ろしながら磯野はそのカードの名前を叫んだ。

「黄昏の都 ルルイエー！！」

磯野の発動したフィールド魔法により世界は変わる。

今までフィールドを覆っていた青紫の煉獄の世界はその鳴りを潜め、幾何学を否定するような線と角度を持って構成された異界が広がっていたのだ。

その異常極まりない異界の都の中心で、磯野は鷹揚に腕を振るい

ながら勝利を確信した笑みを蒼乃丞に見せた。

「ついにクトウルフとルルイエが揃いました。これで我がクトウルフの前に敵はありません」

「ッ!? それは一体どう言う意味だ!？」

磯野から発せられた聞き捨てならない言葉に蒼乃丞は食って掛かる。

先の磯野の言葉は言外の勝利宣言に他ならなかったからだ。

それにだ。例え言葉にしくても今の磯野からは勝利に手をかけた余裕がありありと見て取れる。先の言外の勝利宣言もそこから来たものである。

その事実が蒼乃丞の気を荒立てていたのである。

「ふふふ……直にわかりますよ。ですが、その前にルルイエの効果のお披露目と行きましょう」

しかし、当の磯野はそんな蒼乃丞を余裕綽々と言った体で軽くあしらうと早速ルルイエの効果を起動させた。

「黄昏の都 ルルイエの効果! 一ターンに一度手札を二枚まで捨て、捨てた手札一枚に付き自分の場にシヨゴストーン一体を守備表示で特殊召喚できるのです」

その効果とは手札を捨ててのトークン作製能力。

磯野から放たれたルルイエのフィールド魔法の効果に蒼乃丞は身構えた。

だが、蒼乃丞が身構えたのは何もルルイエの持つ効果に対してではない。蒼乃丞はルルイエから生まれいずるトークンモンスターに対して身構えていたのであった。

しかしだ。ここで一つの疑問が残る。

それは、何故蒼乃丞がここまでトークンに神経過敏になるのかと
言う事だ。

確かにトークンはアドバンス召喚やカードコストのためのリリースを初めシンクロ召喚の素材など幅広く使われる優秀な存在である事は確かだ。だが、いかにトークンがサポートとして優秀な存在であるとは言っても、その多くは大した攻撃力も効果も持たない弱小モンスターである。

そんな脅威には成りえないトークンに対し蒼乃丞が必要以上に警戒する理由。その答えは彼女の前に立ちほだかるクトゥルフにあった。

何といってもこの異界の都の主は他ならぬ気色の悪い蛸の怪物なのだ。

その異形の怪物が支配する世界で産み落とされるモンスターが普通のモンスターな訳がない。ならば産み落とされるトークンの姿はきっと目の前の邪神に劣らぬ悍ましい姿に違いないはずだと、蒼乃丞はそう考えていたのである。

では何故、蒼乃丞はそうまでして新たな宇宙的恐怖神話のモンスター出現に身を強張らせるのか。

これは別に蒼乃丞がそれら宇宙的恐怖神話のモンスターが持つ異形に臆したわけではなく別の理由に由来する。

クトゥルフが放っていた致死量の狂気は蒼乃丞が被ったとはいえ、それでも目の前に立ちほだかる異形に対し何も思わなくなつた訳ではない。生理的嫌悪を喚起させる邪神の威容は否が応にも蒼乃丞の精神を蝕んでいたのだった。

流石に心を砕くほどの威力はないが、それでも土気に関わる大きな問題だ。

こんな状態の中、さらに新たな異形が生み出されればどうなるか。それを蒼乃丞は懸念していたのである。

そんな懸念を抱き身を強張らせる蒼乃丞を尻目に、磯野は効果起

動のためのコストである手札二枚を掲げながらルルイエの効果を発動させた。

「私は二枚の手札を墓地へ捨て、二体のシヨゴストークンを特殊召喚！」

シヨゴストークン	1	ATK0	DEF0
シヨゴストークン	1	ATK0	DEF0

そして磯野の場に悍ましいトークンモンスターが遂に産み落とされる。

身構えた蒼乃丞の前にグチャリと嫌な水音を立てて現れるはアメーバの様な奉仕種族。

ギョロリとした一つ目は敵を射抜き、その敵を飲み込み咀嚼する口は笑みに歪んでいる。動くたびに揺れるオレンジ色の粘体質な身体は、それだけを持ってても生命を冒瀆しているかのよう。そして身の毛もよだつような声でこう鳴くのだ。

てけり・り！
てけり・り！

身の毛もよだつ……………。

てけり・り！ てけり・り！
てけり・り！ てけり・り！

悍ましい奉仕種族のはず……………なのだが……………。

てけり・り！ てけり・り！ てけり・り！ てけり・り！
てけり・り！ てけり・り！ てけり・り！ てけり・り！

……なんと言う事だろうか。

磯野がルルイエの効果で特殊召喚した奉仕種族たるシヨゴストークン。

それは愛嬌のある目と口を持ち、オレンジ色の身体をゼリーのよ
うにプルンプルンと可愛らしく躍らせるスライムだったのだ。

蒼乃丞がその出現を覚悟したモンスターだったが、悍ましさや狂
気など微塵も感じさせない。そればかりか、微笑ましいほどユーモ
ラスでコミカルな印象しか与えないモンスターだったのである……
どうしてこうなった。

そんな拍子抜けするほどのシヨゴストークンの姿に身構えていた
蒼乃丞はと言うと。

「……………」

絶句していた。

新たな宇宙的恐怖神話のモンスターの登場にそれ相応の覚悟を決
めていた蒼乃丞は、言葉なくシヨゴストークンを見つめながら身を
震わせていたのである。

無理もなかるう。悍ましげなモンスターが出てくるばかりと思っ
ていたのに、出てきたのはその正反対のモンスターだったのである。

盛大な肩透かしに身を怒りに振るわせるのは当然と言えば当然か
と、思われた蒼乃丞の心中だが実際のところは大きく違った。

彼女は肩透かしを食らった怒りに震えていたのではなく、別の意
味で身を震わせていたのだ。

では何に彼女は身を震わせているのか。

それはある意味、蒼乃丞らしい事と言えた。

シヨゴストークンが姿を見せ第一声を放った時、彼女はこう思っ

たのである。

か、かわいいッ!!

そう。普段の蒼乃丞からは想像もつかない事だが彼女が少女的や可愛らしい物に目がないのは、今彼女が着ているフリフリでヒラヒラなネグリジェやトウーン・ワールドと化したベッドでブルーアイズ・トウーン・ドラゴンたちをもふもふしていたのを顧みれば一目瞭然だ。

そんな蒼乃丞にとって、磯野が召喚したシヨゴストークンは彼女のストライクゾーンのだ真ん中へ時速100マイルの直球が突き刺さるほどの威力と衝撃を持っていたのである。

つまるところ、蒼乃丞はシヨゴストークンの愛らしさに身を震わせていたのだ。

これが決闘中ではなくプライベートならば一も二もなくシヨゴストークンに駆け寄り、力の限り抱きしめていた事だろう。

しかし、悲しいかな今は生死すらかけた死闘の最中。しかも立場は敵と味方だ。ロミオ、ジュリエット

この事実を必至に自分に言い聞かせ、乙女モードに突入したい激情を鋼の意志を持って制する事で何とか寸でのところで踏みとどまれた蒼乃丞だった。

当然、蒼乃丞は表面上はポーカーフェイスを貫いているので彼女のそんな心の内を磯野は知る由もない。

「シヨゴストークンは闇属性モンスターと水属性モンスター以外のアドバンス召喚のためにはリリースできず、ルルイエの効果を使用したターンは 8 以下のモンスターの召喚、反転召喚、特殊召喚が行えなくなりますが……それでも場の制圧はクトウルフがいれば事足ります。戦闘ッ！」

狂気や闇でさえも打ち崩せなかった蒼乃丞の牙城を、まさかシヨゴストークンが崩しかかったと言う事実には気がつかないまま磯野はクトウルフに攻撃の命を下した。

「絶望のクトウルフで青眼の白龍を攻撃！ コール・オブ・アウト
ーゴッド！！」

その磯野の攻撃宣言に対して一瞬で思考をシヨゴストークンから決闘へと切り替える。

惚けていても流石は蒼乃丞と言うべきか。

通れば敗北が決するクトウルフの攻撃に対し、直ぐさま先のターンに伏せたカードを発動させていた。

「させんツ！ カウンター罠、攻撃の無力化！！」

青眼の白龍と蒼乃丞に殺到しようとしていた邪神の触手は青眼の白龍の手前で見えない壁に阻まれる。

それでも何とかして前進を阻む壁を突破しようと触手がもがくが、それは無駄な労力だった。

「この効果により相手モンスター一体の攻撃を無効にし、戦闘フェイズを終了させるツ！」

蒼乃丞の効果の宣言と共にクトウルフの放った触手は大きく弾かれたばかりか、戦闘フェイズをも強制的に終了させられてしまったのだ。

攻撃の無力化により邪神の弾き返された磯野だったが、それでも磯野の余裕は僅かなりとも揺らがない。

「おや、ここは凌ぎましたか。しかし、そうでなければ面白くは在

りません」

あたかもこれから面白くなってきたと言わんばかりの磯野に対し、蒼乃丞は吼えた。

「抜かせ！ 貴様のライフポイントは残り300。その程度ならばいかに強力なモンスターが立ちはだかるうとも如何様にもしてみせるわッ！！」

確かに蒼乃丞の言うとおりだ。

いかに絶対的なモンスターを従えていようと磯野のライフポイントは風前の灯。

その僅かな値を削るだけならば何もモンスター同士の戦闘にこだわる必要はない。魔法でも罫でもモンスター効果でもなんでもいいカード効果によるダメージを与えるだけで十分なのである。

だが、そんな蒼乃丞の鋭い指摘にも磯野の余裕は崩せなかった。

「おやおや、流石は蒼乃丞様。勇ましい限りですね。ならば、こう言う趣向はどうでしょう？ 魔法カード、ダンウィッチの怪を発動」

何故ならば磯野の手札には現在彼の唯一とあっていい憂いであるライフポイントを回復する手段があったのだから。

「相手の墓地にあるモンスターカードを三枚まで選択し、ゲームから除外します。そして除外したカード一枚に付き私のライフポイントは500ポイント回復するのです。私はオネスト、伝説の白石、青眼の白騎士姫を選択！」

しかも蒼乃丞の墓地にいるモンスターを除外するというオマケ付きでだ。

磯野の宣言と共に発動されたカードからイグナイイイと言う叫び声が響くと共に、叫びが木魂する深遠の闇から幾多の触手が飛び出した。

カードから飛び出た触手は蒼乃丞の決闘盤の墓地に突き刺さると、蒼乃丞の墓地から三枚のカードを取り上げたのである。

「ッ!? オネストが!!」

「何だかんだ言ってもオネストは厄介ですからね。再利用されてもしたら今度こそ負けかねません。ですので、ライフポイントの回復のついでにここでご退場願いますよ」

ライフポイントの回復もさることながら、ここでダンウィッチ怪を発動させた磯野のもう一つの狙いはオネストの排除だ。

その奇襲性の高さと効果の強力さにより、蒼乃丞のデッキで最も警戒しなければならぬカードであるオネスト。そんな厄介極まりない存在を再利用の余地のある墓地に眠らせて置くほど磯野は甘くはなかつたのである。

墓地より取り上げられた蒼乃丞のモンスターたちはそのまま触手の湧き出る虚空の闇に引きずり込まれると、その深遠の闇に飲まれたのであった。

それと同時に磯野のライフポイントが回復していく。

磯野 LP 300 1800

せつかく削ったライフがまるで徒労であったと言わんばかりに回復していく様に蒼乃丞が苦虫を噛み潰したような表情になる中、磯野は余裕の笑みの上に更なる余裕の笑みを重ねながらターンエンドを宣言した。

壊れた蓄音機のように高笑いを発し続ける蒼乃丞に、磯野は嫌らしい笑みを潜めると彼女に怪訝な表情を向けた。

「いかなされました蒼乃丞様？　もしや状況を打開するカードを引けず、壊れてしまいましたか？」

確かに狂ったように笑い続ける蒼乃丞を目にしては壊れたとしか思えないのも無理はなからう。

それに今この場は常軌を逸した建築物が立ち並び、その中心には狂気と恐怖を振りまく邪神が主として居座っているのだ。狂う材料には事欠かない。

そんな中で希望さえもなくしたとなれば如何な蒼乃丞とて正気では居られまい　と、磯野は思ったのである。

しかし、忘れてはならない。

彼女はあの海馬瀬人の孫だと言う事を。

思い出せ。勝利への一手を引き寄せた時に対する彼の人の行動を。そう。まるで今の蒼乃丞は勝利を前に痛快に笑う海馬瀬人そのものではないか。

「はっはははは！！　磯野にしては面白い事を言う……それこそまさかだ！　逆だよ、磯野。これで貴様は終わりだと言うことだッ！！」

やはりだった。

彼女は先のドローで絶望を引いたのではない。奇跡を引いていたのだ。

その手中に今一度逆転の一手を収めた蒼乃丞は磯野に向けて放った言葉を現実によく、手にしたカードを決闘盤へと挿し込んだ。

この絶望的状况下、蒼乃丞に勝利を確信させたカード。

そのカードとは　。

「魔法カード発動、滅びの爆裂疾風弾ッ！！」

彼女の魂、青眼の白龍の必殺技と同じ名前の魔法カード。

当然その効果は青眼の白龍の必殺技、滅びの爆裂疾風弾の名に恥じない強力なものだった。

「この魔法カードは自分の場に青眼の白龍がいる時、相手の場の全てのモンスターを破壊する事ができるのだ！ まあ、その代償にこのカードを発動したターン、青眼の白龍は攻撃する事ができないがな」

何とその効果とはデュエルモンスターズでは禁止カードのルール制定に際し即禁止カードに指定され一時もその禁止制限が解除される事がなかった凶悪な魔法カード、サンダー・ボルトと同等の効果だったのである。

効果の発動に青眼の白龍が必要で、カード発動直後は青眼の白龍で追撃できないと言う制約があるものの、それを抜きにしても相手の場を焦土と化すことの出来る殲滅効果は強力無比。

そして何より、滅びの爆裂疾風弾による破壊は戦闘ではなくカード効果による破壊だ。

よってDT ナイアルラトホテップがクトゥルフに与える不死の力は働かない。

その事に気がついた磯野は表情を戦慄へ大きく転じると大仰な仕事で天を仰いだ。

「なんとッ！？ これでは我がクトゥルフは！！」

「ふうん、忌々しい蛸の怪物もこれで見納めと言う事だ！ その愛くるし……もとい、気色の悪い下僕共々消えうせるがいい！！」

一瞬滑りそうになった口を何とか繕う事に成功した蒼乃丞は、共

に消え行くシヨゴストークンに心の中で詫びを入れながら青眼の白龍に号令を下した。

「イブリース！ 磯野の場へ向け、滅びの爆裂疾風弾ッ！！」
「ッ！？」

蒼乃丞の号令と共に青眼の白龍より放たれた全てを消し飛ばす滅びの光は破壊の奔流となって磯野の場へ怒涛の如く押し寄せて行く。己が身に迫る圧倒的な光景に磯野は身体を硬直させ息を吞まざるを得ない。

そんな磯野の様子に会心の笑みを見せた蒼乃丞だったが。

「と、言うのは冗談でして」

それも長くは続かなかった。

危地にあるはずの磯野が戦慄から一転しておどけた態度を見せたのである。

「なんだと？」

破滅が迫る危機の中、一変して余裕の態度に戻った磯野に蒼乃丞は怪訝な表情をするが同時に嫌な既視感を感じていた。

蒼乃丞の思考に嫌な予感がよぎる。

この磯野の態度。まるで先のターン、青眼の白龍とオネストのコンボ攻撃を凌がれた時の様ではないか。そして、当たって欲しくない嫌な予感と言うのは得てして現実のものになるのが世の常だ。

蒼乃丞が抱いた予感も、その例に漏れることなく現実となって彼女の前に立ちはだかった。

「言ったはずですよ蒼乃丞様。クトゥルフとルルイエが揃った今、

我がクトウルフに敵はいないと」

「ッ！？ まさか！！」

先に言った意味深な言葉を今一度嬉々として繰り返す磯野に、蒼乃丞は予感が現実となった事を知る。

だが知ったところでどうするか。

もはや今の蒼乃丞にはこれから起こるであろう悪夢のような現実を阻む術はないのだから。

「流石は蒼乃丞様、察しがいい。ええ、そのまさかです。絶望のクトウルフの持つもう一つのモンスター効果。それはクトウルフがカード効果によって破壊されるかカード効果の対象になった時、自分の場のクトウルフ以外の水属性モンスター一体をリリースする事で、そのカードの発動と効果を無効にし破壊できるのです」

蒼乃丞が予感し、そして現実となった悪夢。

それは生贄を捧げる事で破壊と対象を取るカード効果からクトウルフを守る鉄壁の防御であったのだ。

リリースするモンスターは水属性という縛りはあるものの、今の磯野には効果発動に際するコストに事欠くことはない。

「ルルイエの効果で特殊召喚されたシヨゴストークンは水属性……ッ！ トークン召喚はこの効果のための布石だったのか！」

忌々しげな蒼乃丞の言葉通り、磯野の場には水属性モンスターであるシヨゴストークンを生成できるフィールド魔法、黄昏の都ルルイエが存在するのだから。

攻撃力ダウンの永続効果で場を制圧し、不意なカード効果による破壊もルルイエから生まれるシヨゴストークンを生贄にする事で無効にする。

先の磯野の言葉通り、クトウルフとルルイエの二枚のカードは無敵のコンボとなって蒼乃丞の前に立ちはだかつていたのだ。

「真の絶望、ご照覧あれ。グレート・オールド・ワンツ!!」

そして磯野の命の下、効果が発動されるがその光景は凄惨なものであった。

邪神は徐に触手を動かすと一体のシヨゴストークンを掴み上げ、何のためらいもなく喰ったのである。

耳を塞ぎなくなるほどのシヨゴスの断末魔が辺りに響くが、それもベチャツと何かが潰れる音と共に聞こえなくなる。そんな見るも悍ましい光景が繰り広げられるが、クトウルフの真の悍ましさはここからであった。

口元にオレンジ色の粘体を垂らした邪神は生贄として喰ったシヨゴスの血と肉を持って自身の狂気を増強し、それを持って青眼の白龍の放った滅びの爆裂疾風弾を阻む。

いや、邪神の発した狂気の波は光を阻むばかりではない。

物理的衝撃を起こすほどの濃厚な狂気と全てを滅する白き光。両者の激突は始めこそ拮抗してはいたが、狂気がじわじわと光を侵食し始めたのだ。

その様は正に闇が光を貪り食っているよう。そして貪欲に光を食らう狂気の闇は遂に光を食い尽くすと、蒼乃丞の場に発動していた滅びの爆裂疾風弾のカードへ殺到したのである。

「ぬううツ!!」

真横に着弾した狂気の波に蒼乃丞は顔を腕で庇う事しかできなかった。

完膚なきまでに破壊された滅びの爆裂疾風弾のカードの残骸が宙を舞う中、磯野はどうだと言わんばかりにルルイエに鎮座するクト

ウルフを仰ぎ見ながら大きく腕を広げて見せた。

「これぞ揺り籠に抱かれし邪神の真の力です」

蒼乃丞が絶望の中で手にした二度の奇跡。

しかし、二度に渡る奇跡を持つてしても絶望の邪神を打倒するに至らなかった。

そして今の蒼乃丞の手札にはもはや逆転どころか身を守る手段すらない。

「くッ！ イブリースを守備表示に変更してターンエンドだ」

青眼の白龍を守備表示にして次のターンを耐えるという消極策にしか出る事のできない蒼乃丞に、とうとう磯野は余裕ばかりか嘲りの表情さえも隠さなくなった。

「ふっふふ、切札たる青眼の白龍を守備表示にして時間を稼ぐしか手がないとは流石の蒼乃丞様もここまでですか。ああ、それはそれとして蒼乃丞様、先ほどの私の演技はいかがでした？ アカデミー賞にノミネートされるほどの出来だったと自負していますが」
「抜かせッ！ 貴様のターンだ！ さっさとターンを始めるッ！！」

余りに馬鹿にした磯野の口調に蒼乃丞は高らかに吼えるが、それが強がりであると言う事など誰が見ても明らかだ。

だが、そんな蒼乃丞に対しても磯野は攻勢の手を緩めない。

蒼乃丞は絶望の中にあっても二度の奇跡を手にして見せた決闘者なのだ。

連続して窮地を切り抜けることの出来るカードを引きたる確率は天文学的とまでは言わないが、それでも圧倒的に低い事は疑いようもない。

それが二度も続いたのだから三度目の奇跡はそれこそ奇跡でも起こらなければありえないはずだ。

しかし、磯野はそうは思わなかった。

海馬蒼乃丞と言う決闘者は運命や世の理さえも屈服さえ自身の配下に置くような生まれ持ったの王なのだ。

意志一つで理さえも捻じ曲げる王を相手には確率論など何の当てにもなりはしない。

王を相手にするならば、希望を抱くその心を完膚なきまで碎かなければ勝利できないと言う事を磯野はこの決闘を通じてよく知ったのである。

「では私のターン。私は再び手札を二枚捨て、シヨゴストークンを二体特殊召喚します」

シヨゴストークン	1	ATKO	DEF0
シヨゴストークン	1	ATKO	DEF0

再びルルイエの効果で二体のシヨゴストークンを特殊召喚した磯野は続けてクトウルフに攻撃の号令を下す。

当然、狙いは蒼乃丞を守るように立つ青眼の白龍だ。

「そして、絶望のクトウルフで青眼の白龍を攻撃！ コール・オブ・アウターゴッド……！」

磯野が発した号令と共に邪神から伸びた触手が青眼の白龍を貫き、蹂躞する。

それでも青眼の白龍は主たる蒼乃丞を守るため身動き一つせず、その身を楯とし邪神の攻撃を全て受けきったのだ。

無残にも砕け散った青眼の白龍の残滓が僅かに残った攻撃の余波と共に蒼乃丞の頬を掠めて行く。

「あうううッ！ くッ、イブリースが！」

青眼の白龍の挺身により蒼乃丞には掠り傷一つつかなかつたが、これで蒼乃丞の場はガラ空きだ。しかしながら磯野の場にはもう攻撃できるモンスターは居らず、蒼乃丞が追撃を貰うことはなかった。幸いにして九死に一生を得た蒼乃丞であったが、その認識は甘かった。

未だ磯野の攻勢は終わっていないなかったのである。

「さらに魔法カードを発動します。シャドウ・オーバー・インスマウス！」

最後に残った手札、その一枚を追い討ちとして発動させたのだ。そのカードの効果とは。

「このカードは自分の場にいる水属性モンスターの数かける300ポイントのダメージを相手に与えるのです。私の場にいる水属性モンスターはクトウルフと三体のシヨゴストークン……よって合計1200ポイントのダメージを受けてもらいます」

何と最高1500のダメージを与える事が出来る直接ダメージ効果だった。

幸運にもこの効果で蒼乃丞のライフポイントが尽きる事はないが、それでも大ダメージなのには変わらない。

深きものどもの襲撃によってインスマウスが魔窟に成り果てたと言つH・P・ラヴクラフトの同名の著書の如く、何も守るもののない蒼乃丞にクトウルフの触手と三体のシヨゴストークンが殺到して

行く。

「ッうあああああああああああああ!!」

クトウルフの触手がさらに蒼乃丞のネグリジエを切り刻み、シヨゴスの粘液が蒼乃丞の肢体を呑み込み穢す。

一点の穢れのない真っ白いハンカチを汚すように。

綺麗に積もった処女雪を踏み散らかすように。

その様はいかに命を賭けた決闘とはいえ、無垢な少女に科すには余りに無残な仕打ちだった。

蒼乃丞LP1350 150

「くうう……ッあああ!!」

それでも蒼乃丞は引かない、譲らない、膝をつかない。

裂帛の気迫で持って笑う膝に喝を入れると磯野と対峙していたのである。

だが、邪神たちの攻撃を受けた彼女の姿は惨憺たるものだった。

もはや襪褌切れと化したネグリジエはシヨゴスの粘液によって肌に纏わり付き、その下の珠の様な白い肌を透けさせている。僅かに残った大事な部分を隠す布地もまるで用を成さない状態だ。

衣服を破かれ身体中を粘液で穢された蒼乃丞の姿は、まるで処女を散らされた乙女。

その蒼乃丞の姿に磯野はこれ以上ないほどの極上の笑みを浮かべて言った。

「何とお勞しいお姿でしょう。奇跡は絶望の前に掻き消え、美しく

可憐であつたお姿は今や見るも無残。ならばこの磯野、これ以上蒼乃丞様が苦しめぬよう介錯を務めるが臣の役目と存じます」

自分でやっておきながら態とらしくおどけて振舞う磯野だったが、それは圧倒的な優位が彼をそうさせるのだろう。磯野の場はそれだけ磐石だった。

クトウルフの第一の効果により蒼乃丞の召喚するモンスターはその攻撃力を下げられ、よしんば攻撃力を上げて戦闘しようにも墓地にナイアルラトホテップがいる限り戦闘では破壊できず、クトウルフをカード効果で破壊する事もシヨゴストークンの数だけ無効にされる。

それに蒼乃丞のデッキで唯一クトウルフを戦闘で破壊できる可能性を持つオネストも既に磯野により除外された。

蒼乃丞にとっては正に八方塞の状況。

逆転を想像する事さえ愚かしく思えてくる程の苦境が彼女の前に大きな壁となつて立ちはだかつていたのである。

「……ボクに、他でもないこのボクに磯野如きが情けをかけるか。良くぞ言つたり！」

しかし見よ、彼女の瞳を。

起こした奇跡を幾度となく絶望に挫かれながらも未だ折れぬその意志を。

「ならば磯野、刮目せよッ！！ 貴様が情けをかけると言つた相手が誰であるかを！ 貴様が絶望の闇に沈ませようとする相手が何者であるかを！！」

さらに見よ、彼女の姿を。

如何にその身がみすばらしく穢されようとも美しく輝く気高き姿

を。

「二度の奇跡を持っても貴様の邪神には通用しなかったが、それがどうした！ 二度でダメなら三度、三度でもダメなら四度の奇跡を持ってボクは貴様に対峙する！ それでも貴様が無限の狂気を持ってボクの奇跡を挫くならば、ボクは無窮の奇跡で迎え撃つ！！ そうだ、ボクは勝利をこの手に掴むまで何度でも何度でも奇跡を起こす！ そうボクは、ボクの名は」

そして見よ、彼女の決闘を。

蒼乃丞と青眼の白龍の機械仕掛けの神をも凌ぐ至高にて究極の逆転劇を。

ここから先は一時の瞬きさえも許されない。

これより開演される演目は、絶望と狂気と混沌が織り成す暗黒神話を踏破する荒唐無稽な御伽噺。一人の王が無窮の光を持って無限の闇を打ち滅ぼす絶対勝利の物語。

蒼乃丞の蒼乃丞による蒼乃丞のための舞台だ。

「ボクの名は海馬蒼乃丞！ 青眼の白龍と共に栄光のロードを征く決闘者なりッ！！」

Turn - 13 奇跡を呑み込む絶望 恐怖神話の外なる神々（後書き）

今回のキーカード

《絶望のクトゥルフ》

9 ATK3000 DEF3000 水属性 悪魔族 ダーク
シンクロ効果モンスター
チューナー以外のモンスター1体-ダークチューナー

このカードを特殊召喚する為には、自分フィールド上に存在する「DT（ダークチューナー）」と名のついたチューナーのを、それ以外の自分フィールド上に存在するモンスター1体の から引き、その数字がこのカードの と等しくならなければならない。

このカードの属性は「闇」としても扱う。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手フィールド上の 8以下のモンスターの元々の攻撃力は半分になる。

このカードが魔法・罫・効果モンスターの効果で破壊されるか効果の対象になった時、自分フィールド上にあるこのカード以外の水属性モンスター1体をリリースすることで、そのカードの発動と効果を無効にし破壊する。

「闇と闇重なりし時、冥府への扉は開かれる……光なき世界へ！
ダークシンクロ！！ 出でよ、絶望のクトゥルフ！！」

CM ≪STRUCTURE DECK・クロウリング・アウターユニット≫

CV：不動遊星

「絶望抱きし狂気の闇が、決闘を新たな領域へと誘う。深淵の闇より現れ出でよ、絶望のクトゥルフ！ 封印されし邪神達を解き放ち、暗黒神話の紡ぎ手となれ！！」

遊戯王5D'sオフィシャルカードゲーム

STRUCTURE DECK・クロウリング・アウ

ターユニット

メーカー希望小売価格1050円（税込み）

2月30日 発売予定

「決める、ダークシンクロッ！！」

（K NAMI）

新録カード

・SDOX - J P 0 4 1 ≪絶望のクトゥルフ≫ Ultra
・SDOX - J P 0 0 1 ≪DT ナイアルラトホテップ≫ Super

pre
・SDOX - J P 0 2 2 ≪黄昏の都 ルルイエ≫ Super
・SDOX - J P 0 2 3 ≪シャドウ・オーバー・インスマウス≫
・SDOX - J P 0 2 4 ≪ダンウィッチの怪≫

・SD0X - JP032 《クトウグアの業火》

再録カード

・SD0X - JP002 《邪神ドレッド・ルート》

・SD0X - JP003 《邪神アバター》

・SD0X - JP004 《邪神イレイザー》

・SD0X - JP008 《冥府の使者ゴーズ》

・SD0X - JP009 《ウォーター・スピリット》

・SD0X - JP013 《トラゴエディア》

・SD0X - JP017 《魂を削る死霊》

・SD0X - JP019 《大邪神 レシエフ》

・SD0X - JP026 《終焉の焰》

・SD0X - JP029 《大邪神の儀式》

・SD0X - JP030 《旧神の印》

・SD0X - JP033 《イタクアの暴風》

・SD0X - JP035 《黄金の邪神像》

・SD0X - JP038 《邪神の大災害》

他多数収録

Turn - 14 無窮の奇跡 蒼乃丞、覚醒

残りの手札は一枚。

しかも現時点では全く使いどころのない調和の宝札

。

磯野LP1800

蒼乃丞LP150

ライフポイントの差も歴然。

こちらは吹けば消えてしまいそうな弱々しい蠟燭の灯火ほどし
なく。

絶望のクトウルフ	9	ATK3000	DEF3000
シヨゴストークン	1	ATK0	DEF0
シヨゴストークン	1	ATK0	DEF0
シヨゴストークン	1	ATK0	DEF0

モンスターに至っては圧倒的。

攻撃力を下げるばかりか、戦闘による破壊も効果による破壊も全
く寄せ付けない無敵の邪神が下僕を従え眼前に聳え立つ。

対してこちらは切札である青眼の白龍を倒され、二度の奇跡は絶
望が放つ無限の闇の前に儂くも断たれた。

まさに剣は折られ矢は尽きた絶体絶命の状況。

己が力のみで国を興し開祖となった過去の豪傑や物語に登場する

正義の味方たる救国の英雄さえも有象無象の凡百に墮す圧倒的な絶望。

勝機がない、奇跡が折られた。それが何だ。

しかし、その只中にあつても絶望の体現者である邪神に相対する者が 立ち上がる者がいる。

敵は強大無比、打倒は不可能。それがどうした。

狂気と絶望が絶対的な敗北を突きつけようとも、幾度となく手にした奇跡をことごとく折られようとも、それでも絶望しない者がいる。

その者の心にあるのは、ただ勝利への渴望と青眼の白龍への絶対の信頼。

伝説である青眼の白龍を継承した決闘者が、果て無き栄光のロードを征く王が、勝機がない程度で勝利への邁進を止めていいはずがない。二度の奇跡が折られた程度で敗北に膝を折っていいはずがない。

勝機がなければ己が力で拓き、奇跡が折られるなら勝利を手にするまで奇跡を起こす。

彼女の祖父であり先代の青眼の白龍の所持者であった海馬瀬人も、そうして己がロードを青眼の白龍たちと共に歩んでいったのだ。

ならば、それが自分に出来ぬ道理など何処にもあるはずがない。だから、今ここに宣言しよう。

この勝利への渴望と青眼の白龍への信頼を光に変えて無限の絶望を断つことを。深淵の闇を踏破することを。そして、この手に奇跡すら超えた絶対勝利を掴むことを。

伝説の青眼の白龍と、王たる我が名において。

そう、我が名は 。

「ボクの名は海馬蒼乃丞！ 青眼の白龍と共に栄光のロードを征く
決闘者なりッ！！」

祖父から受け継いだ青眼の白龍たちと自身の名において放たれた
蒼乃丞の宣誓は、狂気渦巻く絶望の領域たる黄昏の都にかつてな
った奇跡を起こす。

絶望を越え、闇を踏破せんとする蒼乃丞の意志に彼女の胸元が輝
き始めたのだ。

「っ、これはッ！？」

目を焼かんばかりの眩い輝き。

蒼乃丞の言葉と共に発生した光を前に磯野は困惑の表情を見せる
が、それ以上に驚愕すべきことが磯野の場に起こっていた。

冥府が闇の力で生み出された凶星のモンスターが、絶望と狂気を
持つて混沌と恐怖を撒き散らす暗黒神話の旧支配者が、蒼乃丞から
発せられる光の前に戦慄していたのである。

狂気と絶望を持って恐怖を刻みつけるはずの邪神が恐怖に震える
という矛盾した光景。

それを創り出した蒼乃丞の心の光は暗き邪神の世界を灼かんと輝
きながら、三条の光を空へと打ち上げた。

まるでそれは、天へと続く梯子のように空へと架けられた真白き
道。

絶望の都の暗雲を切り裂き天へと昇った光の道は現実を越え、幻
想を結ぶ架け橋となる。

そして、その道を通して蒼乃丞の場へと舞い降りて来たものは正
に奇跡だった。

「お……お前達は……ッ！」

光の道から降臨する彼女らの姿に、蒼乃丞は歡喜と困惑に声を振るわせる。

何故という戸惑いと、遂にという喜び。

カードを決闘盤に置いてもない　そもそも彼女らのカードは一枚が墓地にあり、残りは未だデッキの中なのにも関わらず彼女らが召喚された不可解な事実と異空間での出会いから常に切望していた彼女らとの再開が叶った現実を前に、蒼乃丞は光さす道を通ってやって来る彼女達の名前を叫ぶように呼んだ。

「イブリース！　ジブリアル！　アズラエル！」

彼女らこそ華麗にして最強。

デュエルモンスターズの世界で神に列する力を持つ唯一のモンスター、青眼の白龍。

それが三体。蒼乃丞が所持する全ての青眼の白龍が光さす道を通り、彼女の場へと舞い降りて来たのだ。

真白き光の道を通り絶望の化身と戦う蒼乃丞の元へと馳せ参じた彼女らは主の声に強き意志の光を燈す青眼を向けて一回力強く頷くと、前に向き直り神々しいまでの神聖な輝きと魔を祓う高らかな咆哮を持って主の敵へと相對したのであった。

しかも、彼女らはソリッド・ビジョンに投影された幻影などではない。

呼吸のたびに吐かれる息吹。龍独特の高い体温。そして生きとし生けるものの証である心臓の鼓動。それらソリッド・ビジョンでは表現しきれない命の脈動が彼女らを本物の生命であると雄弁に物語っていたのだ。

実体となつて現れ出でた青眼の白龍たちの頼もしき姿に蒼乃丞は不覚にも涙腺が僅かに緩む。

「皆が……青眼の白龍たちが……ボクの……ボクの声に応えてくれた」

異空間での出会いからこっち、望んでも応えてくれなかった青眼の白龍たちが遂に実体を持って蒼乃丞に応えてくれたのだ。

これを喜ばずして何を喜ぶと言うのか　そう思う程、蒼乃丞にとって青眼の白龍たちとの再開は堪らなく嬉しかったのである。

蒼乃丞が青眼の白龍の精霊達と感動の再開を果たす中、彼女の場へと実体化を果たした青眼の白龍たちに磯野は驚愕の叫びを上げていた。

「莫迦なツ！　精霊世界から現実世界への召喚……しかも触媒を介さない純然たる実体化などトツ！？」

精霊世界から現実世界へのデュエルモンスターの召喚は何も不可能な事ではない。

カードを通して精霊の声を聞き現実世界と精霊世界を繋ぐことのできる人間は余り表に出ることはないが、その存在は決して少ないものではなく各時代を通して精霊と心を通わせた者達を見る事が出来る。

現在ならばシグナーの一人でもある龍可がそうだし、過去を振り返れば伝説の決闘者の一柱に数えられる遊城十代やヨハン・アンドレルセン、さらに遡って初代デュエルキングである武藤遊戯もカードの精霊と心を通わせたと言われている。

その中でも遊城十代の力は特に突出しており、精霊と心通わせるだけではなく精霊の力を現実世界で行使することが出来たそうだ。彼が旅して廻った世界の各地にはそれを裏付ける物証や証言が今も数多く残されている。

そんな精霊の声を聞き心通わせる者達とは別に、カードに描かれたモンスターやカード効果を実体化出来る特殊能力を持つ者達もい

る。

十六夜アキを始めとしたアルカディアムーブメントに属するサイコデュエリスト達だ。

その力の大小には個人差があるらしいが、アルカディアムーブメント内で最強のサイコパワーを持つと言われる十六夜アキがデュエル・オブ・フォーチュンカップで見せ付けた力の強大さは記憶に新しい。

何より、ダークシグナーが決闘するフィールドではダメージや衝撃が現実となるのだ。

これだけの例を見れば精霊世界からの召喚は別として、カードの実体召喚自体はさして珍しいものではないのが良くわかるだろう。

しかし、そんな彼らにも力の行使にあたり絶対に避けては通れない制限が一つあった。

精霊と心通わせた者にしろ、サイコデュエリストにしろ、ダークシグナーにしろ、精霊やカードの力を実体化させるにはデュエルモンスターのカードを決闘盤のソリッド・ビジョンに介すという手順を踏まなければならないのである。

この制約はデュエルモンスターの源流である古代エジプトで行われた戦いの儀ディアハでも見受ける事が出来る。

極一部の例外を除き、千年アイテムを持つファラオやその側近たる六神官達でさえ自身の心の映し身である精霊や石版に封じられた魔物を召喚するにはディアディアンクという決闘盤にあたる祭器が必要だったのだ。

デュエルモンスターの発祥から現在まで連綿と続いてきた召喚の制約。

それを蒼乃丞はカードと決闘盤と言う二つの触媒を通さず己が意志のみで成してしまったのである。

期せずしてデュエルモンスターの歴史に輝かしい足跡を刻んだ蒼乃丞はしばし青眼の白龍たちの頼もしき背中を眺めていたが、その先にいる敵の姿を目にするとその表情を凜々しく引き締めた。

青眼の白龍たちが応えてくれたことに感激するのはいいが、今はそれも後回しだ。

今はただ、己が心に応えてくれた青眼の白龍と共に勝利へのロードを進むのみ。その意思を持って蒼乃丞は瞳に溜めた涙を振り払い、一歩前へと踏み出す。

また一歩。さらにもう一歩。

王の威容を示すかのように強い足取りで大地を踏みしめながら前へと進んだ蒼乃丞は自身を守るように立っていた青眼の白龍たちの横へと並び立つ。

それは正に決戦の地に配下の騎士たちを従えて立つ王の姿。

その堂々たる威風を持って蒼乃丞は敵たる磯野と邪神に対し高らかに吼えた。

「見たか、磯野！　これがボクたちだ！　これが海馬蒼乃丞と青眼の白龍だ！　無限の闇を照らす無窮の光だ！　絶望においてなお奇跡を目指す気高き心の陽だ！　この煌き、この輝き、貴様に敗北を突きつける絶対勝利の力だ！！」

蒼乃丞の高らかな宣言と共に青眼の白龍たちも雄々しい咆哮を放つ。

王の威容と神々しい輝きを纏った一人と三匹の咆哮に、絶望の邪神は忌々しげな怨嗟の叫びを上げる。まるで彼女等こそが自身の天敵であるかのように。

そしてそれは邪神の主たる磯野にしても同様。

蒼乃丞の猛き言の葉の前に、この決闘で初めて後ろへ後ずさると自身に言い聞かせるように叫び声を上げた。

「ッ！！　で、ですが精霊を召喚したところで貴女の場合には一枚のカードもなく手札は一枚のみ！　私とクトウルフの優位は絶対に揺るぎませんッ！！」

しかしそれでもなお、磯野は身に迫る危機感を拭えない。

精霊を実体化させたと言っても状況は何も変わっていないはずなのに、未だに絶対的優位はこちらにあるはずなのに、目の前に立つ彼女たちを見ていると自分と邪神が敗北する光景が否が応にも脳裏に浮かび上がってくるのだ。

それは余りにも明確なビジョン。

追い詰めていたはずなのに、逆に追い詰められていると言う矛盾した感覚。

だがしかし、それはある意味道理であると言えた。

影は日輪の輝きでその姿を霧散させるものであり、暗き夜の闇も日の出の光と共に駆逐されるが世の理。

絶望を司る闇の権化たる磯野たちにとって、勝利を司る光の導き手である蒼乃丞の覚醒と青眼の白龍たちの出現は闇たる彼らの消滅に他ならなかったのである。

絶望を敷く者でありながら絶望に打ち震えると言う矛盾を持ってあげられた磯野の叫びに、蒼乃丞は再び高らかな言の葉を持って彼へと返した。

「ならば篤と見よッ！ 絶望を超え奇跡さえも超越した絶対勝利の力を！！」

高らかに言い放った蒼乃丞の言の葉に今一度青眼の白龍たちが猛き咆哮を添えると、その身を再び光へと変え蒼乃丞の中へと戻っていく。

蒼乃丞と共に輝かしい勝利を掴むため、来るべき出番に備えて。

一つ、二つ、三つ 自分の心音とは別に脈打つ生命の鼓動を胸に感じながら、共に流れ込んでくる青眼の白龍たちの意志に蒼乃丞は胸を熱くさせていく。

その魂の気高さと心の温もりを青眼の白龍たちと共に全て胸へと

仕舞い込んだ蒼乃丞は、彼女らが入っていった自身の胸元を一つ撫でると強き意思の籠った気迫を纏いデッキへとその手を伸ばした。

「ボクの……ターンッ!!」

そして奇跡は紡がれる。

蒼乃丞は勢いよく引き抜いたカードを一瞥すると、手札に残っていた一枚のカードと共に高らかに掲げあげた。

「ボクが引いたカードはチューナーモンスター、伝説の白石! このカードをコストに手札の魔法カード、調和の宝札を発動ッ!」

このターンにドロウした伝説の白石を墓地に送って蒼乃丞が発動したカードは宝札の天使の効果でオネストと共にドロウしていたものの発動条件を満たせず、ずっと彼女の手の中で眠っていたドロウ補助の魔法カード、調和の宝札。

それが今、蒼乃丞の紡ぎだす奇跡によって勝利への道を拓く。

「調和の宝札の効果は手札の攻撃力1000以下のドラゴン族チューナーモンスターを一体捨てる事でデッキからカードを二枚ドロウできる効果! さらに伝説の白石が墓地にいった事で伝説の白石の効果も発動する!!」

ドクン!

蒼乃丞の中で一つ、強き鼓動が脈打つ。

それは心強き援軍。青眼の白龍がアズラエルの鼓動。

胸を打った脈動と共に蒼乃丞はデッキから青眼の白龍と二枚の新たなカードを引き抜き手札へと加えると、拓いた道をさらに繋げるべく新たに手札に加えたカードを続けざまに切った。

「さらに魔法発動、トレード・イン！ 手札の 8 のモンスター一体を墓地に捨てる事でカードを二枚ドロウできる！ 伝説の白石の効果で手札に加えたアズラエルを墓地に捨て二枚のカードをドロウッ！！」

ドクンッ！

二つ目の鼓動が蒼乃丞の胸を打つ。

それは麗しき導き。青眼の白龍がジブリールの鼓動。

その胸の鼓動を確かに感じながらドロウしたカードに蒼乃丞は視線を落とす。

今の蒼乃丞の手札は三枚。これだけの手札があれば逆転の一手も打てるかと期待した蒼乃丞だったが、悲しいかな勝利への道は未だ繋がらないでいた。

この三連続ドロウで蒼乃丞が手にした今の手札はトラップ・ブースター、魂の解放、異次元からの埋葬の三枚。

形勢を逆転させるカードどころかドロウを補助するカードさえもなかったのだ。

もはや万事休すかと思われた蒼乃丞であったがしかし、彼女の紡ぐ勝利への奇跡は未だに途切れていなかった。

何故なら、勝利へと続く道を繋ぐ奇跡は手札ではなく他の場所にあったのだから。

「まだだッ！ 魔法カード、異次元からの埋葬を発動ッ！！」

蒼乃丞の発動した異次元からの埋葬はゲームから除外されたカードを三枚まで墓地に戻すことが出来る魔法カード。

そうだ、彼女の除外ゾーンにはあったではないか。墓地に存在する自身と光属性天使族一枚をゲームから除外する事で二枚のカード

をドロー出来るカードが。

それを墓地に戻すことが出来れば蒼乃丞は今一度勝利への奇跡を紡ぐことができる。

そのカードを　勝利への道を終着へと導く最後の奇跡を蒼乃丞は除外ゾーンから取り出し掲げると、その効果を高らかに起動させた。

「ゲームから除外したマンジュ・ゴッドと宝札の天使を墓地へと戻し、再び宝札の天使の効果を発動！　墓地に戻した二枚のカードを除外し、互いのプレイヤーは二枚のカードをドローするッ！！」

もはや決闘の常識を超えた蒼乃丞の四連続ドロー。

専用のギミックを組んだとしても早々成し得ない奇跡の業を一切の小細工を弄することなく堂々と己が心意のみで成した蒼乃丞に、磯野はただただ戦慄の叫びを上げるしかなかった。

「そ、そんな莫迦なッ！　ありえない！　一ターンに四回のドローなど、そんな事ッ！！」

確かにこれは常識で考えればありえない。

よほど運命に愛されているかイカサマを仕込まない限り成し得る事は不可能に近い事だ。否、不可能と言ってもいいだろう。

しかし忘れてはならない。

彼女はその存在だけでも常識すら凌駕する王だと言つ事を。覚醒により白き龍の加護を真に得た決闘者であると言つ事を。

「言つた筈だぞ磯野！　貴様の闇が無限にボクの奇跡を阻むならば無窮の奇跡で迎え撃つと！　絶対勝利を持って貴様に敗北を与えるとッ！　故にこれは必然であり当然の帰結だ！　そして、このドロ―を持って今度こそボクは勝利を掴む！　青眼の白龍たちと共にッ

「!!」

王の力と精霊の力。

二つの力を合わせて蒼乃丞は最後の奇跡を紡ぎだす。

「征くぞッ！　これが……ラストドロ―だあああああッ！！」

ドッケン！！

そして蒼乃丞の胸に高鳴るは三つ目の鼓動。

それは勝利を告げる天啓。青眼の白龍がイブリースの鼓動。

このイブリースの鼓動を　否、彼女だけではない。アズラエルとジブリアル、全ての青眼の白龍たちの思いを熱き血潮に変えて、蒼乃丞はデッキから高らかにカードを引き抜いた。

熱く滾り沸騰した血液を持って放たれた蒼乃丞のドロ―は、カードと共に一陣の風をも巻き起こす。

「……………ッ」

その風が運んだ一抹の静寂。それに唾を飲んだのは一体誰であったか。

全てが停止したと感ずるほど静かな世界で、闇と光が向かい合う。かたや無限の闇を持って絶望を司る者。こなた無窮の光を持って勝利を司る者。

決して交われぬ対極の存在が静かに相打つ中、無窮の光と勝利を司る者である蒼乃丞は引き抜いた二枚のカードへと視線を移すとその口元に笑みを浮かべた。

「…………ふッ、揃った」

それは他ならぬ勝利の笑み。

蒼乃丞が紡いだ奇跡の道は遂に勝利へと繋がったのだ。

その様はまさに機械仕掛けの神。デウス・エクス・マキナ

邪神とその主が脚本を書いた最悪と最狂が踊り狂う絶望の恐怖劇ケランギニョルを打ち切り、闇を照らし絶望を踏破する王の英雄譚へと書き換えてみせたのである。後はその演目を開演するのみ。

さあ、鐘を鳴らせ。幕を開けよ。

今こそ、奇跡と光をもつて絶望と闇を打ち倒さん。

「しかと見よ、磯野！ これこそが絶対勝利の力によってボクが手にした絶望と狂気を断ち切る奇跡たちだッ！！」

「ッ！！」

高らかに放たれた蒼乃丞の言葉に磯野はただ圧倒されるしかない。

これがつい先ほどまで彼の王を追い詰めていた絶望の化身かと思われるほど、彼の存在は小さなものへとなっていた。

そんな磯野を尻目に、蒼乃丞は繋がった勝利への道を駆け抜けるべく手札に揃った切札たちを一気に切る。

「手札よりジブリールを墓地に捨て速攻魔法、トラップ・ブースターを発動！ さらに魔法カード、魂の解放！ このカードの効果によりボクの墓地にある三体の青眼の白龍と貴様の墓地にあるDT ナイアルラトホテップをゲームから除外ッ！！」

続けざまに二枚のカードを発動した蒼乃丞は墓地にあった三枚の青眼の白龍を取り出した手を、そのまま磯野へと突きつけて言った。

「これで貴様ご自慢の邪神は不死の力をなくすッ！！」

蒼乃丞の言葉通り絶望の邪神を守っていた混沌の闇が剥がれ落ち

ていく。

クトウルフの戦闘では破壊されないと言う効果はクトウルフ自身の効果ではなく、墓地に存在するナイアルラトホテップの効果。そしてナイアルラトホテップの戦闘破壊耐性を付与する効果はナイアルラトホテップが墓地に存在しなければ発動しないのだ。

これで絶望の邪神を戦闘で破壊することが可能となった。

だがしかし、蒼乃丞が妙手と同時に下手を打っていた事を磯野は見逃してはいない。

「しかし、貴女も青眼の白龍を全て除外してしまいましたッ！ 貴女のデッキで我がクトウルフを倒せる可能性を持つのは青眼の究極竜とオネストのみ！ それらが除外され召喚できなくなった今、貴女になんら恐れるところがありませんようやッ！！」

確かに磯野の言うとおりだ。

クトウルフの戦闘破壊を可能にするため不死の効果を与えているナイアルラトホテップを除外するのは分かる。

だが、戦闘破壊が可能になったといえクトウルフは 8以下のモンスターの攻撃力を半減させる効果と、カード効果による破壊と自身を対象にとる効果を無効に出来る効果を持っているのだ。

その効果により無敵を誇るクトウルフを倒す事のできるカードは蒼乃丞のデッキには青眼の白龍三体融合によって召喚される 12モンスター、青眼の究極竜と相手の攻撃力を自身のモンスターに与えることが出来るオネストしかない。

磯野により既にオネストが除外されている現状で彼女が狙うべきは残されたもう一つの手である青眼の白龍三体融合のはずだ。だと言うのに、蒼乃丞は唯一の勝利への手段たる青眼の究極竜の融合に必要な素材である青眼の白龍までをも全て自ら除外してしまったのである。

この解せない蒼乃丞の行動。

しかし、磯野にとっては勝利を確信するに足る蒼乃丞のミスプレイだ。

その事に意気揚々と声を木魂させる磯野に対し、蒼乃丞が取った反応は実に冷ややかなものだった。

「貴様、大事な事を一つ忘れているぞ」

「えッ？」

まるで落胆したかのような声音の蒼乃丞の言葉に磯野は不覚にも気のない返事を返してしまう。

そんな磯野の様に蒼乃丞はこれが自分をここまで追い詰めた決闘者なのかと、王である自分を跪かせようとした絶望なのかと一層失望の感を深くする。少し圧倒されたくらいで心揺らぎ相手の手を見抜けなくなるとは、もはや怒りさえも通り越し哀れみさえ浮かんでくる程だ。

未だ蒼乃丞の言っている言葉の意味がわからず醜態を晒し続ける磯野に、蒼乃丞は彼が見落としている事実を叩きつけるようにして言っちゃった。

「ボクがトラップ・ブースターを発動していた事をなァッ!!」

そう。蒼乃丞は魂の解放でカードを除外する前にもう一枚、魔法カードを　トラップ・ブースターのカードを発動していたのだ。

その効果とは　。

「トラップ・ブースターのカード効果！　このカードの発動ターンに一度だけ、ボクは手札から畏カードを発動できるのだ!!」

本来、場にセットしてから相手のターンに移らないと発動できない畏カードを魔法カードの様に手札から発動できるようになると言

う決闘の理を歪める強力なカード。それが速攻魔法、トラップ・ブ
ースターの効果だった。

しかしながら、このカードはその効果の発動にそれ相応に厳しい
代償を要求する。

一ターン待てば何の代償もなく使える罠カードを手札から使うた
めに、このカードとは別にコストとなるカード一枚を用意しなけれ
ばならないのだ。

少し待てば何の問題もなく使える罠カードの効果を今使うために
三枚ものカードをつぎ込む。いかに非常識な事がよくわかるだろう。
だが今の蒼乃丞にとって、その代償を払う価値は十二分にあった。
蒼乃丞に残された最後の手札。それこそが彼女を勝利へ導く切札
だったからである。

「ッ！ では、それが!？」

その事に今さらながら気がついた磯野が声を荒らげるが、もう遅
い。

何故ならばカードを持った蒼乃丞の手は既に天高く振り上げられ
ていたのだから。

「そう、このカードこそボクを勝利へと導く奇跡の光！ それを今、
ここに解放する!！」

胸を打つ三つの鼓動と身体を駆け巡る熱き血潮、さらに魂を振る
わせる高らかな言の葉を持って蒼乃丞はそのカードを決闘盤へと振
り下ろした。

「罠カード、異次元からの帰還を発動ッ！ ライフポイントを半分
支払い、ゲームから除外されたモンスターを可能な限り自分の場に
特殊召喚する!！」

そして蒼乃丞がトラップ・ブースターの効果で発動した罠カード、異次元からの帰還により奇跡は勝利へと終極する。

僅かに残ったライフポイントを光に変え、蒼乃丞は闇に染まった天を裂く。その開かれた天から射し込むは暗闇を引き裂いて駆ける白き道。先の蒼乃丞の心意が創った光さす道と同様、暗き地を照らす天使の梯子だった。

しかし、今度の光は先のものとは決定的に違う。

王の心意と精霊の加護に置いて顕れ出でた白き道は三条だったが、今光遮る暗闇を裂いて地に光を燈す白き光の道は幾条と数え切れぬ程あったのだ。それはまるで、天が王の勝利を祝福しているかのようだった。

天に蓋する暗き闇を切り裂いて、顕れ出でた光の道。

そこを通って舞い降りるは伝説を受け継いだ白銀の騎士姫と光の天使。磯野によって除外された青眼の白騎士姫とオネストだ。

蒼乃丞の開いた勝利への光は深遠の闇に葬られたモンスターを光の下へと返したのである。

その様はまさに天使降臨。

しかし、その神々しい光景でさえも蒼乃丞にとっては前座にしか過ぎなかった。

蒼乃丞は華奢で可愛らしい、それでいて妖しくも麗しくある美しい御手を天高く掲げる。その手に掲げられたカードはいずれも同じ絵柄、青い眼を持つ白き龍のカードたち。

己が魂、我が身の半身でもある彼女らを掲げた蒼乃丞は奇跡と光と勝利を持って先の神話を再び創造せんと彼女らの名を高らかに呼んだ。

「光さす道ロードより我が元へ再び舞い降りよ！ イブリース、アズラエル、ジブリール！！」

蒼乃丞の声が天へと響き、射し込む光がより一層輝きを増す。その輝きの中から顕れるは三体の伝説の白き龍。騎士と天使を脇に控えさえ、神々しく天から舞い降りる様はまさに神の姿。

かつて古代エジプトで三幻神に唯一対抗できたと言われる白の神々が蒼乃丞の場へと降臨したのであった。

蒼乃丞 LP 150 75

青眼の白龍	8	ATK 3000	DEF 2500
青眼の白龍	8	ATK 3000	DEF 2500
青眼の白龍	8	ATK 3000	DEF 2500
青眼の白騎士姫	7	ATK 2100	DEF 1600
オネスト	4	ATK 1100	DEF 1900

それは何と壮大な光景か。

幾条もの光が天使の梯子となって闇を照らし、その輝く光から騎士が、天使が、そして神々が舞い降りてくるのだ。

もはや一種の芸術と呼べるまでに昇華されたこの光景を創ったのは一人の少女の強き心と、少女と心通わせた白き龍たちとの絆。

蒼乃丞と青眼の白龍たちが紡いだ奇跡は 勝利への道は遂にここに成ったのだ。

だが、事ここにいたっても磯野は無駄な足掻きを見せた。

「しかし、クトウルフの効果で攻撃力は半分になります！」

磯野の言葉と共にクトウルフが狂気の叫びをあげ、光を闇へと閉ぢす。

青眼の白龍	8	ATK	3000	1500	DEF	2500
青眼の白龍	8	ATK	3000	1500	DEF	2500
青眼の白龍	8	ATK	3000	1500	DEF	2500
青眼の白騎士姫	7	ATK	2100	1050	DEF	1600
オネスト	4	ATK	1100	550	DEF	1900

絶望司る邪神の放つ狂気の前に光より降臨した神とその使いたちは力を半減させられたが、それでも蒼乃丞の勝利は揺るがない。

何故ならば磯野自身が邪神に対する勝利の鍵とまで言っていたオネストが、唯一この決闘で邪神に攻撃を届かせたオネストが、既に蒼乃丞の場にいるのだから。

蒼乃丞はそのオネストの力を青眼の白龍に与えるため、オネストの持つもう一つのモンスター効果を猛き言葉と共に起動させた。

「それがどうした！ オネストのモンスター効果を発動！ メインフェイズに自分の場で表側表示でいるこのカードを手札に戻す事ができる！！」

その効果とは自身を決闘者の手札へと戻す効果。

手札から捨てることにより味方モンスターに絶大な力を与えるオネストにとって、このもう一つの効果は自身最大の効果である第一の効果を生かす優れた効果だったのだ。

この効果によってオネストを手札へと加えた蒼乃丞は高らかに攻撃を宣言する。

「もはやこの決闘の趨勢は決した！ 戦闘ッ！ イブリースで絶望

のクトウルフに攻撃！！」

蒼乃丞の高らかな号令の元、名を呼ばれた一体の青眼の白龍がその顎に破滅の光を収束させていく。

白き神たる龍へと集う光の輝きは邪神の狂気により弱々しい煌きへと堕ちていたが今の蒼乃丞の手にはそれを補うカードが　オネストがある。

聖なる輝き持って闇の世界に光を開かんと、蒼乃丞はオネストのカードを天に向かって掲げ挙げその効果を起動させた。

「この時、オネストの効果を使いイブリースの攻撃力をクトウルフの攻撃力分アップさせる！」

光さす天へと掲げられたオネストが天使の翅を広げ、青眼の白龍に限りない光の力を与えていく。

青眼の白龍	8	ATK1500	4500	DEF2500
-------	---	---------	------	---------

白銀の翼を天使の翅へと変じさせた青眼の白龍の輝きが未だ世界を覆う暗き闇を駆逐せんと祈りを込めて、蒼乃丞は天へと掲げた腕を高らけく振り下ろした。

「今こそ絶望を蹴散らせ！　滅びの爆裂疾風弾ッ！！」

そして聖なる光の力を得た青眼の白龍、その渾身の一撃が絶望の邪神へと放たれる。

まるで天地を引き裂かんばかりの眩い輝きは、まさに世界を創造する神であることを示す天地開闢の一撃だ。

対して神の放つ光の輝きを受けるのもまた神。
絶望の邪神たるクトウルフは対極たる闇の力を持って青眼の白龍の光に対抗する。

しかし、這い寄る混沌の力を失った邪神では聖なる力が付与された破壊の光を止めることは叶わなかった。

クトウルフの巨体を持つても受け止めきれない世界を白へと染める閃光。その光は邪神を越えて主である磯野の身をも灼いていく。

「ぬぐううううううッッ！」

磯野 LP 1800 300

世界を灼くが如き光が晴れた後、残っていたのは満身創痍の磯野と非力な奉仕種族であるシヨゴストークンたちのみ。

あれだけの威容を放ち絶望と狂気の闇で決闘を支配していた邪神は一片の肉片も断末魔の叫びすらも残す事を許さない破邪の光の奔流に吞まれ、遂に大地から消え去ったのであった。

そして狂気を振りまいていた邪神がいなくなったことで蒼乃丞の場に存在するモンスターたちは本来の力を取り戻す。

「これでボクのモンスターたちは狂気の軛から解き放たれる！」

青眼の白龍	8	ATK	4500	6000	DEF	2500
青眼の白龍	8	ATK	1500	3000	DEF	2500
青眼の白龍	8	ATK	1500	3000	DEF	2500
青眼の白騎士姫	7	ATK	1050	2100	DEF	1600

蒼乃丞の言葉と共に、復活していく彼女のモンスターの姿に磯野は表情を引きつらせる。

「ぐぬう……くッ!!」

この光景、まさに数分前に磯野の脳裏に垣間見えた敗北の瞬間そのもの。

幻想が現実を重ねるのを前にして立ち尽くすしかない磯野に対し、蒼乃丞は止めの一撃を叩き込むべく腕を高らかに振り上げた。

「これで極まりだあッ！ 青眼の白騎士姫でシヨゴストークンを攻撃ッ!!」

シヨゴストークンの守備力は0、そして青眼の白騎士姫は攻撃力が攻撃する守備表示モンスターの守備力を上回った分だけ相手にダメージを与える貫通効果持ちのモンスターだ。

絶望の邪神を失い残りライフポイントも残り僅かとなった磯野に、この攻撃を耐える術はない。

蒼乃丞の勝利は目の前。

しかし、それでも蒼乃丞には一抹の未練があった。

それは。

「……許せよ、ダンセイニ……ッ!!」

愛くるしいシヨゴストークンをその手に掛けなければならなかったのだ。

生命を賭けた決闘の場とはいえ恋焦がれ心揺れ動かされた相手。それを何故進んで手に掛ける様な非情が出来ようか。

だが、蒼乃丞は斬らねばならない。

王である己が心の誇りのために。精霊となって応えてくれた青眼の白龍たちとの絆に報いるために。そして、その二つに必ず拮むと誓った絶対勝利のために。

ならばせめてもの手向けと、いつしか名付けていた名と謝罪の意を込めて蒼乃丞は腕を振るう。白き神たちの聖なる輝きを背にしなから、蒼乃丞は力ある言の葉と共に振り上げた腕を断罪の剣が如く振り下ろしたのだった。

「散華せよ、ヴォーパル・ストライイイクツ！！」

白き神の威光を背に光さす世界を駆け抜けた白の騎士姫は、その手に持った長剣をシヨゴストークンへと突きつける。

魂魄を穿つ白き騎士姫の一撃は攻撃対象であった奉仕種族をいとも容易く突き抜けると、その後ろに立つ磯野の顔を庇った決闘盤へと突き刺さったのだった。

「ぬうわあああああッ！！」

磯野LP3000

ここに闇のゲームは決着した。

穴を穿たれた磯野の決闘盤が小規模な爆発を上げ収められていたカードたちが宙へと舞う中、ソリッド・ビジョンで投影された青眼の白龍たちや黄昏の都が消え去ると共に蒼乃丞たちを覆っていた不気味な青紫の炎もまた消える。

それと同時に磯野の右腕に輝いていた蜘蛛の痣も消え、磯野は糸の切れた人形のようにその場へと倒れ伏したのだった。

「磯野ッ！！」

勝利の余韻もそこに蒼乃丞は心配げな表情を浮かべながら磯野の元へと駆け寄る。

磯野は齡八〇を越える高齢だ。

老体にこの闇のゲームはさぞ報えた事だろう。操られていたとは言え 否、操られていたからこそ、蒼乃丞は磯野の身が心配だった。

「おい、大丈夫か磯野！？ 磯野ッ！！」

小さな身体で磯野の身を抱え起こした蒼乃丞の言葉に磯野は苦しげな呻き声をあげる。

どうやら息はあるらしい。

問題は未だ磯野が何者かに操られている可能性だが、今の蒼乃丞にはそれはないと言い切れる。何故かと問われれば答えに窮するが、それでも確かな確信だけがあった。磯野はもう大丈夫だと。

事実、磯野は元の彼へと戻っていた。

「……………うあ……………こ、ここは一体……………ッ！？ 蒼乃丞様、そのお姿は！？ それにこの部屋の惨状も一体どうしたというのですか！？」

気がつくや否や部屋と蒼乃丞の惨状に驚愕の声を上げ、劣情を催す蒼乃丞の艶姿を直視しないように努める様はまさしく元の実直な忠臣の姿だ。

しかし、真に恐るべきは既に枯れ果てたはずの老人を赤面させた蒼乃丞の魔性であろうか。

女の魅力は皆無な幼児体型だと言うのに、濡れた肢体が放つ彼女の輝きは百万ドルのダイヤモンドさえ霞んで見えるほど可憐にして

妖しく艶やかで、そして何よりも美しかった。

そんな姿を信用できる人物であるとは言え男性である磯野に晒している事を認識しているのかいないのか。我が身の事を一向に気に留める素振りも見せず、蒼乃丞は至極真面目な表情で磯野に向かって問いかけた。

「そんなことよりも磯野、ボクの部屋に来る前の事を覚えているか？」

「えっ！？ いえ……そう言えば何故私は蒼乃丞様の寝室に……」

蒼乃丞の問いかけに磯野はここに来る前の出来事を振り返ってみるが、何故自分が蒼乃丞の寝室に来たのかさえわからない。

それどころか、ここ数十分の記憶が完全に抜け落ちていたのだ。

「何も覚えていないのか？」

「……はい。しかし蒼乃丞様、これは一体何があったと言うのです？」

まるで何も覚えていない磯野の様子に蒼乃丞は思案する。

磯野が何かを覚えていれば彼を操り自分に非礼を働いた下手人を探し出す手がかりになるだろうと思ったのだが事はそう簡単には運ばないようだ。

しかし蒼乃丞はそこで、ふと気がつく。

手がかりといえば、磯野が使っていたカードもそうだ。

ダークチューナーにダークシンクロ、そしてダークシンクロモンスター。今まで聞いたことのないカードを使って召喚された、持つ黒縁のカード。

デュエルモンスターのレアカードを大量に持つ大資産家であり、インダストリアル・イリユージョン社との提携から過去のカードや

新たに発売されたカードへの造詣も深い蒼乃丞をしても知り得なかったカードの数々は貴重な手がかりになるだろう。

「それはだな　　ッ！」

そう思った蒼乃丞は磯野にここまで経緯を説明しながらそのカードたちを改めようとカードへ視線を移したところで絶句した。

宙に舞い地へと散らばったカードから黒い霞が立ち昇り、その絵柄をどこにでもあるノーマルカードへと変えていくのが見えたからだ。

あれだけ蒼乃丞を苦しめたダークシンクロモンスター、絶望のクトウルフも一山幾らの価値しかない眠れる巨人　ズシンになっていたのである。

「させんッ！」

その光景を目にした蒼乃丞はとっさに空中へと手を伸ばすと、黒い霧が立ち昇る一枚のカードを手を取った。

立ち消えようとすする黒い霧を何とか押さえ込もうとする蒼乃丞に対し、黒い霧は激しい抵抗を見せる。

黒い霧はその身に秘めた闇の力で持つて蒼乃丞の精神に侵攻を始めたのだ。

「くあッ！」

心臓を抉り取られ氷水に浸けるかのような冷たさが蒼乃丞の心を苛む。

凍てつくような寒さと冷たさに蒼乃丞が負けじと心を強く持つ中、カードを手に急に苦しみ出した主の姿に磯野は困惑を顕にする。

「蒼乃丞様!？」

「大……丈夫だ! それと今……は忙しい……から……話しかけるな……ッ!！」

「しかし……ッ! わかりました」

全く大丈夫そうでない蒼乃丞の姿に何かを言おうとした磯野であったが彼女の目に燈る決意の光に押し留められた。

蒼乃丞が苦しむ原因は磯野にはさっぱりわからないが、それでも彼女が何かと必至に戦っていると言う事だけはわかる。そして彼女がこういう目をするときは決まって自分の制止の声は届かないのだ。ならば齒がゆいことこの上ないが臣として自分に出来る事は主の無事を祈るのみ。

そんな痛いほどの磯野の気持ちを受け取ったのか蒼乃丞は彼を安心させるように一つ静かに頷くと黒い霞に覆われたカードに向き直り再び心を蝕む闇と相対する。

「ぐッ! ……どこの誰だか……わからんが……このボクに喧嘩を売ったんだ……。ただで……。ただで……。逃がすものかあああああああッ!！」

蒼乃丞の叫びと共に黒い霧も声なき雄叫びを上げ彼女の中へと闇を伸ばすが、残念ながら黒い霧の攻勢はここまでだった。

主の叫びに呼応して蒼乃丞のデッキから顕れ出でた青眼の白龍の精霊が眩いばかりの輝きを持って黒き霧の放つ闇の力をかき消したのだ。

魔を払う聖なる輝きを前に蒼乃丞の心から闇は晴れる。

それと同時にカードから立ち昇っていた黒い霧もその姿を霧散させたが、カードの絵柄を見る蒼乃丞の顔には満足気な笑みが浮かんでいた。

「ふッ……捕まえ……た……」

しかし、その笑みも一瞬のこと。

瞼を重く閉じ、体を徐々に傾いていく蒼乃丞の姿に磯野は悲痛な叫びをあげた。

「あ、蒼乃丞様！ 蒼乃丞様ああああッ！！」

磯野の叫びが木魂する中で、全ての力を使い果たしその場へと崩れ落ちた蒼乃丞は死んだように眠り続ける。

その手にDT ナイアルラトホテップのカードを握りしめながら。

Turn-14 無窮の奇跡 蒼乃丞、覚醒 (後書き)

今回のキーカード

《宝札の天使》

1 ATK300 DEF700 光属性 天使族 効果モンス
ター

自分の墓地に存在するこのカードと光属性天使族モンスター一体を
ゲームから除外することで、お互いのプレイヤーはデッキからカ
ードを二枚ドローする。

暗闇に灯された蝋燭が燭台の上で不気味な光を揺らす中、別の光源が闇に光を浮かび上がらせる。

しかし、その光は決して闇を照らす輝きなどではない。

それは闇に燻る黒き光。世界を光なき冥府へと導く黄泉の住人、ダークシグナーの証たる蜘蛛の地上絵の痣が放つ輝きであった。

ここはB・A・D・エリア。《Barbaric Area After Damage》と呼ばれるゼロ・リバースの爪あとが今も生々しくも残る不毛の大地。セキュリティでさえも足を踏み入れることのないサテライト屈指の危険地帯だ。

彼ら、ダークシグナーがいるのはその中心点。

地獄の門を開いたゼロ・リバースの震源地であり、ゼロ・リバースと言う大災厄を引き起こした原因たる第一号モーメント 開発コードネームを《Uru》と名付けられた最初のモーメントが眠る地こそが彼らの居城であった。

廃墟となつた研究室の一室に座す彼らは上座に座る男の蜘蛛の痣に戻っていく二本の脚を見ながら、それぞれ違った反応を見せる。

「不動遊星と海馬蒼乃丞……どうやら、三つの内二つの獲物は逃げたようですね」

「ハッ！！ 俺にとつちや、その報告は寧ろ好都合だね！ 遊星には俺を満足させてくれるまで死んでもらつちやあ困るからなあ！！」

上座に座る男に恭しく接する大男と、狂躁の声を上げて不動遊星に固執する男。

両者とも蜘蛛の痣を持つ男と同様フードを目深に被っているため顔はわからないが、それでもその闇の奥に揺らめく濁つた黒き瞳は

暗き闇の中にあってもよく映えていた。

そんな彼らからの言葉に、盟主たる蜘蛛の痣を持つ男は鈍く光る右腕の痣を抑えながら邪悪な笑みを持って答える。

「今回は挨拶代わりだ。我々と奴等とは言わば磁石の両極が如き存在……いずれは向こうから糸にかかりに来るだろう」

シグナーとダークシグナーは戦い合うが宿命。

そして全てのシグナーが覚醒した今、五千年周期の戦いは再び幕を上げたのだ。

シテイへと送った三人の刺客は此度の戦いを盛り上げるための余興、言わば前哨戦に過ぎないと言う蜘蛛の痣を持つ男に対し納得できない部分があったのか大男はとある疑問を投げかけた。

「それはそうと、何故シグナーではない海馬蒼乃丞の元へも刺客を？ それも地縛神にさえ匹敵する最強のダークシンクロモンスター、絶望のクトゥルフまでも死るとは……。何故貴方は部外者である彼女にそこまでするのですか？」

大男の疑問も尤もな事だ。

シグナーである不動遊星とジャック・アトラスに刺客を送るのはわかる。十六夜アキにも自分たちの仲間であるもう一人のダークシグナーが復讐に向かっているし、龍可にしても彼女のシグナーの竜たるエンシェント・フェアリー・ドラゴンを自分が握っている以上いつかは戦う時が来るだろう。

しかし、蒼乃丞は別だ。彼女はシグナーでもなければダークシグナーでもない。

そんな招かれざる客とも云うべき蒼乃丞にダークシグナーの盟主たる蜘蛛の痣を持つ男は我らが神、地縛神にも劣らぬ力を持つ絶望の邪神を彼女に向けたのだ。いかに心酔する盟主の行動とは言え、

大男にとって今回の彼の行動は余りにも解せない事であったのである。

この大男からの問いに蜘蛛の痣を持つ男は一つ鼻を鳴らすと意味深な笑みを湛えながら、その理由を答えてやった。

「ふッ。貴様たちは知らないだろうが、彼女もこの地に並々ならぬ因縁を持つ者なのだよ」

「確かに彼女はここを管轄していた海馬コーポレーションの現総帥ですが、それが果たして我ら神々の戦いに参戦しうる因縁足りえるのですか？」

まるで謎かけのような言葉に一番想像し得る可能性を述べた大男だったが。

「ふ……ふはは、あつははははははははッ！」

蜘蛛の痣を持つ男から帰ってきたのは笑い声であった。

抱腹絶倒、腹を捻じ切らんばかりの大笑い。それだけ大男の語った可能性は的外れだったのかと思われたが、それはあながち大きく外れているわけでもなかった。

何故ならば大男が述べた言葉はある意味で正鵠を射ていたからである。

「ふっはははははははは！　そうではない！　いや、そうでもあるか！　確かに彼女はシグナーではないが、その身体に流れる血脈は決してこの地を避けては通れない！　その意味に置いて、彼女は既に此度の戦いに参加する資格を有しているのだからな！」

まるで彼女の事をよく知っているかのような口ぶりで高らかに語りながら蜘蛛の痣を持つ男は笑い続ける。

一体、彼女と彼の間にとどのような接点があつたのか。彼は彼女の何を知っているのか。

謎だけが深まっていくばかりの中で、ただただ蜘蛛の痣を持つ男の笑い声が深き闇に木魂するのであつた。

セピア色。

それは、全ての色彩が色褪せた思い出の色。それは、どこか希薄で何かの拍子に泡沫と消えてしまいそうな儂い色。それは、優しく穏やかで暖かな柔らかい色。

ここはそれ一色を濃淡だけで持つて彩られた世界。現世の枠から外れた追憶の世界。

そんな世界に浮かび上がる風景はどこかの病室だろうか。

どうやら、ある妻が双子の赤子を生んだらしい。柔らかな日が差し込む小綺麗な部屋で一組の夫婦が手に手に生まれたばかりの赤子を抱きながら幸せそうな笑みを湛えあつていた。

『アナタ、こつちも見てください』

『おおッ！ こつちは可愛い女の子だな。それに双子だけあつて瞳の色も 同じ蒼色か。私の瞳は鼠色だから二人は君に似たのかな？』

彼らにとって初めての子供なのか慣れない手つきでたどたどしく赤子を抱き上げる姿は初々しく、生まれてきた赤子の面差しが誰に似ているかで花を咲かせる様は微笑ましい光景だ。

夫婦に抱かれた双子の姉弟も幸せそうな両親に天使のような笑みを見せる。

両親から限らない愛情と祝福を受けて笑う姉弟の瞳は父となった男の言う通り、母となった妻と同じ蒼穹の様な美しい蒼色。

だが妻は娘の面差しに自分とは少し違うところを見たのか、その手に抱く娘に慈愛の眼差しを向けつつ夫の言葉に一つの注釈を付け加えた。

『この娘はどちらかと言えば、私の父と母に似たのかもかもしれませんよ。目元なんか、ほら』

そう言うって差し向けられた娘の目元を良く見た夫は、そこに良く知る人物の面影が確かにあった事に驚きの声を上げる。

『本当だ！ お義父さんの力強い瞳によく似てる』

巖の様な厳しさと滝の様な激しさを持って眼前に立ちはだかる全てのものを薙ぎ倒し蹂躪してきた傑物。企業経営から技術開発、さらにはデュエルモンスターズに至るまで多方面に才を見せた不世出の天才。

娘の蒼い瞳とそれを縁取る凜々しい目元は、そんな妻の父を想起させてしまうほど良く似通っていたのである。

しかも娘が受け継いだのはそれだけではない。

苛烈にして熾烈なる義父を優しさでもって暖かく包み込むことのできた人格者である義母の特徴までをも娘は備えていたのだ。

『ふふふ、でしょう。それに白磁のような白い肌も私の母にそっくり

りですし、亜麻色の髪の毛なんて父の栗毛と母の銀髪を合わせたみたい』

『確かに見れば見るほどお義父さんとお義母さんにそっくりだ。これが隔世遺伝と言っやつなのかな』

両親よりも祖父母に似た娘。

これは何かの天啓だろう。偉大な義父と人格者の義母に似たこの娘はきつと後世に残るような大きな事を成す　娘の面差しに彼はそう思わずにはいらなかった。

しかし、彼も人の子か。

娘が尊敬する妻の両親に似てくれたことを誇らしげに思う一方で、父親としては娘に自分の面差しを一端でも受け継いでほしかったのだろう。己に似たところを欠片も見受けられなかったことに大きく肩を落としていた。

シヨンボリと肩を落として落胆する夫の様子に、妻は微笑ましい笑みを浮かべながら彼の手の中に収まっているもう一人の我が子を指して言った。

『でも　はアナタ似ですよ』

この妻の言葉に大きく落胆していた夫は復活を果たす。

妻の指摘したとおり、夫の抱く双子の弟の方は確りと父親である彼の特徴を色濃く受け継いでいてくれたからだ。

『はっははは、確かに　は黒髪だし目元は私にそっくりだ。しかし息子は父親似、娘は母親似と男と女で見事にわかれてしまったね』
『双子とは言っても二卵性双生児ですもの。似るのは通常の姉弟程度のもですよ』

そう言いながら妻は見事に復活を遂げた夫と共に朗らかに笑いあ

うが思い出したことがあるのか、でもと言葉を続けた。

『この娘の名前はとうしまししょうか？ 結局、今日まで新しい名前は思いつきませんでしたし』

どうやらこの夫婦、女の子の名前を未だ決めていなかったらしい。男の子の名前は妊娠が発覚した時の一番に決める事ができたのだが、女の子の方の名前はこれと言ったいい案が出ずこれまでズルと引き延ばしてきたのである。

しかしこうやって元気に生まれてきたのだから、この娘にも名前をつけて誕生を祝福してあげなければならぬ。それこそが親となつた自分たちが生まれてきた子供にあげる最初にして最大の贈り物なのだから。

その思いを胸に彼は科学者として培つた優秀な頭脳をフル回転させる。

女の子だから可愛らしい名前がいいか、それとも凛とした響きの名前がいいか。

花にちなんだ名前も捨てがたいし、当て字でオンリーワンの名前を作るのも悪くない。

などと言つた思考の果て数秒の間に様々な名前が彼の灰色の頭脳に羅列されていくが、どれもこれも何かがしっくりこない。偉大な義父と義母のイメージを強く持つ娘には、どのような名前も霞んで見えてしまうのだ。

それでも彼は諦めることなく次々と新たな名前を脳裏に羅列させては没印をつけていく。

幾度となくその行為を繰り返して没にした名前の数が千を越えようかとした時、不意に彼は妻と娘の蒼い瞳と己が腕に納まる息子の顔を見た。

その時だ。彼の脳裏に一つの名前が思い上がったのは。彼はまるで何かに導かれるかのように脳裏に浮かんだ一つの名前を紡ぎ出す。

『ううん、そうだね……それじゃあ蒼乃丞というのはどうだい？』
『蒼乃丞……ですか？』

夫の口から紡がれた名前をかみ締めるように反芻する妻に、彼は彼女と彼女の腕に収まる娘、そして自分が抱く息子に視線をやりながらその名の由来を口にした。

『そう。君や君のご両親から受け継いだ蒼穹の様な瞳の色から蒼と二人の子等が多くのご《友情》を育めるようにとの願いを込めての一字と同じ韻の《友》の字の対となる《情》の韻を持つ丞で蒼乃丞』

妻と彼女の偉大な両親と同じ瞳の色と、息子の名前に乗せた夫婦の思いをさらに姉が繋いでより大きな力となるようにとの願いを名前に乗せる。

娘だけではなく二人の姉弟に幸あれと　それが父である彼が娘につけた名前であった。

そんな思いをもって語られた娘の名前に妻はクスリとたおやかな笑みを見せる。

『二人の名前を一字ずつ合わせて《友情》……ふふッ、やっぱりアナタはロマンチストなのね』
『気に入らなかつたかい？』

『いいえ、とてもステキな名前。ねえ、聞いた？　貴女の名前は蒼乃丞。　蒼乃丞よ』

名前をもらった娘が嬉しそうに笑って自分たちの声に応えたように見えたのは親の引け目だろうか。

花の咲くような娘の笑みに彼らも自然とその表情は笑顔になる。しかし、両親の視線が姉一人に向かっている事を過敏に感じとったのか。父親の腕に抱かれた弟が急に愚図り始めた。

『わわッ！ えっと……ど、どうすれば!？』

『あらあら、蒼乃丞はこんなにケロリとしているのに　は泣き虫さんなのね。よしよし、お母さんとお姉さんのところにおいで』

いきなり泣きだした息子にどう対処していいのかわからずオロオロとするしかない夫の様子に、妻は小さな蒼乃丞の身体を片手だけで抱えると空いた手で夫の腕から愚図る息子を抱き寄せるとあやしながら姉である蒼乃丞と対面させる。

『ほら、。貴方のお姉さんですよ。蒼乃丞も、この子が貴女の弟ですからねえ』

母の言葉に導かれてか、それとも泣き止まぬ弟が気にかかったのか。蒼乃丞はまるで慰めようとするかのように短く小さな手を精一杯、弟へ伸ばす。

だが、所詮は赤子の手。同じ母の腕の中にといてもその距離差はどれだけ手を伸ばそうとも届くものではなかった。

懸命に伸ばされる蒼乃丞の小さな手はただ空中を彷徨うばかり。そんな娘の健気な姿を見やってか、母たる妻は娘の手が弟に届くように二人の間を近づけてやった。

そうしてやっと蒼乃丞の手が弟の頬に触れた時、驚くべきことが起こった。

母の胎内で常に一緒だった姉の存在を近くに感じられたことが大きな要因だろうか。何と大声を上げて泣いていた息子の泣き声がピ

タリと止んだばかりか、一転して彼ら家族に笑顔を見せたのである。弟に手を触れていた姉たる蒼乃丞も弟が笑顔になったことに満足したのか、可愛らしい笑みを漏らす。

まるで二人で一つの存在であるかのように笑いあう姉弟の中睦まじい姿に、その様子を見ていた夫と妻も朗らかな笑みを浮かべた。

『この子等の生きる人生が幸多きものになるといいな』

親が子の幸せを願うのはいつの世も同じだ。そこには一点の例外も存在しない。してはならない。

思いを乗せた名前を与え、限りのない愛を与え、健やかな未来を願う。

過去に幾星霜と紡がれ未来永劫かわることのない万物の理へと昇華された親の我が子を思い、愛し、慈しむ心　人、それを親心と云う。

その心を持って紡がれた夫の言葉に妻は子供たちと同じ満面の笑みを持って応えた。

『きつと、そうなりますよ。だって私たちの子供たちですもの。それに、私たちの研究が実ればこの子達の過ごす未来はきつといい時代になるはずです』

『ああ、そうだな』

家族の笑みが満開に咲き乱れる病室に優しい午後の日差しが柔らかに降り注ぐ。

新たな時代を生きるだろう子供たちと、その時代の扉を開こうとする自分たち。

そして、それはきつと子供たちの笑顔が眩しく煌く幸福な未来だと、この時夫婦は来るべき次の時代をそう信じて疑わなかった。

「……夢か」

まどろみから覚めた蒼乃丞の呟きが静かに広い室内の空気を振るわせる。

ここは海馬コーポレーション本社ビルに備え付けられた医務室。総合病院に劣らぬ最新設備を備えた医療機関のベッドの上で横たわっていた蒼乃丞は未だぼやける眼を数回瞬かせながら身体をゆつくりと起こすと現状を把握するために今の自分の姿や辺りを見渡した。入院患者が着るような寝間着。老廃物分解機能を備えた長期介護用のジェルベッド。腕に繋がった点滴のチューブ。時計はないので今はいつの何時かはわからないが窓から差し込む日の明るさから正午前後といったところか。と、なれば自分が気を失った時点が深夜だとするならば少なくとも半日は寝ていたということになる。

次に医療兼介護用ベッドの横に備え付けられたサイドボードに眼を移してみると、そこには決闘盤とデッキと共に、この状況の元凶となったDT ナイアルラトホテップのカードがおかれていた。

忘れもしない、悍ましい邪神との生死を賭けた決闘。自分の中に潜んでいた弱く醜い、心の闇が姿を見せた忌々しい決闘。そして、青眼の白龍たちと真に心通わせる契機となった覚醒の決闘。

「どつやら、あの《闇のゲーム》とやらまでは夢でなかったらしい

な。しかし……」

あの出来事が真実であったことを示す証のカードに蒼乃丞はしみじみとそう言葉を漏らすと、不意に神妙な面持ちとなって右手の掌を自分の目の前に掲げ上げた。

それは白く小さな愛らしい乙女の手。世界の全てを掌握せんとする偉大な王の手。

本来ならば相容れぬはずのその二つの要素を相住まわせる彼女の手が今感じる夢の中で触れたある感触。

夢自体が何であったかはサツパリ覚えていないが、それでも右手に残る確かな温もりは身に覚えのある懐かしいものがあつたのだ。

しかし、それは一体何であつたか。

確かにこの温もりは自分が“いつか”“どこか”で感じたことがあるものだ。

だがそれは、尊敬してやまない祖父母のものとは違う。父母に代わり自分を育ててくれた伯父のものとも違う。先の決闘で心通わせあつた青眼の白龍たちのものとも当然違う。

それはまるで、郷愁の念にも似た寂しくも心癒される感覚。得体の知れない、しかし決して不快ではない不思議な感覚。

どこかを感じたことがあるのに、誰かと触れ合つたことがあるのに、それがこうも思い出せない。まるでポツカリと心に穴が空いたような。否、この場合は心に穴が空いていたことに今気づいたと言つべきか。いつか自分が持つていたはずのものが知らず知らずのうちに失くなつていたと言つ喪失感が蒼乃丞の心に少なからぬ痛みを与えていた。

それに加えてデュエル・オブ・フォーチュンカップから色々とりすぎたせいもあるのだろう。心身の疲れから若干ナーバスになっていた彼女の眼に不意に涙が溢れ出した。

その様はまさに、孤高の王が弱き乙女に戻る瞬間。

彼女の中にあるもう一人の自分。王という強すぎる光に隠された

彼女のもう一つの側面が僅かに顔を出したのだ。

そんな蒼乃丞の心の内を感じ取ったのだろう。サイドボードに置かれたデッキから精霊化した三体の青眼の白龍が慰めるように蒼乃丞の元へと擦り寄ってきた。

泣いてもいいんだよと、王であらねばならない貴女でも自分たちの前ではただの少女でいていんだよと、誰も見ていない場では王でいる必要はないんだよと、心に語りかけてくる彼女たちの思いに蒼乃丞は“ならば一時”と心の奥底に嚴重にしまい込んだ闇を縛る鎖を僅かに緩める。

そして、思いのままに眼にたまった涙を雫に変えようとしたその時。

ガチャンッ！

と、ガラスが割れる甲高い音と共に震える従者の声が蒼乃丞の耳に飛び込んできた。

「あ、蒼乃丞……様？」

その音と声に驚いたのか青眼の白龍の精霊たちは姿をカードの中へと戻した。

そんな彼女たちに釣られるように蒼乃丞も開きかけていた心の中にある闇を再び押し込めると嚴重に封をする。そして眼にたまった涙を一瞬にして振り払うと直ぐさま王の姿を取り戻して何事もなかったかのように扉の前で立ち尽くす磯野に向かい、いつもの様に鷹揚な王の言葉を持って彼に言ったのだ。

「ああ、磯野か。どうした、呆けた顔をして」

もう、そこには弱々しい乙女の姿はない。あるのはただ毅然と前

を向き、他者に行くべき道を指し示すいつもの蒼乃丞の姿であった。

「よ、よくもご無事で。私はもはや目覚めぬものとばかり……」

何時もと変わらぬ蒼乃丞の姿に彼女の元へと駆け寄った磯野は蒼乃丞の手をとり、ただただ主君の快復を喜んだ。それ故だろうか、磯野は蒼乃丞の目がほんの少し赤いことに気がつかなかったことは彼女にとっては僥倖であったと言えよう。

喜びに咽び泣く磯野に蒼乃丞は己が健在であることを強調するために一つ頷きながら、あれから自分がどうなっていたのかを問いかけた。

「その事についてだが磯野、ボクはどれほど眠っていた」

「はッ、丸三日と言うところでしょうか」

磯野の喜びぶりから半日では効かない長い時間　それこそ半年や半月ほど眠りについていたらと予想していた蒼乃丞だったが意外とその期間は短いものだった。

「三日……。そうか、三日か」

その磯野が語った三日と言う数字に蒼乃丞は危惧していた最悪の事態には至っていないということを確認すると安堵の息を漏らす。

海馬コーポレーションはトップ不在で機能停止に陥るような脆弱な会社でないにしても辣腕社長たる蒼乃丞の存在はやはり大きい。

屋台骨がぐらつくなどと言うことはないが、それでも投資家たちの動向や社員のモチベーションなど蒼乃丞が前線離脱をすることによってのリスクは決して小さなものではない。病状が意識不明の重症であるならば尚更だ。現に蒼乃丞が倒れてからと言うもの右肩上がりだった海馬コーポレーションの株価は久しく続落続きと言う様

相を呈していた。

この状態が半月以上続き蒼乃丞の復帰が絶望的と断ぜられた場合、海馬コーポレーションが被る損失はいかほどのものか考えただけで恐ろしい。当然、蒼乃丞が目指す栄光のロードも途絶えることとなる。それは名実共に蒼乃丞の王国が終焉を迎えると言う事だったのだ。

己がロードが未だ途切れていないことに静かに安堵する蒼乃丞に対し、磯野は次いで驚くべき情報を口にした。

「それと、お伝えしたいことが一つ。本日未明にアルカディアム・ブメントが崩壊しました」

「なにッ！」

蒼乃丞が驚くのも無理はない。

あれほど警戒し、いつかは立ちふさがる敵として認識していたアルカディアム・ブメントがたった一夜で崩れ去ったというのである。規模では海馬コーポレーションにも引けをとらない団体が簡単に崩壊した事実信じられないと言う表情を見せる蒼乃丞に磯野は今日の新聞の一面記事を見せながら何が起こったのかを彼女に語った。

「アルカディアム・ブメントの本部ビルを中心に蜥蜴と蜂鳥の地上絵が現れ、巨大なモンスターが出現したのです。それと同時に近隣の住人が数多く行方不明となる事件も同時に発生しておりまして、地上絵と共に出現した巨大モンスターの生贄にされたという嘘の様な噂が実しやかに飛び交っているのです」

差し出された電子新聞には確かにアルカディアム・ブメントの本部ビルを中心に蜥蜴と蜂鳥の地上絵が交差する写真が掲載され、行方不明になったその地域の住民たち数百名の名前が共に羅列されていたのだ。

他にもペルーにあるナスカの地上絵がいくつか消えていて、消えた地上絵の中にはネオ童実野シティに現れた蜥蜴と蜂鳥もあったという事が記事に書かれており関連性を指摘する社説までもあった。大地は焼かれ、瓦礫が散乱する中に描かれた地上絵　蒼乃丞はその地上絵に青紫の炎が走るのを幻視した。

それは忘れもしない《闇のゲーム》で自分を取り囲んだあの不気味な炎。青眼の白龍たちに招かれた世界で垣間見た蜘蛛の地上絵を描きサテライトを飲み込んだ破壊の炎。

間違いない。

そしてあの世界で見たビジョンが現実になったのなら消えた住民たちがモンスターが生贄にされたと言う噂も　。

「嘘なんかじゃない……」

「はッ？」

ポツリと呟かれた蒼乃丞の言葉に磯野が何とも言えない表情を見せる中、蒼乃丞は何かを決意するように顔を上げ虚空を見据えると、やおら腕に刺さった点滴の針を引き抜きベッドから降りたつ。

そしてサイドボードに置かれた決闘盤やデツキを掴むと、力強い言葉で磯野に一言告げた。

「征くぞ」

その言葉と共に部屋の出口である扉に力強い足取りで歩を進めて行く蒼乃丞に磯野はたじろぎながらも彼女の後を追隨する。

「えッ！？　行ってくつて、どちらに!?!」

磯野の驚きが至極当然だ。

何といつても蒼乃丞は今の今まで意識不明の重体だったのである。それを目覚めてすぐ、しかも検査もせずに退院とは余りにも思い切りがよすぎる。ここはせめて後遺症がないかだけでも調べてほしい磯野であったが、そんな理由では果断にして即断即決を身上とする蒼乃丞を留めるには至らない。

「決まっている。この件とお前を操ってボクに決闘を仕掛けてきたコレの使い手……それを知る人物に直接問いたです」

「あ、蒼乃丞様！ 病み上がりなのですからご自愛ください！ 蒼乃丞様！！」

主君を気遣う磯野の心情を知ってかしら知らずか、蒼乃丞は手に掴んだデッキの中からDT ナイアルラトホテップのカードを取り出して磯野に見せると歩みを一段と早くする。この一連の事について確実に情報を持っているだろう人物の元へ。

磯野に出来るのは歩みを止めない蒼乃丞の後ろを心配げについて行く事だけだった。

その様は、まさに従者を従える王の姿。燦然たる輝きを放つ強者の姿。

そんな眩いばかりの輝きを放つ彼女が病室の中で一瞬垣間見せた弱さ。それは先の決闘でも顔を覗かせた海馬蒼乃丞の心の闇。

果たして彼女の今の姿は偽りの仮面か、それとも彼女の真なる姿か。その問いかけに答えるものは蒼乃丞を含め、誰もいない。

疑問は謎のままに王たる乙女の物語は進んで行くのだった。

Turn - 16 彷徨の星屑 / 決意の刻

ブオオオオオオン！ ブオオオオオオオオオオンッ！！

サテライトの曇り空に車輪が空転するけたたましい音が聞こえる。その音源にあるのは赤いD・ホイール《遊星号》。先のダークシグナーとの決闘で半壊した愛機を遊星が修理していたのだ。

ボロボロで動くかどうかとも怪しい状況だったにもかかわらず、ものの見事に元通りに修復して見せた遊星の手腕に情報収集をしていたカウボーイスタイルの何でも屋、雑賀は感心した様子で遊星に声をかけた。

「いつもながら見事なもんだな。これでやっと復活って訳だ」

「ああ。D・ホイールはな」

しかし遊星から返ってきた返答は弱々しい。

「どうやら未だ、つい先日行ったダークシグナーとの騎乗決闘での事実上の敗北が尾を引いているようだ。」

その決闘を見ていた遊星の幼馴染であるクロウ・ホーガンの話を聞くところによると、何と対戦したダークシグナーはかつての友であり仲間であった鬼柳京介であつたらしい。

雑賀は彼らの過去に何があつたかまでは聞いてはいないが、それでも鬼柳という人物はかつての友である遊星をこの手で殺したいほど憎んでいるとの事だ。

現に先の騎乗決闘では《遊星号》が実体化するダメージに耐え切れずクラッシュし決闘が中断されなければ遊星は鬼柳の召喚した巨大モンスター、地縛神 Capac Apuの攻撃の前に死んでいた。加えて腹部にD・ホイールの破片が深く刺さる重傷を負い激

痛に苦しむ遊星に極上の笑みを見せたらしいところを見ると楽に死なせる気もないらしい。それだけの狂気を持った相手に遊星は目をつけられたのである。

幸いにして破片は主要な血管や臓器を傷つけておらず、治療は破片の除去と傷の縫合だけで済んだ。

だが、心に負った傷はそう簡単に治らない。

かつての友が故郷を滅ぼす敵となり自分の命を狙っている現実と、今まで体感したことのないような圧倒的な死の恐怖。それらを前に、遊星は夜も眠れないほどの悪夢に苛まれ魔されていたのだ。

「だが」

もはや遊星は戦えないのではないかと、そう思っていた雑賀に遊星は静かに言葉を挟む。

「今日は別の夢を見たおかげか悪夢は見なかった。見た夢がどんな夢だったかは覚えていないが」

今日見たと言う夢とやらに関係があるのだろう。何か残ったものを必死に確認するように頬に手をやりながら語る遊星の顔は昨日の憔悴しきった顔よりも遥かにマシに見えた。

しばらくはそうやって夢で感じた心地のいい感触に浸り心に刻まれた恐怖を癒した遊星は気持ち切り替えると雑賀に依頼していたある案件の進捗について問いかけた。

「で、そっちはどうだった？」

「お前の勘は当たっていたようだ。ダークシグナーがネオ童実野シティに……。このビルはアルカディアムーブメントの本部だ」

言葉短く聞いてきた遊星に雑賀は弄っていたパソコンを遊星に見

せつつシティの新聞や衛星写真から集めた画像を開いて見せる。

そこには遊星が鬼柳と戦った時と同様に大地に地上絵が刻まれていた。

間違いなくこれはダークシグナー。それも操られた傀儡ではなく人々の魂を生贄に召喚される恐ろしいモンスター、地縛神を持つ真なる冥府の番人が出てきたことの証だ。

そしてシグナーの敵たるダークシグナーが直々に現れたということとは。

「十六夜がやつ等に襲われたのか!？」

シグナーの一人であるアキはアルカディアムーブメントの所属。そのアルカディアムーブメントにダークシグナーが現れたとなれば狙いはアキ一人しかない。

「そのようだ、彼女は病院に運ばれたらしい。それと病院と言えば気になるニュースがもう一つ。何でも海馬コーポレーションの社長が意識不明の重体らしい。こっちには地上絵は浮かび上がっていないが社長室に地上絵に走ったのと同じ青紫の炎が燃えていたと近くに住むトップスの住人が証言している」

「海馬のところはまだ……」

さらにシグナーでない蒼乃丞のところはまだダークシグナーから刺客が送り込まれ共に病院送りになっている事実には遊星は病院のベッドで臥せっているだろう二人の身を案じると共に、改めてダークシグナーの恐ろしさを痛感していた。

攻撃が実体化するフィールドに　のダークシンクロモンスター、さらに地縛神。

今までとは次元の違う戦いにアキはもちろん、あの蒼乃丞ですら苦戦したであろう事は想像に難くなかった。

そんな遊星の心の内を読み取ったのか、雑賀は穏やかな口調で遊星に問いかけた。

「気になるか？ 同じ仲間ともいえるシグナーとして、決勝戦で死闘を演じた好敵手として」

この問いかけに遊星は痣のある右腕を掲げると苦々しそうな表情で首を横に振る。

「仲間、好敵手……。しかし、今の俺では十六夜の力になるどころか、あの真っ直ぐな眼で俺を認めてくれた海馬の前に立つことなど……」

今日見た夢のおかげでだいぶ薄れたとは言え未だ自分は鬼柳と向き合うことに恐怖を覚え、その力の前に脅えている。

そんな地に落ち、燃え尽きた流星のような自分に誰かを助けられる力があるだろうか。生命ある限り眩いばかりの輝きを放ち、常に前へと進み続ける彼女の前に立つ資格があるだろうか。

絆を信じ、思いを繋げば不可能はないのだと胸を張っていた自分は嘘なのではないか。本当の自分がかつての友に裏切られ、殺されかけ、その影に脅えるちっぽけな人間なだけではないのか　と、遊星は生まれて初めて自分という存在を信じられなくなっていたのだ。

痛いほどに拳を握り締め自己の在り方に迷う遊星に雑賀はどう声をかけたものかと言葉を捜すが、今の遊星にはどのような言葉も慰めにはならないだろう。仲のよかった友と不和になる辛さは雑賀自身、体験として良く身に染みている。それが確執となり相克とまできた遊星の苦しみはいかほどのものか。

しかし、だからこそと雑賀は思う。

一度断たれた自分たちの絆を再び繋いだ遊星には立ち直ってほし

いと。そんな遊星ならばきつと相克さえも超えて友と在りし日の絆を取り戻せるはずだと。ならば雑賀に出来ることは遊星の心の強さを信じ彼の復活を祈るだけであった。

心揺れる遊星と、遊星の強さを信じる雑賀。

言葉を漏らす者は他になく、ただただ静かな時が遅く重く流れる中で不意にその静寂を破るものが現れた。

耳を劈くような轟音と、激しい突風。

遊星は腕で顔を強風から庇いながらいきなり襲来した音と風の発生源へと視線をやった。

そこにあつたのは、けたたましいローター音を奏で激しい強風を巻き起こす飛行機械。こちらに向かって着陸態勢をとるKCのロゴが描かれた一台のへりの姿であった。

シテイの発展と富の象徴たる海馬コーポレーションのへりがサテライトに何用だと思つたのもつかの間、そのへりの窓に蒼乃丞の姿まで見えたのだから驚きだ。

曹操の噂をすると曹操が来るという故事があるが、まさか話をした次の瞬間に当の本人が尋ねてくるとは、それもトップス生まれでサテライトとは無縁の蒼乃丞が直々に乗り込んでくるとは流石の遊星をしても余りにも予想外の事すぎた。

予想外の人物の来訪に遊星と雑賀が固まる中、無事に着陸したへりから当の蒼乃丞が何時もの白コートを翻しながら降りてくる。そして遊星たちの後ろに建つマーサハウスの一瞥すると心なしか感嘆の息を漏らした。

「ほう。サテライトはゴミの城ばかりかと思つていたが、存外ましな建物もあるらしいな」

あまりといえばあまりなコメントだが実際サテライトではマーサハウスのようにしっかりとした建築物の体をなしている家というのは少数派を通り越して貴重派だ。

大概のサテライトの住人たちは崩壊し打ち捨てられたビルや地下鉄の駅に住み着いていたり、路上にゴミや瓦礫で家を作ったりして雨露を凌いでいたりと言った現状を考えると蒼乃丞の感想はもつともであると言えるし、シティの大半の人間が抱くサテライト「ゴミと瓦礫の巣窟」というイメージは風評でもなんでもない真実であった。しかし蒼乃丞が建物に興味を向けたのも一瞬のこと。それ以降は何物にも目を留めることなく堂々とした王の足取りで一歩一歩遊星へと近づいていく。

その威風漂う蒼乃丞の様に、萎縮していた遊星の心はさらに堪れない気持ちでいっぱいになった。

こうやって彼女が健在だということは彼女は身に迫る脅威を跳ね除けたのだろう。そして彼女から滲み出る黄金のような輝きがさらに増しているのを見るに、彼女は何かしら壁を一つ越えたのだ。それには彼女に襲い掛かったであろうダークシグナーが関わっている事は確かだった。

未だ恐怖に脅え立ち止まり続ける自分と、苦境を乗り越え次の段階に進んだ彼女。

こうして対比を見せられると否応にも気分が重くなる遊星に対し、蒼乃丞は小さな身体を盛大に大きく見せながら遊星に向かって言葉を放った。

「レクスに聞いたぞ遊星。シティ存続のために用意された生贄であるサテライトを救うと豪語し一人で乗り込んだとな。その意気や良しだが……なんだその覇気のなさは。それがこのボクと引き分けた決闘者の姿か？」

既に蒼乃丞はここに来る前すべてを知るだろう人物レクスの元に赴きダークシグナーが何であるかを聞いてきた。サテライトが作られた意味も、そのサテライトを救うべく一人敵地へと乗り込んだ遊星の事も。

ならば黙って手をこまねいている蒼乃丞ではない。

敵がはつきりした今、そこに乗り込み駆逐し蹂躪するが王道と従者である磯野ひとり連れてサテライトの地へと降り立ったのである。そうしてまずは情報収集と現地を良く知る者として蒼乃丞より先にサテライトへ戻っていた遊星の元をたずねるべく、遊星のメーカーをセキュリティのホストコンピュータにハッキングし追跡、特定してここまでやって来たのだ。

「……………」

真つ直ぐとした眼差しを　好敵手としての視線を向けてくる蒼乃丞に対し、決闘者としてはおるか自己の在り方にまで迷いを持つ遊星は彼女のその魂の気高さと眩しさ故に視線を逸らせざるを得なかった。

その遊星の機微を蒼乃丞は鋭すぎる嗅覚で嗅ぎ取る。それと同じ反応を見せる者を蒼乃丞はよく知っていたからだ。

遊星のその様に蒼乃丞は、まさかと唇を戦慄かせる。

何故ならば、今の遊星の姿はまるで　。

「遊星……まさか、負けたのか？」

頭を下げ、弱弱しく下を俯く姿。それはまるで敗者の姿に他ならなかったのだ。

しかし、遊星が負けたことなど蒼乃丞には到底信じる事が出来ない。常勝無敗、完全完璧である自分が唯一勝利できなかった人物が、生涯でただ一人心躍る強敵として認識した決闘者が、有象無象の負け犬に堕したなどと信じたくなかったのである。

断定を基本とする蒼乃丞の声音が疑問の色を帯びているのは、その言葉を否定してほしいからだろう。

「……………ああ」

だが、無常にも返ってきたのは弱々しい肯定の言葉と見るに耐えない好敵手の負け犬としての姿であった。

遊星のその姿と言葉に蒼乃丞は顔を真っ赤に染めると怒髪天を突いた。

「くっ………巫山戯るなああああッ！！」

歯を軋ませ怒りの形相で遊星に迫った蒼乃丞は遊星の胸倉を掴むと二〇センチ近く身長差のある遊星の顔を自分の前へと引き付け、睨み付けながら怒鳴り散らす。

「あのデュエル・オブ・フォーチュンカップで貴様に預けたデュエルキングの称号をどこの馬の骨ともわからぬ相手に奪われたというのか!？」

唾が直接かかる位置にて吼えかかる蒼乃丞だったが、その言葉の全てが事実そのものである遊星はただただ申し訳なさそうに視線を逸らすのみだった。

ここまで言われても何も言い返すことのない遊星に蒼乃丞は苦虫を噛み潰したような表情になると、もはや何も言うことはないと言わんばかりに遊星を手荒に突き放した。

「見損なっただぞ、遊星！ 負け犬の貴様など、何の用もないわ!!」

無様に尻餅をついた自分に向かって言い放たれた蒼乃丞のその言葉に遊星は頬に打たれた様な鈍い痛みを感じた。そこは奇しくも今日見た夢に係るであろう場所だったのは偶然であろうか。蒼乃丞も突き放した時に右手を痛めたのか不思議そうな表情を見せなが

ら右手を押さえていた。

不意に訪れた得も知れぬ痛みにより二人の時は一時止まったかに見えるがそれも数瞬の事。

右手に感じる痛みを無理やり振りほどいた蒼乃丞は別れを告げるように遊星を一瞥するとコートを翻して磯野の操縦するヘリへと歩を進めていく。

未だ鈍く痛む右手を押さえながらも遣る瀬無い怒りに身を焦がす蒼乃丞だったが、その胸中には一抹の虚しさも去来していた。

これでまた一人だと。

共に並び立つ者はなく、先導者として一人走り続けねばならない我が身を不幸だと呪った事はない。しかし、それでも孤高と孤独は別だ。人は孤独ではいられない。蒼乃丞の尊敬する祖父、瀬人にも己が全てをぶつけられる好敵手と心許せる弟がいたのだ。

尊敬する祖父や育ての親である伯父がこの世にいない今、真に心許せる相手は蒼乃丞にはいない。だからこそ、蒼乃丞は世界の先頭を走りながらも待った。自身に並び立つ強者が現れるのを。自身の築く栄光のロードに華を添える好敵手の存在を。

だが、その期待は見事に裏切られた。

勝利を逃したことをあかも忌々しげに語りながらも内心では自分に並び立つ好敵手の登場に喜び打ち震えていたからこそ、その落差は激しい。

それ故だろうか。もはや遊星のほうを顧みることなく進む蒼乃丞の足取りが、どこかふらついているかのように見えた。

一度は結ばれかけた二人の縁、好敵手と言う名の絆。

離れて行く二人の距離はそのまま歪ながらも紡いだ絆が儚くも霧散していく様であった。

そして完全に絆の糸が切れる境界線　乗ってきたヘリへと蒼乃丞が足をかけようとした時、ふと蒼乃丞の足が止まった。

何も蒼乃丞が心変わりを起こしたわけでもない。遊星が蒼乃丞を呼び止めたわけでもない。不意に起こった爆音と強風に歩を止め、

上を見上げただけである。

偶然か、それとも必然か。

こうして切れかけた二人の絆はこの地に向かって舞い降りるもう一台のへりによって繋ぎとめられたのであった。

サテライトはマーサハウスのダイニング。

そこで蒼乃丞は自身を態々サテライトに追ってまで訪ねてきた人物との面会を行っていた。

すぐさまここを発ち、ダークシングナーに奪われた勝利を奪還せんとしていた矢先に出鼻をくじかれた蒼乃丞だったが一応、自分に対する客と言う事で彼女は腸が煮えくり返りながらも応対することにしたのである。

ひよつとすると遊星との絆を断ち切りたくない彼女の内面が偶然とはいえ遊星との絆を危ないところで繋ぎ留めてくれた人物に対して見せた気まぐれかもしれない。

だが気まぐれにしる何にしる、本来ならばそう簡単にはプライベートルな対話の席を設けない蒼乃丞がこうして話を聞いてくれるのだ。幸運なことには違いない。

その幸運を手にし、蒼乃丞と拝謁する機会を得た顎鬚が立派な議員バッジをつけた人物はこの主であるマーサや何故かそのマーサに引っ張り込まれた遊星立会いの下、まずは会ってくれた蒼乃丞に

対し深々と頭を下げた。

「始めまして、海馬総帥。私はシテイで議員をやらせていただいている」

「知っている。十六夜アキの父親、十六夜英雄だな。ボクは忙しいんだ。用件は簡潔かつ手短に言え」

対する蒼乃丞は彼の顔と議員と言う肩書きを聞いたただけで彼が誰であるかをピタリと言い当てたが、これは何も難しいことではない。海馬コーポレーション総帥と言う社交界に良く出入りをする立場上、財閥関連の名士や政に携わる代議士といった人間の顔は一通り覚えているし、何より先のデュエル・オブ・フォーチュンカップでアキの近辺を洗った際、当然彼女の両親についても調べたのだ。これで知らないわけがなかった。

何より、彼女が後半に語ったように蒼乃丞には直ぐに成さねばならぬことが出来たのだ。この会話を早く切り上げそちらに向かうために、なるべく余分なことは省いておきたかったのである。

そう言われれば英雄にしても口舌を弄すまでもない。

否、そもそも口舌を弄する立場など自分にはないのだと英雄は自分に言い聞かせると今一度頭を　それこそ机に額をこすり付けるようにして蒼乃丞に下げたのだった。

「はい。今回こうやって海馬総帥にお目通りしたのはその娘の事なのですが、どうかお願いします！　アキを……娘を救ってほしいのですッ……！」

そして、英雄は語りだす。自分たち家族の過去を。

忙しさにかまけて娘にかまってやれず、娘には日々寂しい思いをさせたこと。それ故に娘が異形の力に目覚めてしまったこと。向けられたその力の前に恐怖し、娘を化け物呼ばわりしたこと。厄介払

いするようにデュエルアカデミアの寮に入れ、自分たちから遠ざけたこと。ふと寂しさから帰ってきた娘に、肩の荷がおりた自分たちの幸福そうな姿を見られ余計に傷つけたこと等々。

静かに、懺悔をするように語った英雄の言葉に誰も声をかけられない。

娘は親から見放されたことに傷つき、親は子を見離した罪に傷ついた。そして両者とも、その傷故に向き合うことが出来ないのだ。また傷つけられるのではないかと、また傷つけてしまうのではないかと思うが故に。

だからすれ違っしかない。

娘は行き場のない感情を《黒薔薇の魔女》として破壊に変え、親は何も出来ない自分たちの無力さに打ちひしがれる。十六夜親子が背負ったのは何と深き業であろうか

その深き業の中にあつては救いを求めるのはまた人としての真理であろう。アキもまた、破壊の中で一筋の救いを見出した。それが同じ力を持つ男、デイバインと彼の語る異能者の理想郷アルカディアムーブメントであったのだ。

しかし、やっとの思いで見つけ出した彼女の唯一の救いもアルカディアムーブメント崩壊と共に露と消えた。そして、彼女自身も生きる意味といつても過言ではない人物を目の前でなくしたショックにより深い眠りへと落ちたのである。

考えることを全てデイバインに委ね依存してきた彼女は自分の未来を考えてくれるデイバインが死ぬのを目の当たりにしたことで未来を　生きることを放棄したのだ。

これでは目覚めるものも目覚めはしない。

生きようとする意思がない者が昏睡から眼を覚ます道理などあるはずはないのだから。

こうしてアキは覚める事のない眠りにつく棘姫となった。両親との間に出来た心の溝をそのまま他者を阻む棘にして　。

「詰まるところ貴様の娘が昏睡状態に陥っていて、その原因の一端……否、かなりの部分は貴様たち二親にある。そんな自分たちが呼びかけてみたところで心を閉ざした娘は目を覚まさないからボクにそれをやれと言う事か」

全ての事情を話し終えた英雄に彼の言っていたことを要約してみた蒼乃丞だったが、それでも一つだけ腑に落ちない点がある。

普通、昏睡状態の人間に呼びかけて覚醒を促すという手法は患者と密接に関係のある人物が行うもので、そもそも昏睡状態の人間に赤の他人が話しかけたところで効果が見込めるとは到底思えない。

だというのに何故、彼女との接点がほとんどない自分にお鉢がまわってきたのか。その理由は意外なところからの情報にあった。

「私はあのジャック・アトラスから聞いた！ フォーチュンカップで唯一あの娘が助けを求めた貴女なら望みはあると！」

身を乗り出して熱く語る英雄の口から出た人物の名前に蒼乃丞は得心がいく。

彼もあの決闘の一部始終をみていたのだから、最後にアキが蒼乃丞に向けて手を伸ばしていた姿も当然見ている。それも端から見ればアキ本人もそのつもりであったろうが、その様はまるで助けを求める幼子のようにだったのだから。

であるならば確かに望みはありそうなのだが、しかしだ。

「あの駄犬め、いらぬ事をしてくれるツ……！」

厄介な客を呼び込んだジャックの不用意な一言に蒼乃丞が忌々しげに舌打ちする。

何故か。

蒼乃丞は直感で理解したのだ。これはジャックからの遠まわしの

嫌がらせであると言うことを。

もちろんジャックは女子供に対しては甘いところがあるので全ての理由がそれに収束することはないだろうが、それでも理由の51パーセントは蒼乃丞に厄介ごとを押し付けてやるうという魂胆だったのには違いない。

自分に嫌がらせしつつ、困っている者の窮地も救う。

ジャックの考え付いた忌々しい一挙両得の手段に蒼乃丞が心中で憤慨する中、英雄は再度対面に座る小さな王に向かって深々と頭を下げた。

「だから、お願いします！ アキを、私たちの娘を救ってください
ッ！！」

「ならば一つだけ聞こう。そんなに大切な娘ならば何故、貴様はそれを手放した？」

これで駄目ならば土下座も厭わないとばかりに頭を下げる英雄だったがしかし、蒼乃丞から返ってきた言葉は彼にとっては心の臓を貫くほどの正論であった。

「ッ！？」

「そんなに大事なものならば失くさぬように手を握っておくべきだったのではないか？ 手を離さぬべきではなかったのか？」

あまりの正論ゆえに英雄は身を強張らせ息を呑むしかない。

そんな彼に向けて、蒼乃丞は次々と正論を並び立ててはそれを浴びせていく。

攻め立てるように浴びせられる言葉は刃となり英雄の心に突き刺さっていくが、何も彼女は彼を甚振ろうとしているわけではなかった。

蒼乃丞はどんな経緯があるにしても大事なものを自分から捨てた

英雄の行動が全く持って理解できなかったのだ。

常に正しい道を正しく選び続けてきた蒼乃丞にとって、間違いと言う概念は彼女の中には存在しなかったのである。

人として当然あるべき機能が決定的に欠如している蒼乃丞。

言い換えるならば、彼女は人の心がわからない王にして純粋な乙女といったところか。

であるからこそ、蒼乃丞の放つ言葉は時として俗世に染まった者にとっては激しい痛みを伴う毒となるのだ。彼女の心根が清純であるが故に。

「あ、あの時は……」

そして、純粋な正論であるからこそ誰も蒼乃丞の言葉には反論出
来ない。

当然として存在する人としての心がないだけで、彼女の言っている事は徹頭徹尾真理であるのだから。

「過程はどうでもいい。ボクには理解に苦しむことだが貴様は結果として己が大事な宝である娘を手放した。どんなに言葉を繕って見た所でその現実が変わらんのだからな。これは貴様が招いた状況だ……それをッ！」

純粹過ぎる蒼乃丞には英雄の一連の行動は一切理解できなかったが、それでも確実に理解できたことが一つだけある。

それは彼女にとっては許容できない絶対事項。常に正しくある彼女が最も忌み嫌う事柄。

唯一理解できたそれに対し、蒼乃丞は一つ大きく息を吸うとまるで火山が噴火するとき激しさを持って吼えるように言葉を放った。

「誰かに尻拭いしてもらい繕いを戻そうなどと虫が良すぎる！しかもその役をこのボクに、他ならぬこの海馬蒼乃丞にさせようとはその所業、腹立たしいを通り越して万死に値する！この負け犬といい、他人に縋るしか能のない貴様といい、そんな貴様を寄越した駄犬といい、実に不愉快だッ！」

「……ッ！」

小さな身体が巨大に見えるほどの怒りを身に纏わせる蒼乃丞に名指しされて息を呑んだのは遊星か英雄か、それとも両者か。

期せずして訪れた静寂の中で場に去来するは蒼乃丞の怒りと、彼女に責められた者たちの自責の念のみ。そんな負の情念が渦巻く中で声をあげられるものは誰一人としていなかった。

唯一人を除いては。

「確かに、お嬢ちゃんの言うとおりさ。そんなに大切なものなら、どんな事があっても手を離さないべきだったんだよ。それが我が子であるならなおさらさ」

それまで静かに事の成り行きを見守っていたマーサの初めての発言に全員の視線がマーサへと向かう。

孤児院を預かる者として、孤児たちの親として、蒼乃丞を全面的に同意したマーサの厳しい言葉に英雄は一層肩を落として頭を抱えた。

やはり自分がしたことは取り返しがつかないことなのかと。これは娘がこうなるまでに放ったらかしにしていた自分たちに対する天罰なのかと。

しかし、このマーサの話には続きがあった。

マーサは蒼乃丞の方へ振り向くと、小さい子供に言い聞かせるように優しく言葉を続けたのだ。

「でもね、人間っていうのは常に正しい選択を選べるほど器用じゃないんだよ。海馬コーポレーションの社長さんであるお嬢ちゃんにはわかり辛いかもしれないけどね、大半の人間は皆そうなのさ。間違つて、失敗して、それでもそこから悔い改めてやり直す。それが人間なのさ」

それは真理の裏にある真実をついた言葉。

遊星やジャック、クロウといった孤児たちを立派に育て上げてきた“母”であるマーサだからこそ語ることの出来る心のもつた力ある言の葉であつた。

予期せぬ人物から放たれた力ある言の葉に、蒼乃丞は一瞬だけ驚きの表情を見せると怒りを納めて居住まいを正す。

普段の言動から誤解されやすいが蒼乃丞は傍若無人ではあつても決して暴君ではない。自身がこれと認めた相手には最低限の敬意と礼節は払う度量の広さは持ち合わせているのだ。それは有能な従者である磯野であつたり、今はその資格を剥奪されたが遊星もそうであつた。

そして、マーサも今の言葉を持って蒼乃丞に認められたのだ。強き偉大なる“母”として。

ただしそれはそれ、これはこれ。

自身が認めたマーサの言葉故に理解はできずとも取り敢えずはそうであると認識する事とした蒼乃丞であつたが、それでも話の本筋アキを眠りから救うという依頼の事となると話は別だ。

「例えそうだとしてもお断りだ。それにボクにはコイツがどこぞの誰かにくれてやった勝利をこの手に取り返すという大事な用があるんだからな」

何といつても蒼乃丞には大事な勝利を取り戻すという己に課した使命があるのだから。

遊星を睨み付けながら無碍もなくそう言い捨てた蒼乃丞に、一つため息をついたマーサはその蒼乃丞に睨み付けられている遊星に向かってとんでもない事を言い放った。

「はあ、じゃあ仕様がなね。遊星、変わりにお前が行ってきな」「ま、待ってくれ！ どうしてそうなるんだ、マーサ!？」

まるで意味がわからない。

どこをどうしたらそう言う結論になるんだと声を荒らげる遊星にマーサは真剣な表情で真っ直ぐに遊星を見つめるとズバリ指摘してやった。

彼の心にかかる靄の正体を。

「お前、鬼柳を恐れているね」「ッ！」

未だ誰にも語っていない心の内を的確に指摘したマーサに遊星の瞳が揺れた。

そんな遊星の様子にやはりと当たりを引いたマーサは腰に手を当てると出来ない息子に向かって言葉を続ける。

「お前はかつての仲間だった鬼柳と戦うことを恐れている。向き合うことをね。ちゃんと向き合えないで何が仲間だい」

「俺は鬼柳に恨まれても仕方が……」

助言を受けてもなお、うだうだと言葉を弄し煮え切らない遊星に痺れを切らしたマーサは彼の耳を思い切り引つ張ると蒼乃丞の方へ視線をやりながら言っただけだった。

「わかんない子だねえ！ そんなんだから、アンタを追いかけてき

たお嬢ちゃんが愛想つかすんだよ。いいかい？ 今のお前はね、心の扉を閉ざしちまつてる。その扉を開けてくれるのは仲間じゃないのかい？」

久方ぶりにマーサから受けた身の入った説教に遊星はハツとなる。自分は本来そうして来たのではないかと遊星は今更ながらに気がついたのだ。

裏切られたこともあった、言葉が届かない時もあった。けどそれでも仲間を信じ、絆を信じて進んできたのは他ならぬ自分だったのではないかと。

遊星は今一度思い出してみる。

自分たちを裏切つてまでシティでキングとなったジャックを問いただすために多くの無茶をした事を。残してきた仲間を救うため危険を承知で一人だけで敵地であるサテライトに乗り込んだ事を。それら全ての行動の根底には常に仲間という言葉があった。

「仲間といることが、その扉を叩くことになる。その音に気づけば扉が開くこともあるんじゃないのかねえ」

そして、それは鬼柳にもアキにも当てはまるのではないかとマーサは言うのだ。

かつての仲間という絆。シグナーという絆。今が最悪の状況でも絆が繋がっているのなら、それはきつと互いを結ぶ架け橋となるのだから。

それには、まず

「まずは仲間に向き合わなきゃ。なあ、遊星」

恐怖が、痛みが、死が待っていようと信じて向き合わねばならない。

そう言つて微笑みを見せるマーサに遊星は自身の心の扉が音を立
てて開くのを確かに感じたのだった。

「……ああ、そうだ。そうだったな、マーサ」

そこにはもう鬼柳の影に脅える弱々しい遊星の姿はない。

完全に恐怖を克服できたとは言えないが、それでも心の迷いだけ
は払ふことの出来た遊星にマーサは満足気な表情を浮かべながら、
それにと言葉を付け加える。

「それに、お嬢ちゃんが議員さんの依頼を断つた理由の一端はアン
タにあるんだろう？　ならこの件、お嬢ちゃんに代わつてアンタが
解決するのが筋つてもんさ」

「わかつた。十六夜の親父さんも海馬でなくて悪いが、俺でも構わ
ないか？」

今回の事を含め、返しても返しきれないほどの大恩あるマーサの
言葉に素直に頷いた遊星はお門違いであるとは理解しつつもアキ救
出に手を上げたのだった。

無碍にも蒼乃丞に断られ途方に暮れていた英雄は思わぬところか
ら上がった手を藁にも縋る思いで掴む。

もうこの際ならば四の五の言つていられる状況ではなかったから
だ。

それに何も望みがないわけではない。

聞けば遊星はアキと同じ痣を持つ人間だと言つてはないか。それ
がどこまで効果があるかは未知数だが、何も無いよりは遙かに見込
みがある条件であることには違いなかった。

「あ、ああ。海馬総帥に断られた今、望みがあるのならは全ての可
能性は試すつもりだ。君にはアキの腕にあるのと同じ痣があるのだ

ろう？　ならば、私からも是非ともお願いしたい」

こうして固く結ばれた遊星と英雄の手を尻目に、蒼乃丞はもういいかと言わんばかりに席を立つ。

「これで話は終了か？　ならばボクは失礼させてもらう」

本来ならば付き合う必要のない茶番にこれだけ付き合ったのだ。これ以上の瑣末事に付き合う謂れはないと後ろで控えていた磯野を引き連れ、出口に向かって踵を返したのである。

「待ってくれ、海馬！」

そんな蒼乃丞を遊星が必死に呼び止めた。

ここで蒼乃丞を帰してしまつては、彼女との絆が完全に切れてしまふという確信が遊星にはあつたからである。

しかして、遊星の心の底からの必死の呼びかけは届いた。

やはり彼女にとって自分はもはや価値のない存在なのか振り返つてはくれなかつたが、それでも足だけは止めてくれたのだ。

その彼女の後姿に遊星は理解する。

これが最後の好機なのだ、今この時を逃せば彼女の期待を彼女から繋いでくれた絆を完全に裏切ることになるのだと。

ならば遊星が取る手段はただ一つのみ。

「今の俺がこんな事を言えた義理ではないが……お前には是非立ち会つてもらいたい。お前に認めてもらえたかつての俺を今の俺が取り戻す場面を」

取り戻すのだ、好敵手という名の絆を。

今度は自分から彼女へと絆を繋いで。

そしてそれは、きつとアキとの交流こそが契機になる。だからこそ、その場には蒼乃丞がいてほしかったのだ。

そう思つての遊星の懇願だったが、今の遊星の言葉では蒼乃丞には届かなかつた。

蒼乃丞は遊星に背中を向けたまま冷たく突き放す様に言い放つ。

「言つた筈だ。負け犬の貴様にようなどないとな」

「そこを曲げて、頼むッ！！」

当然とも言える蒼乃丞の拒絶の言葉だったが、それでも遊星は引き下がらない。

これでもかと言わんばかりに垂直に身体を曲げて頭を垂れる。それは、見ているほうが痛々しくなるほどの切実な訴えかけであつた。

だが、そんな遊星の必死の願いも蒼乃丞に届かない。

それこそ自分の好敵手であるならば易々と頭を下げるなど、そんな無様な真似はしなと言わんばかりに蒼乃丞は語気を荒らげ断じるところにこう言い放つたのだ。

「くだいッ！！ ボクの知っている好敵手、不動遊星は死んだのだ！ その抜け殻の貴様が何をほざこうともボクの心には些かも届かぬわ！！」

肩を怒らせながら部屋を出て行くこととする蒼乃丞と、それを食い止め、説得しようとする遊星。

共に目指すところが妥協点の存在しない究極の選択肢しかない以上、話は平行線を辿るしかない。しかも蒼乃丞にしる遊星にしる、一度こうと決めたら引く事のない意志の強さを持っている。と言えば聞こえは良いが単に評するならば筋金入りの頑固者だ。迷つていた遊星がこうして心を決めた以上、どちらかがどちらかの言い分を聞いて折れるという事はありません。

詰まるところ、このやり取りはどちらが先に根負けするかと言う不毛な消耗戦だった。

しかも他者からの介入を寄せ付けられない雰囲気や二人が醸し出しているため、余計に性質が悪い。

そんな第三国が調停に乗り出すことの出来ない泥沼の消耗戦が展開される中で、そこに涼しげに割り込んだのはまたしても“母”たるマーサであった。

場に漂うの雰囲気とは裏腹に朗らかな様子で二人の間に割り込んだマーサは肘で遊星を突きながら豪快に笑って彼を茶化す。

「おやおや、遊星も隅には置けないねえ。こんなに可愛らしいお嬢ちゃんを口説こうだなんて」

「マーサ……」

いきなり場違いな事を語りだしたマーサに遊星はこんな時に何を言っているんだという表情を見せる。

確かに自分の言った言葉は口説き文句といえ口説き文句だが、これは好敵手としての絆を取り戻すための口説き文句だ。決して他に疚しい理由があるわけではない。なのに、マーサの言い方ではまるで自分が蒼乃丞を異性として口説き落とそうとしているみたいではないか。

そう言った言葉を視線に載せてマーサへと抗議する遊星と、そんな非難の視線も意にも介さず豪快に笑うマーサに、もう一人の当事者である蒼乃丞は呆けて何もいえなかった。

いきなり喜劇のそれへと転じた場の空気に追いつけていけなかったのだ。

ただの一言でももの見事にガラリと険悪な空気を変えて見せたマーサは恨めしそうな視線を投げかけてくる遊星から未だ呆けている蒼乃丞の方へ向き直ると、豪快な笑みから一転申し訳なさそうに肩をすくめながら遊星の願い叶えてくれるよう掛け合った。

「それと、お嬢ちゃんも。大の男がこうやって頭を下げてるんだ。ここは一つ、この子に一度だけチャンスを上げてくれやしないかねえ」

「断る！　このような負け犬になど用はないと何度も」

当然、蒼乃丞の答えは決まっている。

答えずとも、その答えは変わることなく否であったのだが。

「そうかい、そうかい、聞き届けてくれるかい！　それは有難いねえ！！　ささ、それなら善は急げだ！！」

何と、その答えはマーサによって、いつの間にか了ということになっていたので。

曲解を遙か彼方に置き去る横暴を揮いせしめた張本人がしきりに頷き笑顔を振りまく中、当然蒼乃丞は抗議の声を上げた。

「ちよつと、待て！　ボクは了承した覚えなど」

しかし、マーサはそんな蒼乃丞の抗議を意にも介さず彼女の背中をグイグイと押す。

そして遊星のほうへ振り返ると蒼乃丞の眼がないのをいいことに彼に向かってウィンクを飛ばしたのである。

「つべこべ言わずに行つた行つた！　遊星！　ちゃんとアキちゃんを救つて、そつちのお嬢ちゃんにいいとこ見せるんだよ！　男なら惚れた女にいいとこの一つでも見せなきゃね！！」

後はそつちで上手くやりなという言葉に、やはり先のやり取りは

確信犯だったかと遊星は苦笑を漏らした。

かなり強引で褒められた方法ではないが、それでも梃子でも動かなかった蒼乃丞を連れ出してくれたマーサに遊星の心は感謝の気持ちでいっぱいになった。のだが、しかしである。

後半の自分に向けられた言葉には断固抗議したい遊星であった。

「ちょっと、待ってくれ！ 俺は別に」

「照れなくっていいだろう。件のアキちゃんかお嬢ちゃん、どっちか嫁さんにしてやるぐらいの気持ちで臨んできな！」

しかし、そこは百戦錬磨のマーサ。

遊星の抗議はそんなもの知ったこっちゃないと言わんばかりに蒼乃丞共々、豪快な笑みに虚しくかき消されたのだった。

蛇足であるが、その様は完全に初孫を期待するお節介な親そのものだったと追記しておこう。

何はともあれ、有無を言わさぬ威厳を持つ蒼乃丞にしる、クールで落ち着きのある遊星にしる、肝っ玉母さんの前では形無しと言う事だった。

「はああ、はああああッ!?」「」

そして、気がつけば断つたはずの件につき合わされている蒼乃丞と、思いの届かぬ相手に懸想していることになっている遊星。

人の話を聞かないだとか完璧なスルースキルだとか、そんなチャチなものでは断じてない。もっと恐ろしいものの片鱗を味わった二人の叫びは期せずして同調しサテライトの空を突き抜けたのであった。

結果から言おう。

昏睡状態に陥ったアキの覚醒から、長い年月をかけて醸成された十六夜親子の家族不和、果ては遊星に見切りをつけた蒼乃丞が遊星を認めなおすかと言う問題まで、余さず全てが一挙に解決した。

そう。マーサハウスにて展開された数々の難題は全てが万事上手く収まったのである。

まるでご都合主義全開の冗談の様な現実。

では、いかにしてその様な冗談が現実となったのか。その流れは以下のとおりだ。

マーサの手腕により渋る蒼乃丞を同行させることに成功した遊星はアキの元へと赴き、眠りにつく彼女を《赤き竜》の痣の繋がりを持って目覚めさせる事に成功させた。

深い眠りからの急な覚醒からか多少の前後不覚の感はあるが、それでも目覚めたアキの姿に見守っていたアキの両親やジャック、龍亞と龍可も安堵の息を漏らしたのも束の間、目覚めたアキがその視界に父親の英雄を収めたことで事態は一変する。

自分を捨てたはずの父が今更父親面をして心配気な表情で己を見ている事に対し激昂したのだ。さらに視界の端には助けを求めたにもかかわらず、それを無碍にも跳ね除けた蒼乃丞の姿もあったのが余計に彼女の怒りを駆り立てた。

優しさと愛はくれず、痛みと悲しみしか与えてくれなかった父と助けを求めたのに助けてくれなかった蒼乃丞。もはや両者は英雄は当然として蒼乃丞もアキにとって憎悪の対象でしかなかったのである。

そんな憎んでも憎み足りない両者に対し言葉を荒らげるアキであったが、自分を受け入れてくれたデイヴァインの死を思い出したこ

とにより錯乱。取り乱したアキを落ち着かせようとした遊星に対し決闘をけしかけたのだ。

悲しみと憎しみに囚われサイコデュエリストとしての能力を完全に開放したアキは忌むべきその力とブラック・ローズ・ドラゴンを持って遊星を攻め立てた。

対する遊星はアキに向かって説得を続けながらも彼女の攻撃に応戦するが、倒れることも許さぬ猛攻にスターダスト・ドラゴン共々傷ついていく。

それでも毅然と立ってアキに立ち向かう遊星と、傷だらけになりながらも皆を守ろうとするスターダスト・ドラゴンの姿に英雄はアキを恐れる己の心を再認識すると共に、さらにその先にある本当の気持ちに気がつく。

そして追い詰めた遊星を誰も救えないと責めるアキに向かって返した彼の言葉が英雄の決意を決定的にさせた。

そうだ、俺には力などない。誰かを助ける事などできるはずもない。

ただ俺に出来るのは傷ついた仲間が救われるのを願うこと……それだけだ！

この遊星の言葉にアキを真に救えるのは事の発端でありアキの父親である自分にしかできないと悟った英雄は二人の決闘に介入。我が身が傷つくことを恐れず娘と向き合い、異形の力を恐れていたという本音を隠さず明かし、今まで言いたかった　　言えないで来た“愛している”と言う言葉をアキに面と向かって告げたのであった。しかし、それでも憎悪をむき出しにして戦うアキには届かない。

アキは目の前に立つ父が傷つくことも厭わずに相手プレイヤーに直接ダメージを与える永続罫、デス・ペタル・カウントダウンを発動して遊星を追い詰める。

身体を切り刻む花卉の嵐は当然、遊星の前に立って娘と向き合う

英雄にも殺到する。その破壊の力は最早アキの制御を受け付けられない暴走の域にまで達していた。

立っている事も出来ない痛みに晒される英雄だったが、それでも今度はアキから眼を逸らさないと、今度こそはアキの囁きを聞き逃さないと、そう心に誓った確たる意思を持って一歩一歩アキへと距離を縮めて行く。

それはまさに離れた親子の心が埋まり行く様であったが、それでもアキは未だ父の言葉と行動を受け入れることが出来なかった。

ならばその彼女が纏った殻を、間違った憎悪を砕くは同じ《赤き竜》に選ばれた仲間である自身の役目だと宣言した遊星は、その意思を持ってデッキからカードを引き抜く。

仲間の絆を信じ、親子の愛情を信じた遊星の元へともたらされたのは彼が待ちに待ったカード。圧倒的不利な状況を一変させる逆転の一手に必要な不可欠な装備魔法、白銀の翼であった。

遊星はそのカードをコストに手札に眠っていた切り札、拘束解放波を発動。

その効果によってアキの場にある憎悪の棘とデス・ペタル・カウントダウンを破壊し、スターダスト・ドラゴンを癒えぬ傷を刻み付ける悪意の呪いから解放したのである。そして攻撃力の戻ったスターダスト・ドラゴンで彼女の破壊衝動の象徴であるブラック・ローズ・ドラゴンを攻撃したのだ。

スターダスト・ドラゴンの放った星屑の輝きはブラック・ローズ・ドラゴンへ突き刺さり彼の竜を爆散させるが、アキの手札にあったガード・ヘッジの効果でブラック・ローズ・ドラゴンは一瞬の内に復活する。

だが、アキに英雄の心を届かせるのはその一瞬で十分だった。

全てを壊す花吹雪に苛まれる英雄の姿にアキは初めて自分が力を制御できていないことに気がつくと同時に心の奥底に暖かく脈打つものを確かに感じたのだ。

それは、これまでずっと破壊衝動によって塗りつぶされてきた彼

女の本当の思い。彼女の心からの切なる真の願い。父と母、両親と一緒にいたいと言う子供なら誰もが思う当然の感情だった。

大きすぎる愛情だからこそ些細な切欠で反転した時それは大きな憎悪となるが、逆もまた然り。愛情は一度転ずれば憎悪に変わるが、今一度転じることで元の愛情へと戻るのである。今のアキは感情が廻り廻って元の位置へ戻ってきたのだ。

そしてそれは、恐怖を抱きながらも真摯に娘と向き合った英雄の心がアキへと届いた証拠でもあった。

父への情愛を思い出したアキは自身の力で苦しむ父の姿に暴走する力を押さえ込もうとするが、荒ぶるほどに暴走した力は全く収束される気配も見せないどころか最悪の事態が起こる。一向に止まることのない破滅の花吹雪によって巻き上げられた機材の一つが英雄目掛けて迫ったのだ。

重量のあるメートル四方の機材が巻き上げられた勢いをそのままに人に当たるとどうなるか。考えるまでもない結果に、誰もがこの後に起こであろう惨事に顔面を蒼白とさせる中でアキは必死になって父へと伸ばした手を固く握った。

すると、どうしたことであろうか。あれだけ吹き荒んでいた花弁の嵐が、まるで何事もなかったかのように消えうせたのである。そう、アキは初めて力の制御に成功したのだ。

しかし、破壊の力を止めたところで与えられた運動エネルギーまでは消せなかった。

宙に待った機材は依然勢いを緩めることなく英雄への直撃コースを取っていたのである。

もはや直撃は免れない。誰もがそう思い、直ぐに訪れるだろう惨劇に身を強張らせた。

だが、次の瞬間に起こったのは人が肉塊へと変わる猟奇的場面でもなければ、耳をつんざく断末魔の悲鳴でもない。

耳に聞こえたのは金属の筐体が破壊される豪快な音。

眼に見えたのは太陽さえも霞んで見える眩しい白銀の煌き。

自分を助けてくれた存在を仰ぎ見る英雄が、望まぬままに父親殺しとなりかけたアキが、遊星が、ジャックが、龍亞が、龍可が、節子夫人が、その白銀を驚愕の眼差しで見つめる。

そして白銀を見つめる皆の視線は白銀の元へと歩み寄る小さな王へと移った。

堂々と並び立つた主従には、もはや飾りの言葉など必要あるまい。英雄を死神の魔の手から救ったのは海馬蒼乃丞と彼女の切り札、青眼の白龍。その内の一体が華麗なまでの姿を实体を持って顕現させ英雄を守ったのである。

普段の彼女からすればまずあり得ない行動だが、これは何も彼女にとつては不思議な事ではなかった。

己が定める美学によって行動する蒼乃丞はその美学に則り、他人に縋る事を醜とし、己から道を拓く事を尊とする。

王とは真に自身を助ける者こそを救うのだ。

であるからこそ彼女はマーサハウスでは一蹴した英雄を危地から救った。死を覚悟してでも娘を救おうとした彼の行動を救うにたると認めて。

さらに蒼乃丞が認めたのは英雄だけではない。仲間の絆とやらは彼女には理解しがたいことだが、それでも譲れぬものの為に自身を犠牲にしながらもそれを通した遊星を蒼乃丞は今一度、好敵手として認めなおしたのである。

最後の最後で美味しい所を全て持っていった感がないではないが、それも蒼乃丞が蒼乃丞たる所以であろう。まるで太陽の様な烈しさを持って祝福する蒼乃丞と青眼の白龍に決死の決闘を行っていた遊星とアキはどちらからともなく穏やかな笑みを見せると、この決闘に幕を引いたのであった。

結局のところ問題解決の鍵となったのは仲間と絆を信じる遊星の心と、娘と真つ直ぐに向き合えた英雄の勇氣、そして蒼乃丞の僅かばかりの助力と言ったところか。

アキの無限の憎悪を断ち切り、ようやく一つになれた《赤き竜》

のシグナーたち。

そんな彼らと海馬蒼乃丞は今、治安維持局長官、レクス・ゴドウィンに招かれ彼の私邸へと向かっていた。

ネオ童実野シティの外縁部。

コンクリートとアスファルトが支配する都市部の中にあつて、青と緑が映えるそこは一種のオアシスとも言っていていいだろう。

開発し尽くされた都市に残った最後の自然。広大な湖を擁する自然公園こそ、治安維持局長官たるレクス・ゴドウィンの私有地であり彼の住まいがある場所でもあつた。

そこへと到着したリムジンから降り立つは蒼乃丞と四人のシグナー+。

その+ こと龍亞が贅を尽くされたレクスの私邸の余りの豪華さに感嘆の声を漏らす。

「ほええ、でつかいお屋敷だなあ。ここがゴドウィン長官の家か」

ネオ童実野シティの上流階級であるトップス在住の龍亞をしてこつと言わしめたのも束の間、その豪邸の扉が音を立てて開き、中から招待主であるレクス・ゴドウィンがゴツゴツと大理石の床を鳴らしながら姿を見せた。

「お待ちしておりました。ようこそ、シグナーの諸君。ずいぶんと回り道をしてしまいましたが、やっとこうして皆さんをお迎えできたことを喜ばしく思います」

本当に待ちかねたと言う感慨を帯びて慇懃に礼をするレクスにジヤックは胡散臭げに鼻を鳴らし、遊星は油断なくレクスを見据える。

謎の多いダークシグナーの件と言い、彼らとの戦いのために戦力として自分たちを集めるために弄してきた様々な小細工と言い、はつきり言って彼らにとってはレクスはとんでもない食わせ物だ。

そんな彼からの直々の招待。

その真意が何処にあれ、今起こっている事態の全てを知るであろうレクスがこのタイミングで四人のシグナーを集めたのだ。きっとそこには彼のコレまで行ってきた行動の答えがある。

何か大きなものが音を立てて開こうとする予感に四人のシグナーたちが神妙な表情になる中で、始めにレクスに声をかけたのはシグナーではない龍亞だった。

「なあなあ、オレたちに用って何だよ？」

いかにも子供らしい無邪気さと馴れ馴れしさを孕んだ率直な疑問。しかし、そんな無邪気な問いかけに返って来たのは余りに冷たい視線と言葉だった。

「君を招待した覚えはないが」

まるで価値のない路傍の石に向かって態々言い放つように紡がれたレクスの言葉に龍亞は怖気づくが、それでも子供ならではの特権だろう図々しさを持って気力を奮い立たせる。

「えッ……と、そんな硬いこと言わないでさあ」

だが、そんな子供特有の図々しさもレクスには通用しなかった。

「シグナーでない者に用はありません。お引取り願ひましょう」

もとよりレクスが呼んだのはシグナーの面々であって龍亞ではない。
い。

それは当の龍亞だってわかっていた。わかつてはいたのだが、それでも龍可のヒーローであり続けたいと願う彼は最低でも龍可の隣を歩きたかったのだ。妹の護り手でありたかったのだ。

しかし現実として、自分と姿形が瓜二つな双子の片割れは、護ると決めた自分より弱いはずの妹は、自分の遙か先にいる。尊敬する遊星やジャックと肩を並べて。

シグナーである。その一点が絶対的な境界線となつて龍亞と龍可の間を別たっている事実を明確にされた龍亞言葉を失うしかなかった。自分と龍可たちシグナーの間にある隔絶した距離に。

改めて突きつけられたその厳然たる事実を前に龍亞が何もいえないでいる重苦しい空気の中、不意に上がる声があった。

「そう言うことならばボクにもこの場にいる権利はないということなのだが、ならば何故貴様はシグナーでないボクを呼んだ」

それは、この場にいるもう一人のシグナーでなき者。シグナーでないにも関わらずダークシグナーの襲撃を受け、それを撃退せしめた者 海馬蒼乃丞。

龍亞に向かって放たれたレクスの言に照らし合わせれば彼女もまた招かれざる客であることは確かだ。

ダークシグナーの強襲を受けたとは言え、彼女も龍亞同様シグナ

「ではないのだから。」

なのに彼女は招かれた。この場に、このシグナーたちの集いに。ならばそこには理由があるはずだ。シグナーでない自分がここに呼ばれるに足る特別な理由が。

「貴女は特別ですよ海馬総帥。無窮の奇跡に覚醒し、神をも降す白き龍の真なる加護を得た貴女は……いえ、例えそれがなかったとしても貴女にはこの戦いに参加する権利があるのですから」

「その理由も貴様は知っているのだろうな」

「ええ。しかし残念ながら、今は未だ時が満ちていないとしか言いようがありません。ですが、時がくれば貴女は自然とその答えを知ることになるでしょう」

しかし、ここでその理由が語られることはなかった。

本来であれば部外者である蒼乃丞が持つシグナーとダークシグナーとの戦いに参加する権利。

レクスの言ったことが正しければとの但し書きが付くが、それはどうも戦術でも能力でもなく蒼乃丞自身に起因することらしい。さらに言うなれば、その秘密は時が来ればわかるとも。

これを聞いただけでは何かなんだかサッパリだが、それでも何がしらかの理由があるのがわかっただけでも十分な収穫だ。それに蒼乃丞にとっては理由付けなどどうでもいい。

結果としてダークシグナーと戦えさえすればいいのだから。

「ふうん。貴様に踊らされているようで気分はよくないが、まあいいだろう。ボクはボクのロードを阻む者をこの手で倒すことが出来ればいいのだから」

「海馬総帥ならばそう言ってくれればいいと思っていました。では狭霧君、後の事は頼みましたよ」

深く追求するよりも実利を取った蒼乃丞の対応に満足げに頷いたレクスは、ここまで蒼乃丞とシグナーたちを案内した狭霧深影に対し新たにそう命じると邸内に踵を返す。

後の事とは当然、真の招かれざる客である龍亞にお帰りいただくことだ。

当の命令を受けた狭霧は沈痛な面持ちで下を向く龍亞の姿に心を痛めながらもレクスの命令には逆らえない。それは彼が自身の所属する組織の長であることも然ることながら、以前にジャックの事で彼の意に沿わぬ進言をした時に受けた恐怖が彼女の中に刷り込まれていたからである。

その狭霧の様子や先ほどのレクスの龍亞への対応から今の命令の内容を察したのだろう、龍可はとっさに龍亞の腕を取ると叫ぶように宣言した。

「私、龍亞が一緒じゃないと行かない！」

「龍可……」

絶対に離れないと言う意思を言葉と行動で示した龍可に、レクスはしばらく彼女を見つめると諦めたように一つ頷いて見せた。

「……仕方ありません」

龍亞が屈したレクスの冷たい視線を前にしても真っ向から見据えて眼を逸らすことのない龍可の強い意志の籠った瞳に、ここでへそを曲げられて一人でも不参加となつては本末転倒だと彼は考えたのである。

「良かったね、龍亞！」

「う、うん……」

しかし、それでも龍亞の表情は硬い。

特別に同行が許されたことを我が事のように喜ぶ龍可の手前、露骨な表情こそ見せなかつたが、それでもぎこちない笑みの裏には自身に対する情けなさがあった。

護るべき妹に護られた兄。それはシグナーでないこと以上に龍亞を惨めにさせたのだ。

「では早速、邸内へご案内いたしましょう。こちらへどうぞ」

そんな少年の心情も置き去りにレクスの案内の元、豪邸に隠された秘密の部屋への道が開かれる。

指紋と網膜、二つの個人認証を必要とする二重のセキュリティを解除することによって辿り着いた地下深くの階。プレ・インカ文明を模った物と思しきレリーフの壁と炎揺らめく石柱型の灯台が続く通路が蒼乃丞とシグナーたちの前に現れたのだ。

そこを案内人であるレクスが先頭に立って進んで行く中、不意に彼は思い出したかのようにジャックへ向けて語りだした。

「キングは一度お連れしたことがありましたね」

確かにジャックはキングであった時に一度ここを訪れている。

初めて《赤き竜》がこのネオ童実野シティへと舞い降りた遊星とジャック再開の決闘。

あの夜に起こった不可解な現象を問い詰めてきたジャックへの回答としてレクスはジャックをここに招いたのだ。

「あれは他人だ。俺はもうキングではない」

だが当のジャックは、その言葉に否と答えた。

故郷と友を捨てて手に入れた偽りのキングの座。それが道化だっ

たことに気がつき己が生き様がどうあるべきかを迷っていた彼に、一時を共に過ごした女性記者、カーリー・渚が答えをくれたのだ。今までのキングは死んだのだと、新しいジャック・アトラスを生きて本当のキングになればいいのだと。

だから彼は決めたのだ。本当のジャック・アトラスとして今度こそ嘘偽りのない真のキングになると。

その揺るがなき意思の籠った声にレクスは好意的な笑みを浮かべると了と頷いた。

「ならばこれからは、あえてジャック・アトラスと呼ばせていただきますしょう」

レクスから降って湧いた話題に遊星も確認しておかなければならないことを思い出したのか蒼乃丞に向けて言葉を投げかける。

「そう言えば、海馬。あの時の決闘で召喚したお前の青眼の白龍、あれは一体？」

あの時は親子の絆を確かめ合うアキたちに遠慮して追及できなかったが、蒼乃丞はソリッド・ビジョンではなく実体を持った青眼の白龍を召喚して英雄の危地を救ったのだ。アキの様なサイコデュエリストでないにもかかわらず。

ならば、あの現象は何だったのか。

それはあの場にいた全員が疑問に思っていたようで遊星の質問を機に、皆の視線が蒼乃丞へと集まった。

「あれか？ あれは精霊の召喚　レクスが言うには無窮の奇跡と言う代物らしいが、精霊世界にいるデュエルモンスターの精霊をこちらに実体を持たせたまま召喚すると言うものだ。最初に自覚したのは《赤き竜》の異空間へ飛ばされた時、力に目覚めたのはダー

クシグナーとの戦いでだ」

蒼乃丞の語った言葉に、龍可とアキは先のものとは別に見に覚えがあった事を思い出す。

スターダスト・ドラゴンとレッド・デーモンズ・ドラゴンの激突の果てに現れた《赤き竜》が来るべき脅威を見せるために異空間へシグナーたちを招いたおり、シグナーでない蒼乃丞も青眼の白龍の精霊たちに導かれてその場にいたのである。

この蒼乃丞の言葉にやっと確証がもてたのか、龍可は同じ力を持つ者の登場に嬉しそうな笑みを見せた。

「やっぱり、貴女も精霊の力が使えたんですね」

「ボクの場合は青眼の白龍に限るがな」

そうは言っても、やはり感覚を共有できるのは嬉しいことだ。

龍可の精霊たるクリボンも蒼乃丞のデッキの中に仲間がいるのを感じ取ったのか、精霊化すると嬉しそうに宙を舞っていた。

そんなこんなを話すうちに、とうとう一行は目的の場所へと辿り着く。

「なにッ!?!」

「こ、これは!」

「私たちの痣と一緒……」

「……《赤き龍》」

重々しい音を立てて開いた扉をくぐった先にあったのは《赤き竜》が刻み込まれた巨大な石の塔。《赤き竜》によって見せられた過去のビジョンにもあった遺跡であった。

「そう。それは星の伝説として語り継がれてきたシグナーの証」

その遺跡を前にレクスが語るはシグナーの真実。

今までの出来事や自身の選んだ行動ですら《赤き竜》の導きだったと言うシグナーの宿命。

伝説の痣を持つシグナーの生まれ変わりとして廻り合う様、数千年前から約束された運命。

遺跡に呼応して痣を輝かせるシグナーたちを前にして次々と明かされていく《赤き竜》とシグナーの謎。

だが、ここまで明かされてもなおシグナー最大の謎が残っている事にお気づきだろうか。

その最大の謎を龍亞が声を大にしてレクスへと問いかけた。

「ね、ねえ！ 一つ肝心なことを忘れてない？ シグナーは確か五人いるんじゃないかった？」

「そうよ！ もう一人はどこにいるの？ まさか、ひよつとして蒼乃丞さんが五人目のシグナー！？」

《赤き竜》の痣が五つあると言うことはシグナーが五人いるという事で、未だ姿を見せない五人目が誰であるかは常々遊星たちが議論に挙げていたことだ。

特に龍可の挙げた蒼乃丞は一時は痣の疼き具合から候補から外されていたが、それでもシグナー候補を集めたフォーチュンカップに招かれた事実と、精霊の声を聞ける決闘者であること、何よりシグナーしか招待されないこの場にいるという証拠から現時点では最有力候補として名前が挙がったのである。

ひよつとしたら、ひよつとするかもしれない。

龍亞と龍可の双子の言葉に誰もが期待と困惑が入り混じった視線を蒼乃丞からレクスへと移して行く。そんな彼らの視線を前にしてはレクスも答えを教えざるを得ない。

そして、彼の口から紡がれたその問いに対する答えは真に驚愕す

べきものであった。

「いいえ、彼女はシグナーではありません。何故なら、もう一人のシグナーはとくに目覚めているのですから」

「……ッ!?」「」「」

「ふうん」

レクスから放たれた驚愕の真実にシグナーの面々と龍亞は絶句するしかない。

だが、考えてみればレクスの語った事は可能性として大いにあり得た事だ。何故ならば、遊星と龍可こそフォーチュンカップでの極限の決闘でシグナーに覚醒したがジャックとアキはそれよりもかなり昔に痣をその腕に宿らせていたのだから。

ならば最後の一人も既に覚醒していても何ら不思議ではない。

皆が一樣に驚く中で蒼乃丞はその可能性に行き着いていたのだろう、やはりと言った風に一つ鼻を鳴らしていた。

そんな彼女と彼らを前にして存在を明かされた五人目のシグナーであったがレクスが語ったのはここまで。五人目のシグナーが誰であるのか、何処にいるのかは語られることはなかった。レクスが言うにはシグナーたちが本当の危機に瀕したとき《赤き竜》と共に姿を現すとの事。

結局、五人目のシグナーの話はそのほとんどがわからずじまいで終わってしまった。

しかし、彼らが真に驚くべきはここからだ。

何故、レクスはシグナーを集めたのか。

何故、シグナーと言う存在が生まれたのか。

その根源、レクスがこれまで語ってきた話の核心こそ、ナスカに地上絵として封じられ現世に黄泉帰った邪神。

地上絵と同じ痣を持ち、多くの人々の魂を生贄に召喚される地縛神と闇の象徴たるダークシンクロモンスターを操るダークシグナー

生命の力の真逆、冥府の力を使う者たちの存在であった。

特に地縛神の脅威は筆舌に値する。

リリースではなく本当の意味での生贄を必要とし、一旦召喚されれば魔法・罠の効果も効かず、モンスターの攻撃も受け付けられない最強のモンスターとして場に君臨するのだ。

もしそれが市街地で暴れれば被害は戦車や爆撃機の比ではない。運よく生贄となるのを免れた人々も形となった災厄の前に皆等しくその命を刈り取られていくことだろう。

だからこそレクスは主戦場としてサテライトと言う生贄を用意しなくてもネオ童実野シティを救おうとした。被害を廃墟となった街や犯罪者及び社会不適合者のみの最小限に抑え、善良な市民の命と財産を護るために。

だが事態はレクスの想定を遥かに超えたものとなってしまった。

サテライトのみならずシティにまで地縛神が現れたのである。

事ここに至っては、もはや一刻の猶予もない。これ以上手をこまねいてはサテライトとシティは共にダークシグナーの手に落ち、ネオ童実野シティは崩壊することになるのだ。

それは最悪の未来予想図。

しかし、それ以上に最悪だったのは最後に明かされたダークシグナーたちの正体であった。

何と彼らは一度死んだ亡者 既にこの世ならざる者が闇の能力に目覚めた存在であったのである。

地に封じられた地上絵の邪神と同様に地獄の底から黄泉帰った冥府の使者。 が となるダークシンク口召喚こそまさにその証であると語ったレクスは最後にダークシグナーを倒すか、シグナーと共に世界が滅びるかという二択を迫る言葉をシグナーたちに問いかけて話を締めくくったのであった。

「……………」

あまりにも強烈な真実を前に言葉を失うしかないシグナーと龍亞。特にかつての仲間だった鬼柳が既に死んでいることを聞かされた遊星とジャックの衝撃は凄まじいものであった。

かつての友の抱く妄執が、死してなお現世に黄泉帰るほど深きものだったと知ったのだから。

そんな重苦しい空気が辺りに漂い渦巻く中で、唯一人蒼乃丞だけがいつもと変わらぬ毅然とした態度を崩してはいなかった。

説明するまでもない事であろうが彼女にとってはダークシグナーが生者だろうが亡者だろうが、そんな事は些かも関係しない。彼女の前に立ち塞がるならば例外なくその尽くを蹴散らす、それが彼女が蒼乃丞たる所以なのだから。

彼女の心を一文で表するなら、結果が同じならばそれを辿る過程に大した意味などないと言ったところか。

心からそう思うからこそ取れる、威風漂う王としての堂々たる姿であった。

「それはそれとしてだ」

だからであろうか。

人の生き死にと言う重い話をされたのにもかかわらず、彼女の声音は今日の夕飯の献立を聞き出すかのごとき気安さで持って語られていた。

「ボクの事を無窮の奇跡と呼んだが、それは青眼の白龍の精霊と何か関係があることなのか？」

その蒼乃丞が紡いだ疑問。

いかに精霊の力に覚醒したとは言え彼女は未だ目覚めて間もない。それどころか、つい先日まではオカルトを全否定していたのだ。

当然、精霊についての知識など皆無。

幼いながらも精霊世界で幾日を過ごした経験のある龍可のほうはまだ詳しいという現状だ。

故にその言葉の意味を知るため問いかけられた蒼乃丞の疑問に対し、レクスは何とでもないかのように肩をすくめると静かに語り始めた。

「星護主の務めとして様々な光と闇の戦いの歴史を知っていると云うだけです。例えばデュエルモンスターズの発祥の地である古代エジプト。オレイカルコスの神によって海に沈んだアトランティス。さらに宇宙の本質の対極たる破滅の光に宇宙創生から存在する闇の意思、ダークネス。宇宙の誕生から現在に至るまで世界はその都度存亡の危機に瀕してきたのです」

「ッ！ 敵はダークシグナーだけではなかったのか!？」

ここに来て初めて明かされたダークシグナー以外の脅威に遊星が戦慄の声を上げる。

目下、ダークシグナーだけが敵だと認識していたシグナーたちは遙か過去や伝説上で語られる地に強大な敵がいたことなど考えもしなかったのだ。

さらに驚愕すべきは破滅の光とダークネス。

シグナーとダークシグナーの五千年周期の戦いなんて話にならない。宇宙誕生から悠久に続く光と闇の戦いに目眩がしてきそうであった。

「ええ、ですがご安心を。先ほどまでに述べた数々の危機はその時代時代の歴戦の決闘者たちによって倒されています。当面の差し迫った危機はダークシグナーだけといっても問題はないでしょう」

だが、こうしてダークシグナーと戦うことを宿命付けられた自分たちと同様にそれらの敵にも相對するのを運命付けられた者たちが

いたらしい。

例えば、その心に名も無きファラオの魂を宿した者。

例えば、正しき闇の心を持って精霊と融合した者。

歴史書に名前が乗ることの無い数多の英雄たちが世界の平和と平穩を護つてきた事実。遊星は己が腕に宿る痣を見つめつつ静かに呟いた。

「今度は俺たちが世界を護る番……と言う訳か」
「そうなります」

レクスが語った数々の戦いの歴史と遊星の言葉に思つところがあつたのだろう。

シグナーの面々は遊星に倣つて自分の痣を見つめながら、その瞳に新たな決意を宿していた。

「話を戻しましょう。私が海馬総帥に語った無窮の奇跡とは先に述べた古代エジプトで起こった大邪神との戦い、その終局で起こった白き龍の覚醒の事です」

「まさか ツー!？」

「はい。その白き龍こそ青眼の白龍。どういった経緯で覚醒したかまでは定かではありませんが、彼の三幻神ですら傷一つつけられなかつた大邪神に大きな傷を与えることができた唯一のモンスターであると伝わっています」

そして語られた言葉の意味。

表の歴史では絶対に語られることの無い歴史の真実に蒼乃丞は身震いする。

現在において強者の代名詞である青眼の白龍は、過去にあつても最強であつたのだ。しかも、その最強を証明したのは神さえ届かなかつた存在。

確かに奇跡だ。限りある可能性を超えた無窮の奇跡。

神を超える事である事を証明したかつての青眼の白龍の伝説に蒼乃丞は身体を歡喜に震わせながら、ならばと宣誓するかのよう
に言葉を紡いだ。

「故に神をも降す無窮の奇跡……か。ならば面白い！ その伝説、この時代でも神を倒すことで再現してやろうではないか。地縛神を倒すことによつてなァッ！！」

それは明確な打倒宣言。

かつてありし伝説を自身の手で再現するべく掲げた彼女の誓約。

その伝説の再現をもつて蒼乃丞は未だ刻み続ける栄光のロードに華やかな彩を添えるのだ。

蒼乃丞にとつてダークシグナーを倒す理由がもう一つ増えた瞬間であつた。

無期限更新停止のお知らせ

どうも皆さん、ご無沙汰しておりましたkurieiです。

生来の遅筆からか続きを楽しみにしている皆さんを待ちに待たせてきた私ですが、今回は皆さんに謝らなければなりません。

実はこの度、新しく始めたオリジナル小説に傾注するため、非常に勝手ながら遊戯王5D's - 青眼の白龍の継承者 - の更新を無期限停止する事にしました。

今まで遊戯王と言う既存の世界を借り物にモノを書き、少ない支持を集めてきましたが、所詮は借り物。それも世界に冠たる人気アニメです。例えば私の作品が支持されたとしても、その支持の半分以上は元の世界観を作り上げた偉大な原作者によるものです。

ならば、自分の本当の実力はどこらへんにあるのか？

それを試したくなりオリジナルに手をつけたというわけです。

本当に自分勝手な行動だとは思いますが、蒼乃丞の活躍はしばしのお休み。オリジナルが一段落着くまでお待ちください。

ちなみに、そのオリジナルも”小説になろう！”の<http://ncode.syosetu.com/n7230u/>に出来上がり次第投稿していますので見てただけると幸いです。

そして、行く行くは完成したオリジナルで小説の新人賞に応募してみたいとも思っておりますので何卒、応援のほどよろしくおねがいします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8940/>

遊戯王5D's-青眼の白龍の継承者-

2011年9月22日18時31分発行